

静岡県指定史跡

よこ ち じょう
横 地 城 跡

— 総合調査報告書 —

1999

静岡県菊川町教育委員会

静岡県指定史跡

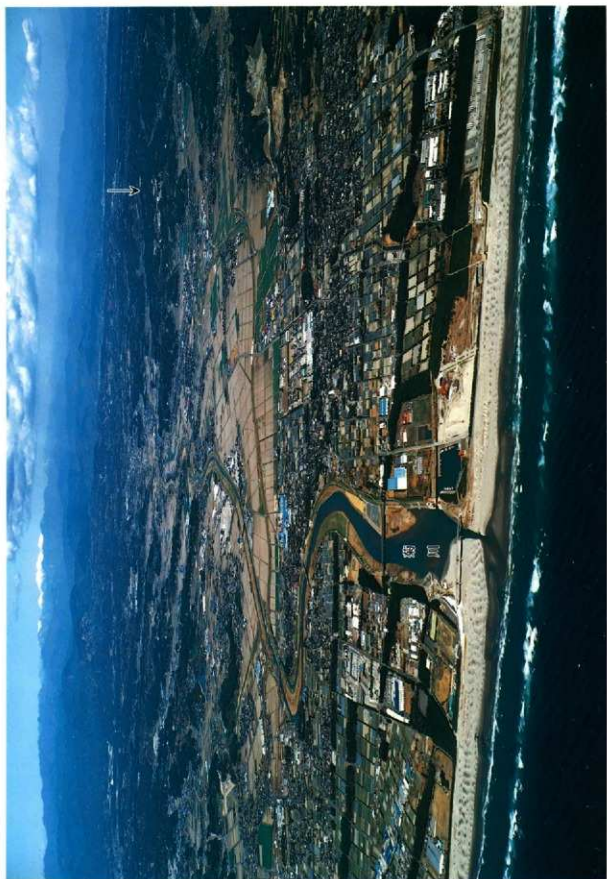
よこ ち じょう
横 地 城 跡

—— 総合調査報告書 ——

1999

静岡県菊川町教育委員会

卷頭 1 横地城跡遠景（空中写真）



卷頭 2 横地城跡



卷頭 3 横地氏遺跡群出土遺物



横地城跡出土遺物



殿ヶ谷遺跡出土遺物

能通 左兵佐
 母木之頭宣雅女
 從五位上 但馬路備後甲斐
 信理
 母伊豫孫宣明女
 正五位下
 言通 少納言 兼遠江守 伊賀常陸介
 母同能通
 從四位下
 保相 三河守 尾張守
 永信
 從五位下 小一條院判官代

長通 太郎
 母池田長女
 居遠別横地 保元從源義朝 之乱
 成長 三郎 又早三
 母同長通
 居遠別勝因保元三乱從源義朝
 長重 太郎
 治承五年癸丑二月十七日使安國二郎
 義定相率和田義盛臣部次郎
 忠總將野五郎親光土屋次郎
 義清守美三郎祐茂遠別横地
 太郎長重勝因平三成長也子
 濱松庄橋本武衛命因此要害之

序 文

菊川町が誇るもののひとつとして基幹作物のお茶があります。茶園面積1,400haで自然地形を生かした優良茶園が町内に広がり、この茶園の一面に「横地」姓発祥の地となる中世の山城「横地城」が位置いたしております。そして、ここを本拠地とする横地氏は、平安時代末に発生しこの地で勢力を誇っておりました。横地城跡は、御前崎・遠州灘自然公園に属し、城跡の中心部の58,000㎡が昭和46年に県史跡に指定され、山頂部から尾根など自然の地形を生かした概ね530,000㎡が城の範囲とされております。これだけの広さで保存状態の良い中世の山城跡は全国に誇り得る文化財であり、また多くの自然が残され、桜、サユリが咲くときはみごとであり、人々の憩いの場となっております。

私たちは、この貴重な歴史的遺産を忠実に基づき保存整備を図りながら後世の人々に引き継ぐ為、平成7年度より教育委員会を中心に学識者による「横地城跡総合調査委員会」を発足させ、城郭・文献・考古・石造物等総合的に調査してまいりました。その結果、中世武士団の本拠地の変遷モデルで、日本史的な価値を持った遺跡との成果を得ました。町としては将来は、居館復元や史跡地域学習の場としての活用を図ってまいりたいと考えております。

最後に、本調査にご指導・ご協力いただきました調査委員のみなさまと、静岡県教育委員会文化課のご指導、地元を始めとする横地城保存会員や、調査・資料協力等にお力添えを賜りました方々に感謝申し上げ、今後のご支援・ご協力をお願いしまして発行のご挨拶とさせていただきます。

菊 川 町

町 長 太 田 順

序 文

当町の歴史的遺産として昔から地域の人達から親しまれている横地域は、静岡県内における県指定の他の城郭にも劣らない立派な城跡のひとつだと、城郭研究家からも認められております。築城時期については明らかではありませんが、横地氏の居城として往時はその名城振りを大いに発揮していたことが想像されます。

史実については歴史研究家の専門的見解を待つこととして、われわれ教育委員会としては、この貴重な文化財を末永く後世にわたり保存・継承していく手立てを考えることにその責務があると考えました。

幸い平成7年度より、町長の積極的な文化行政のひとつとして、県文化課並びに県内外の学識経験者及び当町横地域保存会等、関係各位のお世話になり、教育委員会を中心に「横地域跡総合調査委員会」が発足し、大変お忙しい中にもかかわらず、関係するこの道の権威者の数々のご指導ご協力のもとに、あくまでも史実に基づく研究・検討を重ねてまいりました。

今、私たち菊川町は町政の理想として、ふるさとの自然と歴史的遺産を大切にし、調和のとれた文化の香り豊かな町へと町民がそれぞれの立場で町づくり而努力しているところです。その中であって横地域跡は、町にとっても非常に意義のある歴史的遺跡であり、今後今までの調査結果を踏まえて、末永く後世に受け継がれていくための史跡公園として地域住民に誇れるものにしていきたいと考えています。さらに出来得れば、これからの子供達にとっても貴重な地域学習の場になればと期待しております。

こんな願いをこめての本報告書であります。今後において皆様方のより多くのご指導ご助言をいただき初期の目的が達成されることを心から願っております。最後になりましたが、ご執筆またはご協力いただきました関係各位に心から感謝を申し上げ序文にかえます。

菊川町教育委員会

教育長 鈴木 静 夫

例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡菊川町に所在する県指定史跡横地城跡の保存整備事業の一環としての総合調査の報告書である。
2. 横地城跡総合調査事業は、平成7年から10年にかけて県費補助事業として実施したものである。
3. 事業にあたっては、「横地城跡総合調査委員会」を設置し、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに委員会等の協議・調査によって行った。
4. 事業の事務局は、菊川町教育委員会生涯学習課であった。
5. 本書の執筆は、関係者で分担し一部を委託した。執筆者名は目次及びそれぞれの文に明示した。

6. 事業の実施にあたっては、次の機関のほか多くの各位の御協力を得た。厚く御礼申し上げます。
(敬称略・順不同)

大須賀町教育委員会 大東町教育委員会 掛川市教育委員会 相良町教育委員会 榛原町教育委員会
浜岡町教育委員会 金谷町教育委員会 島田市教育委員会 磐田市教育委員会 袋井市教育委員会
天竜市教育委員会 森町教育委員会 水窪町教育委員会 国立歴史民俗博物館 彦根市立図書館
群馬県吾妻町教育委員会 群馬県太田市教育委員会 千葉県光町教育委員会 福岡県柳川古文書館
岐阜県神岡町教育委員会 愛知県岡崎市教育委員会 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
三重県埋蔵文化財センター 財団法人静嘉堂
平田寺(相良町) 清浄寺(榛原町) 長福寺(掛川市) 医王寺(島田市) 今瀬寺(大東町)
正林寺(小笠町) 興盛寺 慈眼寺 龍谷寺 常泉寺 永寶寺 宝珠院 報恩寺 潮海寺 善福寺
洞月院 藤谷神社
中野晴久(常滑市教育委員会) 福田 誠(鎌倉市教育委員会) 大平愛子(神岡町教育委員会)
古川久雄(摂陽文化財調査研究所) 尾野善裕(京都国立博物館) 中山文人(松戸市博物館)
木村美代治・菊川 泉(鎌倉考古学研究所) 浅野晴樹(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事務所)
永井久美男(兵庫県埋蔵文化財調査会) 山田 猛・伊藤裕偉(三重県埋蔵文化財センター)
服部敬史・土井義夫(八上子郷上資料館) 柴田龍司(千葉県文化財センター)
藤沢良祐(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)
松井一明(袋井市教育委員会) 戸塚和美(掛川市教育委員会) 鈴木 守(榛原町教育委員会)
山崎克巳(磐田市教育委員会) 渋谷昌彦(島田市教育委員会) 木佐森道弘(大須賀町教育委員会)
足立順司・加藤理文・川合 修(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所) 大橋保夫(森町考古研究会)
赤瀬庄太郎 赤瀬 操 石川正幸 伊藤俊一 伊藤昭治 猪原恒男 金子正敏 栗田 務 近藤孝義
匂坂忠明 渋谷明徳 鈴木 勇 角皆英明 津川文一郎 坪井清二 坪井 尚 坪井正則 中川 勝
中田 稔 福井貴義 福島唯雄 二俣訓士 二俣碩文 堀内三吉 三ツ井春彦 三ツ井高子
宮城方雄 山崎松枝 横地 章 横地 治 横地勝則 横地一興 横地貞義 横地忠占 横地恒夫
横地敏明 横地英雄 横地 博 横地光徳 横地良成 横山みさを 横山祐一 伊藤初恵
伊藤せつ子

7. 総合調査報告書は、今回の報告書の別冊として資料編を刊行予定である。

目 次

第Ⅰ章 序 説

第1節 菊川町の位置と概要	事務局 石川睦美	1
第2節 歴史的環境	塚本和弘	2
第3節 横地城跡総合調査の目的	石川睦美	8

第Ⅱ章 横地城跡総合調査委員会について

第1節 調査委員会の構成	事務局 塚本和弘	9
第2節 調査委員会の調査内容	"	10
第3節 調査委員会の組織	"	11
第4節 調査委員会の活動経過	"	12
第5節 各専門部会の活動日誌	"	14

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 一民俗調査からみえる横地一	横地城保存会	16
第2節 文献資料にみる横地城と横地氏 一横地氏における性格の変化と築城一	齋 藤 慎 一	37
第3節 一中世山城一 横地城の実像に迫る	関 口 宏 行	50
第4節 遺跡関係(考古学関連) 横地城の調査	塚 本 和 弘	74
横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について	原 廣 志	92
互からみた菊川町の中世	"	116
第5節 石造物からみた中世の横地 一横地城周辺石造物調査の成果と課題一	桃 崎 祐 輔	124

第Ⅳ章 横地氏とその本拠の構造

1 横地遺跡群の空間構造と変遷	小 野 正 敏	155
2 勝間田城との陶磁器比較		158
3 残された問題		160

第Ⅴ章 保存整備に向けて

第1節 横地城跡調査の意義	向 坂 鋼 二	161
第2節 横地氏及びその関連遺跡調査の意義		163
第3節 保存整備及び活用における課題		165
図版1 年 表		167
図版2 横地城跡の遺構配置図(カラー)		169

別 図1 地名地図(2色)

" 2 横地城跡の地形図(1/500)	
---------------------	--

第1章 序 説

第1節 菊川町の位置と概要

菊川町は静岡県の中西部に位置し、小笠平野と榛原御前崎を含めた三角地帯の頂点にあり、静岡市と浜松市のほぼ中央に位置し、町域は6,388haである。現在の行政区は、昭和29年の堀之内町・横地村・内田村・加茂村・六郷村・西方村の町村の合併により菊川町が誕生し、その後、河城村と棚草原地区が昭和30年に編入し、現在に至っている。

町の東部は日本一の大茶園地帯牧之原台地を擁し遠く雪峰富士を望み、西には小笠の連山が起伏し、北には標高282.6mの火剣山を中心にした山地丘陵が連ね、南には沖積平野が広がり、北に高く南に低い穏やかな地形をなしている。町のほぼ中央を町名の山米となっている一級河川菊川が流れる。菊川は粟ヶ岳東麓榛原郡金谷町に源を発し、菊川町を経て小笠町・大東町を南流し遠州灘へ至る。菊川の支流には、富田川、沢水加川、西方川、小出川、上小笠川、稲部川、牛淵川がある。この川によって形成された菊川平野は町の南部に広がり、穀倉地帯となっている。気候は、年間平均気温16℃前後、年間日照時間約2,300時間という温暖の土地である。この恵まれた自然条件を利用した茶の栽培が盛んで、1,400haの茶園面積を有し、良質茶の産地として県内でも屈指の茶所となっている。

明治22年に東海道本線菊川駅（当時堀之内駅）が開設されて以来、駅前に市街地を形成してきた。昭和44年東名高速道路菊川インターチェンジが開設され、東遠地域の門戸として恵まれた立地条件の中、積極的な企業誘致を図るとともに、土地区画整理事業や住宅団地建設による都市環境整備を推進し、町の経済基盤の確立と都市機能の充実が図られてきている。

菊川町は古代から自然環境に恵まれた土地で先人の足跡を物語る文化財が多くみられる。文化財は、国指定の応声教院山門をはじめ県指定2件、町指定11件、埋蔵文化財包蔵地 224箇所となっている。特に、県指定史跡の横地城をはじめ内田氏の居館跡と推定される高田大屋敷遺跡・潮海寺を中心にした門前町である、潮海寺遺跡など中世の遺跡が多く存在し歴史ある町として現在に至っている。

横地城の立地する横地地区は、町内の東南にあたり東を榛原町、南を小笠町と隣接し、西は菊川が流れ地区境となっている。地区の西から中央には、牛淵川と菊川によって形成された沖積平野が広がり田園地帯となっている。横地城は地区でも東の丘陵部奥横地村にあたる。丘陵は、標高50m～70m前後と低く、段丘が発達した比較的水平な地形となっている。城跡周辺では、標高100m前後の山頂があり、この地区では標高の高い地点となっている。丘陵の地質は、軟弱な岩石を基盤としているため、浸食谷が樹枝状に発達し埋積谷が形成されている。さらに、丘陵斜めは急斜地形を形成しているため城郭を構築するには自然の防壁となっている。奥横地村は、丘陵の低位段丘面や谷戸を利用し住居を構えており、中世遺跡の分布状態と比較してもあまり変化はなく、中世以来大規模な開発もなく農村の景観を残した地域である。



第1図 位置図

第2節 歴史的環境

菊川町の歴史は、過去の発掘調査や昭和63年度に刊行された静岡県文化財地図に記載されている周知の遺跡をはじめ、近年確認された遺跡などから、原始の時代から菊川の地に先人立ちの営みがあったことを窺い知ることができる。ここでは、考古学の成果を踏まえて中世の時期まで横地を中心に順に追ってみる。

町のあけぼの、旧石器時代に遡ってみられ、半済の高田ヶ原遺跡（1998）、東横地の小太郎砦（1995）と三沢西原遺跡（1985）が挙げられる。旧石器時代の遺跡については、黒曜石の剥片が採集され、その存在は古くから指摘されていたが、昭和58年の三沢西原遺跡の発掘調査によって遺構として礫群、遺物では槍先形尖頭器、ナイフ形石器が検出され、生活の痕跡を裏付ける結果となった。その後、小太郎砦や高田ヶ原遺跡でナイフ形石器が発見されるなど著実に資料が増えつつある。

縄文時代には、集落が早期に始まり一時前期に断絶するものの、中期と継続する遺跡と中期に出現し後期に継続するものがあり、いずれも丘陵部に分布する。前者の遺跡は、高田ヶ原遺跡、千駄ヶ原遺跡、西原遺跡など比較的多くみられ、後者は小規模なものが多く打上鹿島遺跡など低位丘陵部に立地する傾向がみられる。さらに後晩期の遺跡では、石畑遺跡（1984）に代表されるように沖積平野に続く低位段丘上に位置する特色がみられる。横地地区の興嶽寺原丘陵には、三沢西原遺跡、東横地西原遺跡（1988）、久保之谷遺跡（1996）と集中している。三沢西原遺跡は、町内唯一の早期の住居跡や押型文・縄文・撫糸文土器を出し、東西文化の特徴を見ることのできる重要な遺跡となっている。東横地西原遺跡は、早期末から前期の遺跡で三沢西原遺跡に引き続く時期に当たる。久保之谷遺跡は、中期の曾利Ⅲ・加曾利Ⅱ式段階の集落が主体に形成されており、三沢西原遺跡が井戸尻Ⅲ・曾利Ⅰ式を主体とした集落であった時期より後出するもので、興嶽寺丘陵の中で早期から中期での集落の変遷を知ることのできる唯一の地域である。



三沢西原遺跡早期住居跡

弥生時代には、菊川に注ぐ西方川、上小笠川、牛瀧川の各支線流域に遺跡が分布する。西方川では、中期の標識遺跡となっている白岩遺跡が分布し、この地域を代表する中核的遺跡となっている。白岩遺跡は前期から中世まで継続し大規模な集落を構えている。上小笠川では、中内田地区に分布する東ノ坪遺跡・御門前遺跡の両遺跡による集落が中期から古墳時代前期にかけてこの地域の中核的遺跡となっている。横地地区を流れる牛瀧川流域には椎ヶ下遺跡、土橋遺跡が分布するが西方川、上小笠川流域の遺跡に比べ小規模な集落となっている。この地域では、東ノ坪遺跡や白岩遺跡から出土する瀬田式段階の土器はなく、椎ヶ下遺跡から白岩式土器が出土しているが、量的には少なく後期を主体となしており、他の地域より少し遅れて中期でも新しい段階から沖積地への進出が行われた地域であったと判断される。後期から古墳時



土橋遺跡弥生後期住居跡

代前期になると、沖積地以外に丘陵部に集落をみることができる。また、比較的支流となる河川に集落が集り、支流の流れ込む小規模な河川流域の谷間や舌状の小丘陵の尾根上にも住居を構え、開発が広範囲におよんでいたことを遺跡の分布状態が裏付けている。これらの特徴は、菊川流域だけでなく各地域にみられる傾向があり、人口の増加と集落間の緊張の高まりによる影響とする説がある。

古墳時代は弥生時代の遺跡分布とあまり変化はなく、集落は前期まで踏襲する形となっているが、中期には遺跡の分布は極端に少なく、現在のところ集落構造を把握できる状況に至っていない。後期になると、沖積地に立地する白岩遺跡、御門前遺跡、土橋遺跡など前期の集落の中核的な場所を中心に広がることを遺跡分布から読み取ることができる。そして後期後半頃には、久保之谷遺跡、高田ヶ原遺跡など丘陵上にも集落が築かれ、奈良時代まで継続する。古墳では、菊川流域での大型古墳をみ

ると小笠町上平川の方後円墳、上平川大塚古墳をはじめ、舟久保古墳、朝日神社古墳（以上小笠町）、半済の大徳寺古墳、神尾の庚申塚古墳（菊川町）などの前方後円墳がある。これらの古墳は、流域の丘陵部や低位丘陵地に前期から中期にかけて築かれ、首長の系譜を判断する資料となっている。後期になると、高塚古墳に代わって、横穴が墓制の特徴となっている。

横穴は、丘陵部の斜面の上部付近の凝灰岩層に掘り込み築造される。この横穴は、数十単位で群構成をなし群集墳を形成する。菊川流域では、横穴群の分布の特徴について『遺江の横穴群』（1983）の中で平野吾郎氏は、西方川、上小笠川、佐束川、下小笠川、牛淵川、丹野川、高瀬川の各流域ごとに7つのグループに分け、各グループを律令期の城隍郡の郷名に対比させて捉えている。菊川町では、西方川流域の大淵ヶ谷・山本横穴群、上小笠川流域の杉森・政所・東平尾横穴群、牛淵川流域の宇藤横穴・横谷横穴・下木所横穴群のグループとなる。これらの横穴は6世紀中葉頃に築造が始まり、追葬、墓前祭も含め、8世紀段階には造営が終息している。横地地区の古墳では、前方後円墳の神尾山腰の庚申塚古墳が最も古く、中期には横地小学校の北側打火山の段横地古墳がある。中期後半から後期前葉には、初期群集墳の宇藤横穴古墳群（1996）となり、6世紀中葉頃になると宇藤横穴群、横谷横穴群、など横穴の造営がみられ、奥横地村に分布する武衛原横穴群以外は、加茂と横地地区の境の丘陵が古墳時代の墓域となっている。このことは土橋遺跡や林光寺遺跡などの沖積地の集落遺跡と密接に関係していることを示唆するものである。

奈良時代から平安時代になると、西方川流域の堀田遺跡（1994）、豆尻Ⅱ遺跡（1988）や上小笠川流域の森前遺跡（1987）、御門前遺跡などが発掘調査され、集落痕跡を垣間見ることができるが、全体の遺跡の数に比べ未調査となっており、当時を語るには資料があまりに少ないと言わざるを得ない。横地地区は、『和名抄』によれば城隍郡荒木郷とされるが、加美郷とする文献もみられる。遺跡では、興嶽寺原に久保之谷遺跡、御屋敷段遺跡が分布し、掘立柱建物跡が検出されており、奈良時代の集落の一端を知る手掛りとなっている。しかし、沖積地では発掘調査や表探によって遺



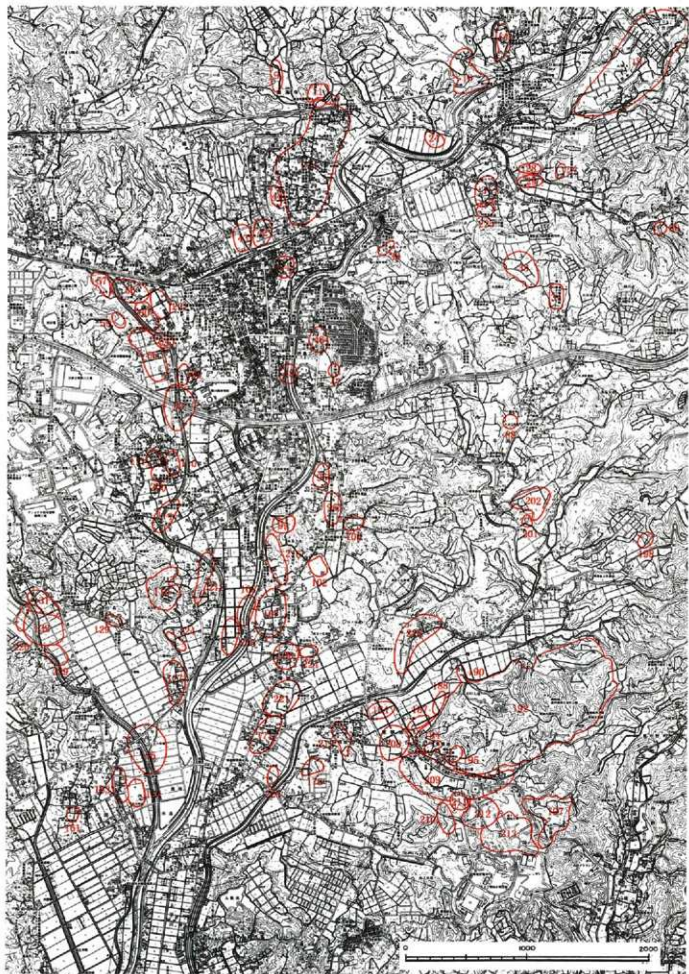
宇藤横穴群



久保之谷遺跡掘立柱建物跡

第1表 周边清跡一覧表

頁	番	番 名	所在地	時 代	住 居	備 考
9	1	男ノ子	支那	前清	支那	上巻
10	2	男ノ子	支那	前清	支那	上巻
11	3	愛知工學堂	支那	前清	支那	上巻
12	4	香島子	支那	前清	支那	上巻
13	5	支那	支那	前清	支那	上巻
14	6	支那	支那	前清	支那	上巻
15	7	支那	支那	前清	支那	上巻
16	8	支那	支那	前清	支那	上巻
17	9	支那	支那	前清	支那	上巻
18	10	支那	支那	前清	支那	上巻
19	11	支那	支那	前清	支那	上巻
20	12	支那	支那	前清	支那	上巻
21	13	支那	支那	前清	支那	上巻
22	14	支那	支那	前清	支那	上巻
23	15	支那	支那	前清	支那	上巻
24	16	支那	支那	前清	支那	上巻
25	17	支那	支那	前清	支那	上巻
26	18	支那	支那	前清	支那	上巻
27	19	支那	支那	前清	支那	上巻
28	20	支那	支那	前清	支那	上巻
29	21	支那	支那	前清	支那	上巻
30	22	支那	支那	前清	支那	上巻
31	23	支那	支那	前清	支那	上巻
32	24	支那	支那	前清	支那	上巻
33	25	支那	支那	前清	支那	上巻
34	26	支那	支那	前清	支那	上巻
35	27	支那	支那	前清	支那	上巻
36	28	支那	支那	前清	支那	上巻
37	29	支那	支那	前清	支那	上巻
38	30	支那	支那	前清	支那	上巻
39	31	支那	支那	前清	支那	上巻
40	32	支那	支那	前清	支那	上巻
41	33	支那	支那	前清	支那	上巻
42	34	支那	支那	前清	支那	上巻
43	35	支那	支那	前清	支那	上巻
44	36	支那	支那	前清	支那	上巻
45	37	支那	支那	前清	支那	上巻
46	38	支那	支那	前清	支那	上巻
47	39	支那	支那	前清	支那	上巻
48	40	支那	支那	前清	支那	上巻
49	41	支那	支那	前清	支那	上巻
50	42	支那	支那	前清	支那	上巻
51	43	支那	支那	前清	支那	上巻
52	44	支那	支那	前清	支那	上巻
53	45	支那	支那	前清	支那	上巻
54	46	支那	支那	前清	支那	上巻
55	47	支那	支那	前清	支那	上巻
56	48	支那	支那	前清	支那	上巻
57	49	支那	支那	前清	支那	上巻
58	50	支那	支那	前清	支那	上巻
59	51	支那	支那	前清	支那	上巻
60	52	支那	支那	前清	支那	上巻
61	53	支那	支那	前清	支那	上巻
62	54	支那	支那	前清	支那	上巻
63	55	支那	支那	前清	支那	上巻
64	56	支那	支那	前清	支那	上巻
65	57	支那	支那	前清	支那	上巻
66	58	支那	支那	前清	支那	上巻
67	59	支那	支那	前清	支那	上巻
68	60	支那	支那	前清	支那	上巻
69	61	支那	支那	前清	支那	上巻
70	62	支那	支那	前清	支那	上巻
71	63	支那	支那	前清	支那	上巻
72	64	支那	支那	前清	支那	上巻
73	65	支那	支那	前清	支那	上巻
74	66	支那	支那	前清	支那	上巻
75	67	支那	支那	前清	支那	上巻
76	68	支那	支那	前清	支那	上巻
77	69	支那	支那	前清	支那	上巻
78	70	支那	支那	前清	支那	上巻
79	71	支那	支那	前清	支那	上巻
80	72	支那	支那	前清	支那	上巻
81	73	支那	支那	前清	支那	上巻
82	74	支那	支那	前清	支那	上巻
83	75	支那	支那	前清	支那	上巻
84	76	支那	支那	前清	支那	上巻
85	77	支那	支那	前清	支那	上巻
86	78	支那	支那	前清	支那	上巻
87	79	支那	支那	前清	支那	上巻
88	80	支那	支那	前清	支那	上巻
89	81	支那	支那	前清	支那	上巻
90	82	支那	支那	前清	支那	上巻
91	83	支那	支那	前清	支那	上巻
92	84	支那	支那	前清	支那	上巻
93	85	支那	支那	前清	支那	上巻
94	86	支那	支那	前清	支那	上巻
95	87	支那	支那	前清	支那	上巻
96	88	支那	支那	前清	支那	上巻
97	89	支那	支那	前清	支那	上巻
98	90	支那	支那	前清	支那	上巻
99	91	支那	支那	前清	支那	上巻
100	92	支那	支那	前清	支那	上巻
101	93	支那	支那	前清	支那	上巻
102	94	支那	支那	前清	支那	上巻
103	95	支那	支那	前清	支那	上巻
104	96	支那	支那	前清	支那	上巻
105	97	支那	支那	前清	支那	上巻
106	98	支那	支那	前清	支那	上巻
107	99	支那	支那	前清	支那	上巻
108	100	支那	支那	前清	支那	上巻
109	101	支那	支那	前清	支那	上巻
110	102	支那	支那	前清	支那	上巻
111	103	支那	支那	前清	支那	上巻
112	104	支那	支那	前清	支那	上巻
113	105	支那	支那	前清	支那	上巻
114	106	支那	支那	前清	支那	上巻
115	107	支那	支那	前清	支那	上巻
116	108	支那	支那	前清	支那	上巻
117	109	支那	支那	前清	支那	上巻
118	110	支那	支那	前清	支那	上巻
119	111	支那	支那	前清	支那	上巻
120	112	支那	支那	前清	支那	上巻
121	113	支那	支那	前清	支那	上巻
122	114	支那	支那	前清	支那	上巻
123	115	支那	支那	前清	支那	上巻
124	116	支那	支那	前清	支那	上巻
125	117	支那	支那	前清	支那	上巻
126	118	支那	支那	前清	支那	上巻
127	119	支那	支那	前清	支那	上巻
128	120	支那	支那	前清	支那	上巻
129	121	支那	支那	前清	支那	上巻
130	122	支那	支那	前清	支那	上巻
131	123	支那	支那	前清	支那	上巻
132	124	支那	支那	前清	支那	上巻
133	125	支那	支那	前清	支那	上巻
134	126	支那	支那	前清	支那	上巻
135	127	支那	支那	前清	支那	上巻
136	128	支那	支那	前清	支那	上巻
137	129	支那	支那	前清	支那	上巻
138	130	支那	支那	前清	支那	上巻
139	131	支那	支那	前清	支那	上巻
140	132	支那	支那	前清	支那	上巻
141	133	支那	支那	前清	支那	上巻
142	134	支那	支那	前清	支那	上巻
143	135	支那	支那	前清	支那	上巻
144	136	支那	支那	前清	支那	上巻
145	137	支那	支那	前清	支那	上巻
146	138	支那	支那	前清	支那	上巻
147	139	支那	支那	前清	支那	上巻
148	140	支那	支那	前清	支那	上巻
149	141	支那	支那	前清	支那	上巻
150	142	支那	支那	前清	支那	上巻
151	143	支那	支那	前清	支那	上巻
152	144	支那	支那	前清	支那	上巻
153	145	支那	支那	前清	支那	上巻
154	146	支那	支那	前清	支那	上巻
155	147	支那	支那	前清	支那	上巻
156	148	支那	支那	前清	支那	上巻
157	149	支那	支那	前清	支那	上巻
158	150	支那	支那	前清	支那	上巻
159	151	支那	支那	前清	支那	上巻
160	152	支那	支那	前清	支那	上巻
161	153	支那	支那	前清	支那	上巻
162	154	支那	支那	前清	支那	上巻
163	155	支那	支那	前清	支那	上巻
164	156	支那	支那	前清	支那	上巻
165	157	支那	支那	前清	支那	上巻
166	158	支那	支那	前清	支那	上巻
167	159	支那	支那	前清	支那	上巻
168	160	支那	支那	前清	支那	上巻
169	161	支那	支那	前清	支那	上巻
170	162	支那	支那	前清	支那	上巻
171	163	支那	支那	前清	支那	上巻
172	164	支那	支那	前清	支那	上巻
173	165	支那	支那	前清	支那	上巻
174	166	支那	支那	前清	支那	上巻
175	167	支那	支那	前清	支那	上巻
176	168	支那	支那	前清	支那	上巻
177	169	支那	支那	前清	支那	上巻
178	170	支那	支那	前清	支那	上巻
179	171	支那	支那	前清	支那	上巻
180	172	支那	支那	前清	支那	上巻
181	173	支那	支那	前清	支那	上巻
182	174	支那	支那	前清	支那	上巻
183	175	支那	支那	前清	支那	上巻
184	176	支那	支那	前清	支那	上巻
185	177	支那	支那	前清	支那	上巻
186	178	支那	支那	前清	支那	上巻
187	179	支那	支那	前清	支那	上巻
188	180	支那	支那	前清	支那	上巻
189	181	支那	支那	前清	支那	上巻
190	182	支那	支那	前清	支那	上巻
191	183	支那	支那	前清	支那	上巻
192	184	支那	支那	前清	支那	上巻
193	185	支那	支那	前清	支那	上巻
194	186	支那	支那	前清	支那	上巻
195	187	支那	支那	前清	支那	上巻
196	188	支那	支那	前清	支那	上巻
197	189	支那	支那	前清	支那	上巻
198	190	支那	支那	前清	支那	上巻
199	191	支那	支那	前清	支那	上巻
200	192	支那	支那	前清	支那	上巻
201	193	支那	支那	前清	支那	上巻
202	194	支那	支那	前清	支那	上巻
203	195	支那	支那	前清	支那	上巻
204	196	支那	支那	前清	支那	上巻
205	197	支那	支那	前清	支那	上巻
206	198	支那	支那	前清	支那	上巻
207	199	支那	支那	前清	支那	上巻
208	200	支那	支那	前清	支那	上巻
209	201	支那	支那	前清	支那	上巻
210	202	支那	支那	前清	支那	上巻
211	203	支那	支那	前清	支那	上巻
212	204	支那	支那	前清	支那	上巻
213	205	支那	支那	前清	支那	上巻
214	206	支那	支那	前清	支那	上巻
215	207	支那	支那	前清	支那	上巻
216	208	支那	支那	前清	支那	上巻
217	209	支那	支那	前清	支那	上巻
218	210	支那	支那	前清	支那	上巻
219	211	支那	支那	前清	支那	上巻
220	212	支那	支那	前清	支那	上巻
221	213	支那	支那	前清	支那	上巻
222	214	支那	支那	前清	支那	上巻
223	215	支那	支那	前清	支那	上巻
224	216	支那	支那	前清	支那	上巻
225	217	支那	支那	前清	支那	上巻
226	218	支那	支那	前清	支那	上巻
227	219	支那	支那	前清	支那	上巻
228	220	支那	支那	前清	支那	上巻
229	221	支那	支那	前清	支那	上巻
230	222	支那	支那	前清	支那	上巻
231	223	支那	支那	前清	支那	上巻
232	224	支那	支那	前清	支那	上巻
233	225	支那	支那	前清	支那	上巻
234	226	支那	支那	前清	支那	上巻
235	227	支那	支那	前清	支那	上巻
236	228	支那	支那	前清</		



第2圖 周辺遺跡分布図

物は採収され、直接生活の痕跡を示す遺構は明らかになっていない。しかし、地名の中に坪等条里制の痕跡を窺いみることができ、水田開発に携わった人々のムラが今後明らかとなるであろう。

平安時代から中世にかけて、菊川の特徴として窯業生産が挙げられる。東海地方は、全国的にみて窯業生産が盛んな地域で、当地域でも皿山古窯をはじめ牛瀨川流域で中世の窯業生産が行われている。窯は牧之原台地から延びる丘陵の比較的緩やかな傾斜を利用して築かれている。しかし、この窯の立地環境が茶栽培の適した地形となっており、そのほとんどが耕作によって消滅している。窯の操業は、10世紀後半から開始し、12世紀後半から13世紀前半に最盛期を迎え、13世紀中葉で終息する。菊川流域での12世紀から13世紀の遺跡の状況が、比較的他の地域に比べ把握されているのは、供膳具として硬質な陶器の山茶碗類を取り込んだ文化圏であったことが、遺跡の状態を知る手掛りとなったこと、さらに豊富な生産量と消費地が密接に関連し成り立っていたこと等によるものと思われる。いずれにしても窯業生産に帰依するところが大きい。

中世から戦国期になると菊川の里には、富田城、堀田城、横地城、上ノ城などの城が築かれる。この地域では菊川を挟んで右岸の内田郷を内田氏が、左岸の河村荘横地一帯を御家人の横地氏によってそれぞれ政治・経済的に緊張を保ち領地経営に動んでいたが、応仁の乱以後、今川氏の台頭により軍事的緊張が高まり文明8年横地城の落城を期に、この地域が今川氏、武田氏、徳川氏の領地の戦いの場と変貌していた。城郭遺跡としては、横地城以外は明確な年代や城主の経緯が明らかでなく城郭研究が遅れている。一方、研究の遅れは、戦国期の動乱の影響で文獻や文化財資料が消滅していることが、大きく影響してより困難さに拍車をかけている。遺跡は、城郭周辺にみられ、富田城の東に善福寺遺跡が分布し居館跡と考えられている。善福寺遺跡の年代は12世紀～13世紀と15世紀～16世紀にまわって遺物がみられ、居館は後者の年代に対比されると考えられる。堀田城の所在する西方では、西方川を挟んで東に広がる沖積地に堀田遺跡がある。遺跡は、屋敷地を溝によって区画し、その中に掘立柱建物を構えている。遺物は、山茶碗、船載陶磁器、常滑産壺や古瀬戸後期の陶器などが出土している。年代的には、12世紀～13世紀と15世紀～16世紀の二時期に集落の形成を見ることができると



善福寺遺跡中世遺構

跡となっている。横地地区では、奥横地ムラの谷全体に遺跡が広がり分布している。遺跡は、横地氏に関連する時期の遺跡となっており、横地氏の居館と推測される殿ヶ谷遺跡（1988、1996、1998）、屋敷跡の伊平遺跡、横地城下遺跡群がみられる。殿ヶ谷遺跡は、奥横地ムラの西側のムラの入口に位置し、谷戸型の居館跡となっている。また、伊平遺跡は、興嶽寺原に続く丘陵から派生した小屋根の小谷に屋敷地を構えており、いずれも谷戸型の居館タイプとなる。また、奥横地ムラの中央に広がる沖積地では、建物跡が部分的に確認されており、横地城下遺跡群となっている。さらに宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔などの石造物が三光寺跡裏、慈眼寺など寺院跡や奥横地集落の至る所に分布し、中世のムラがそのまま残っていると言える。また、横地から神尾周辺の広範囲に中世の遺跡や石造物が分布し、当時の繁栄をうかがい知ることができる。

参考文献

- 菊川町教育委員会 1984「石畑遺跡」
- “ 1985「三沢西原遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第4号
- “ 1987「森前遺跡・森前外屋敷遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第10集
- “ 1988「殿ヶ谷遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第12集
- “ 1988「豆尻Ⅱ遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第13集
- “ 1988「東横地西原遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第14号
- “ 1993「高田大屋敷遺跡第8次発掘調査報告書」菊川町埋蔵文化財調査報告書第25集
- “ 1994「堀田遺跡Ⅱ」菊川町埋蔵文化財調査報告書第27集
- “ 1994「善福寺遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第29集
- “ 1994「堀田遺跡Ⅲ」菊川町埋蔵文化財調査報告書第30集
- “ 1995「横地城南遺跡群発掘調査報告書（伊平遺跡・小太郎砦）」菊川町埋蔵文化財調査報告書第35集
- “ 1996「潮海寺門前町遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第39集
- “ 1996「猿田谷遺跡Ⅱ」菊川町埋蔵文化財調査報告書第37集
- “ 1996「久保之谷遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第40集
- “ 1996「宇藤遺跡群」菊川町埋蔵文化財調査報告書第41集
- “ 1996「殿ヶ谷遺跡第4次発掘調査」菊川町埋蔵文化財調査報告書第36集
- “ 1997 菊川町文化財年報－第4号－
- “ 1998「高田ヶ原遺跡第8次発掘調査」菊川町埋蔵文化財調査報告書第50集
- “ 1998 菊川町文化財年報－第5号－
- “ 1999「林光寺遺跡」菊川町埋蔵文化財調査報告書第55集
- 静岡県教育委員会 1981「静岡県の中世城館跡」静岡県文化財調査報告書第23集
- “ 1983「遠江の横穴」

第3節 横地城跡総合調査の目的

近年、生涯学習が見直され各地域で文化財を活かした町おこし等が盛んに進められている。隣接する市町村でも、中世山城や城郭を中心とした史跡公園整備を行い、文化財を活用した町づくりと文化学習の場としている。

菊川町には、中世土豪である横地氏が築いた横地城をはじめ、多くの文化財が存在する。横地城は、山城の形態を非常に良く留めているため、歴史的評価の高い史跡として、昭和46年に静岡県の史跡指定を受け、町内唯一の史跡指定文化財となっている。この横地城は、地元では古くから知られ地域のスティタスシンボルとして保護されてきた。横地城の研究は、昭和44年国学院大学による調査で縄張図が作成された。この調査がきっかけとなり、横地古城保存会（後の横地城保存会）や静岡古城研究会によって、各遺構の踏査が実施され精密な平面図や縄張図が作成された。その結果、城郭の構造が明らかとなり室町時代の城郭としては、県内では有数な遺跡として注目されることとなった。そして、静岡県教育委員会による中世城跡踏査調査が昭和53年度から55年度にかけ行われ、やや遅れていた中世遺跡の研究をより推し進めることとなった。さらに、この調査は城郭研究について城郭部分だけでなく、周辺の地名や景観も含めた総合的な条件の中での調査の必要性が新ためて裏付けられることとなり、新たな研究の転換期ともなった調査であった。しかし、横地城は公有地であったこともあり付近での開発もなく一時研究の停滞期となった。横地城が現在まで良好な状態で保存されてきたことには要因がある。第1に、横地城周辺の山林について昭和6年造林組合が設立され、村有地として植林され管理されたためである。特に横地神社周辺は区有地として昭和25年組合員に譲渡されたが、開発が行われなかった。この時期木材の需要が高く、伐採後もスギやヒノキが植林され、山林として保護されてきた経緯による。第2に、静岡県指定史跡となったことで昭和50年代からの機械化の中で、各地で山が崩れさけ畑や宅地へと変貌する流れに、取り込まれずに済んだことであった。公有化については、地元の方々の横地城に対する理解が高かったことや、横地城保存会や故鈴木則夫氏菊川町文化財保護委員長が努力があった結果であろう。

その横地城を取り巻く環境は大きく変化し、工業導入により、人口規模も増加し宅地化も進み、その結果、自然との調和・景観・歴史保存等との大きな問題が生じるなど、このまま後世に保存していくことは厳しい状況となっている。

このような状況下、自然が残る比較的保存状態の良い中世の山城は、菊川町民にとってかけがえのない文化財であることはもちろん、全国的に見ても貴重な文化遺産として後世に伝えていくことは菊川町民の責務であり、文化財の愛護を進め、合わせて歴史文化の学習の場、憩いの場として活用を図るために史跡公園として整備するための保存整備事業を計画することとなった。

この整備は、横地城跡総合調査委員会を設置して調査研究を行い、今後の整備に必要な基礎資料の作成と歴史的位置付けを進めるものである。



昭和11年頃の東の城付近開墾状況
(三ツ井高子所蔵)

第Ⅱ章 横地城跡総合調査委員会について

第1節 調査委員会の構成

整備事業は、歴史的位置付けに伴い忠実に保存整備することを目的とし、将来的な保存・管理を視野に入れて実施するものである。事業を進めるにあたり学識経験者、行政関係者、地元住民、民間機関等の多くの方々参加により、地元住民はもとより県民にあまねく横地城跡の重要性と後代へ引き継いでいくべき貴重な遺跡であることの理解を求め、行政と地域が一体となって推進する総合的な整備・活用の対応を図っていくものである。

整備事業の期間は、平成7年から数年に跨る長期的な事業である。そのため、第Ⅰ期から第Ⅲ期の段階に分けて実施するものである。各段階に応じて委員会を構成し対応を図る。

第Ⅰ期 総合調査委員会を構成して、横地城及び横地周辺の中世関連の総合調査を行う。

調査委員会は、学識経験者を委員として構成し、平成7年度に発足し10年度に、調査成果を報告書にまとめる。

第Ⅱ期 整備基本構想策定委員会を構成して、総合調査の成果をもとに史跡公園整備構想の検討を行う。

策定委員会は、総合調査委員会の調査報告を基に史跡公園の構想を練り整備化を図る。また環境アセスメントについて調査を行う。平成11年度に会を発足し、13年度までに整備基本構想の作成を行う。

第Ⅲ期 整備基本構想に基づき、整備構想実施計画書を作成し、本格的な調査復元整備等を行う。期間は13年度以降。



年度	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第Ⅰ期 (総合調査)	■	■	■	■										
第Ⅱ期 (整備構想計画)					■	■	■	■						
第Ⅲ期 (整備)														
											(未)	(定)		

＜年度計画表＞

第2節 調査委員会の調査内容

文献・地名関係

- ① 文献・古文書資料調査 県内外の文献や書籍から、横地氏関連史料をリストアップし調査カードを作成する。リストの中から原本の調査を行う。一方地元や全国の横地姓の方々への資料の掘り起こし、全国に残る横地系図についての調査を実施し横地氏の動向を把握する。
- ② 地名調査 横地地区内を対象に聞き取りと土地宝典や古文書からの読み取りによる地名資料を収集する。地名については、小字・通称・呼び名などすべて網羅し地名一覧表とカードを作成する。
- ③ 伝承・屋号調査 地元での聞き取り調査を行い、資料カードを作成する。

城郭関係

- ① 測量調査 県指定範囲及びその周辺の地形測量を行う。平成7年度から10年度で完了する。平場や堀切等の遺構部分については、縮尺100分の1で、全体は原則的に500分の1の縮尺で行う。また、測量範囲内をグリッド設定しそれに併せて基準点を配置する。
- ② 縄張調査 踏査による遺構の検出・確認と各パーツの用語統一を図る。各遺構を網羅した全体縄張図を作成する。
- ③ 発掘調査 平場、堀切等遺構の調査及び発掘による検証を行う。
- ④ 周辺中世城郭調査 町内の堀田城・富田城・上ノ城・小太郎若や同時代の勝間田城・殿谷城や菊川流域の城郭を調査し、横地城の全体像を把握する。
- ⑤ 古道調査 城郭への交通ルートの解明をする。

考古関係

- ① 聞き取り調査 現地での伝承や地形の聞き取りを行う。
- ② 地形調査 現地踏査による古図を参考に地割等を読み取る。
- ③ 発掘調査 横地城跡では、保存状態を把握し遺構・遺物の検出を図り年代的位置付けを行う。横地氏関連遺跡群の性格と遺跡範囲の把握を目的に確認調査を実施し資料の収集を行う。
- ④ 周辺地域の中世遺跡調査 過去に調査された殿ヶ谷遺跡や藤丸館遺跡などの横地氏関連遺跡群や瀬海寺・掛川市殿谷城・榛原町勝間田城・磐田市見付端城等周辺地域の遺跡について、遺構・遺物の再調査研究を行い、地域の集落研究解明を行う。
- ⑤ 石造物の調査 横地地区における石造物の分布調査を行う。各石造物の計測・写真撮影と基礎データの資料化を進める。中東遠地域に分布する年代基準となる石造物を調査する。この地域での石造物の変遷を把握する。

第3節 調査委員会の組織

総合調査は、横地城及び横地周辺の中世村落景観を、あらゆる角度から調査・研究し分析を進める。そのためには文献史学・民俗学・城郭史学・考古学・宗教学等様々な分野の学識的研究体制を確立する必要から、調査委員会は学識経験者で構成される。委員会では7名を委員に委嘱し、平成10年度までを任期とした。委員は、文献・民俗関係、城郭関係、考古学関係の三部門に編成される。各部門は、年度ごとに調査計画書を作成し、それに基づき調査活動を行い、調査成果について報告する方法で運営することにした。委員会の会議は、年4回ないし5回を目標に開催する。会議では、各部門の成果についての報告、全体討論を中心として問題点や調査方法、今後の計画について方向付けを行い、必要に応じて現地視察を計画した。調査の経過報告及び成果については、年度の最終の委員会で報告会や講演会を開催し、地元住民や県民に対して調査への理解と文化財の啓発を図った。また、リフレットを作成し調査の公開を行い、行政と住民と一体となって事業を推進するように努めた。

調査委員会名簿

	氏 名	分 野	役 職 等	備 考
委員長	向 坂 鋼 二	考 古	静岡県考古学会会長	平成8年度から参加
副委員長	小 野 正 敏	考 古	国立歴史民俗博物館助教授	
委 員	鈴 木 哲 太郎	民 俗	横地城保存会会長	
"	斎 藤 慎 一	文献・城郭	江戸東京博物館学芸員	
"	関 口 宏 行	城 郭	静岡中世城郭調査研究員	
"	原 廣 志	考 古	鎌倉考古学研究所研究員	
"	桃 崎 祐 輔	考古・宗教	筑波大学歴史・人類学系 日本学術振興会特別研究員	平成8年度から参加

平成7年度 委員長 小和田哲男（静岡大学教育学部教授） 委員 野沢則幸（名古屋市博物館学芸員）

調査指導機関	静岡県教育委員会	調査担当	山田成洋	
	文化課	管理担当	鈴木利男	中山正典
調査実施機関	菊川町教育委員会	教 育 長	鈴木静夫	
		事務局長兼生涯学習課課長	横山守孝（平成7・8年度）	
		生涯学習課学術文化係係長	落合偉之（平成9・10年度）	
		学術文化係	石川睦美	
			塚本和弘	

第4節 調査委員会の活動経過（平成7年～平成11年）

＜平成7年度＞

7年9月29日 第1回 横地城跡総合調査委員会の開催

- ・委嘱書の交付
- ・委員長及び副委員長の選任について
- 30日 横地城跡の視察
- ・調査計画について
- ・過去の調査資料の検討

11月22日 第2回・駿ヶ谷遺跡第4次調査の視察

- ・過去の調査資料の検討

8年2月10日 第3回・7年度の調査成果について

- ・8年度事業計画について

11日 第1回報告会 テーマ「横地氏と横地城」

「横地氏と横地城」 小和田哲男



＜平成8年度＞

4月20日 第4回・委員長及び副委員長の選任について

- ・8年度事業について
- ・相良町平田寺と榛原町清浄寺の視察
- ・菊川町及び周辺地域における中世石造物研究の議題（桃崎氏）

6月14日 第5回・榛原町勝間田城と調査資料の視察

15日 勝間田城の縄張、横地城周辺の城郭遺構について（齋藤氏）

8月26日 第6回・リフレットの作成について

- ・第2回調査報告会について
- ・金谷町三ツ沢窯出土品の調査

10月19日 第7回・横地城跡第1次発掘調査現地視察

- ・発掘調査の成果について
- ・掛川市溝江地区観音寺石塔視察

9年1月20日 横地城跡総合調査だより1「横地城とその時代」刊行

2月1日 第8回・横地城跡現地視察

- ・平成8年度の成果について
- ・平成9年度の事業計画について

2日 第2回報告会 テーマ「横地城とその時代」

「横地氏の動向」 齋藤真一

「横地城と城郭」 関口宏行

「調査された横地の遺跡」 小野正敏

「地名について」 鈴木哲太郎

「菊川町の中世石造物」 桃崎祐輔

討論会 司会 向坂鋼二

パネラー 小野・齋藤・関口・桃崎・鈴木氏



<平成9年度>

- 5月11日 第9回・9年度事業について
・城郭用語について（関口氏）
- 8月30日 第10回・宇蘇横穴遺跡の視察
・殿ヶ谷遺跡第5次調査報告
・潮海寺出土の瓦類について（原氏）
・横地氏成立と中世菊川について協議
- 11月22日 第11回・横地城跡第2次発掘調査現地視察
・発掘調査の成果について
- 23日
・堀田城、潮海寺、富田城、菩提寺の視察
・周辺城郭と横地城について
- 10年2月8日 第3回文化財講演会にて桃崎祐輔氏講演
テーマ「土橋遺跡の出土品からみた古代・中世のまじない信仰」
- 2月11日 第12回・横地城跡総合調査の中間報告の発表
・総合調査成果について
・慈眼寺遺跡の調査成果について（桃崎氏）
・平成10年度の事業の計画について



<平成10年度>

- 4月25日 第13回・平成10年度事業について
・総合調査報告書について
- 7月18日 第6回小笠・掛川郷土史研究会で齋藤氏講演
テーマ「横地城と横地氏について」
- 8月28日 第14回・総合調査報告書について
・平成11年度の資料編について
・殿ヶ谷遺跡第7次調査について
- 29日
・菊川町及び周辺地域における中世石造物研究の課題（桃崎氏）
・遺跡からみた中世の様相（小野・原氏）
・横地氏と横地城（齋藤氏）
・横地城の縄張について（関口氏）
- 11月14日 第15回・水窪町高根城の視察
・総合調査報告書について
・今後の事業計画について
・第3回調査報告会について
- 11年2月14日 第16回・総合調査の成果について
・総合調査報告書について
・平成11年度の資料編について



第3回報告会 テーマ「横地氏遺跡群から何がわかったか」

「横地氏遺跡群から何がわかったか」 小野正敏

討論会 司会 向坂鋼二

パネラー 小野・齋藤・原・鈴木氏

20日～2月9日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10月26日～27日	西藤氏による横地城跡調査調査。小野氏による元島・鍛ヶ谷・伊平道跡出土遺物の調査
11月7日～20日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10月～20日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
16日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
11月22日～23日	第11回調査委員会開催
23日～26日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
21日～12月11日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
12月3日～5日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
5日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
9日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10月11日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
17日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
2月7日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
6日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
9日～10日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
13日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
2月11日	第12回調査委員会開催
12日～13日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
3月8日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
24日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
25日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
26日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
27日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
28日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
29日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
30日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
31日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
4月1日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
2日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10日～20日	堀崎氏・古川久雄氏（日本石塔学会）による石塔調査（豊原寺）
21日～26日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
28日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
4月25日	第13回調査委員会開催
27日～28日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
5月20日	小野・堀崎氏・堀本による報告書の打ち合せ
21日	小野氏・堀本による報告書の打ち合せ
27日	堀本による石塔調査（豊原寺）
6月16日～18日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
19日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
20日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
21日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
7月17日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
18日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
23日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
24日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
30日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
8月3日～6日・11日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
6日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
9日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10日～12日・20日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
14日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
15日～16日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
18日～21日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
26日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
28日～29日	第14回調査委員会開催
30日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
31日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
9月1日～3日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
4日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
5日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
6日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
7日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
9日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
14日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
17日～21日・25日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
10月13日～14日・16日・22日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
23日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
26日～28日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
29日～11月5日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
11月13日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
14日	第15回調査委員会開催
12月1日・2日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
21日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
22日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
11月2月13日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
2月14日	第16回調査委員会開催
16日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
3月1日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
3月～5月	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）
20日～24日	堀崎氏による石塔調査（豊原寺）



堀崎氏による石塔調査（豊原寺）



堀崎氏による石塔調査（豊原寺）

第三章 調査の概要

第1節

—民俗調査からみえる横地—

横地城保存会

はじめに

横地地区は、菊川町内の南東部に位置する地区で、南が小笠町、西が菊川が境となり東西に広がる地域である。地区の中央の沖積地は水田、丘陵部には茶畑と典型的な農村主体の集落となっている。そのため、農業に係わる行事や祭祀事が多く伝承され生きついている。従来、横地地区の民俗調査の研究は極めて少なく、昭和61年3月に刊行された『横地村誌』の中で民俗誌的な記述が断片的に報告されているが、資料的に重要な研究の一つにあげられる。本格的に学術的な調査が行われたのは、静岡県史編纂事業の一環として民俗部会による調査が昭和62年に実施され、その成果は平成元年3月に静岡県史民俗調査報告書第7集『横地の民俗』として報告書が刊行されている。報告書では、民俗芸能や祭祀を始め、日常的な民俗事象まで総合的に網羅しまとめられており、学術的に評価の高いものであり、当地域の民俗学研究に新たな光を与えるものであった。その後、地元の人々を中心に構成されている横地城保存会によって、横地地区の地名について平成7年3月刊行の菊川町埋蔵文化財報告書第35集『横地城南遺跡群』の中で、地区内の地名を六項目に分類し、各村ごとに特徴を述べている。そして、明細な地名地図を作成を行っており、明治以降の地名資料について一定の評価を与えられるものである。しかし、地名の時期について近世文書を始め対比資料（文獻等）との裏付けがなく、研究に課題を残している。以上のように、近年わずかながら民俗関係の研究は増えつつある。その要因として、近代化していく農村地域の変貌が一つの危機を生み、地方史を自覚めさせ逆に研究を加速させることとなった。ここでは、従来の研究を踏まえた中で、中世横地の一端を窺いみることであればと考え、地名をはじめ屋号などの調査研究について語ることにする。

1) 地名

地名は「見えざる無形の文化遺産」と呼ばれ、歴史研究にとって重要な資料となっている。特に、中世の城郭跡や村落研究には、欠かせない調査方法の一つにあげられる。

地名の由来について検証する場合、地名は本来文字に書かれたものでなく、伝承として残るもので現在漢字で表記されている字のみで見て、その由来を考えることは危険であり、平仮名や片仮名に直し検討を加える必要がある。また、地方によって語源やアクセントの違いによる点もあり、方言にも充分注意することも重要である。

地名の調査は、地籍図・文獻（検地帳）・現地調査による聞き取りによる資料収集を行い、その資料を調査票に記載し、さらに地図に地割を復元し、地名を記入する方法を用いた。

地名は人字・小字はもとより、それ以下の小名・孫名などの地名、さらに通称や屋号などに注意を払って資料収集に努めた。

○ ヨコチ地名の由来

横地は、地元ではヨコチ又はヨコヂの両方が使われている。昭和57年の角川書店の『日本地名大辞典』ではヨコチと記載されており、前者の呼称が一般的と言える。このヨコチという地名の由来について調べると幾つかの説があり、その内代表的なものを取り上げてみると以下のとおりである。

地形・地勢説・・・城飼川(菊川)は、城飼郡の中央を流れる代表的な河川で、その河川に対して横又は傍にあることから「ヨコ」と言い、「チ」は未完成又は開発の土地を意味する語源からきており、両者が合せヨコチと付いたと考えられる。

歴史行政地名説・・・桐田幸昭氏が昭和46年刊行の『中世夜夜中山考』「九横地氏の興起」の中で、郷甲制の中で荒木郷・加美郷・河上郷などの周辺三郷のいずれにも俗さない余戸地であった地域であったことから山来するとされる。

人名地名説・・・『横地城南遺跡群』の報告書の中に横地城保存会による度会彌宜に関連の説があるので、本文を抜粋し以下のとおり記述する。

古代遠江国は十二の郡からなっていた。この土地(横地)は城飼郡の中にあり当時は荒木郷(安良木)といい隣地には河上(加波加美)狭束(佐都加)などの郷があり、荒木郷外12位あったという。

荒木郷は東西横地と上下平川を荒木ノ庄と称し、荒木郷転じて庄名になる。荒木は、万葉集の中に「種種時く荒木の小田を求めむと足結い出てぬれぬ此の河の瀬に」と読まれている。さらに続日本書記分中に「神護景雲元年(767年)荒木忍国が聚田百町庄三区を奈良の西人寺(東大寺の反対側の寺)に献じたとする。その功績によって従九以下の位を授けられた」とある。伊勢神宮には大祭主(長官)と現地にあって神事を専門に司る。彌宜(ねぎ)があり、時代が下がると大祭主は専ら人中出皇太神宮(内宮)荒木田彌宜家尊受人神官(外宮)は度会(ワタライ)彌宜に固定されるようになった。荒木忍国、大祭主、大中臣家も伊勢朝臣家も二侯彈正も度会家も共に横地に関係が深く結びついていると思われる。奥横地の西北部に神田、松木田の地名が残っている。松木伊勢彌宜家の松木と同名で度会氏から横地常親が出ている。初めて横地の名が用いられた最初と思われる。

度会を名乗るのは長保三年(1001年頃)からとされている度会氏八代目に当たるのが横地常親である。横地太郎が横地氏を名乗ったのが何時からか明確ではないが、保元の乱に史上に出てくる最初で(1156年)あり以後、今川氏に敗れるまで永年当地に住んできた。各地の横地性は横地と呼んでいる。それは度会二門系図の中に横地から系譜を引くものではないかと思われる。

荒木田性横知

秋並	—	常相	—	延兼	—	季光	—	常親	—	親任	常行	常雅	親雅
大和夷		大内人		二称宜		一称宜横地		權		二称宜	五位	六位	

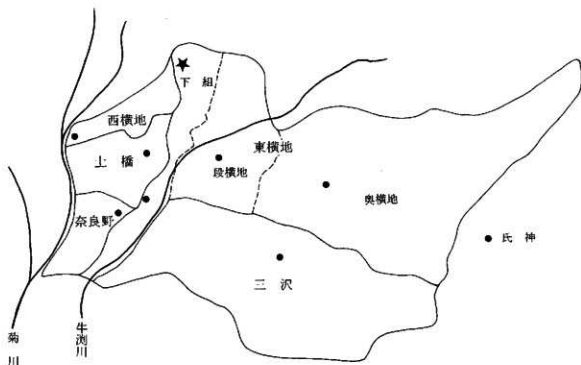
平安時代後期の何時から知・地へと変化したかは明らかではないにせよ、この期を境に横地と呼ぶようになったのではないかと推測される。

以上の諸説があり、現段階では明確な答えを見出すことは困難であるが、今後文献資料の発見を始めて新たな研究に期待するところである。

○ 横地のムラについて

横地地域の地名を語る前に、この地区のムラの変遷について触れておくことにする。行政的には、堀之内、内田、六郷、加茂、横地各村が昭和29年町村合併により菊川町となり旧村の範囲を世襲する形で地区と称され、横地村は横地地区となり現在に至っている。横地村は、東横地村、西横地村、上橋村、奈良野村、三沢村の五ヶ村が明治21年公付の市制・町村制により明治22年城東郡横地村となり、明治29年には小笠原横地村となって村組織に編成されていった。東横地村は、他の村と村編成が異な

り奥組、段組、下組の村落がまとまって構成されている。この当時の流れを受ける形で現在、区として奥横地・段横地・下組・西横地・上横・奈良野・三沢の7区が存在していると言える。近世の村落についてみると『横地の民俗』調査報告書の中で氏神について触れ、三沢を除くムラは藤谷神社の氏子地区となっているが、奥横地＝神明神社、段横地＝天神社、下組＝天神社と各村落で氏神を祀っていることに注目し、このことは西横地・上横・奈良野は一つの藩制村が一つのムラであり、東横地は奥組、段組、下組と複数の村落による藩制村によるとする。前者を藩制村＝村落、後者を藩制村＝複数の村落といった近世藩制村の特徴を見出すことできる地区であると指摘している。

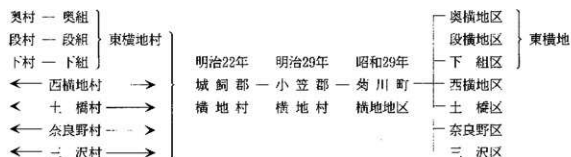


第3図 村と氏神の位置図

では、それ以前のムラについては近年の教育委員会による発掘調査成果や研究誌などから判断し、中世横地氏について着目してみたい。横地氏は、伝承として藤谷神社系図や伝承として源氏の流れをくむ武士団とされたが、平成10年7月18日第6回小笠・掛川郷土研究会で齋藤慎一氏によるテーマ「横地城と横地氏について」の研究発表があり、その中で系図や文献などから藤原氏系であるとした。横地氏が藤原氏系であるとなると、春日社や土橋遺跡で出土した祭祀遺物など、土橋周辺に京都的な文化を見出すことができることと関連するのではないかと考えられる。あくまでも推測であるが、近世一つのムラを藩制村とする地域が、近畿地方での一般的な特徴である点、当地域における京都の文化の影響を中世に受けたムラが、そのまま近世へと存続した名残ではないだろうか。そして、東横地は横地氏が奥横地を中心に領地支配の中で統合されていたと考えられ、前者の地域が「狂園」の名残によるムラ構造、後者の地域がより中世武士社会を繁栄しているものではないだろうか。

少し時代は古くなるが、6世紀の古墳の墓制研究から自然村落について解明が行われている。古墳が数十基単位で一定のまとまりで構成し群をなす。この群が自然村落の墓域として連動するものとして考え、群の数が村落の数に反映する。そのため、群内の古墳の数や副葬品の質や量によって、当時の村落規模や社会的状況を読み取ることができると考えられる。当地域では、横穴が丘陵斜面に築造され分布も明らかとなっている。奥横地に武衛原横穴群、西横地に藤谷横穴群、段横地の類分側に宇

藤穴群、三沢に数基確認されている。横地地区では4ヶ所の群があり、ムラとの関連からみれば三沢、奥横地は独立した村落で後世の村に通ずる点が多い。しかし、蘇谷横穴群、宇藤横穴群は立地的に隣接する丘陵上にあり、一つの地域を形成する中で村落と村落の境が接し、密接に関係したとも考えられる。なぜならば、土橋遺跡、林光寺遺跡、西軒遺跡、御領所遺跡と西横地、土橋、奈良野一部にかけて南北に広がる微高地地形に古墳時代の遺跡が分布し、集落を構成しており、この集落が二つのまとまった自然村落を構成し、それと対応する形で横穴群に反映されたものと判断されるからである。横地のムラは、長い歴史の中で名前や村範囲が変わっているものの、中世と近世に大きな画期がみられるものの断続することなく現在に至っている。



村の変遷

○ 横地の地名

地名は大字・小字・通称を含め 327件を数える。区では奥横地が 119件と全体の3分の1を数え、次に三沢91件となる。最も少ない区は、奈良野4件で土橋、西横地と沖横地の隣接区は、区の面積が狭い点を考慮しても少ない。奥横地と三沢は丘陵部や沖横地と地形的に変化に富んだ地域でもあり、これらの自然環境による影響が地名の数に大きなウェイトを占めていると言える。地名は、地名・地勢・気象・生物などに関連する自然地名と生産・信仰・交通・歴史・建物・史話伝説など様々あり、人々の生活・文化・歴史の反映によって生み出された人為地名に大別される。横地の地名を、この区分に従って以下のように分類した。

- | | | |
|------|---|---|
| 自然地名 | { | A: 地形・地勢に関連し幅広い意味を持たせた。この類では今後の研究にあたって細分が必要と考えられるが、今回の調査の本来の目的でないため含めた。 |
| | | B: 植物・動物に関するもので、地形や地勢の一部をこの類とした。 |
| 人為地名 | { | C: 歴史・伝承に関するもので、条里、荘園、城郭、伝説などをこの類とした。 |
| | | D: 人名・屋敷に関するもので、屋敷名、人名、名田、集落名などをこの類とした。 |
| | | E: 信仰に関するもので、寺院、墓標、信仰などを対象とした。 |
| | | F: 生産に関するもので、水田、畑、交通、池、堤、井戸などをこの類とした。 |
| | | G: その他(意味不明) |

この分類を区ごとにまとめたものが第2表地名分類表である。その表によると、自然地名は三沢区の59%と比率は高く、他は20%前後を占める。人為地名は、土橋が87%と最も高く、奥横地、下組、奈良野、西横地と75%前後となっており、三沢は37%と最も低い数となっている。この表から、三沢と奥横地は地名の数は多い区となっているが、内容を分類してみると明らかに奥横地に村落の歴史を感じる。なお、自然地名には、谷を「ヤ」と呼ぶのが特徴としてあげられる。

今回の目的である中世関連の地名については、人為地名に含まれていると考えられる。特にこの時期の特徴の一つにあげられる、城郭に関連する地名として城・館・堀・溝・殿・屋敷の字が付く地名や城下集落・城下施設を示す地名が知られている。さらに、人名に関係する地名や宗教的施設に関する地名の中に中世的なものを見出すことができる。

- ①「城」の字がつく地名・・・・・・東城、中城、西城、金寿城、城下、矢城海戸
- ②「館」の字がつく地名・・・・・・藤丸館
- ③「堀」・「溝」の字がつく地名・・・・長溝、内堀田（三）、堀下（十）
- ④「殿」・「屋敷」の字がつく地名・殿ヶ谷（奥・三）、窯屋敷、三屋敷、櫓屋敷、小田屋敷、段屋敷（段）、神屋敷（段）、御屋敷段（段）、紺屋敷（段）、寺屋敷（下）
- ⑤城下集落を示す地名・・・・・・茶屋ノ前、蔵ノ腰、番匠跡（三）
- ⑥城郭施設の地名・・・・・・井戸ヶ谷、丁置敷、一騎駆け、釣場ヶ谷、馬越場（瀬）、馬留（西）、
- ⑦人名に関係する地名・・・・・・小太郎、道久、伊平、惣七ヶ谷、五郎兵衛、武兵衛原、弥兵治谷、渥美谷、長五郎田（西）、峯甚七（三）、丑太郎（三）、新太郎ヶ谷（三）、平松ヶ谷（三）、平四郎谷（三）、佐次兵衛谷（三）、藤助ヶ谷（二）、大田ヶ谷（二）、小太田ヶ谷（二）、五郎大夫（瀬）
- ⑧宗教的施設に関係する地名・・・・・・常清、地藏前、延命段、諏訪下、諏訪ノ谷、法院下、法院山、根岸、送神、烏帽子、白山前、白山東、白山、慈眼寺前、東御堂谷、西御堂谷、いわい堂の谷、東泉寺谷、諏訪、天神裏（段）、道光（段）、常泉原（段）、神田（三・西）、寺脇（三）、寺ノ谷口（三）、宮下（二）、寺ノ谷（三）、宮脇（二）、佛沢（二）、北裏（余）、表門（余）、南裏（余）西軒（土）、東軒（土）、地藏面（西）

①の地名については、横地城跡に関連して城郭用語として付けられたものが多い。金寿城は横地城の別名である。②の地名は、奥横地の中上に残る地名で、伝承によると横地氏の15代元国の幼名が「藤丸」であったとされ、その館が築かれた場所と言われる。③の地名は、長溝は大変興味深い地名といえる。堀下は、周辺の地名から城郭に直接関係するものではなく、寺社施設に伴う堀（溝）に関係していると考えられる。④の地名については、殿ヶ谷が三沢と奥横地に所在し、居館跡を意味する地名となっている。菊川流域では、城郭施設周辺には居館跡＝殿ヶ谷地名の形が成立する地域である。屋敷地名はストレートに中世の武士やそれに関連する人物の屋敷とは考えにくく、窯屋敷、紺屋敷、寺屋敷は明らかに職種に係わるものであり、中世以降に付けられた地名であろう。また、発掘調査で小田屋敷地点で中世屋敷跡が発見されており、検討を必要とする。また、屋敷地名は奥横地と段横地に集中していることは大変興味深い傾向である。⑤の地名については、横地城下に広がる奥横地に直接関係するかは不明であるが、茶屋ノ前と蔵ノ腰がみられる。⑥の地名については、①の地名と同様、城郭用語に関するもので横地城跡周辺に集中している。⑦の地名は、奥横地と三沢に多く分布している。三沢では、谷地形にみられ近世の地名であろう。奥横地では、惣七ヶ谷、弥平治谷、渥美谷といった三沢区にみられた谷地形に付けられたものと小太郎、道久、伊平といった屋敷地に関係するものが見られる。小太郎は、伝承で横地氏に伴う人物名ではないかとされ、その地点で城郭施設が発見され

ている。⑧の地名では、土橋・奈良野にみられる地名は、現在所在は明らかでないが、『延喜神名式(神名帳)』に載る式内社奈良神社に關係すると思われる。三沢の寺地名は、興嶽寺・寺龍谷寺を示すものである。また、宮地名は八幡神社の社地に關連するものである。奥横地では、現存する慈眼寺の谷に残る東御堂谷、西御堂谷はより中世的な地名として注目される。また、法院下、法院山など過去に寺院があった可能性を示すもので興味深い。慈眼寺周辺には白山地名がみられ、白山信仰の名残とも考えられる。

横地の地名は、城郭關連の用語から分類し抽出した結果、横地域・立地する奥横地に集中することとなった。この結果については、中世に横地氏が居館を奥横地に構え、横地の領地支配を行っていたことで、政治・經濟の中心的としての役割を果たしていた地域であったことを裏付けるものであろう。また、土橋・西横地などの沖積地には条里制關連と考えられる地名や伝奈良神社を推測される地名と比較的中世以前の古代に關連する地名がみられ、横地の地域が西(奈良野、土橋、西横地)から東(段横地、奥横地)地域へと、中世を境に社会的動向を読むことが可能であろう。

第2表 地名分類表

	奥横地	段横地	下 組	三 沢	奈良野	土 橋	西横地	合 計
A: 地 形	23	11	6	36	1	1	4	82
B: 植物・動物	7	4	0	18	0	0	1	30
小 計	30 (25%)	15 (31%)	6 (20%)	54 (59%)	1 (25%)	1 (13%)	5 (18%)	112 (34%)
C: 歴史・伝承	28	1	4	4	0	3	7	47
D: 人名・屋敷	21	7	4	10	0	0	1	43
E: 信 仰	19	6	2	9	3	2	2	43
F: 生 産	20	12	12	11	0	2	11	68
小 計	88 (74%)	26 (54%)	22 (76%)	34 (37%)	3 (75%)	7 (87%)	21 (75%)	201 (61%)
G: そ の 他	1 (1%)	7 (15%)	1 (4%)	3 (4%)	0	0	2 (7%)	14 (5%)
合 計	119	48	29	91	4	8	28	327 (100%)

○ 奥横地の地名

横地の地名の一覧表は、明治初期戸長制度ができた時の公図を、昭和7年再製した『横地村』地番地目反別入図を基本に、記述されていない小字や伝承、さらに呼び名を付け加え、横地城保存会によって平成7年に作成されたものである。その中で、奥横地の地名について文献資料などから少し検討してみたい。地名の研究にとって検地帳は、多くの資料を提供するものとして重要な文献にあげられている。検地といえど太閤検地が有名であるが、この時の資料は残っていない。菊川町で確認できたものとしては、友田村の天正18年の検地帳が最も古い文書となっている。横地では、慶長4年(1599)の奈良野村の検地帳(句坂出明氏所蔵)が古いものである。奥横地では、貞享2年(1685)横地村新田検地帳(横山祐一氏所蔵)が近世の地名を知る資料となっている。ただし、新田、新畑に関わった上地と限定されていることも考慮しなければならない。この検地帳によると、奥横地の大久保・鍋沢・小太郎・杉ノ谷の原野や山林が対象となり、新畑8町5反1畝(851a)、新田1町4反8畝(148a)、当時の石高としては73石6斗4升3合となり、奈良野村一村に匹敵するものであった。ちなみに東横地石高を元禄天保明治通江国高表でみると、元禄以降明治に至るまで変化がない。このことは

第3表 地名一覧表

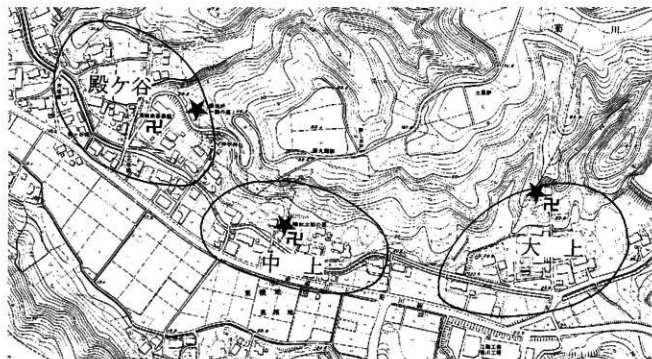
番 号	分 類	呼 び 名	漢 字	番 号	分 類	呼 び 名	漢 字
1	C	コタロウ	小太郎	-5	E	サグチヤマ	左口山
-2	C	オハヤシ	御 林	-6	A	ムカイバラ	向 原
-3	D	カマヤンキ	蒸屋敷	-7	C	カクシイド	かくし井戸
-4	B	ヤナギヤ	柳 谷	31	A	チュウカミ	中 上
-5	F	サスバシ	さすばし	-2	C	フジマル	藤 丸
-6	A	ユリキリ	ゆりきり	-3	D	ブエバラ	武兵衛原
2	A	アカミネ	赤 峯	32	D	トウハチウエ	藤八上
-2	A	クロサンザワ	黒三沢	33	A	ナカオシク	中尾下
-3	D	アマツツミヤ	雨堤谷	34	B	スギノヤ	杉ノ谷
-4	A	ナカオ	中 尾	-2	D	ナガミゾ	長 溝
-5	F	アマツツミヤイケ	雨堤谷池	-3	D	ツバキヤシキ	椿屋敷
-6	B	ヘビマツ	蛇 松	-4	C	ジンデン	神 山
3-1	D	ドオキユウ	道 久	-5	A	ドウドウ	百 々
2			(大久保内飛地)	-6	A	デサキ	出 崎
4	F	サンダンヤ	三反田	-7	D	アツミヤ	湊美谷
5	D	サンヤシキ	三屋敷	-8	F	ネギシ	根 岸
6	E	ジョウセイ	常 清 (成西)	*2	F	カッターヤ	駒出谷
7	E	ジゾウマエ	地藏前	-9	E	オクリガミ	送 神
8	D	ハンザンヤ	半三谷	-10	F	ヨトウリダ	四通田
9	D	ハンザンヤグチ	半三谷口	11	F	マツノキダ	松木田
10	A	ヒガシノヤ	東ノ谷	-12	C	エボシ	烏帽子
11	A	ヒガキノヤグチ	東ノ谷口	-13	C	ミョウウタイ	明 体
12	D	イヘイ	伊 平	-14	A	ヤ ダ	谷 田
-2	D	モクベイ	木兵衛	*2	A	ヤダオオイケ	谷田大池
-3	B	コウノツル	こうのつる	-15	C	ヤシガヤ	矢師谷
13	D	ゼンサンヤ	善三谷	-16	A	スギノヤハラ	杉ノ谷原
14	D	ゼンサンヤグチ	善三谷口	-17	C	ヒザツキンヤ	膝搦ん谷
15	E	エンメイダン	延命殿	-18	C	キンタマオトシ	金玉落し
16	E	スワシタ	諏訪下	-19	C	イドガヤ	井戸ヶ谷
17	F	ナカイバ	中井場	20	C	ホンマル	本 丸
18	E	スフノヤ	諏訪ノ谷	21	C	ナカジョウ	中 城
19	E	ホウインシタ	法院下	22	C	ニノマル	二ノ丸
-2	E	ホウインヤマ	法院山	23	C	キンスジョウ	金寿城
20	F	カミカイト	上海戸	24	E	ジンジャブン	神社分
21	D	チャヤノマエ	茶屋ノ前	25	C	センジョウジキ	千畳敷
22	G	チョウトウ	長 藤	26	C	イッキガケ	一騎懸け
23	A	サイサカ	才 坂	35	A	オオクボ	大久保
-2	G	ドンドン	どんどん	2	E	ドウキユウ	道 久
24	F	ニシガワ	西 側	3	D	ヤヘイジヤ	弥平治谷
25	F	ヤジロカイト	欠城海戸	-4	E	ハクサンマエ	白山前
26	D	ソウヒチガヤ	惣七ヶ谷	-5	E	ハクサンヒガシ	白山東
27	D	クラノコシ	蔵ノ腰	-6	E	ハクサン	白 山
28	D	ゴロベエイ	五郎兵衛	-7	E	ジゲンジマエ	慈眼寺前
29	C	ロクタンダ	六反田	-8	E	ヒガシミドガヤ	東御堂谷
30	C	トノガヤ	殿ヶ谷	-9	E	ニシミドガヤ	西御堂谷
-2	A	アカザカ	赤 坂	-10	D	オダヤシキ	小田屋敷
-3	A	ヒガシザカ	東 坂	-11	E	イワイドウノヤ	いらい堂の谷
-4	C	トノガヤイケ	殿ヶ谷池	-12	C	ナベサワ	鍋 沢

-13	C	ナベザウグチ	船沢口	62	D	ゴリョウショ	御前所
-14	A	マルヤマ	丸山	63	B	ユノキ	柚ノ木
-15	C	マトバガヤ	的場ヶ谷	64	D	ダンヤシキ	段屋敷
16	B	グミノキザウ	ぐみノ木沢	65	D	キグラ	木倉
17	A	イシハラクボ	石原久保	66	A	マエヤマ	前山
18	F	オニトンボ	鬼跳場	67	A	ミネハラ	峯原
19	F	カマンサワ	釜沢	68	A	ヤグチ	谷口
20	F	コカマンサワ	小釜沢	69	F	ヒガシガワ	夷側
21	A	イシハラミネ	石原峯	70	F	イシハラダ	石原田
-22	B	キツネンヤ	狐谷	71	D	カミヤシキ	神屋敷
-23	B	クチナシダイラ	蛸平	72	E	テンジンウラ	天神裏
-24	E	トウセンジャ	東泉寺谷	73	D	オヤシキダン	御屋敷殿
-25	F	ウシイケ	井池	-2	A	トウカザン	灯火山
-26	F	ウウイケ	上池	74	D	コンヤシキ	紺屋敷
-27	A	オオクボバラ	大久保原	75	E	ドウコウ	道光
-28	C	シロシタ	城下	76	F	ヤダ	谷田
-29	C	ハグチハラ	鏡馬原	77	F	ヤダイケ	谷田池
-30	A	ホンザウ	本沢	78	E	ジョウセンバラ	常泉原
-31	A	フコシ	吹越	79	G	オセド	オセド
-32	C	オオジノガケ	王子の崖	80	A	ニシヤマ	西山
-33	C	ジッセンヤマ	拾銭山	81	A	ニシハラ	西原
-34	D	オオカミ	大上	82	B	オオヤブ	大藪
36	F	アライザカ	洗坂	83	F	ドウガン	道岸
37	F	ウチゴモリ	内籠	84	A	オオシタ	大下
38	F	ナカワリ	中割	85	C	ウチボリダ	内堀田
39	E	スワ	諏訪	86	F	シンウダ	四三田
-2	F	ウマコシバ	馬越場	87	A	クネゾイ	久根添
40	F	キリタ	切田	88	A	カキネゾイ	垣根添
41	G	サクラキユウ	桜久	89	B	ヤブシタ	藪下
42	F	タナカ	田中	90	A	ヤグチダン	谷口段
-2	F	ボウグイ	防打	91	G	ヒロ	廣
-3	F	マエガワバシ	前川橋	92	A	ヤマザキ	山崎
43	F	キデン	喜田	93	A	マエヤマ	前山
-2	G	フコウ	不幸	94	A	サンノウウラ	山王裏
44	A	ミネシタ	峯下	95	A	サンノウマエ	山王前
45	F	ジョウセンバシ	常泉橋	2	A	サンノウヒガシ	山王東
46	G	ヨツニ	四つ恵	3	A	サンノウニシ	山王西
47	B	イヌモチ	戌持	96	B	フシノキ	フシノ木
48	A	ダンムカイ	段向	97	G	ソウサク	惣作
49	B	シイガシタ	椎ヶ下	98	A	ハラシタ	原下
50	F	サンマイバシ	三枚橋	99	A	ドウドウ	占占
51	F	タユウバシ	大夫橋	100	A	ミズイリ	水入
52	F	ゾイ	悉	101	F	マエダ	前田
53	F	フカダ	深田	102	C	ジンデン	神田
54	F	ツイタチデン	刺田	103	G	ダンロク	段六
55	F	ウマドメ	馬留	104	A	シノガヤ	篠ヶ谷
56	C	コクタンダ	六反田	105	F	タナカ	田中
57	D	チュウゴロウダ	長五郎田	106	B	ナシクボ	梨久保
58	F	ツルイケシンデン	鶴池新田	107	A	マルヤマ	丸山
59	A	ケナシヤマ	毛無山	108	E	テラワキ	寺脇
60	F	イケノヤ	池ノ谷	109	A	ミネニシヤマ	峯西山
61	C	ミコウデン	神子田	110	A	ミネニシハラ	峯西原

111	A	ニシハラ	西原	163	D	ヘイシロウヤ	平四郎谷
112	D	ミネジンヒチ	峯七	164	D	サジベンヤ	佐次兵衛谷
113	C	トノガヤ	殿ヶ谷	165	A	ムカイヤマ	向山
114	D	ミネヒコゾウ	峰彦三	166	D	トウスケガヤ	藤助ヶ谷
115	F	シンサカウエ	新坂上	167	D	オオタガヤ	大田ヶ谷
116	F	シンサカ	新坂	168	D	ショウオオタガヤ	小太田ヶ谷
117	C	バンショウアト	番匠跡	169	B	カキガヤ	柿ヶ谷
118	E	ナラノヤグチ	等ノ谷口	170	E	ドウサン	堂山
119	E	ミヤシタ	宮下	171	A	ウタリ	雨垂
120	A	ヤマダ	山田	172	E	カスガ	春日
121	A	ミネニシ	峯西	173	A	ナラブチ	奈良淵
122	A	ミネヒガシ	峯東	174	G	ジョウケイ	上慶
123	F	テラノヤ	寺ノ谷	175	F	ハヤクチ	早門
124	E	ミヤワキ	宮脇	176	F	イリノクチ	入ノ口
125	A	ヤマダ	山田	177	D	マエノ	前野
126	B	クチナシダイラ	槌平	178	D	カナヤマ	金山
127	B	ニシサルダガヤ	西猿田ヶ谷	179	F	カワシロ	川代
128	B	ヒガシサルダガヤ	東猿田ヶ谷	180	F	マエドオリ	前通
129	B	サルダガヤ	猿田ヶ谷	181	C	イチチョウダ	一丁田
130	A	キタノヤ	北ノ谷	182	F	カワダ	川田
131	A	コキタンヤ	小北谷	183	D	テラヤシキ	寺屋敷
132	B	クスノキサワ	楠沢	184	C	ロクタンダ	六反田
133	A	ヌメリサワ	ぬめり沢	185	A	イワノウエ	岩ノ上
134	E	ホトケザワ	佛沢	186	A	カワムコウ	川向
135	F	キタノイケ	北ノ池	187	F	ウバダ	姥田
136	A	ホソヤ	細谷	188	A	ニシアラケ	西荒毛
137	F	フルツツミ	古堤	189	E	キタウラ	北裏
138	B	ミョウガタニ	茗ヶ谷	190	A	ダナムカイ	段向
139	A	アラガヤ	荒ヶ谷	191	E	オモテモン	表門
140	A	アナナザワ	穴沢	192	E	ミナミウラ	南裏
141	B	クマンザワ	熊沢	193	C	ゴタンダ	五反田
142	B	コクマンザワ	小熊沢	194	F	ヒガシミチシタ	東道下
143	A	アラコンヤ	荒小谷	195	E	ヒガシノキ	東軒
144	A	アラコンヤトウケ	荒小谷峠	196	E	ニシノキ	西軒
145	A	ナカオネ	中尾根	197	C	イチチョウダ	一丁田
146	F	ミナミンイケ	南池	198	F	ツチハシマエノ	土横前野
147	A	ミナミンヤ	南ノ谷	199	A	ニシクボ	西久保
148	D	ウシタロウ	丑太郎	200	C	ニシツボ	西坪
149	F	オオイケシタ	大池下	201	F	スナダ	砂田
150	F	ウモコケ	馬よけ	202	E	デゾウメン	地蔵面
151	B	ショウブガヤ	菖蒲谷	203	G	ヒロナガ	廣長
152	D	シントロウガヤ	新太郎ヶ谷	204	C	トラウカダ	寅若田
153	A	タノウエ	田ノ上	205	F	オケダカイト	桶出海口
154	A	ミツケヤ	耳付谷	206	C	ジンアン	神田
155	F	ヒガシモンドウヤ	東間答谷	207	A	クボ	久保
156	B	キツネンヤムカイ	狐谷向	208	A	モリスサキ	森先
157	B	ヒガシキツネンヤ	東狐谷	209	C	ニタンダ	二反田
158	B	ヒガシゴボウガヤ	東午房谷	210	C	イチチョウダ	一丁田
159	B	ニシゴボウガヤ	西午房谷	211	G	ノジリ	野尻
160	B	キツネンガヤ	狐ヶ谷	212	F	ウバダ	姥田
161	E	モンドウヤ	間答谷	213	F	ゴカンデ	五貫地
162	D	ヒラマツガヤ	平松ヶ谷	214	C	ホリシタ	堀下

215	C	ハッタンダ	八反田	-2	G	ドウノマエツミバ	どうのまえつみば
216	D	カミヨコザ	上横地	242	F	コマンバ	駒馬
217	E	テンバク	犬白	-2	F	コモイゲ	こも池
218	F	アライガワ	荒井側	243	A	ヤマアケ	山脇
219	B	マツシタ	松下	-2	A	ジゴクザワ	地獄沢
220	F	ハマイバ	浜井場	-3	A	ムギクソソヤ	むぎくそん谷
221	C	キロウデン	京田	244	F	クノギョウダ	久之木田
222	A	オクガワ	奥側	-2	C	ブタイ	舞台
223	F	カワシロ	川代	-3	B	サクラダ	桜田
224	F	クグダ	くぐ田	-4	C	マトバ	的場
225	F	ナカミチ	中道	-5	D	ハチロベエダヤシキ	八郎兵衛田屋敷
226	A	ダラムカイ	段向	245	E	ハチマンマエ	八幡前
227	F	ツイタチデン	一日田	246	A	ヤブシタ	藪下
228	F	フカダ	深田	247	F	アゼカチ	芹勝
229	A	ウトウ	宇藤	248	G	アラマキ	荒巻
230	A	ゼブガワ	瀬分川	249	A	ヤザア	井谷沢
231	A	マエガワ	前川	-2	A	ツンボヤ	つんぼ谷
-2	F	ボウグイ	棒打	-3	G	スグンジ	すぐんじ
232	F	シンバシムカイ	新橋向	-4	E	ロクバサマ	六部様
233	D	ゴロウダイフ	五郎大夫	-5	G	ノリマワシ	乗り廻し
234	A	オオヒラ	大平	-6	C	ノウノハラ	能ノ原
2	F	ムカイバタ	向畑	-7	A	ウエノヤマ	上ノ山
3	F	ウマヨケ	馬よけ	-8	A	ホソヤ	細谷
4	D	カジャシキ	鍛冶屋敷	-9	G	ダンガア	段があ
5	G	ゼンシンクボ	ぜんしん久保	250	E	ミヤノヤ	宮ノ谷
-6	G	コガビタイ	こがびたい	-2	A	ブリダイラ	ぶり平
-7	C	ヒョウヤマ	兵山	3	A	オイノハラ	おいの原
-8	D	ゴロウダイフ	五郎大夫	4	A	モリシタ	森下
-9	D	チョウスケシタ	長助下	-5	A	ホンナシガサワ	本梨ヶ沢
-10	D	サダエジリ	佐大夫尻	-6	C	ジンガクボ	陣ヶ久保
-11	D	イガヤシキ	伊賀屋敷	-7	A	スゲンヤ	すげん谷
12	A	ダルマヤマ	だるま山	-8	A	スイドンヤ	ぬいどん谷
13	A	ナカジマ	中島	-9	B	キツネンヤ	きつねん谷
14	G	ゴメン	ごめん	-10	A	タノンヤ	たのん谷
235	A	モリグチ	森口	-11	A	アカンビラ	赤平
236	F	スミカワ	住川	-12	G	コウジウセド	こうじうせど
-2	D	ギョウニン	行人	-13	D	ロクベイヤシキ	六兵衛屋敷
-3	D	ゴウグラアト	郷倉跡	251	B	シバハラ	芝原
-4	C	オクリマツアト	送松跡	-2	D	キエンバラ	喜右衛屋敷
-5	C	シロミガヤ	城見ヶ谷	-3	B	サルダガヤ	猿田ヶ谷
-6	D	ジンベイマツアト	甚平松跡	-4	A	トクサハラ	とくさ原
237	B	マツタケンヤ	松竹谷	-5	F	カマガヤ	釜ヶ谷
-2	A	ヒガシツバラ	東ツ原	-6	A	ヤノオク	谷ノ奥
-3	A	サネヤマ	佐根山	252	A	ヤダノヤ	矢田ノ谷
-4	A	ホソヤ	細谷	-2	E	テンバク	天白
238	B	スズノヤ	杉之谷	-3	A	ウシロザワ	うしろ沢
-2	G	シンゾウ	しんぞう	-4	C	ツメノシロ	詰ノ城
239	A	カケンタ	欠下	253	A	クボノヤ	久保之谷
240	A	エンゲヤマ	会下山	254	F	フジヤイケ	藤谷池
2	C	センニンズカ	千人塚	255	E	フジヤジンジャ	藤谷神社
3	C	ミウチハラ	身打原				
241	F	ビリダ	毘呂田				

17世紀後半には大規模な耕地の開発はなくなり、村としての生産地が一定の安定した領域となったことを意味している。貞享2年の文書と昭和7年に残る地名を比較したのが第4表の一覧表である。これによると、杉ノ谷周辺の水田地域の地名が見当たらないほかは、昭和7年の地名とはほぼ同じ様相となる。また、杉ノ谷周辺地域の地名については、横山祐一氏所蔵の近世検地帳の中で確認できており、現在残っている地名の一部を除き、江戸時代には社会の中で機能していたと判断される。個々の地名では、善才→善二、赤嶺→赤峯、殿ノ谷→殿ヶ谷、椿木→椿、屋しヶ谷→欠師谷と漢字が変わっているがカタカナでの表記では同じである。谷の前に「ヶ」が付くものゝ湿美ヶ谷、屋しヶ谷、半三郎ヶ谷など、ヶが昭和の頃には省略されているものがみられる。小太郎周辺には、現在まで小字、通称も含め6件が残るが、検地帳では、小太郎・丸山下・道上・赤井沢・堤表・堤北・堤下・清水ノ谷・うたり・口、小太郎ヶ谷、東小太郎、西小太郎と13件が記載されているが、全て現在消滅している。その他に藤ノ谷沢、赤井沢、袋ノ尻、岩ノ上、前木たいらなどいつしか忘れ去られてしまった地名となっている。このムラでの呼名の一つに中上・大上があり興味深いものである。中上は、現在地名としても残るが、部落内の領域を意味するものとして使用されている。ムラの中央、班で言えば2・3班を中上、その東の慈眼寺周辺1班を大上と言う。また、ムラの西、殿ヶ谷周辺5・6班を殿ヶ谷と呼んでいる。これらの呼名は、一定の集団の領域を意味していると考えられ、それが後世の組又は班の前身となったものであろう。その集団領域は、殿ヶ谷にみえるように中世的なものである。よってカミは上と書かれているが神の可能性が高く、大上（オオカミ）は大神となり、西御堂、東御堂の地名と共に慈眼寺周辺に宗教的な世界が広がることと合うのではないだろうか。中上（チュウカミ）は中神で、現在伝横地太郎石塔と永楽寺跡がみられる。殿ヶ谷には、三光寺といったように寺と屋敷をセットにした核が呼名として、現在まで残った地域である。このことは、中世横地氏の動向と連動するもので、この地域より中世的な空間を見出すことが可能な場所と言えよう。



第4図 奥横地ムラ概念図（★石塔群）

第4表 奥横地地名一覧表

番号	呼び名	漢字	昭和7年		番号	呼び名	漢字	昭和7年	
			(1685年)	(1932年)				(1685年)	(1932年)
1	コタロウ	小太郎	○	○	33	ナカオシタ	中尾下	○	○
-2	オハヤシ	御林			34	スギノヤ	杉ノ谷	○	○
3	カマヤシキ	高屋敷			-2	ナガミゾ	長溝	○	○
-4	ヤナギヤ	柳谷			-3	ツバキヤシキ	椿屋敷	○	○
-6	ユリキリ	ゆりきり	○		-4	ジンデン	神田	○	○
2	アカミネ	赤峯	○	○	-5	ドウドウ	百々		○
-2	クロサンザワ	黒三沢	○	○	6	デサキ	出崎		○
3	アマツツミヤ	雨堤谷	○	○	-7	アツミヤ	殿美谷	○	○
-4	ナカオ	中尾	○	○	-8	ネギシ	根岸	○	○
3-1	ドオキユウ	道久		○	*2	カッタシヤ	勝田谷	○	○
4	サンタンヤ	三反田		○	-9	オクリガミ	送神		○
5	サンヤシキ	三屋敷		○	-10	コトウリダ	目通田		○
6	ジョウセイ	常清(成西)		○	11	マツノキダ	松木田		○
7	ジゾウマエ	地蔵前	○		-12	エボシ	烏帽子		○
8	ハンザンヤ	半三谷	△	○	13	ミョウタイ	明休		○
9	ハンザンヤグチ	半三谷口	△		-14	ヤダ	谷田		○
10	ヒガシノヤ	東ノ谷	○	○	-15	ヤシガヤ	矢野谷	○	○
11	ヒガキノヤグチ	東ノ谷口	○		16	ズキノヤハツ	杉ノ谷原		○
12	イヘイ	伊平		○	-17	ヒザツキンヤ	膝捲ん谷		○
-2	モクベイ	木兵衛			35	オオクボ	大久保	○	○
13	ザンサンヤ	善三谷	○	○	-2	ドウキユウ	道久		○
14	ザンサンヤグチ	善三谷口	○	○	-3	ヤヘイジヤ	常平治谷	○	○
15	エンメイダン	延命殿		○	-4	ハクサンマエ	白山前		○
16	スワシタ	諏訪下	○	○	5	ハクサンヒガシ	白山東		○
17	ナカイバ	中井場		○	-6	ハクサン	白山		○
18	スワノヤ	諏訪ノ谷	○		-7	ジゲンジマエ	慈眼寺前	○	○
19	ホウインシタ	法院下		○	8	ヒガシミドガヤ	東御堂谷	○	○
-2	ホウインヤマ	法院山			-9	ユシミドガヤ	西御堂谷	○	○
20	カミカイト	上海戸		○	-10	オダヤシキ	小田屋敷		○
21	チャヤノマエ	茶屋ノ前		○	11	イワイドウノヤ	いらい家の谷		○
22	チョウトウ	長瀬		○	-12	ナベサワ	鍋沢	○	○
23	サイサカ	才坂		○	-13	ナベザウグチ	鍋沢口	○	○
-2	ドンドン	どんだん			14	マルヤマ	丸山	○	○
24	ニシガワ	西側		○	-15	マトバガヤ	的場ヶ谷	○	
25	ヤジロカイト	矢城海	△	○	16	グミノキザワ	ぐみの木沢		○
26	ソウヒチガヤ	惣七ヶ谷		○	-17	イシハラクボ	石原久保		○
27	クラノコシ	蔵ノ腰		○	-18	オニトンボ	鬼跳場		○
28	ゴロベエ	五郎兵衛	○	○	19	カマンサワ	釜沢		○
29	ロクタンダ	六反田		○	-20	コカマンサワ	小釜沢		○
30	トノガヤ	峠ヶ谷	○	○	-21	イシハラミネ	石原峯		○
-2	アカザカ	赤坂		○	-22	キツネンヤ	狐谷		○
3	ヒガシザカ	東坂		○	-23	クチナシジイラ	榎平		○
-4	トノガヤイゲ	峠ヶ谷池			24	トウセンジヤ	東泉寺谷		○
-5	サダチヤマ	左門山			-27	オオクボハラ	大久保原	○	
-6	ムカイバラ	向原		○	-28	シロシタ	城下	○	○
31	チュウカミ	中上		○	30	ホンザワ	本沢		○
2	フジマル	藤丸		○	-31	フッコシ	吹越		○
-3	ブエバラ	武兵衛原		○	33	ジッセンヤマ	拾銭山		○
32	トウハチウエ	藤八上		○	-34	オオカミ	大上		○

2) 屋号

屋号とは『広辞苑』によると「商家または俳優などの家の称号」と記述されている。今回の調査では、家の称号以外に場所を意味する称号なども多く伝承として残っていることが分った。各ムラでは、奥横地23件、段横地24件、下組15件、三沢26件、奈良野10件、西横地5件、上橋8件と、横地地区で111件を数える。屋号では、商家を意味するものが多く、豆腐屋、鮎屋、醤油屋、蕎麦屋、酒屋、麴屋といった生活食料品に関係した家と、瓦屋、桶屋、鍋屋、籠屋、人工、左官、鍛冶屋、臼屋、下駄屋、足袋屋、こびきと生活関係の道具類を生産・製造する職人を示す屋号の家がみられる。特に三沢では商家が多く、ムラの中で生活に必要なものが調達できるシステムになっている。また、奈良野は江戸時代宿本として発達したムラで、その名残が屋号として残っている地域である。

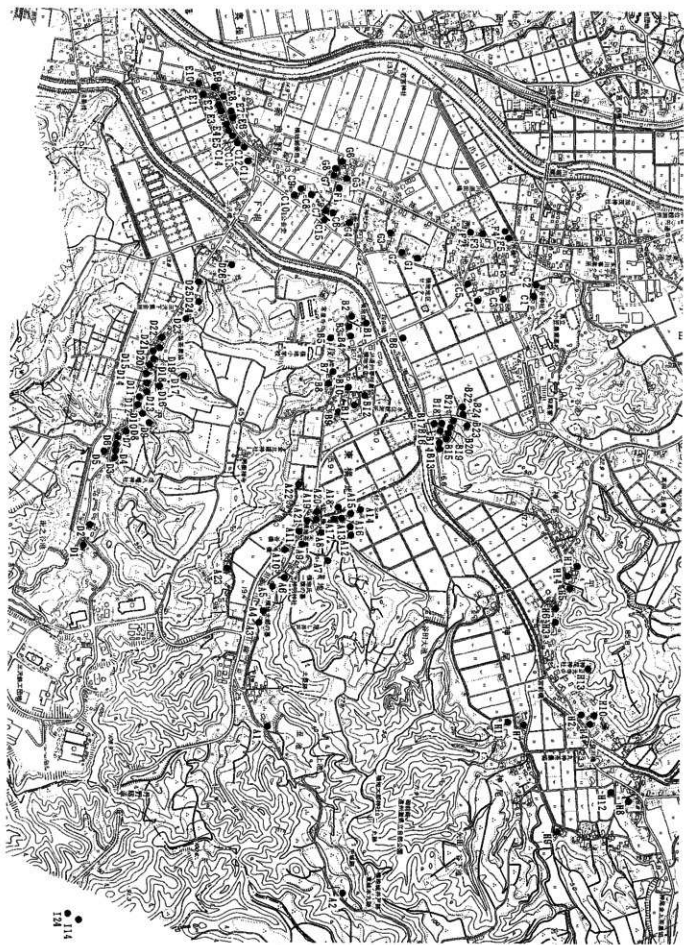
人名を称号とする、やざえもん、でんはちさま、やとうさま、じざえもんさま、にへいさまがある。この屋号は村ごとでも数軒と極めて少なく、近世の庄屋や組頭といった村役職層にあった家について伝わる場合が多い。そのため、何棟付の屋号であったりする。

場所を意味する称号としては、班単位で中核となる家や施設から家の位置を示した、おく、した、にし、ひがし、てらしたなどや、地形や地勢から付いたと思われる、かわばた、くぼ、さか、つじ、さかい、やまねなどがある。地名がそのまま屋号として残る、なかみぞ、くらのこし、しいがした、とんのやなどもある。

以上のように、屋号の中には職層を示すものも多くみられるものの、いつごろから呼ばれ屋号となったのかは明らかでない。しかし、人名などの称号は近世藩村制の中で育まれたものと思われる。地名では注目されるものがあつたが、奥横地には商家を意味する屋号や家の称号が少なく、中世に関連するものは残念ながら見出すことは難しいと言わざるを得ない。福井県朝倉氏館など戦国城下町と違い文明年間の横地氏滅亡が、この奥横地ムラに政治・経済面から大きな衝撃を与えた結果、中世以後、文化や経済といった人の動きが一時途絶え、そこに住んだ人々の生活に変化をもたらすこととなったと推測される。そのため、当時の繁栄ぶりを示す地名だけが名残りとして残ったためではないかと考えられる。また、戦国期の村構造がこの地に残っていないのは、横地氏の滅亡時期を裏付けている結果ともいえるのではないだろうか。

3) 宗教的施設に関する地名

横地では、屋敷を守る神として地の神を祀る風習がみられる。この地の神は、一方でデノカミとも呼ばれ屋敷神を意味しているもので、屋敷の戌亥隅に木を植えるという伝承と共に、葉と竹で作る葉屋根の祠を建て祀っている。地の神の祭りは、三沢は12月15日で、それ以外の区では11月23日に行われる。なお、菊川町では旧暦11月15日の神事を月遅れの新暦12月15日に行っている。このように新暦と旧暦の行事での違いは節供などにもみられる。年間行事の中では、エビス講（大黒様）、神送り、カマドカミ、秋葉講など家の神に関連する祀りごとが伝わっている。ムラの神としては、氏神がある。前項で触れたが、各ムラごとに社があり氏神を祀っているが、藤谷神社の氏子地区は三沢以外の横地の地域となり、二重氏子の形が成立した区域となっている。慶応4年の廃仏毀釈に始まり、明治の宗教改革が行われ、神社の合祀によって神名の変更などが推し進められることとなった。三沢の八幡神社、東横地の藤谷神社がその代表的なものである。三沢の八幡神社は、日吉神社、山神社、伊雑皇神社、大白山社、五姓神社、南風神社、春日神社、若宮神社、津島神社の9神の小社が、明治7年に合祀されたものである。東横地の藤谷神社は、天神社、諏訪社、八幡社、水神社、金刀比羅神社、左口神社、高嶺神社、地荒神社、稻荷神社の11社を明治18年までに合祀されたと伝えられる。そのため、



第5図 屋号分布図

第5表 屋号一覧表

奥 横 地

番号	呼 名	意 味	地 区	現 氏 名	番 地	地名番号	備 考
A-1	いけした	場 所 名	奥横地	福井 久雄	3509	35-5	
A-2	やぎえもん	人 名	"	金子 正敏	3467	35-6	金倉の谷の地内 現況は崩 谷人久保 3640 1
A-3	なかに	場 所 名	"	丹羽 潤	3657	31	
A-4	でいやん	"	"	福島 静大	3059	3'	
A-5	な	"	"	赤堀 信司	3689	3'	
A-6	みやした	"	"	福島 敬一	3670	3'	
A-7	こた	木材を鋸で切る	"	栗山 務	3698	30	
A-8	たて	場 所 名	"	鈴木 勇	3683	30	
A-9	ら	"	"	坪井 清二	3677	30	
A-10	て	豆腐を作り販売	"	丹羽 三雄	2837	20	
A-11	く	地 名	"	広瀬 義照	2777	27	
A-12	さ	"	"	鈴木 幸大	4028	34 6	
A-13	であ	"	"	坪井 成則	4019	34 6	
A-14	お	場 所 名	"	福島 唯雄	3899	34 2	
A-15	なが	地 名	"	坂部 典史	3897	34 2	
A-16	勢	行 商	"	鈴木 行	3892	34 2	
A-17	か	場 所 名	"	鈴木 哲太郎	3890	34 2	
A-18	は	本 家	"	福島 ふさ	2776	28	
A-19	いん	分 家	"	福島 説	2773	28	
A-20	あ	"	"	福島 無	2743	28	
A-21	くろへえやし	人 名	"	西沢 勇治	2730	28	
A-22	お	場 所 名	"	西沢 方松	2726	24	
A-23	桶	製造・修理	"	坂部 郁	2972	19 2	

段 横 地

番号	呼 名	意 味	地 区	現 氏 名	番 地	地名番号	備 考
B-1	しい	地 名	段横地	大賀 一秀	1752	74	
B-2	足袋屋(やま)	足袋製造	"	鈴木 昇	1758	74	
B-3	新	製造・修理	"	二倉 育男	1362-2	48	元屋敷 1776 (74)
B-4	でんは	人 名	"	横山 横春	1773	74	
B-5	か	製造・修理	"	坂部 静雄	1785	73	元屋敷あり、すぐ傍(74)
B-6	仁平(にっさ)	人 名	"	三ツ井 高子	1904-1	232	元屋敷 1378 (48)
B-7	いん	分 家	"	横山 幸弘	2158	68-1	
B-8	お	本 家	"	横山 祐一	2164	68-1	
B-9	あ	竹ヤブが多い	"	松永 昇次	2167-1	69	
B-10	く	地 名	"	横山 二郎	2114	68	一段低い所にある宅 地から付いたのでは
B-11	しょうべえ	江 屋	"	鈴木 美弘	2175-1	68	
B-12	はらやし	地 形	"	内藤 昭	2103	69	内藤家の総本家 宅地が広いので付い たのでは 束の外れで付いた
B-13	ひ	場 所 名	"	宮城 芳雄	1619	230	
B-14	か	人 名	"	宮城 敏	1619	230	
B-15	た	足袋製造・販売	"	赤堀 友一	1617	230	元の生人は宮城久作
B-16	し	分 家	"	横山 方郎	1614	230	横山祐一(表)の分家
B-17	鏡	商品名	"	木村 秀天	1608 1	230	
B-18	桶	"	"	二倉 貴一	1610	230	敷地内にある杉の老 木あり、相当古いの で徳川時代とされる
B-19	店	地 名	"	二倉 嘉天	1613	230	
B-20	こ	場 所 名	"	二倉 政男	1612	230	前に家がある所から
B-21	や	地 形	"	二倉 美智夫	1611	230	山ノ根ニ住てる所から
B-22	に	場 所 名	"	鏡部 昌代	1585	230	西の外れで付いた
B-23	や	人 名	"	二倉 晴彦	1576	230	傳承あり(2語)
B-24	やとう	場 所 名	"	鏡部 正弥	1583		傳承 高天神の藩 武名という

下 組

番号	呼 名	意味	地区	親氏名	番 地	地名番号	備 考
C-1	ふじや	神社名	下	二俣 始文	1218	82	
C-2	おおしんや	分 家	"	米山 三信	1225	82	
C-3	じえもんさま	本 家	"	米山 治秀	1159	62	米山本家
C-4	始 屋	康 亮	"	米山 昌夫	1139	62	
C-5	たば	たば	"	米山 友雄	1114	62	阿婆にある田からついた?
C-6	お	場 所	"	福井 昭夫	974	187	下組川島集落で一番奥にある住宅
C-7	福 屋	製造・修理	"	福井 力男	975	187	
C-8	とうえもんさま	人 名	"	福井 博昭	710	181	
C-9	しょうや	庄 屋	"	倉橋 山太郎	698	181	
C-10	へ	家	"	倉橋 一	696	181	
C-11	かなやま	神 社 名	"	福井 義義	570	178	宅地内に倉山神社あり
C-12	まんぼちや	せいろ	"	川中 正明	550	178	
C-13	つきや	つきや	"	川中 昭弘	549	178	川島景山牛家 水車で米・麦等をついていた
C-14	うしや	動 物 造	"	江中 文男	548	178	
C-15	越屋(こじや)	製 造	"	宮城 一男	972-1	187	現在空屋敷 (先人は松久六平)

三 沢

番号	呼 名	意味	地区	親氏名	番 地	地名番号	備 考
D-1	やまだ	地名	三 沢	伊藤 昭治	1398	125	
D-2	ほうえんさま	山伏の名前	"	中山久仁雄	1359	125	
D-3	ひがしうえ	場 所	"	伊藤 勲	1183	119	
D-4	にしうえ	"	"	伊藤 忠夫	935	119	
D-5	店	雜 商	"	伊藤 哲雄	1181	125	
D-6	大	だ い く	"	伊藤 繁	933	119	
D-7	左	さ か ん	"	勾板吉久郎	906	119	
D-8	酒 屋	酒 製 造	"	栗原 正信	902	119	先人が酒を作っていた (伊藤 保)
D-9	ト 城 屋	製 造	"	赤堀庄太郎	803	118	
D-10	や	本 家	"	伊藤徳一郎	512	118	北海道へ移住、伊藤徳本家
D-11	しんたく	分 家	"	伊藤 俊一	683	105	
D-12	ほんたく	"	"	空 家	778	105	
D-13	し ん や	"	"	伊藤 圓	670	105	
D-14	"	"	"	伊藤 和弘	667	105	
D-15	つ	ち 場 所	"	山田 元彦	528	105	
D-16	さ	"	"	伊藤 雅彦	558	116	
D-17	とん の や	地 名	"	伊藤 孝敏	642	113	
D-18	両 務 屋	製 造 所	"	山田 貞雄	597-2	101	
D-19	む か 治	場 所	"	伊藤 尚秀	595	101	元屋敷は日影と呼んでいた
D-20	ね 織	農 具 造	"	伊藤 賢次	578	101	
D-21	綿 織	製 造・修理	"	赤堀 義之	521	101	
D-22	ん	分 家	"	永田 秀次	483	101	
D-23	五 郎 門 機	人 名	"	永田 金徳	437	101	
D-24	醬 油 屋	販 売	"	二倉 正作	401	95 2	
D-25	にへいさ	人 名	"	永田 邦三	366	95 2	元の住人は北海道へ移住
D-26	く	地 名	"	二倉 剛	243	90	

奈良野

番号	呼名	意味	地区	現氏名	番地	地名番号	備考
E-1	つち	場所	奈良野	山田 義行	31	191	
E-2	鍛冶	場所	奈良野	津川 守男	55	191	元は奈良ブチで現在地へ移転
E-3	な	場所	奈良野	句坂 武	12 1	191	
E-4	かま	場所	奈良野	川中 三夫	5 1	191	うどんやとも呼んでいた
E-5	酒	場所	奈良野	空 屋敷	2 1	191	句坂春平氏の平家(26事件)
E-6	ろくろ	場所	奈良野	栗 商店	62	189	
E-7	米	場所	奈良野	松村 完二	56 2	189	炭、飼料、糞等も販売
E-8	餅	場所	奈良野	端部 重雄	45	45	すぐ西に旧横須賀街道あり
E-9	餅	場所	奈良野	句坂 重雄	34 2	189	現在は左官業
E-10	ま	場所	奈良野	松浦 良	61	198	上橋分 前の住人は鍛冶屋という

西橋地

番号	呼名	意味	地区	現氏名	番地	地名番号	備考
F-1	な	場所	西橋地	菅沼 利勝	328	212	
F-2	か	場所	西橋地	平川 利夫	539	219	
F-3	お	場所	西橋地	青島 豊	597 3	219	
F-4	新	場所	西橋地	鈴木 山	816 1	221	
F-5	白	場所	西橋地	渋谷登志男	614	221	村地からついた

土橋

番号	呼名	意味	地区	現氏名	番地	地名番号	備考
G-1	か	場所	土橋	嶋川 義晴	261	195	
G-2	な	場所	土橋	句坂昌久雄	257	195	
G-3	いんさう	人名	土橋	内田 清	316	195	
G-4	前	製造	土橋	中山 正喜	393	195	以前鍛冶屋をしていた
G-5	丸	製造・修理	土橋	丹羽 長吉	329-1	200	
G-6	しん	場所	土橋	大林 利秋	993	200	
G-7	しょう	人名	土橋	菅沼 弘	467	197	庄屋をしていた時代あり
G-8	あ	分家	土橋	菅沼 見	467	197	

神尾

番号	呼名	意味	地区	現氏名	番地	地名番号	備考
H-1	掛	染物	神尾	杉山 熊次	189	234	
H-2	〃	〃	神尾	横山 守孝	1411	236 3	
H-3	〃	〃	神尾	瀧美 真平	279 1	234 7	
H-4	酒	製造・販売	神尾	横山 英	1431	236-3	
H-5	〃	〃	神尾	森小耕一郎	196	234-6	近世相良城主へしていた 可幸山へ仕へた家の仕事を した後、酒やを始めたの では？
H-6	鉄掛	修理	神尾	山口 静男	209	234 7	
H-7	襦袢	場所	神尾	戸塚 正明	721 2	243	
H-8	き	場所	神尾	横山 勇	1293	248	
H-9	やすん	場所	神尾	赤堀 雄	1033 1	247 9	傳承によると横地の武士 が休息したと傳う
H-10	ごえもんさま	人名	神尾	横山 辰哉	1425	235	
H-11	やまわ	場所名	神尾	松下二郎次	713	243	以前庄屋をしていた
H-12	ぶ	場所	神尾	八木 晴吉	1302	244-2	新開田の武士も見に來た と傳う
H-13	しろみかや	場所	神尾	不 明	1339 2	134-8	舞臺を作った跡の地名か ら付いたと考えられる 傳承によると屋敷があり 老夫婦が住んでいたという 場所からみて物ノ見跡が あったのではという。
H-14	木	場所	神尾	山口 義治	190	234-6	

近世以来の神社の位置が明確でなくなった。これは、氏神とムラの関係さらには、村落構造を考える上で残念な出来事といわざるを得ない。そのため、地名調査では元の位置を探り、地図にプロットすることに心がけて作成したものが第6図である。

寺は、昔からムラの中にあつては、先祖供養葬儀などの宗教的儀式を司るだけでなく、村人の心のよりどころとなり文化の発信地としての機能をもっていた。それがいつしか、宗教的な儀式だけに变化し現在に至っている。横地では、現存する寺は興嶽寺・常泉寺（段横地）、慈眼寺（奥横地）の二寺となっているが、興嶽寺以外は無住となっている。近世以降、各ムラには寺院があり、壇家制度の中で寺が維持されてきたが、宗教を取り巻く環境の変化や経済的な面によって、多くの寺院が廃絶した。今までにわかっている寺院は、三光寺（奥横地）、幢照寺（西横地）、林光寺（土橋）、龍谷寺（三沢）、金久寺（下組）で、金久寺以外は興嶽寺の末寺となっている。興嶽寺は、横地域の落城する1年前の文明7年（1475）に相良町西萩間村大興寺の末寺として、月山守満大和尚によって開山されたのが始まりとされる。その後、横地を中心に末寺が六ヶ寺を数え、この地域の曹洞宗の教線拡大に寄与していった。この地域での近世寺院の歴史には、大興寺が大きな役割を担っていたと考えられる。大興寺は、由緒によると曹洞宗大本山総持寺の御直末寺院で、15世紀初頭應永年間に大本山第7代貫主大徹宗令禪師によって、龍門山大興寺として開山された。この寺は駿河・遠江に末寺70余ヶ寺を有する東海の名刹で、曹洞宗の布教活動と共に地域の人々の生活に受け入れられたものであろう。曹洞宗は13世紀、越前永平寺を根本道場とした道元門下の禪僧を中心とする宗派である。この宗派は三河、遠江、駿河で15世紀を境に、有力領主の勝間田、天野、原、久野、各和の各氏の外護を受け、教線を伸ばしていったのである。そんな中で、掛川市本郷の長福寺の住職として活躍した松堂高盛（1437～1508）によって書かれた『円通松堂禪師語録』があり、当時の地方での禪僧の活動を知る貴重な手がかりとなるものである。広瀬良弘氏が『地方文化の伝統と創造』（1976）曹洞禪僧の地方活動 - 遠江国における松堂高盛の活動を中心として - の論文で、曹洞宗が地方の人々に受け入れられていった理由について、宗教的要素を導入し、祈禱を通じて活動したことや、従来の諸宗教勢力を包含利用する

寺の曹洞宗改宗

世 代	住 職 名	没年 月 日	人興寺（相良町）
開 山	月山守満大和尚	延暦元年（782）月15日57才	西 世
二 世	遠藤望右大和尚	文龜元年（911）月11日	
三 世	華嚴建春大和尚	天文2年（7月）4日	
四 世	曹林玄泰大和尚	永禄12年（9月）28日	
五 世	南無義興大和尚	應長15年（5月）23日	
六 世	玉山秀永大和尚	文永5年（9月）28日	
七 世	久山信昌大和尚	享永14年（6月）2日	
八 世	才谷長持大和尚	年月不詳	
九 世	鶴山金尊大和尚	寛文7年（4月）20日	
一 〇 世	一宮良教大和尚	貞享3年（3月）23日	
一 一 世	月間良純大和尚	享保12年（9月）14日	
一 二 世	石雲龍大和尚	延享4年（7月）13日	
一 三 世	清興石齋大和尚	文化元年（5月）14日60才	
一 四 世	民元道仙大和尚	寛政4年（12月）21日	
一 五 世	摩訶石定大和尚	天明8年（正月）9才45才	
一 六 世	泰山宗源大和尚	文政8年（9月）12日64才	
一 七 世	智外昌叔大和尚	文化元年（10月）17日	
一 八 世	智徳隆普大和尚	安政元年（9月）8才53才	
一 九 世	分神良徳大和尚	嘉永元年（11月）22日58才	
二 〇 世	清興石齋大和尚	明治40年（2月）3日57才	
二 一 世	祖庭雪門大和尚	大正3年（2月）1日69才	
二 二 世	泰徳垣陸大和尚	昭和40年（10月）12日58才	
二 三 世	浄善渡佳大和尚	昭和34年（2月）23日53才	
二 四 世	佳徳孝輝大和尚	昭和7年（7月）7才20才	
二 五 世	青天桂青大和尚	昭和30年 退任	
二 六 世	大 心 孝 義		

『ムリ岡は五百年』より抜粋



第6図 宗教施設位置圖

第6表 宗教施設一覽表

神 社

番号	呼 び 名	漢 字	地 区	番号	呼 び 名	漢 字	地 区
ア	さんのう	山 王神社	神 尾	ナ	たかろね	高 嶺神社	段横地
イ	てんばく	天 白神社	神 尾	ニ	す わ	森 訪神社	段横地
ウ	しょうてんばく	小天白神社	神 尾	ヌ	いなり	稲 荷神社	段横地
エ	みょうたい	妙 体神社	神 尾	ネ	ふじや	藤 谷神社	下 組
オ	はんしゃ	本 社神社	神 尾	ハ	て ん	天 神社	下 組
カ	はちまん	八 幡神社	神 尾	ヒ	わかろや	若 宮神社	西横地
キ	て ん	天 神社	神 尾	フ	てんばく	天 白神社	西横地
ク	つしま	津 島神社	神 尾	ヘ	て ん	天 神社	土 橋
ケ	こうしんづか	庚 申 塚	神 尾	ホ	いなり	稲 荷神社	土 橋
コ	しろやま	城 山神社	奥横地	マ	かなやま	金 山神社	奈良野
サ	はくさん	白 山神社	奥横地	ミ	てんばく	天 白神社	三 沢
シ	どうきゅう	道 久神社	奥横地	ム	つしま	津 島神社	三 沢
ス	す わ	源 訪神社	奥横地	メ	や ま	山 神社	三 沢
セ	しんめい	神 明神社	奥横地	モ	いざすめらぎ	伊雑草神社	三 沢
ソ	す い	永 神社	奥横地	ヤ	わかみや	若 宮神社	三 沢
タ	はちまん	八 幡 社	奥横地	ユ	ごしょう	五 件神社	三 沢
チ	て ん	天 神社	段横地	ヨ	うふう	雨 風神社	三 沢
ツ	こんびら	金刀比羅神社	段横地	リ	かすが	春日神社	三 沢
テ	ちこうじん	地 荒神社	段横地		ひ え	日 吉神社	三 沢
ト	て ん	天 神社	段横地				

その他の神社 (さぐち神社)

番号	呼 び 名	漢 字	地 区	番号	呼 び 名	漢 字	地 区
レ	さぐち	左 口神社	奥横地	ワ	さぐち	佐 倉神社	下 組
ロ	さぐち	佐 倉神社	段横地	ン	さぐち	左 口神社	下 組

堂

番号	呼 び 名	漢 字	地 区	番号	呼 び 名	漢 字	地 区
一	まるやまあさひどう	丸山朝日堂	三 沢	四	じゅうおひどう	十 三堂	奈良野
二	やくちどう	谷 口堂	段横地	五	かんのんどう	観 音堂	奥横地
三	びしゃもんどう	毘沙門堂	下 組	六	ろくどうじぞう	六道地藏堂	段横地

寺

番号	呼 び 名	漢 字	地 区	番号	呼 び 名	漢 字	地 区
A	ほうじゅじ	宝 珠 寺	神 尾	J	えんめいじ	延 命 寺	奥横地
B	しょうこうじ	正 光 寺	神 尾	K	えいらくじ	永 楽 寺	奥横地
C	こうがくじ	興 隆 寺	段横地	L	さんこうじ	三 光 寺	奥横地
D	じょうせんじ	常 泉 寺	段横地	M	おうじょういん	往 生 院	奥横地
E	りょうこくじ	龍 谷 寺	三 沢	N	じふくじ	授 福 寺	奥横地
F	とのがや		三 沢	O	ぜんきゅうじ	全 久 寺	下 組
G	りんこうじ	林 光 寺	土 橋	P	不 明		下 組
H	どうしょうじ	幢 照 寺	西横地	Q	不 明(豪原)		東横地
I	じげんじ	慈 眼 寺	奥横地				

形を取ったりしたことが、民衆化していたとされる従来の発展の要因以外に、葬祭・授戒など葬祭施行を、民衆が、禪僧に対して求めたことが各地に浸透していった要因とする。横地では曹洞宗と関わるのは15世紀後半となり、それ以前については、慈眼寺などの真言宗の寺が中心であったと考えられる。三光寺は、延命寺、永楽寺、授福寺を合併したとされ、奥横地には四つのお寺があったことになり、石塔との関係からも真言宗系の寺であった可能性は高い。さらに、興嶽寺は文明7年以前には真言宗の寺として別の場所にあったものが改宗し再建されたとする説もある。さらに、小笠郡下には法然に関連する浄土系の寺院があり、慈眼寺に残る五輪塔がその門下の西蓮とする伝承もあり、中世の横地、とりわけ奥横地に浄土宗、時宗、曹洞宗と複雑な宗教的な世界があったと考えられる。

4) まとめ

地名から歴史を読むためには、私達の生活の中に伝わり、何気なく行われている行事や祭礼などの民俗事例から、寺社などの宗教的施設などにいたるまで、幅広い視点から考え検証しなくてはならない。今回は、奥横地に着目して集中的に研究を進めたが、なかなか結論がでるものでなく、筆者の力不足となってしまった。今後の課題として2、3取り上げてみたい。

横地の地域は、加茂地区のように荘園名をそのまま踏襲し村名として残っている場合とは異なり、横地は郷又は荘園としても今までの文献では見当たらず、いかなる形で村名が変遷していったものであろうか。一般的に中世村落は、平安末～鎌倉初の段階で荘園領主によって一定の領域を支配され、その形が村落の形成に大きく関わり、後世になって荘園名称がそのまま現在の集落の名称に引き継がれることが多いとされる。村落の変遷については、もう少し水田、溜池、灌漑を含めた農地経営、土地支配、新田開発について地名や古地図、文献による研究によって、土地に関する情報が増えることによって中世の横地がよりみえてくるのではないだろうか。

今回、調査の途中となってしまった、古道、古地形の復元については、時間と力不足で断念せざるを得なかった。特に古地形での牛瀬川の復元は、当時の村の境や交通を知る手掛りとなり、横地ムラの景観復元には欠かすことのできないものであろうと考えられる。

終わりにあたり、調査の資料収集から作成まで、横地城保存会の会員の皆さんの協力のもとで、一応形にできたことは大変嬉しい喜びである。内容的には、横地城跡総合調査の委員の皆さんとは違い、研究の域に達しないものであるが、少しでも後世に資料が残ることを願うものである。

参考文献

横地村誌 1986 横地村史編纂委員会

ふり向けば五百年 1980 興嶽寺

千古の森一わが八幡さまの来し方ー 1982 菊川町三沢八幡神社氏子総代会

横地の民俗ー小笠郡菊川町ー 1989 静岡県教育委員会文化課県史編纂室

横地城南遺跡発掘調査報告書 1995 菊川町教育委員会

地方文化の伝統と創造 1996 広瀬良弘著「曹洞禅僧の地方活動・遠江国における松堂高盛の活動を中心に」

榛原郡誌下巻 1916 榛原郡役所

中世佐夜中山考 1971 桐田幸昭著

はじめに

中世遠江国の名族である横地氏とその本城横地城について、従来の研究蓄積はそれほど多いわけではない。その中で重要なものとしては松本芳徳「史実横地一族」^①があげられる。横地氏の関係文書を博搜し、その活動を編年で叙述し、横地城についても解説を加えている。さらに藤谷神社所蔵「横地系図」も部分的に収録する。横地氏研究の基本的な文献と言ってよいであろう。

近年の横地氏の研究は主に系図を中心とした系譜に興味が集中していた。横地勝則が自らの系譜を探求する目的で編纂した『横地家譜史料集』^②は各地に残る横地氏の系図を集成している。津川文一郎『考証のパラード』^③は藤谷神社所蔵『横地系図』の影印を掲載し、諸系図より系譜の検討を加えている。

横地城の観点からは『日本城郭全集5 山梨県・長野県・静岡県』^④・『日本城郭体系9 静岡・愛知・岐阜』^⑤・『静岡県の中世城館』^⑥・『図説 遠江の城』^⑦等の広域的に城館を把握した書籍の内に概説的な記述が見られる。しかし本格的な検討には至っていない。

以上の叙述の背景には鈴木健治や静岡古城研究会の調査による調査があった。このことは引用や掲載図面に窺える。彼らは中世城館の研究を志した旁で、遺構からの歴史の掘り起こしを实践していた。地道な活動の成果が近年の成果の根底にあることは注目しておきたい。

概観したとおり、横地氏や横地城に関する研究はまだ緒についたばかりであり、本格的な研究は今後に待たれる状況にあると言っても過言ではない。

1 出自

従来、通説では横地氏は源姓であるとされていた。先述の松本芳徳「史実横地一族」^⑧は藤谷神社所蔵「横地系図」の記述を典拠とされたと推測されるが、源義家の末流であると解説している。この説が通説となり、近年では「遠江」の域内でもっとも有力とされるのは②横地氏・③勝間田氏で、源義家と在地豪族の娘の間に生まれた子が上着した、その子孫と称し、国府の機構とも深い関係をもって国の東部に発展した。^⑨という叙述に至っている。

しかし近年この通説に疑義が出始めている^⑩。まずはこの点の検討から行うこととする。

既述の通り通説は横地氏を源義家の後胤としている。典拠は藤谷神社所蔵「横地系図」^⑪であるとされる。同系図は全文一筆で書かれ、寛延二年(1749)を記載する最後の年記とすることから、それよりさほど下らない時期、18世紀中頃に成立した系図と推定される。冒頭に「奉納遠江藤谷大明神宝庫」と記されることから、当初より一族の名字の地である横地の藤谷神社に奉納することを目的としていたと思われる。基本的には戦国人名武田氏に仕えたとする横地元次を祖とする旗本の横地一族の系図である。内容の多くは後述する『寛政重修諸家譜』の系譜と同じである。この『寛政重修諸家譜』の系図に中世部分を足したのが本系図となる。横地氏の祖を家永とし、この人物が源義家の子であると位置付けている。

この藤谷神社所蔵「横地系図」のほかに源姓であるとする系図が今一本ある。『断家譜』^⑫所載の横地系図である。この系図は寛文十一年(1671)迄の記載となっている。記載された横地氏はすべて実名を記さず某と表記するが、仮名の記載から藤谷神社所蔵「横地系図」に所載される「横地長久」

と「某 横地教馬」が該当する。従って同じ系譜の横地氏となる。加えて、「断家譜」の性格⁽¹³⁾からすると同書所載の横地系図は実名の記載はないものの藤谷神社所蔵「横地系図」系の系図の影響を受けたものと考えるのが妥当であろう。

管見の限り源姓を主張する横地系図は、この二本の系図と藤谷神社所蔵「横地系図」の写本である静嘉堂文庫所蔵「野口 芝山 松尾 横地 系図」であり、すべて同一系統本と整理される。

しかし、この旗本の横地氏については藤原姓であったとする系図が確認される。幕府編纂の「寛永諸家系図伝」横地譜⁽¹⁴⁾と同じく「寛政重修諸家譜」横地系図⁽¹⁵⁾である。この系図はいずれも横地氏を「藤原支流」に分類して掲載している。

とりわけ「寛政重修諸家譜」横地系図の中で、以下に掲げる横地政吉流系図の冒頭に記載された記事は重要である。

今の呈譜に、清和源氏にして義家の流なり。先祖遠江国横地村に住せしにより、其地をもつて称号とす。其後裔渋谷助元次の長男を義次とし、二男を太左衛門はじめ尊氏兩元貞とせり。これによれば寛永系図第一の横地譜今た門忠家と祖をおなじうす。しかれども今さゝぐるところの譜くはしきに過て疑ふべきものあり。よりて一に旧にしたがひてあらためず。

すなわち、『寛政重修諸家譜』に際して横地家では新たに系図を提出した。その系図は源義家流であったとする。しかし検討したところ、『寛永諸家系図伝』にある系譜と同一の系譜であった。さらに詳細に新しい系図を見ると記事が非常に詳しいので疑わしいものであった。そのために旧のまま藤原姓として記載する、という記事があるのである。

編纂年次から考えても新たに提出された系図とは、藤谷神社所蔵「横地系図」系の系図と考えて間違いない。したがって、旗本の横地一族は『寛政重修諸家譜』編纂の直前に藤谷神社所蔵「横地系図」系の「横地系図」を新たに編纂し、姓を藤原姓から源姓に改めたことが確認されるのである。

このほか以下のように各地に残る藩の文庫に納められた系図にも藤原姓横地氏が散見される。

柳川古文書館所蔵	「横地金兵衛系図」 「横地家譜略」(文政七年八月) 「家世旧事録」(天保十年) 「系図略」(内題「譜謨 横地」)江戸中期カ ⁽¹⁶⁾ 「系図案」(江戸後期カ) ⁽¹⁷⁾
会津若松市立会津図書館所蔵	「会津藩『諸士系譜』」(江戸後期)
山口県古文書館蔵	「萩藩『譜録略系並伝書御判物奉書写』」
金沢市立図書館蔵	「山姥一類附帳」(明治二年) 「先祖由緒井一類附帳」(明治三年 二本) ⁽¹⁸⁾

これらの内、柳川藩士及び会津藩士の横地氏は遠江出身である記載があり、同族と判断できる。

以上の近世史料に加えて中世史料にも横地氏が藤原姓であったことが確認できる。「相国寺供養記」⁽¹⁹⁾には、明德三年(1392)八月二十八日、相国寺の落慶供養に向かう足利義満の行列が記されており、その「五番」の随兵に「横地尾張守藤原長連」が見える。この藤原姓の事実は極めて大きい。すなわち中世から遠江横地氏は藤原姓であることは明らかなのである。

横地氏が藤原姓であることが確認できたことで注目しておきたいのは、駿河・遠江国の在地領主は藤原姓が多く、中でも藤原南家入江氏流の一族が多いとする点⁽²⁰⁾との関連である。

具体的に横地氏が藤原氏のどの系譜に連なるかは確定できない。しかし、柳川古文書館所蔵の「系図略」(内題「譜謨 横地」)江戸中期カ図版参照)と「系図案」(江戸後期カ)は重要な視点を提供す

る。同系図は横地氏を藤原南家貞嗣の系統としているからである。すなわち駿河・遠江両国においては藤原南家入江氏流が多いとする傾向に、藤原南家までは一致することになる。

さらに同系図では横地氏の先祖に遠江守の藤原信通⁽²⁾を位置付け、その子長通を横地氏祖とし、次子を勝間田氏祖の成長とする。『尊卑分脈』には長通は「永通」で確認できる。しかしながら成長は確認できない。あるいは「重通」が当たるのであろうか。いずれにせよこのあたりに系図上の作為が色濃く感じられ、信憑性に問題を感じることは避けられない。

しかし、信憑性はともかく横地氏の祖を藤原南家にまで繋げようとした視点は重要で、今後の出自及び中世初期の地域史の分析に重要な視点を提供することになるであろう。

2 通字と勝間田氏との関係

一般に横地氏と勝間田氏は同族であるとされている。確かにこの説を裏付けるように両氏はセットで史料に散見する。この通説はどうであろうか。系図のすべてが近世の所産であることから、このことを明確に確認することは極めて困難といわねばならない。しかし、下記の表は両者が同族である可能性を示唆している。

横地氏・勝間田氏実名表

	横 地 氏	出 典	勝 間 田 氏	出 典
鎌倉期	太郎長重 太郎兵衛尉長直 左衛門次郎長重 左衛門次郎師重	吾妻鏡 吾妻鏡 吾妻鏡 吾妻鏡	平三成長 二郎成長 玄番助成長	吾妻鏡 吾妻鏡 吾妻鏡
南北朝期	但馬守直宣 周防守秀長 左京亮長連 (因幡守カ)為長 尾張守藤原長連	奉加状 奉加状 大野文書 天野文書 相国寺供養記	能登守佐長 能登守助清	後鑑 太平記
室町期			兵庫助陸長 太郎左衛門尉定長 越前守之長	長享番帳 八幡社参記 大野文書

この表は古文書及び記録に散見する横地氏及び勝間田氏の実名を掲げたものである。一見して両氏とも「長」を通字とする一族であることが確認できよう。通字は同族としてのアイデンティティを象徴的に示すものであり、このことから両氏が血縁的（もしくは擬制的）に同族であるとするのは間違いないことと考えてよからう。

さらに子細に見てみると興味深いことがわかる。通字の「長」の文字の使い方であるが、勝間田氏は一貫して実名の二字目に通字を使用するのに対して、横地氏は一字目に使用する事例の方が多いことである。

一般に国人クラスの家では、通字を嫡流では二字目に用い、庶流や擬制的な関係者は惣領に敬意を払って一字目に使用する。この原則に従えば、勝間田氏が嫡流で横地氏は庶流という関係にあった可能性があることになる。

しかし残念ながら横地氏・勝間田氏の惣庶関係は確証の限りではなく、可能性の指摘に止まる。ただし、両氏が「長」を通字とする一族であり、同族であることは確認してよいであろう。

3 活動と性格

横地氏の性格を解明するために、史料に散見する状況を編年に確認してみたい。なお、横地氏の性格は十五世紀中頃に変化すると考えられるため、まず十五世紀前半までを概観する。

(1) 鎌倉期以前

①保元元年(1156)七月十日 『保元物語』⁽²²⁾

横地氏、保元の乱に際して、勝間田氏・井伊氏とともに源義朝に従い、出陣する。

②養和元年(1181)閏二月十七日 『吾妻鏡』⁽²³⁾

横地長重・勝間田成長他、遠江国守護安田義定に従い、浜松庄橋本に陣して平氏の襲来に備える。

③文治二年(1186)二月六日 『吾妻鏡』

一条能保の掃落にともない、横地長重・勝間田成長ほかの御家人が供を命じられる。

④文治三年(1187)八月十五日 『吾妻鏡』

鶴岡八幡宮放生会の流籠馬において、横地長重が的立ちをする。

⑤建久元年(1190)十一月七日 『吾妻鏡』

横地長重、源頼朝の上洛に際して、入京行列の後陣隨兵の三十四番に連なる。

⑥建久六年(1195)三月十日 『吾妻鏡』

横地長重、源頼朝の東大寺供養のために南都に向かい、勝間田成長とともに供奉行列に加わる。

⑦暦仁元年(1238)二月五日 『吾妻鏡』

將軍藤原頼経の掛川宿泊に際して、横地長直が奉行となり、遠江国御家人が御所を造営する。

⑧暦仁元年(1238)二月六日 『吾妻鏡』

横地長直、鎌倉幕府將軍藤原頼経の掛川出立に際して、天龍川の舟橋の破損を注進する。

⑨暦仁二年(1239)正月一日 『吾妻鏡』

横地長直、納飯の儀に際して馬を引く。

⑩建長二年(1250)三月一日 『吾妻鏡』

閑院殿造営のために横地氏他に配分がなされる。

⑪正嘉二年(1258)正月六日 『吾妻鏡』

幕府御的始めの射手に横地長重が選ばれる⁽²⁴⁾。

⑫正嘉二年(1258)正月十五日 『吾妻鏡』

幕府御的始めの射手を横地長重が勤める。

⑬弘長元年(1261)正月九日 『吾妻鏡』

横地長重、幕府御的始めの試しを前浜で行う。

⑭弘長元年(1261)正月十四日 『吾妻鏡』

幕府御的始めの射手を横地長重が勤める。

⑮弘長三年(1263)正月八日 『吾妻鏡』

幕府御的始めの射手の選出に横地師重が参加する。

⑩弘長二年(1263)正月十二日 『吾妻鏡』

幕府御弓始めの射手を横地師重が勤める。

⑪文永二年(1265)正月十二日 『吾妻鏡』

幕府御弓始めの射手を横地師重が勤める。

⑫文永三年(1266)正月十一日 『吾妻鏡』

幕府御弓始めの射手を横地師重が勤める。

⑬延慶三年(1310) 『他阿上人家集』⁽²⁶⁾

横地九郎左衛門新西、他阿真教と歌会を行う。

鎌倉期以前の横地は大半が『吾妻鏡』が典拠史料となる。しかし、概観すると横地氏の御家人としての活動がよく見えてくる。将軍等の要人の随兵としての活躍(③・⑤・⑥)。課役への対応(⑦・⑧・⑨)。幕府儀礼への参画(④・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱)。戦争への参戦(①・②)。などと概観することができよう。

概して史料の性格もあるが、遠江国の在所での活躍よりも鎌倉などを中心とする幕府近辺での活躍が多いことが指摘できる。

内容的には的始めへの参画の史料は多い。これを横地氏の武芸の力量の高さを示すものとしてとらえるならば、将軍等の要人の随兵としての活躍や戦争への参戦なども同種の活躍として括することができそうである。鎌倉期以前の横地氏のあり方として武芸の観点は重要と思われる。

これらの視点は典拠とする史料の性格のためとも考えられる。しかし、南北朝・室町期の横地氏を概観すると一概に否定することができなくなる。

(2) 南北朝・室町期

①建武二年(1336)二月 『参考太平記』⁽²⁶⁾

横地氏・勝間田氏はか足利尊氏の九州下向に従う。

②建武三年(1336)八月廿日 『鶴岡社務記録』⁽²⁷⁾

横地養子小栗十郎、鶴岡八幡宮に乱入した悪党と戦い、死去する。

③建武三年(1336)九月 「内出文書」⁽²⁸⁾

横地・勝間田氏等、横地城等で南朝方と戦う。

④建武四年(1337)七月五日 『書簡集残編』⁽²⁹⁾

横地治部丞、松井助宗の三方原の合戦における軍功の証人となる。

⑤親応二年(1351)十一月 『参考太平記』⁽³⁰⁾

鎌倉に向かう足利尊氏の軍勢に横地遠江守・勝間田三河守が属す。

⑥延文三年(1358)十二月廿二日 『宝篋院殿将軍宣下記』⁽³⁰⁾

足利義隆の将軍宣下に際して、参内の行列に横地山城守⁽³¹⁾が加わる。

⑦貞治二年(1363)三月 日 「六波羅重宝文書」⁽³²⁾

六波羅重宝寺への将軍近習連署奉加状に横地直直と横地秀長が名を連ねる。

⑧貞治六年(1367)三月 『太平記』⁽³⁰⁾

足利義隆、中殿御会に赴く。その随行の兵に横地山城守が属す。

⑨応安三年(1370)四月九日 『花營三代記』⁽³³⁾

足利義満、六条新八幡宮・北野社・祇園社へ参る。横地為長が随行する。

⑩応安二年(1370)十月 『今川記』⁽³⁶⁾・『今川家譜』⁽³⁷⁾

今川貞世、鎮西下向のために上洛する。鎮西派遣の軍勢に横地一族が加わる。

⑪応安五年(1372)二月十日 『花宮三代記』

足利義満、六条新八幡宮へ参る。横地爲長・勝間田三河太郎が随行する。

⑫永和元年(1375)三月廿七日 『花宮三代記』

足利義満、石清水八幡宮へ参る。横地因幡守(爲長か)・勝間田修理亮が近習として随行する。

⑬永和元年(1375)四月廿五日 『花宮三代記』

足利義満、社参。横地因幡守(爲長か)・勝間田修理亮が近習として随行する。

⑭至徳三年(1386)六月廿七日 『富田仙助氏所蔵文書』⁽³⁸⁾

横地長連、大野景隆との遠江國人峰・半山・犬居村地頭職をめぐる相論に負ける。

⑮明德三年(1392)八月廿八日 『相国寺供養記』⁽³⁹⁾

相国寺の落慶供養に向かう足利義満の行列の「五番」に横地長連が属す。

⑯永享十一年(1438)九月 『永享記』⁽⁴⁰⁾・『今川記』⁽⁴¹⁾

永享の乱に際して、京都よりの派遣軍に横地・勝間田両氏が属し、横地某が箱根で討ち死にする。

⑰文安年間 『文安年中御番帳』⁽⁴²⁾

番帳の二番に横地太郎が記載される。

⑱宝徳・享禄年間 『永享以来御番帳』⁽⁴³⁾

番帳の二番に横地孫太郎が記載される。

南北朝・室町期の横地氏を概観すると、横地氏の幕府にとっての武力装置として活躍していることが鮮明になるのではなかろうか。足利義隆・義満期においては「近習」⁽⁴⁴⁾として散見し、15世紀中頃においては「奉公衆」⁽⁴⁵⁾として御番帳に記載されるに至る。將軍の直属の武力装置であったことは明白である⁽⁴⁶⁾。

このように鎌倉期から15世紀中頃までの横地氏を概観すると、横地氏は鎌倉及び京都において武芸を以て直接に將軍に奉公する武士であった、ということができのではなかろうか。この間における遠江国横地における活動は、文献史料では極めて確認しにくいのである。

4 所領

都市で活動する横地を支えるのは、各地に所在したと思われる横地氏の所領であることはいうまでもない。しかし、その所領構成は明らかではない。遠江国外にも所在した可能性はあるが、その存在を確認するまでには至っていない。以下では横地氏の所領構成を明らかにすべく遠江国内に所在した所領を抽出し、構成内容を素描してみたい。

現在の静岡県菊川町には「奥横地」「東横地」「西横地」の大字が谷に沿って東西一列に並んで所在する。今回の総合調査もこの地点を集中して行ったが、言うまでもなくこの地は横地氏の本貫の地である。ただし残念ながらこの地を相伝するという譲状・安堵状などの明確な史料は発見できなかった。しかし地名から考えて本拠地であることは動かない。

問題はこの名字の地を中心とした広がりがどうなっていたのかである。

東は谷奥までと考えておきたい。山を隔てた東は現在の小笠町であることから、恐らくは別の領主の所領であろう。反対の西は菊川の河川を境とするものと思われる。それより西は内田庄となり、横地氏の権限は及んでいない。

北側については、河村庄との関連ということになる。しかし現在のところ、横地氏が河村庄に関わった事実はなく、河村庄は横地氏の領域外と考えられる。但し、横地の谷と繋がる牛瀬川沿いの大字柿

尾(かんのお)については注意を要する。この地名が中世に存在したことは確認されていない。しかし、語源が「加納」であった可能性がある。加納は荘園制下の新開地で、新たに既存の荘園に追加された地域を指すことがある³⁴⁾。河村庄「加納」であるかどうか帰属関係は明確ではないが、ある時点の新開地であり、その時点が中世であるならば、隣接地の領主である横地氏の関与は想定しうると考えられる。今後の課題である。

次に南である。菊川町に南接する小笠町下平川について、横地氏の所領であったとする伝承がある。しかし文献史料からは明確に確認できなかった。但し、延文六年(1363)八月十六日沙弥成西寄進状(平田寺文書)³⁴⁾は注意を要する。同文書は棚草郷の薬師寺の住持職を平田寺長老日峰和尚に寄進したものである。寄進者の沙弥成西は同日付けで横地往生院の住持職も平伝寺長老に寄進しており、横地に関連を持った人物であることが知られる。松本方徳『史実横地一族』³⁵⁾はこの沙弥成西が横地氏であるとしているが、根拠が明確ではない。しかしながら明確に否定できる状況でもない。先に述べたが「他阿上人家集」³⁶⁾には「横地九郎左衛門新西」なる人物をみることができ、入道名に「西」の共通の文字を持つ。もし、成西が横地一族であるならば、横地氏の所領が下平川・棚草近辺まで広がっていた可能性もある。しかし残念ながら明確にはできない。

横地の名字の地を中心にやや南北に広がる可能性が窺えたが、横地氏の中心所領は郡規模にまで広がることはなさそうで、隣接する勝岡田氏が勝田庄を領していたことに比べると中心となる所領の規模は小さいといえる。

恐らくは横地氏の所領は、この名字の地の中心所領に加えて、他所にある所領から成っていたと考えられる。以下に確認された所領を概観する。

まずは先に確認した幕府御料所の「遠江国大峰・平山・犬居村地頭職」である³⁷⁾。管領斯波義将の奉書で出された裁決状は当該地と横地氏との関係を記している。

遠江国大峰・平山・犬居村地頭職事、横地左京亮長連父為長、去正平六年、就掠給之、可遵行之山、度々難被仰守護人今河入道心省、任御事書之旨、心省観応三年八月十三日、成安堵之間、依不沙汰付、康暦二年十二月廿六日、長連申成料所之処、永徳二年八月廿五日、被止料所之儀畢、雖然、長連猶以就欺申之、去月廿一日、有具沙汰之処、於正平御下文者、申成料所之間、令棄置歟、至料所之段者、既被止其弓之間、旁所被聞長連訴訟也、此上者、可被全領知状、依仰執連如件、

至徳三年六月廿七日

左衛門佐(花押)

天野遠江入道殿

当初、正平六年(1351)に何らかの手段で当該地の宛行を得たと主張する。しかし、後段よりこの時に発給された「下文」は御料所にするという旨が記されたものであったとされる。結局は守護使による遵行はなされないまま天野氏に安堵された。その後、横地長連が御料所に編入されたとして恐らくは預け置きという形で知行していた。御料所の期間が過ぎていた後も当該地に権利を主張したので相論となったとされている。ここで注目したいのは本来は天野氏の所領であったが、御料所とされている期間についての横地氏の領有は問題とされていない点である。すなわちこの期間は横地氏が正当に当該地を領していたことになる。

このほかにも時限的な所領を、將軍との関係を背景として、横地氏は遠江国内に有していたのではなかろうか。

さらに確実な所領が掛川市内にあった。

遠州法多山仏供出・灯明田之事、

一 六町七段 浅羽庄内、 参町壹段 石野号内、

横地方
一 九段 曾我庄内、 六反 曾我庄内所々、

朝比奈三郎右兵衛尉寄進
・ 武反三杖 高部郷内、 一 老町 曾我領家方、

一 六反 各和殿寄進、

右、如前々停止諸役、永寺務不可有相違、縦領主雖有相違、寄進之上者、不可有違乱、以此皆修造・勤行、可拙国家安穩之精誠之状如件、

天文十^辛_丑年二月十三日

治部大輔（花押）

法多山⁽⁹⁰⁾

今川義元が尊永寺⁽⁹¹⁾に与えた安堵状である。書き立てられた所領の内、曾我庄⁽⁹²⁾に注目したい。記載が三筆に分かれてなされている。この相違は寺領となった経緯に由来すると思われる。そのなかで最初に記載された曾我庄の所領に注目したい。肩に「横地方」と付されていることが確認できる。この注記を横地氏に引きつけて解釈するならば、以前は横地氏の所領であったと解することが可能である。横地氏の名字の地以外の所領が一カ所確認できたことになる。

また次のような史料もある。

父元辰年来令所務知行^分之事、

一 豊州番谷米銭之事、

（中略）

一 遠州横地分之事、

（中略）

右条々領掌畢、然者代々之判形、於朝比奈谷失却^三、雖然所務仕来分之儀者不可有相違、守此旨弥可勵奉公者也、仍如件、

閏五月二日

氏真判

三浦小次郎殿⁽⁹³⁾

永禄十二年（1569）によって三浦義次に発給された今川氏真の安堵状の写である。この文書によると遠州の横地分の所領は三浦氏に引き継がれていることになる。名字の地もこの中に属していたと考えてよい。しかし、記載のあり方があまりに概略的で詳細が不明であるのは明らかであろう。当事者間では当該地がどこであるか明らかなのであろうが、この史料からは詳細はわからない。しかし具体的な地名表記がなされていないことは、そのことが煩雑であることの反映であると思われる。とするならば横地氏の所領は名字の地の他、遠江国内に散在していた可能性を示唆すると思われる。

すなわち横地氏の所領構成は、（名字の地）＋（散在領）＋（御料所の預け置き）からなっており、名字の地を中心とした領域的なまとまりのある所領ではなく、曾我庄内の所領の存在に認められるごとく、遠江国内の各所に散在していたことが推定されるのである。

先に行動の分析から、横地氏を鎌倉及び京都において武芸を以て直接に將軍に奉公する武士であったとした。この考察に加えて、所領構成の状況を加味したときに、横地氏は15世紀中頃迄は在地で一門的な領域＝「領」を構成する方向性を指向していなかったと考えられる。どちらかといえば、荘園公領制の枠の中で、將軍の傘下にあることによって自らの存在を得ていた、という存在であったの

ではなかろうか。

5 築城と領主制構造

横地氏の拠点である横地城は横地氏とどのような関係にあったのであろうか。以上の考察を踏まえ、このことに若干ながら検討を加えてみたい。

そもそも横地城の初見は建武三年（1336）のことである。

（前欠）

滝河原合戦致軍出畢、其後駿州馳越、属細河八郎殿御手、數十ヶ口役所令警固之处、日代右京亮殿下国之間、則属于彼手、横地城¹⁴丸崎・気多城¹⁵籠軍、今又参当御手、橋下・比々役所符中惣社上役所警固仕者也、仍為下給御証判、恐々言上如件、

建武三年十一月 日

承了判（花押影）¹⁶

軍忠状の作成者は不明であるが、内田文書中の一点であることから、内田氏に関わる人物であると推測される。この文書等から建武三年の段階に横地城が存在していたことが確認される。既に確認し述べたが、この時期に横地氏と勝間田氏の一族が、遠江国内でも『横地城』に籠もるなどして南朝方と交戦していた。本文書はその状況を示すものである。

ただし注意しておかなければならないのは、この文書の『横地城』がそのまま現在の遺跡名称として馴染みのある横地城を直接には意味しないことである。現状の考古学的成果では当該期に横地城が存在していたことは確認できていない。すなわち別の箇所に別の横地城が存在していた可能性も有しているのである¹⁷。しかしながら全く横地城が当該期に存在していなかったとすることもできない。『横地城』の比定地の確定は今後の研究の成果を待ちたい。

横地城はこのほかの良質な文献史料には見ることはできない。しかし通説としていわれているように、文明八年（1476）二月頃に今川義忠によって横地氏が滅亡したとする点は動かし難いので、この時点では横地城が存在したのは確かであろう¹⁸。

では横地城はいつ頃に築城された山城なのであろうか。総合調査で行われた試掘調査によると15世紀中頃から15世紀後半との知見を得ている。現在残る遺構をみても、堀切・削平地・堅堀の組み合わせが主たる構造となり、複雑な遺構も持たない素朴な山城という所見が得られる。いわば「古めの山城」との印象を持ち、考古学的年代観に異を唱える必要性を感じない¹⁹。

すなわち、横地城は15世紀中頃以降文明八年に至るまでの期間、およそ20～30年間存続した山城とすることができる。

さて先に「永享以来御番帳」にいたるまでの横地氏の行動を概観したが、それ以降の横地城に並行する時期の横地氏はいかなる状況であったか。以下に考察を加え、横地城との関連について触れてみたい。

去八月廿二日、同廿三日令免向狩野七郎右衛門尉館、被官輩数多被疵致粉竹、被責落要害之旨注進之趣、奉行人披露了、神妙候、仍被成下御感奉書候、御面目候、向後亦可被励忠功候、恐々、

十 十六

勝田修理亮へ

横地鶴寿へ²⁰

『親元日記』に書き留められた寛正六年（1465）十月十五日付の鎌川親元の書状である。寛正六年に所領問題为契机として遠江・駿河領国で対立が起き、戦乱に至った。この事件は『宗長手記』にも

見えており⁽⁶¹⁾、今川義忠が狩野一族の籠もる府中の要害を攻め落としている。この事件の中で遠江守護斯波氏の在国の被官狩野七郎右衛門尉⁽⁶²⁾を討伐したのが勝田修理亮と横地鶴寿であった。横地氏の遠江国内での活動を示す極めて珍しい記事といえる。

この次に確認される横地氏の動向は『今川家譜』に見える記事である⁽⁶³⁾。この記事は寛正七年(1466)に横地・勝間田両氏が今川義忠と小夜の中山で戦ったとするものである。ただしこの事件については他に史料がなく、詳細が把握できない。

そして最後に文明八年(1475)の滅亡関係の史料が続くことになる⁽⁶⁴⁾。

寛正七年の事件も含め最末期の事例が、いずれも遠江国内での活動であるという点に注目したい。少なくともこれ以前の横地氏は、将軍の近くで将軍の行動に伴う活動であったが、この時点では将軍とは直接の関連のない地域間紛争の軍事行動という活動になっている。行動を支える背景が将軍であるかないかという相違が存在することになる。このことを横地氏の領主としての性格の変化と考えたい。

横地城の考古学調査の成果は、この変化と即応して横地城が存続していたとしている。この横地氏の変化と横地城の実在の二点の連関を認めてよいと思われる。すなわち、将軍の近辺を活動の場としていた横地氏が在地へと活動の場を転換し、その活動の基点として横地城を築城し維持したと考えることである。都市に居住する領主から在地の領主への転換を考えてよいのではなかろうか。この変化と横地城築城は密接に関連していると考えたい。

さらに蛇足ながら付け加えておきたい。先の『親元日記』の書状の横地氏は「鶴寿」という幼名を名乗っていた。狩野氏討伐にあたっては幼主「鶴寿」を支える構造が横地家の内部にあったことになる。またこれに先立つ史料である「永享以来御番帳」の横地氏の仮名は「孫太郎」であった。ここでも官途を名乗っていないことから、横地家の当主は若い人物である可能性がある。

そして両者ともに惣領とするならばこの間に世代交代があったことになる。世代交代と時期を同じくして京都から遠江国横地への活動地の移転があったことになる。大きな転換点にあって横地家当主の指導力は期待できるものではなかっただろう。

少なくとも「鶴寿」の頃には横地家内に幼主を支える構造があったことは間違いないであろう。時代的に考えて、整ったピラミッド構造をとるという家の構造よりは、一族一揆により支えられていた家の構造であると考えの方が可能性が高いと思われる。明確な一揆契状を交わしたものではないとしても、横地氏の近親者による集団指導体制という家の構造が考えられるのである。

そして、もし横地家の家の構造がこのようであるならば、横地城の構造に一定の説明が可能となるのである。すなわち山城が独立する三つのピークを持ち、総体として横地城を構成するという縄張りである。横地氏の家の構造があるいは横地城の縄張りに反映されているのではなかろうか。

おわりに

横地氏を巡る文献史料は決して多くない。少ない史料から描かれた横地氏像は以上のようなようであった。要点を記し、概括するならば次のようになる。

- ①横地氏は源姓ではなく、藤原姓であり、東海の大半の諸領主と同様に藤原南家に系譜を引く一族の可能性が有ること。
- ②横地氏は「長」を通字とする一族で、勝間田氏と同族である考えられること。
- ③横地氏は鎌倉・室町両幕府のもとでは将軍の近いところで武芸をもって仕えていたこと。
- ④所領は名字の地を中心に遠江国内に散在していたこと。

⑤15世紀中頃に性格の転換があり、行動の場が都市から在地へと移転する。そしてその動向に即応して横地城を営んだこと。

15世紀中頃の転換を、都市の暴力装置から在地領主への転換と言い得るならば、このことの持つ意味は大きい。この転換を小稿では横地氏の領主としての性格の変化と捉えたい。この性格の変化が自らの基盤の地に横地城を必要としたのであると考えるのは飛躍ではなからう。

-
- (1) 横地城保存会発行。初版は1979年刊。現在は新訂増補版で1989年刊。
 - (2) 私家版（刊行年不詳）。なお小稿の系譜の検討もこの成果に負うところが多々ある。
 - (3) 私家版（1998年）。
 - (4) 大類伸監修（人物往来社刊 1967年）。この段階では遺構については存在についてのみの指摘で、構造の分析には至っていない。おもに横地氏の歴史の叙述に終始している。
 - (5) 児玉幸多・坪井清足監修（新人物往来社刊 1979年）。
 - (6) 静岡県教育委員会文化課編 静岡県文化財調査報告書第23集（1981年）。
 - (7) 小和田哲男監修（郷土出版刊 1994年）。
 - (8) 前掲注（1）書。
 - (9) 『静岡県史 通史編2 中世』（静岡県刊 1998年）32頁。
 - (10) 横地勝則（前掲注（2）書の著者）は、調査のおり、源姓の根拠について疑問を呈された。また津川文一郎『考証のバラード』（前掲注（3）書）も藤原姓であり、源姓とするのは近世の偽系図によるとしている。
 - (11) 仕立ては一紙が縦19.8cm・横93.7cmの紙を12紙貼り継ぐ卷子装。軸は白木で一部破損。二重箱に収納される。内箱は黒塗りで蓋の中央に金泥で「横地系図」と縦書きする。外箱は杉材の合わせ箱。なお以下の系図に関わる叙述は調査の成果による。
 - (12) 群書類従完成会刊（1968年）。
 - (13) 断絶した諸家の系図集。文化六年（1809）成立。
 - (14) 『寛永諸家系図伝 第十二』（続群書類従刊行会刊 1988年）。
 - (15) 『新訂寛政重修諸家譜 第十七』（続群書類従刊行会刊 1965年）。
 - (16) 柳川古文書館分類「系図類7 横地氏系図」。追記はあるものの基本的に一筆で、正徳四年（1714）の記事を最後の年記とする。
 - (17) 柳川古文書館分類「系図類8 系図案」。本書は注（16）系図の写本と思われる。但し注（16）系図の欠紙部分を書きとどめる。追記はあるものの、基本的には一筆で文政五年（1822）を最後の年記とする。
 - (18) 柳川古文書館以外は前掲注（2）書による。
 - (19) 『群書類従 第二十四輯 釈家部』
 - (20) 『静岡県史 通史編2 中世』（静岡県刊 1998年）26～33頁
 - (21) 遠江守任官は『尊卑分脈』で確認できる。なお同系図では「言通」と記されている。
 - (22) 『静岡県史 資料編4 古代』一七六九号。
 - (23) 『国史大系 吾妻鏡』同日条。以下、『吾妻鏡』よりの引用等は本書によるとし、注記を略す。
 - (24) 幕初の段階でも横地長重が登場する。しかし当該の長重は仮名が左衛門次郎となっており、幕初の長重の仮名が太郎であることと相違する。また、後述する弘長三年以降、横地左衛門次郎は師

重と名乗っており、左衛門次郎長重と師重は同一人物と思われる。

- (25)『静岡県史 資料編 5 中世一』一六一八号。
- (26) 国書刊行会刊『参考太平記』巻第十六 「尊氏下向筑紫事」
- (27) 鶴岡八幡宮刊 鶴岡叢書第二輯『鶴岡社務記録』同H条。
- (28)『静岡県史 資料編 6 中世二』一四〇号。
- (29)『静岡県史 資料編 6 中世二』一六三号。
- (30) 国書刊行会刊『参考太平記』巻第三十 「薩埵山合戦 附尊氏兄弟重和陸事」
- (31)『統群書類従』第四百五。
- (32) 原典には「横大路山城守」とある。しかし、近習であると見られ、かつ貞治六年にも「横地山城守」が確認されることから、横地山城守と推定した。
- (33)『大日本史料』
- (34) 日本古典文学大系『太平記 三』第四十 「中殿御会事」。
- (35)『群書類従』第二十六組雑部。以下、花宮三代記の出典は同じ。
- (36)『静岡県史 資料編 6 中世二』八二四号。
- (37)『静岡県史 資料編 6 中世二』八二五号。
- (38)『静岡県史 資料編 6 中世二』一〇四四号。
- (39) 前掲注(19)参照。
- (40)『小山町史 第一巻原始古代中世資料編』五九八号。
- (41)『静岡県史 資料編 6 中世二』一九五五号。
- (42)『群書類従』巻第五百十一。同番帳は福田豊彦『室町幕府と国人一揆』(吉川弘文館刊 1995年)によれば、文安元年(1444)五月～同六年正月の成立とする。
- (43) 群書類従 巻第五百十一。同番帳は福田豊彦(前掲注参照)によれば、宝徳二年(1450)正月～享徳四年(1455)正月の成立とする。
- (44) 将軍に近侍する役。日常的には将軍の警護にあたり、戦時には親衛隊の役を果たしたとされる。前掲注(43)参照。
- (45) 室町幕府の直勤御家人。足利義満から義持の頃に整備され五番に編成された。前掲注(43)参照。
- (46) ⑩のみ例外のように見えるが、この相論も横地氏への御料所の預け置きに端を発しており、預け置きが近習であったことに由来する可能性を含んでいる。
- (47) 越後国の國人色部氏の所領は小泉庄加納といい、後に加納庄と称され、小泉庄から分離して呼ばれるようになる。
- (48)『静岡県史 資料編 6 中世二』六一八号。
- (49) 前掲注(1)参照。
- (50)『静岡県史 資料編 5 中世一』一六一八号。
- (51)『静岡県史 資料編 6 中世二』一〇四四号。
- (52)『静岡県史 資料編 7 中世三』一五四二号。
- (53) 静岡県袋井市豊沢。
- (54) 掛川市西南部に所在した荘園。鎌倉期より存在する。
- (55)『静岡県史 資料編 7 中世三』三七五八号。
- (56)『静岡県史 資料編 7 中世二』一四四号。なお本文書に関連する文書が『静岡県史 資料編 7

中世二』一四〇号である。

(57) 当該期にあつては日常の居館に急遽造作を施し、「城」と称した例がある（拙稿「本拠の展開」（石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社刊 1991）参照）。この横地城もあるいは従来の居館が武装化したものではなかろうか。

(58) 松本方徳前掲書以来、横地城は文明八年に今川義忠に攻められ落城したとされている。横地城の南側の山地には今川義忠の陣所の伝承地も伝わる（ただし、この地を実見したが、狭小な地であり、陣所の遺構もなく、疑問なしとはしない）。

しかし、明確に横地城落城を記す記録はない。加えて『今川記』（『静岡県史 資料編 6 中世二』2631号）には、横地・勝間田両氏は遠江府中にあった「故狩野介か館を城郭にかまへ籠籠、」と記し、今川義忠はこの城館を攻めたと記している。

既に『日本城郭体系』も文明八年横地城落城には慎重な見解を示しており、今後さらに検討が望まれる。

(59) 従来は二重堀切や横堀とも評価できる堀切等の存在から、その後の改修を想定する意見があった。基本的にこの視点は現在も意味を持っている。しかし、私見では改修の年代を16世紀まで積極的に引き下げる根拠がなく、落城時点まで考えることも可能であろうと考えている。

(60) 『静岡県史 資料編 6 中世二』二四九三号

(61) 『静岡県史 資料編 6 中世二』二四九四号。

(62) 在国については『静岡県史 通史編 2 中世』381頁の論及、及び『静岡県史 資料編 6 中世二』二四七〇号による。

(63) 『静岡県史 資料編 6 中世二』二四九六号

(64) 『静岡県史 資料編 6 中世二』二六二六・二八～三二号が関連する一連の史料。

関 口 宏 行

(1) 地勢

牧之原台地が西方に伸ばした支脈の内、牛瀧川に向けて半島状に突出した台地状地形がある。長さ約1.5kmであるが、西半分はやや頂面は平坦部があるものの、東半分は様相が一変し起伏のある峻険で複雑な地形を形成している。従って遠景は台地に映るものの、現地に立つと高低差や地形の変化が諸所に認められる。

この台地の南側山麓は、奥横地川が東から西に向って流れ浸蝕谷を形成している。又、北側方面は、現在牛瀧川が永田地帯を貫流しているものの、かつては川が蛇行し、その流域は湿地帯となっていたようである。しかも台地状地形の北面は、南面と大きく相連し、大小の浸蝕谷が無数に入り込んでいる。このため北面の地形はかなり複雑である。つまり、台地状地形から牛瀧川に向かい、大小の支尾根が派生したようになっている。

城は、台地状地形のうち東半分の地域に築城され、ほぼ東西400m、南北460mの範囲に城郭遺構を現在もなお確認することができる。城域は、大きく4区画に区分することができる。西側の峯を利用した「西の城」、南側の「大手曲輪と千畳敷」、千畳敷の東隣に連なる「中の城」、東側の峯を活用した「東の城」である。特に「西の城」・「中の城」・「東の城」は、尾根上の三つの頂部を巧みに活用した築城法であるが、全体としては、完全な連郭式縄張ではない。一城分郭型の型式である。横地城は、室町期の遠江国有力國人横地氏の本城として築城された山城である。



1. 西の城遠景 (南より)



2. 東の城・中の城遠景 (南より)

(2) 東の城

城域の東の峯に構えられた通称「東の城」は、標高101mに立地し、三つの峯の中では、最高地点に位置する。平場の規模や配置、構築法等から「本城」部分と推定される平場群である。標高101mの頂部を中心として、平場は、主として、北方に延びる尾根上に構えられている。東方は、一条の大堀切が存在するだけで、尾根は続くものの、明確な城郭遺構は発見されていないため、この大堀切が東限であろうと考えられる。

東の城は、標高101mの南側部分と、大堀切を隔てた北側部分の2区画より構成されている。この内高所にある南側部分が、東の城の中核部と考えられ、東方の尾根続きを除けば、三方に小尾根を派



第7図 横地城縄張図（作図 関口宏行）

生させ、北側の主尾根から、更に平場群を接続させている。

東の城の平場配置は、同心円状でなく、主として西側より北、そして東側に扇形に階段状に設けられており、戦国城郭に比較してどの平場・削平地とも小規模であることが特徴と云えよう。平場「1・3」が最高地所にある、長さ約30m、幅約10mの略長方形となっている。この平場は、南端部から北側にかけてL字形に、約30m程の低土塁（高さ約1m、底幅1～3m）が巡っている。L字形ではあるが、やや中より平場内に向けて、長さ約2m余の突出部（写真3）があり、これが平場内を仕切る仕切土塁の残片と考えるかどうかだが、当初の形状や規模が現在明確でないだけに即断はできないが、この部分で地表面にわずかながら段差が認められるので、何らかの構築意図があったと考えられる。（写真4）平場「1・3」の虎口は、はっきりした遺構はないものの、下方との位置関係から東縁の北側と推定される。現在、西側より外縁部から平場内に通じる小径は、後世の造成であろう。



3. 東の城 平場1・3土塁（東より）



4. 東の城 平場1・3（西より）

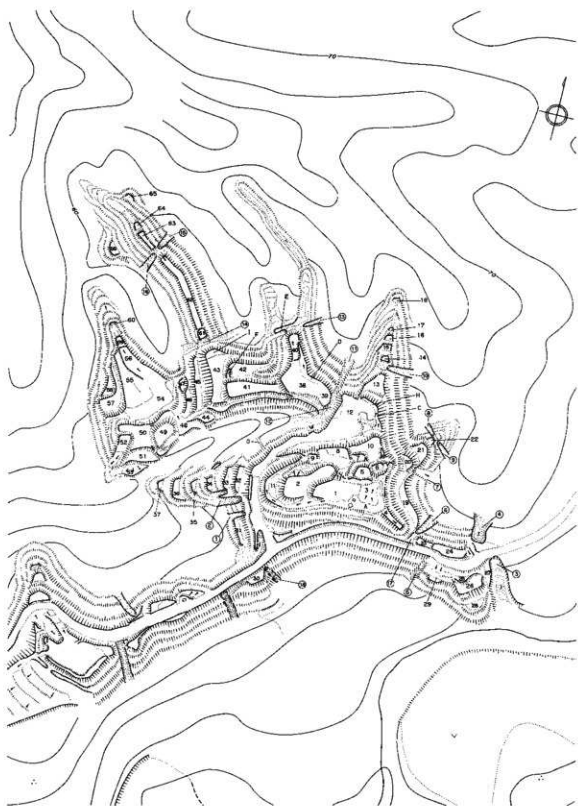
平場「1・3」の西側には、段差約2.6mで、平場「2」がある。西側（幅10m）から北側に回り込み、平場「1・3」の下までやや達しているが、直接の連絡路はない。平場「2」の下方西側には、緩傾斜地が付属しているが、平場として機能させたかどうか、北側に段差がなく明確でない。

平場「1・3」の北側下には、小規模な平場「5」と「6」が存在するが、当初は一面と考えられる。「7」は崩落部分であろう。「8」は、削平地であり平場「12」と上部の平場の中間に位置し、補助的な防衛として備えたものでであろう。「9」の平場も小規模すぎて用途は不明である。

削平地「10」は、不整形な形状ではあるが、東端部に土塁が残存している。長さ約4m、上面幅約1m余であり、上方の通路と、外縁部の補強を兼ねたものでであろう。このような構築城は、菊川町内の中世城郭である堀田城（菊川町西方字堀田）でも認められており、築城者や築城年代を推定する素材となっている。

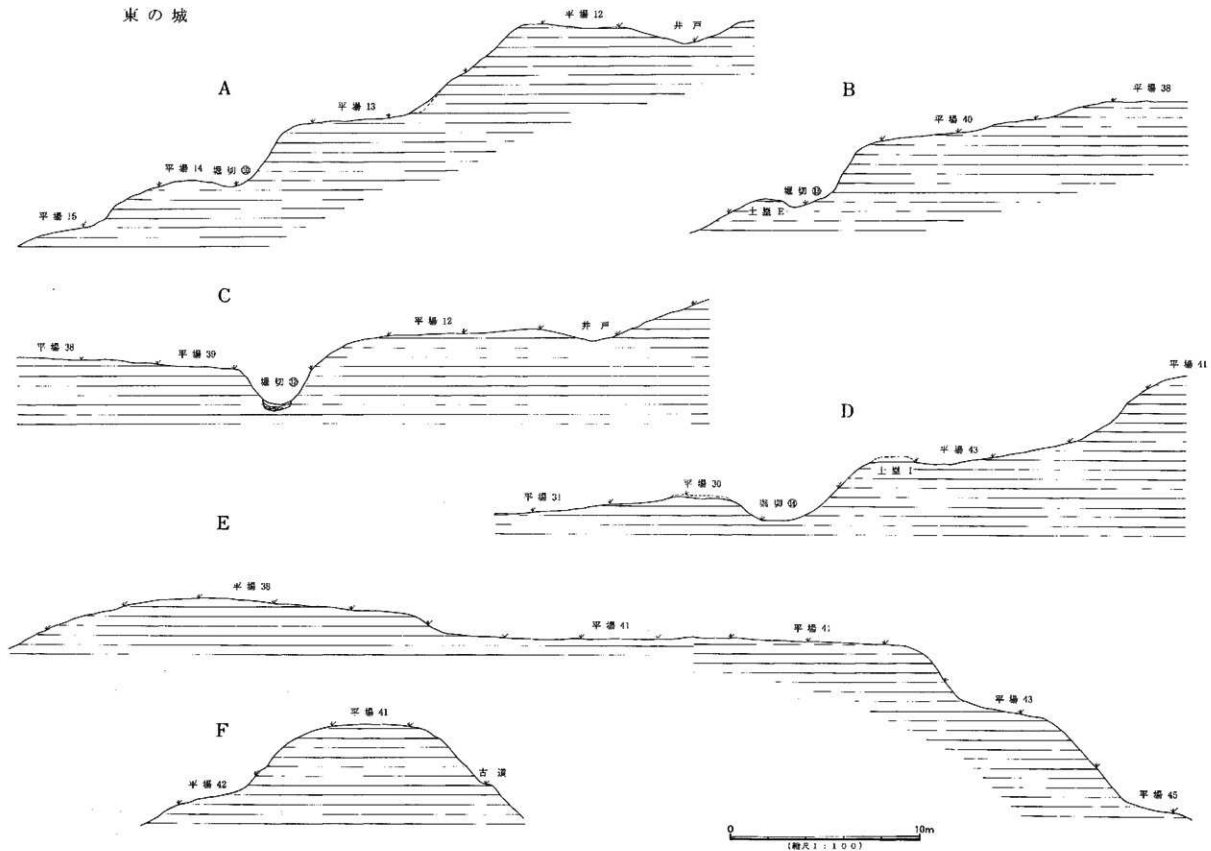
削平地「6」の約3m余の下方に位置する平場は、上方の平場や削平地と異なり、面積も広く、北東への突出部や西方への広がり方が認められ、井戸状の遺構も認められている。平場「12」の東端に、板状の土塁が長さ約5m、上面幅が1m余残存している。これも、削平地「10」の土塁と同様に、通路と兼用したものでであろう。この土塁は、高さを減じて、北側へ10m余延長し、尾根からの侵入を防衛している。

平場「12」と下方の尾根を結ぶ虎口が、小規模ではあるが、わずかに残存している。下方の削平地は、「13」・「14」・「15」・「16」・「17」・「18」の6段が段状（断面図A）に構築され、ほぼ台形である。ただ「14」の背後、即ち削平地「13」の下方に一条の堀切（深さ2.5m、底幅2m余）



第8図 東の城 縄張り図

東の城



第9図 東の城横断面図

を設けた。この堀切は、東方のみの斜面を堅堀とした。西方には堅堀が認められず片面だけである。三角状をなす削平地「13」は、削平地としては比較的大面積であるため、ここを突破されると、直接主郭下に達するために、防衛を強化したものであろう。

縄張図を見ると、平場「13」は、大堀切（写真5・7）側の隅を1ヶ所突出させていることに気付く。これは、削平地「13」への横矢掛けや対岸の北斜面に侵入した敵を俯射するため、意図的に設けたものであろう。又、「大堀切」側の外縁部に、現在半円状に浅い窪地を成しているが、対岸に架設された木橋の構築を推定させるものではないか。但し、対岸の外縁部に現在窪地は認められない。

平場「12」の西方へ延びる部分は、現在幅3m余の農道となっているが、ここには城の存立期には幅の狭い犬走りが存在していたと考えられる。これは谷からの侵入に備えて西側の削平地群との連絡路として使用された可能性が強いからである。平場「12」の北側外縁線を西に辿ると、途中で一部が突出している。これも意図的に拡張し、俯射の足場としたのではないか。又、この部分から北側斜面をみると、やや土盛り状の部分が降下していることを認めることができる。長さ約10m、底幅約3m、高さ0.8m、上面幅1.5m余の規模である。地表観察では、盛り上りか、削り残しか、はっきりしないが、他の斜面の様相と異なるため、城郭遺構の一部と判断した。戦国期からその末期にかけて、活用された堅土塁の祖形ではないかと推定している。谷が深いため、無用とも思えるのだが、この谷を上ると大堀切に達する（写真7）ために、斜面と谷の防衛のため、この堅土塁（写真8）を設けたものではないか。機地城内で堅土塁の存在は、この1ヶ所のみであるため貴重な遺構である。仮に考古学的手法で堅土塁と確認されたならば、室町期から戦国期初頭にかけて構築された1つの指標となり得る。



5. 東の城 平場12（平場38より）



6. 東の城 平場12（西より）



7. 東の城 堀切②（西より）



8. 東の城 堅土塁（東より）

中の城から東の城へ向かうと、左側に下よりの通路上の窪地がある。この窪地から農道を通ると左側に土塁の残欠状(写真9)のものが認められる。この細長い地形は、本来は土塁でなく緩斜面「11」の下方に構えられた台形状の削平地が農道の開削によって、断ち切られた名残りである。この方面には小尾根が西方に突出し、6段余の削平地「32~37」が階段状(写真10)に構えられている。急斜面での削平地であるため、必要もないと考えられるが、主体部への最接近を阻止するために6段余も設け、強力な防衛施設としたものだろう。



9. 東の城 平場11・32・33(南より)

地形に左右されて、規模や形状は一定ではない。この段状削平地に隣接して、二本の堅堀(①・②、写真11・12)にが設けられ、脇から削平地に移動する敵を捕獲できるようにしたものであろう。南側の堅堀に接して狭長の削平地(幅約2m、長さ12m余)「31」が(写真13)ある。

農道の南下方に小規模な台形状の削平地「30」がある。現在は、農道の造成により削平地は下方となってしまったが、城の存立期には中の城との間に堀切が存在し、しかも小さな峯を形成していたのではないかと推定される。このために、東の城への小径が、この削平地の脇を通過して、城の看板の向かい側の窪地に出たものではないか。従ってこの削平地自体が木戸口的な機能を有していたと考え



10. 東の城 平場32~34(平場11より)



11. 東の城 堅堀①・②(南より)



12. 東の城 堅堀②(東より)



13. 東の城 平場31(南より)

られる。この削平地の東側に幅3m余の堅堀(⑯)が1条設けられている。

平場「1・3」の南東隅から、細尾根(14)が徐々に降下すると、小規模な堀切(⑮、写真15)に出る。現在、深さは0.8m、上面幅約5mである。農道が開削してあるため、全体の形状は不明確であるが、深さが防御としては弱いようにも考えられるが、急斜面の地形を利用したため、あまり深さを必要としなかったかもしれない。

この堀切(写真14)と東側の大堀切によって挟まれた部分の平場群は、尾根上と南斜面に存在するが、東方の守りとして重要であった。尾根上は2つの削平地「23」と「24」(写真14・16)によって構成されているが、完全なる削平地ではない。南斜面には、大小4ヶ所の削平地「25～29」が存在し、この方面からの敵に対処していた。最大の削平地は「26」であり、幅5m余、長さ12m余となっており、小削平地「29」と小径によって接続していたらしい。

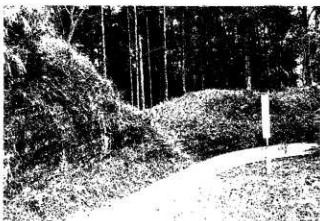
大堀切は、農道によってカットされて存在しないが、両側の堅堀(③と④)が残存する。幅7m余で、南側は自然や谷状地形に落ち込んでおり、北側も谷に落下させている。堀切の幅は推定で5～7m余とされる。



17. 東の城 堅堀③(北より)



14. 東の城 堅堀⑥・⑪、平場23・24(平場4より)



15. 東の城 堅堀⑪(南より)



16. 東の城 堅堀④平場24(東より)

東の城で北区と南区を区分する大堀切(⑬、断面図C)は、現在幅5m余、長さは約8m、平場「12」より深さ約3m、平場「39」よりは約2mの深さを示す。この大堀切は北側で堅堀となり谷底に降下しているが、西側では堅堀を設けず、そのまま谷に連なっている。後世の埋没で堀の断面形状は、栗研堀が箱堀のいずれかであろう。北区への小径は、大堀切の堀底を通過して、平場「38」や「41」の南斜面に造成されたものが、更に奥へ続いているが、この小径は後世の造成であろう。

平場「39・38・40」は、一体化したものであり、自然地形を活用したため、不整形でありカットの度合も不十分である。特徴は大堀切側より土塁が、外縁部に沿って北側に約25m余残存している。し



18. 東の城 平場38~40 (平場12より)



19. 東の城 堀切⑬ (西より)

かし、崩壊が進み形状も高さも変化している。この平場の北端部(写真18)には小規模な堀切(写真19、断面図B)が認められる。深さ約3m、幅3m余であり、掘り下げた土を盛り対岸部に土塁を築いている。堀切の西端部(13)は、堅堀(幅2m余)として谷に降下させている。堀切を越えて二筋の小尾根が連結しているものの、小段は認められないため、直接の防御地点としてはここで止めようとしたために、堀切を入れたものと考えられる。

平場「38」の西側には、狭長の平場「41」とその北下方に平場「42」(断面図F)と、西端に二段の帯平場(断面図E)が設けられている。平場「41」は、曲輪「38」より約1mの段差下にあり、最大幅7m、長さ約24mの狭長な平場(写真20)である。この平場の先端からは、下方に展開する小平場群や平場、尾根をも見下すことのできる最適な位置である。このため、平場「38」の補助的防御地と物見と兼ねた機能を有していたと考えられる。平場「41」には、土塁などの施設は認められない。



20. 東の城 平場41 (平場39より)

平場「42」は、平場「41」の北下段に位置し、幅7m余、長さ約18mの不整形な平場である。東端では、埋没部分があるため、上方との平場を結ぶ小径があったかどうかは不明である。ただ、この平場の特徴は、西端に小規模な土塁(F、写真21)を付属させていることである。しかも、外縁線の長さと同一の長さでなく、途中で終わっていることは平場「43」と何らかの関係があるとみてよいだろう。虎口部分とも思えないが、平場「43」への斜面は西外方に比較し緩斜面となっている。



21. 東の城 平場42・43、土塁下(東より)

平場「43」は、北端部分に低土塁(写真22)を設け、外縁線の幅は約10mでカーブを描く。平場としての長さは約23mで、南端での幅は4m余となり、東に喰い込み部分がある。平場「43」は、平場「41」

より約3m下方にある。平場「43」の北側には、堀切を1条（断面図D）構え、両端を堅堀している。

帯平場「45」は長さ23m、幅4m余で、南端で平場「43」の外方より延びた小径に接続している。平場の「47」と帯平場状の「46」は、現在段違いの位置にあるが、元は同一平面上にあったものが、崩壊により「47」の位置に落ち込んだ可能性もある。

平場「44」は、小径の下方に位置し谷を見降ろす場所となるが、現在は完全な水平面ではない。谷の防御の1地点であろうか。

平場「44」より西側は、平場としての整形が不十分な地域であり、二つの盛り上がり部分とその間は窪地となり、あたかも幅広の堀切状にも見える。その南端に半円形の平場「51」が構えられている。「49」は、平場というよりはややマウンド状となり「52」と対している。「52」は、土塁状をなしているが、他の部分と比較しても自然地形を残している箇所もあり、先端部の防御構造としては不自然さを残すが、この先端が急激に谷に落ち込んでいることを考えれば、必要最小限の整形でよかったのかも知れない。とにかく加工度の少ない部分である。

平場「48」より斜面を下ると（段差5.8m）、やや幅広の平場「54」・「55」に出る。「55」と「54」は一區画と考えられるものの、地形の関係からか0.5～1mの段差がある。しかし、東の城の中では、空間地としての形状は一定でないが居住空間を思わせるものがあり、何等かの施設があつたものと推定される。トレンチ調査で、スラグや釘、刀子、鉄鐵などの金属製品が出土している。「55」の西下方には、二段の削平地「57」と「58」が設置され浸蝕谷の防御として機能した。



22. 東の城 平場43、土塁Ⅰ（平場62より）



23. 東の城 堀切⑬、⑭（西より）



25. 東の城 堀切⑬・⑭（北より）



24. 東の城 平場61～66（南より）

平場「43」の北側には、一条の堀切が構築されている。土塁上より深さ2.8m、上端幅で5.5mを測定できる。堀切の両端は堅堀（写真23）として谷に落としている。

堀切の対岸は、やや方形（写真24）の部分があり、何らかの施設があったことも推定される。この方形部分からは、幅4m余の細尾根が北へ約40m余延びており、この間に堀切や堅堀等の施設はない。40m地点では尾根が一端切れ、ここに小規模な堀切（写真25）が設けられている。堀切の深さは約1.3m、堀底幅1.8mで、上面幅は5m余ある。堀切の両側は堅堀（15・16）となっている。この先端の尾根上に小規模な平場が2ヶ所あり、左右の斜面には2ヶ所の台形状の削平地（65・66）が構築されている。城郭遺構はここで最終となっている。



26. 東の城 平場66（南より）

（3）中の城

西の城と東の城の中間地点に峯を利用して構築された平場群の1つである。標高90mを示し、三つの城の中では標高差が西の城より5m、東の城より10m余低い位置にある。城域は、東の城に向かう尾根上部分と土塁を伴う頂面のやや広い平場の二区画より構成されている。中心的な平場は「1」であり、堀切を隔てて東側の小平場群と、北側の小尾根の削平地より構成される。西の城や東の城に比較し、規模も小さく構造も単純で城と呼称することが妥当であるとは思わないが、機能的には東の城の馬出し的



27. 中の城 虎口付近と土塁B（南より）

な機能を有したものだだろう。中の城全体は、尾根の中心部分を農道が貫通したため、規模や形状を著しく損っていることから、今日その形態等を正しく捉えることができない。

中心的な平場は「1」であり、頂部は菱形状に残存し「くの字形」に低土塁（写真27）に低土塁（写真27）が南端から方にかけて約30m余残る。この土塁が全周していたかどうかは不明であるが、東端の突出部付近には土塁の基部分のものが認められることから、全周の可能性もある。

土塁の幅は約3.5m、高さ約1m、上面幅1.6mで小規模である。土塁線の西端は、下からの小径が入ってくる所で本来の開口部、即ち虎口（写真28）と推定されるところである。平場の西半分は、土取りのため破壊（写真29）を受け形態は不明である。道の対岸の小尾根に3段の削平地が残されている。



28. 中の城 虎口周辺（北より）

「3」は略四角形で、横幅9m、奥行4mで、この3m下方に小削平地「4」が残存する。台形状で幅5m、奥行4m、更に下方に幅4m、奥行1mの

削平地が存在する。中の城の西斜面は、土取りの跡（写真29）で平場は全く認められないが、道の下方に数段の削平地が残存するものの、埋没部分もあり形態や規模が判然としない。

土塁の南外方に浅い溝状（断面図A）が東西に走り、東端にてやや北よりに落ち込んでいる。現在、深さ0.5m、堀底幅1.2m、土塁上からは約3m下に位置する。西側の行先は、土取りのため不明である。全体として一部が埋まっているものの約30m余現存する。この溝が本来、城に伴うものであり横堀と判断されるなら、室町末期の中世山城の使用例として県下では古い時期に属するものである。横堀と排水溝を兼用させていた可能性も強い。室町期の国人領主クラスの本城があまり残存していないだけに貴重な城郭遺構と考えられる。



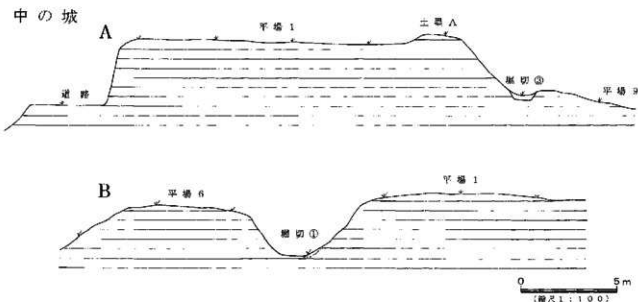
30. 中の城 堀切③（東より）



29. 中の城 平場①（北より）



31. 中の城 堀切①（東より）



第10図 中の城 横断面図



第11図 中の城 周辺縄張り図



32. 中の城 堀切①（西より）



33. 中の城 平場 8（東より）

平場「1」の東側には堀切（断面図B）が存在したが、縄張図にあるように農道のため全容は明確ではない。南側に堅堀（写真31）部分（幅約3m）が認められる。この東側部分は尾根を階段上に削平しており、平場「1」側に1段、中に1段、東の城側に1段の3区画からなっていたようである。平場に土塁などの施設はなかったと考えられる。北側の斜面上に1条の堅堀（幅約3m）が設けられているが、平場「12」側の堅堀とは離れている。また、削平地8（写真33）の反対側にも堀切5の存在が推定され、幅5m余と考えられる。従って、中の城は削平地30の間に2条の堀切1を構えて防御したこととなる。

但し、千疊敷側には現在、堀切は存在していない。これは尾根幅が広がっている状態にあり、木戸や柵によって区分していたことも考えられる。

（4）千疊敷

従来、「千疊敷」（写真34）の呼称で親しまれてきており、西の城の南側に位置し中の城とを結ぶ地点にある。北側に土盛りをされた農道があり、全体は農道の南側に位置している。東西約90m、南北16～30m余であるが、形状としては不整形であり全体が同一の水平面ではない。

西の城の南側部分は緩傾斜地であり、東側部分はほぼ平坦地である。縄張図にあるように全体の形状が不自然であり、防御遺構（土塁、空堀、虎口遺構等）の痕跡もない。西の城の大土塁外方の緩斜面地（16）が面積が広く、それに



34. 千疊敷（東より）

接続して千疊敷の部分、尾根の広い部分が占める面積が多く、城の縄張上からも不適切な立地となっており、防御がしにくい構造となっている。農道の北側に谷が廻り、大手曲輪の方向からも斜面が接近していること等から、この「千疊敷」は、後世何等かの理由によって尾根の拡幅や埋土が大規模にされた結果ではないか。大手曲輪より千疊敷に入るルートや虎口の推定が困難な状況にある。

千疊敷は、従来横地城の居住空間地として推定されてきたが、平成8年度に実施された試掘調査でも3ヶ所のトレンチからは須恵器や土師器1点が出土したのみであった。即ち、城内の生活を示すような中世陶磁器片は出土しなかったのである。従って、千疊敷を居住空間としてきた考えは否定され

るとしてよいであろう。

後世の改変により、千畳敷部分の地形推定は容易ではないが、中の城や西の城の関連と考えるならば千畳敷の外縁線の最も低い込んだ箇所、2ヶ所に堀切の存在を推定してもよいであろう。なお、千畳敷の外縁部から大手曲輪に向かう一直線状の縦形の窪地は、形状や位置等から自然の沢でなく堅堀の名残りとも考えられる。

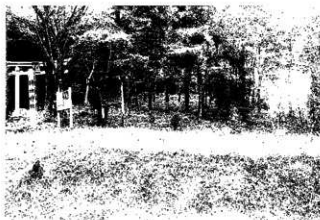
(5) 大手曲輪

横地城全体の縄張を考える時、人口や揃手口の位置がどこになるのか、西の城の西端部や東の城の東端のみにとらわれ、これまで把握できなかった。それは現地での丹念で継続的な遺構調査がされていなかったことや、精緻な縄張図が作成されなかったことも起因している。

平成7年9月に横地城跡総合調査委員会が発足したことを契機に、横地城の縄張調査についても従来の城域をこえて調査対象を拡大することになった。即ち、東の城や西の城の北側の細尾根の1本1本まで精査することや、東の城の尾根続きの調査、そして千畳敷の南側の位置する茶畑の平坦部の調査等まで含んでいた。調査の結果、大きな成果となったのは南側の茶畑が平場として造成されていたことや、斜面上に堅堀を伴う城道が確認されたことである。

山裾に開削された農道が、山道と更に奥へ入る道との分岐点がある。この山道の右側の斜面は幅2～3m余の板状であるが、20m余登った箇所(23)は土橋状の施設と両側に堅堀を構えていたのである。堅堀は幅2m余で谷に降下させており、土橋部分は平坦でなくやや断面は弧状を描く。ルートは、この土橋から緩いカーブを作りながら低土塁状のある平坦面入口に達する。登りきると奥行60m、幅12～16m余の平坦地がある。地元の聞き取り調査によっても、元々平らであったことや、土盛り状のものもなく茶畑にそのまましたとの情報を得た。内部に段差はないものの、平場しかも人手曲輪と判断してよいであろう。西の城から約140m余、東の城から250m余の距離にあるが、地形上の制約もあるが大手曲輪との距離を置くことによって、途中にて敵の侵入を阻止しようとする意図もあったであろう。

大手曲輪の南側は、急崖であるが北側は農道の開削や畑の造成により形状や地形は不明だが、斜面地との距離があまりないため、面積的にはあまり移動していないと思う。大手曲輪から千畳敷に向かう幅4m余の山道は、後世に造成された道で城のルートとは関係ない。



35. 西の城 平場5 (南より)



36. 千畳敷 堀切① (南より)

(6) 西の城

横地城の西側を防御するために築城された平場群である。全体の形状は木の枝が延びたようであり、北側に向けての細尾根が目立つ。主軸から派生した小尾根は7本余あり、その全てに段状の小削平地が設けられており、北側からの侵入に対して厳重な防備をしていたことが判明する。

西の城は東の城に対して、ほぼ直角に近い位置関係にあり、西方に対して厚い城壁を形成しているかのようである。

主体部の平場(写真37・38)は「1・2」であり、これは一体化しており長さ43m余、幅は6m~15m余ある。方形ではなく南北で楕圓を広げ、西側の外縁線は直線状である。山頂に横地神社が建立されており、そのため西の城は参道が造成され後世の改変を受けている。主体部の「2」の箇所は松の根が露頭した状態で、縦軸に段(写真37)が形成され南に13m余延びているが、幅広の増状のものを形成した可能性があるが、土の崩壊で、形状は明確ではない。「1」の南下方に設置された平場「3・4」は、1つの平場であり斜面を削土して南側の拡張した結果、不整形な形状となったが堀切の防御をカバーするため東方へ突出させ、しかも奥の削平地との通路を確保した。

平場「3・4」は、西側に低土塁(F)を設け、南に延ばしていた痕跡がある。しかし、外縁線をじっくり地表観察すると東方からの線と参道付近で喰い違いがあり、しかも下の段との小径が残存していたことから、ここを虎口と推定している。従って、低土塁が左右から延びて開口部(虎口)を形成していたと考えられる。南の外縁部に残るわずかな土盛り(長さ2m、幅1m余)は土塁の名残りであろう。

平場「3・4」は西側が高く東側が低いことから、2段の形成と区画が考えられる。なお、東側斜面に大堀切に沿って土塁(E)が認められる。又、東側斜面には一条の堅堀(幅2m余、6)が構えられ、堀切から斜面へ回り込むことを阻止している。

平場「3・4」の南側下方の大堀切(写真40)は、現在完全に尾根を切断しておらず、参道付近で止まっている。平場「18」は、堀切の跡はないことから貫通せず、小規模な曲輪として大土塁に接



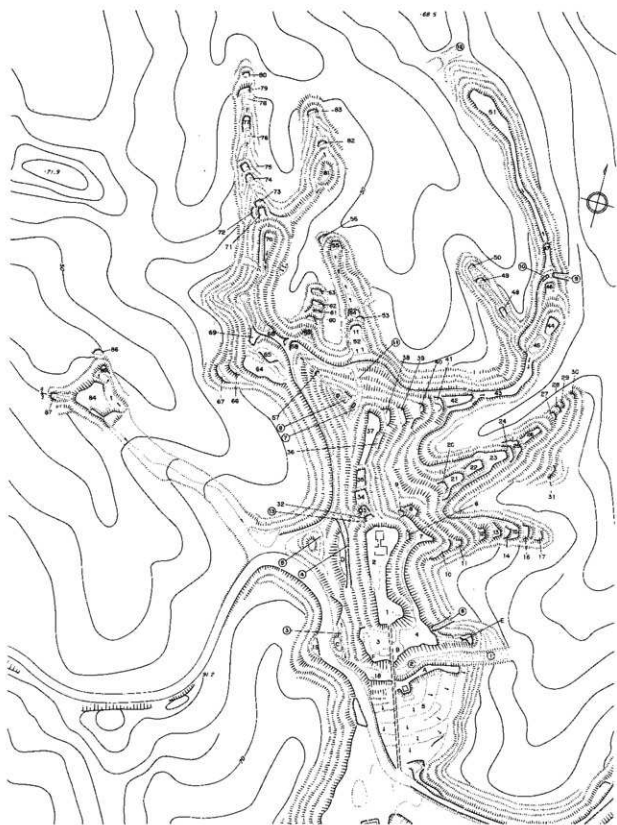
37. 西の城 平場1・2 (南より)



38. 西の城 平場1 (北より)

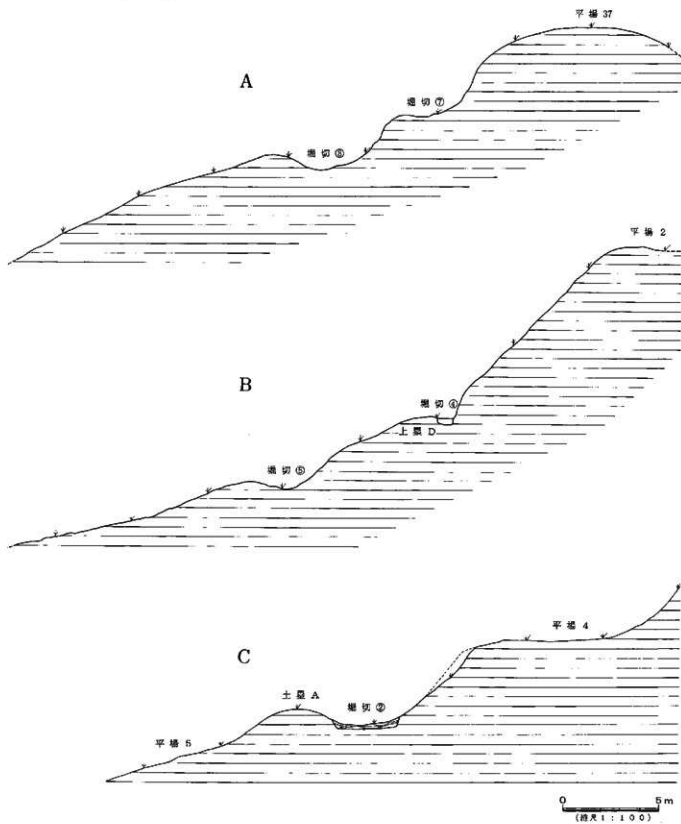


39. 西の城 平場4、土塁B (平場3より)



第12図 西の城 縄張図

西の城



第13図 西の城横断面図

近する敵に横矢を掛けるためと通路としての機能を持たせたものであろう。「18」の外縁線と大土塁の外縁線が喰い違い（写真41）を見せているところからも上塁の延長が直角に近い形で、平場「18」に接続していたのであろう。

大堀切（断面図C）は、上端部で約6m余、堀底1.8mあり、平場「3・4」からは約6.5m余となっている。また、大堀切の形状は一直線状でなく緩い「くの字形」となって平場「3・4」の南縁部にほぼ平行となっている。土塁の上面幅は、約2m、基底幅は約5m余ある。大土塁の一部が参道付近で突出しているのは、後世構造物を設置したために改変されたものである。現在上塁の一部がへこみ、あたかも虎口のように思えるが、これは横地神社への参道に向かうための小径が通ったために、西の城へのルートのようになったと考えられる。大土塁の南側は緩斜面であり農道迄続く。幅広の緩斜面にはテラス状の平場を認めないが、あるいは埋没している可能性もある。なお、東側にてやや斜面ながらも細長い部分が認められるが、用途は不明である。

大堀切と大土塁（長さ約32m）はセットになって構築されたものであり、情地城内では最大の規模をもつ。東の城にも堀切はあるものの、狭い尾根幅をカットしたものであり、これなどの尾根幅をカットするのはかなりの緊張状態に迫られての改修であったと思われる。

築城期としては最末期の即ち、今川氏との対決を想定しての文明8年（1476）に近い頃ではないか。城内では特異な規模と工法による改修である。

平場「3・4」の西側には2条の構えが構えられており、西方から斜面や尾根を伝わる敵に構えた。2条の横堀とも幅2m余で浅いため、特に下方の横堀（写真43）は、通路として使用された可能性も



40. 西の城 堀切②（西より）



41. 西の城 平場3・4・18（南より）



42. 西の城 平場18（西より）



43. 西の城 土塁C、横堀③（東より）

ある。下方は長さ約12m、上方の横堀は約32mにわたり確認されており、32mの両端はカーブをさせて斜面に落としている。

平場「1・2」の東下方には2段の削平地（6・7）に続き、更に下方に7段の小削平地を構えている。背後に続く尾根上には、5段の削平地（32・33・34・35・37）を階段式に設けて防壁している。細尾根上であるため、平場として広く面積を確保できなかったと思うが、特に「37」では下方に展開する小削平地群を見下ろすことが可能であり、北方の物見として最適の地である。「37」の規模は、長さ23m、幅3～6mである。「37」からは2つに尾根が分岐し、右側は150m以上起伏のある細尾根が延び、要所に削平地が設けられている。途中、小規模な土橋と共に、竃（9・10）が設置されている。平場「1・2」の西側斜面には、2本の空堀（横堀と堀切）を設けて（断面図A）西方の防壁とした。

平場「37」の左側は極端な細尾根（断面図B）となり、歩行も容易でないのに2条の堀切（7・8、写真47）がある。執拗なほどの防壁である。この尾根を下ると、削平地（64・65）に達する。他の削平地に比較して若干広いために、小屋掛けのためか何等かの施設の存在が考えられる箇所である。この付近や北側にも細尾根は延び、小削平地を設けて北側からの侵入に備えている。

なお、西の城の西下方に尾根上から農道が通っているが、この方面に1ヶ所堀切の存在が比定される。細尾根とはいえ、柵や木戸では容易に突破される可能性があり、東の城の東方に大堀切が存在したように、西の城の外方に大堀切を想定してもよいであろう。但し、その位置は現在特定できないものの、西の城西側の農道がカーブする辺りと想定している。



44. 西の城 平場6～17（南より）



45. 西の城 平場20～25（北より）



46. 西の城 堀切⑤周辺（南より）



47. 西の城 堀切⑦・⑧（南より）

（7）横地城の縄張の特徴

- ①尾根上に築城された室町期の大規模な山城である。
- ②縄張形式は、連郭式と梯郭式の併用である。
- ③平場構成は、西の城、中の城、大手曲輪・東の城の四群から構成されている。
- ④各平場は、地形の制約を受けて不整形であり方形ではない。狭少な面積が大部分を占める。平場は求心的でなく、派生する細尾根上に精築されている。
- ⑤尾根は先端部まで削平地が認められ、連続する段条の小削平地によって防御されている。
- ⑥平場の多くは北側に配置されており、南側は崖状の地形を巧みに活用しており、南側の谷に下る尾根を城へのルートとして活用し大手曲輪を配置した。
- ⑦平場や削平地は、意図的に段差を設けている。
- ⑧堀切、切岸、堰堀、段状削平地の多用が目立つ。特に尾根に堀切を多く配置していることは、独立性を高く防御を容易にしようとする構想が想定される。
- ⑨土塁は平場を全周しておらず、一方向のみ（外方）に認められ低土塁である。
- ⑩上橋、横堀の活用が認められる。
- ⑪各平場群は同一の構築でなく、時期的な差が認められる。
- ⑫室町期の山城として、完成度の高い大規模な中世城郭である。

- 参考文献
- ・『静岡県の中世城館跡』1981年 静岡県教育委員会
 - ・中世城郭研究
 - ・宇津山城址確認調査報告書…湖西市役所
 - ・千頭峯城跡……………三ヶ日町教育委員会
 - ・十王山砦跡発掘調査報告書
 - ・日本城郭大系九

（8）勝間田城及び殿谷城との縄張の比較

○勝間田城（静岡県榛原郡榛原町勝間田字小山段）

室町期の国人領主である勝間田氏の本城である。14世紀頃の築城形態を今日に伝えている中世城郭である。

山輪配置は、本曲輪を最高地所に置き、階段状に1方向に曲輪を重ねていく連郭式型式を活用している。本曲輪に接続する曲輪群は、面積も小さく、段差もつけているが少ない。低土塁を設けているが、全周しておらず一方向のみである。尾根幅を広げたところに、二の曲輪・三の曲輪・西三の曲輪を設けている。

本曲輪は、前後左右にそれぞれ南曲輪、北尾根曲輪、東尾根曲輪、腰曲輪等により防御させているのである。連郭式とはいえ、求心性の高い縄張配置である。

堀切や切岸、堰堀の多様化は、横地城と共通性があり、曲輪群の間に必ず堀切を設ける点も共通点である。

横地城の選地が複雑で起伏のある地形をとったにせよ、東の城、中の城、西の城と三つの峰にそれぞれ築城し、一城分郭型式となったのは、横地氏の権力構造を反映したものではないだろうか。仮定として、当主が東の城、門衆が中の城や西の城の防備をしたことも考えられる。あるいは重臣クラスの家臣が入城していたのか。今後の研究課題の1つでもある。

なお、勝間田城は過去の発掘により、二の曲輪、三の曲輪が居住空間地として活用され、山城生活を物語る多くの遺物が出土している。本山輪と比較して、二の曲輪、三の曲輪は10倍以上の面積を有していることが縄張図から判明している。

参考文献 発掘調査概報 勝間田城跡Ⅰ～Ⅵ

○殿谷城（静岡県掛川市本郷字中殿谷）

殿谷地区にある標高140m余の山頂とその一帯に築城された山城で、室町期の遠江国の有力国人衆原氏の本城である。現在は、ゴルフ場の造成で消滅している。

山頂に本山輪を構築し、四方に派生する尾根上にも多くの曲輪を設けて本山輪を防御した典型的な求心的配置をとっている。連郭式山城に属しており、特徴は本山輪が城内の諸曲輪に比較して面積が著しく大きくことが目立つ。過去の部分発掘に於て、生活用品が多く出土しており籠城に備えた山上生活の可能性を示している。本山輪の小さい横地城や勝間田城と大きく相違する点である。

参考文献 殿谷城址他遺跡発掘調査報告書

（9）まとめ

横地城は、全体の縄張調査を実施し、縄張図を作成した。その結果、戦国期（16C頃）の改修を受けておらず、室町期の築城形態が残存されていることが判明した。

戦国期になると、居館の背後の丘陵や山頂部に居城を築いて、山麓に根小屋を造成する根小屋式山城が急速に発達するが、横地城の場合は、根小屋式山城に移行しない、古いタイプの形態を留めている好例である。痩せ尾根を活用し堀切を入れて平場を区分していく方法はこの時期の特徴でもある。平場を階段式に構えてはいるが、整形が不十分な箇所が多く、いずれも面積が小さい。虎門は、枡形や喰い違いも明確でなく未発達な状態にある。全体の縄張や城内のトレンチ調査による出土品から判断して、築城は、15Cの中頃と推定されている。

室町期の築城形態を明確に検証できる県下でも有数の中世山城（国人領主の本城）である。

※城郭用語としての曲輪と混乱を避けるため、人工的な掘削による平坦地を平場として統一して使用した。また、勝間田城、殿谷城については調査所見を優先して曲輪を用いた。

第4節 遺跡関係(考古学関連)

考古学部門では、石造物を中心にした宗教的分野と分けて、各遺跡について調査を実施した。調査では、横地城と横地氏関連遺跡に主眼をおき、この地域の中世の様相を解明することに努めた。横地氏関連遺跡とは、横地城跡も含めた横地地区内の中世関係遺跡を総称することにする。なお、この節では石造物を除いた遺跡関係についてまとめて掲載する。

一横地城の調査一

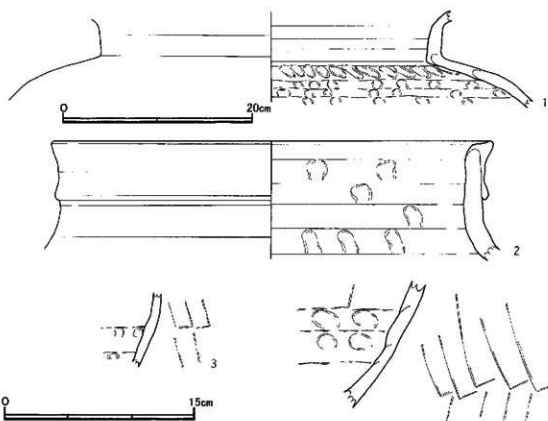
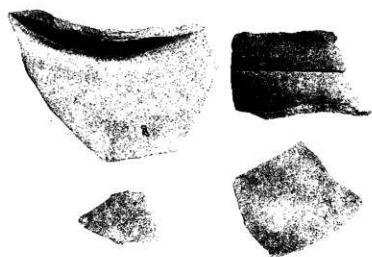
塚本和弘

横地城は、過去において考古学的調査が行われていないため、その実体は明らかでないが、通説では横地氏が城郭を築き、文明8年に今川氏によって落城したとされる。今回、この説について考古学的手法による検証を行うため、横地城跡での過去の表採資料の聞き取り調査と、現地発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、現地の地形の状態などを考慮し、調査委員会で問題点をしぼり、検討を踏まえた上で、最小限の調査面積に留め行う方向で進めることにした。調査の手順として、現地地形測量を先行させ、縄張調査の成果の検討を踏まえてから、平成8年度より実施することにした。調査期間は、平成8年から平成10年にかけて3回発掘調査を実施した。各年度の調査は、8年度を第1次調査、9年度を第2次調査、10年度を第3次調査とした。調査に参加された方は以下のとおりである。

調査参加者 井指秋雄、栗田 務、匂坂二郎、高岡二郎、内藤一夫、内藤清松、西沢由朗、
長谷山寅男、服部喜三郎、広瀬義照、増田豊太郎、宮城芳雄、横山文雄、米山良司
伊藤せつ子、伊藤初恵、織部節子、栗田敏子、黒田文江、小林好子、杉田くめ、
杉田孝江、杉山花江、杉山みさえ、田中悦子、戸田和子、萩原紀江、福井京子、
堀内初代、丸尾安代、水島まさ江、三ツ井しの

表採資料の聞き取り調査

調査は、平成7年から8年にかけて、過去において横地城で表採された遺物について地元の郷土史家や横地城保存会の方々に聞き取り調査を実施した。調査の結果、鈴木哲太郎・宮城芳雄・故鈴木則夫氏の三名によって、土器が採集され保管されていることが明らかとなった。採集された土器についての状況や時期については、残念ながら記憶が曖昧であったが、出土地点については東の城に限定されている。遺物は4点で第3図に掲載した。1は渥美産の大甕で平場1より出土している。口縁部は欠損しているものの、大きさは頸部35.7cmで、口径は40cm前後と推定される。体部外面には自然灰釉が認められ、頸部から口縁部にかけてヨコナデ調整が施される。時期は12世紀後半であろう。2～4は常滑産の大甕である。2は平場12、3・4は平場12北斜面で表採されている。2は、口縁の緑帯が垂下して頸部上端に密着する。口径は34.4cmで緑帯幅は4.6cmを測る。年代的には、15世紀中葉頃と判断される。3・4は体部の破片で、外面に縦位の板ナデ整形が施され、焼は硬く良好なものである。年代は15世紀頃と推測される。以上のように、12世紀と15世紀の二時期の土器が認められる。12世紀の土器は、城と直接関連するものとは考えにくく、城の築城以前のものであろう。15世紀の常滑産の大甕は、一般的に城郭では貯蔵具として利用されることから出土例が多く、城として機能した時期に使用されたものと判断される。よって、この表採遺物によって横地城での人の生活の痕跡を裏付けることができた貴重なものであろう。なお、この資料は御好意により寄贈を受けた。



第14図 横地城表探遺物

＜第1次調査＞

調査期間 平成8年10月15日～10月23日

調査面積 56㎡

調査の目的 通称「千畳敷」と呼ばれる平地地点での
生活空間の確認

調査の成果

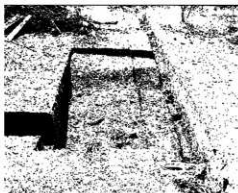
調査地点の平地は、西の域と中の域の中間に位置する。平地は、東と西が比較的高くなりやや窪んだ地点の尾根に沿って、東西に長く平坦な地形が広がっている。北側は谷が入り込んで急斜地形となり、尾根縁辺部には農道が走る。南側では難段状に平坦な地形となり、緩やかに丘陵は広がりが裾部が垂直に落ち崖となっている。また、丘陵直下には奥積地川が西に向かって流れ、沖積地を形成している。この平地は、域内では最も規模の広い場所となっている。

調査は、3ヶ所調査区を設定し土層観察を行った。第1トレンチは、平地のほぼ中央地点で尾根に直交する形で南北に設定した。トレンチの南では、表土が10cm程で基盤層となり緩やかに南に傾斜する。中央付近は、表土から基盤層まで90cm程で比較的安定した土層である。土層中に攪乱が認められることもなく自然堆積と判断される。また、地形的には北側に少し平坦な地形が広がるが、谷が入り込んでいることが明らかである。最下層より摩滅した土師器1点、須恵器片2点が出土している。第2トレンチは、第1トレンチの東側に長さ3m、幅1mの規模で設置した。表土15cm以下は岩混じりの基盤層となっており、特に変化は認められない。第3トレンチは、丘陵尾根に平行する形で、東西に25mの長さで調査区を設定した。東は緩やかに西に向かって傾斜し、第1トレンチ付近で深くなり、6m程西で立ち上がり平らとなる。第1トレンチ付近より西側の部分では、西に向かって低くなるが、比高差は20cmと差は少ない。表土から基盤層まで、20cmと堆積は薄い。西側中央付近では、後世の土層が2ヶ所検出された。遺物は、特に出土していない。

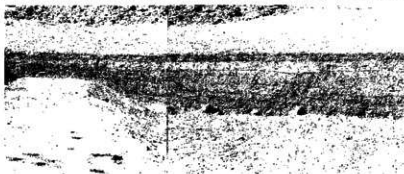
以上のことから、第1トレンチ地点中央付近へ北から谷が入り込んだ地形で、南側が尾根となっていたことが明らかとなった。なお、この地点の平坦地形は周辺の状況などから近世の時期による削平と、考えられる。平成7年度の委員会の協議で問題となったこの平地が、生活域としての機能を果たしているのか否かについて、今回の調査の中で一定の結論を得ることができた調査であった。



調査区遠景（東より）

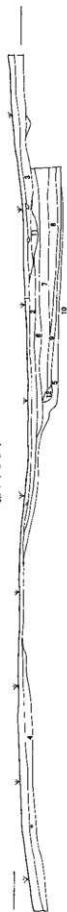


第1トレンチ完掘状態（北より）

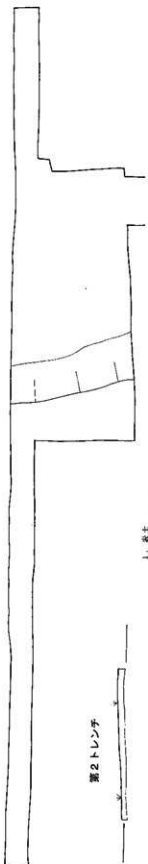


第1トレンチ土層状態（東より）

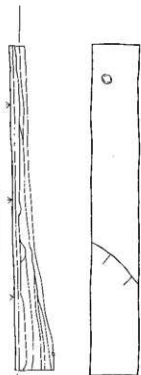
第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



第3トレンチ



1. 赤土
2. 赤土、明褐色土（しまった上）
3. 赤土、明褐色土（神ブロッコをさむ）
4. 赤土、明褐色土（ジャリをさむ）
5. 赤土、明褐色土（ジャリをさむ）
6. 赤土、明褐色土（しまった上）
7. 赤土、明褐色土（しまった上）
8. 赤土、明褐色土（しまった上）
9. 赤土、明褐色土（しまった上）
10. 赤土、明褐色土（しまった上）
11. 赤土、明褐色土（しまった上）
12. 赤土、明褐色土（しまった上）

0 1.0m 2.0m

第15図 第1～第3トレンチ平面図・土層図

＜第2次調査＞

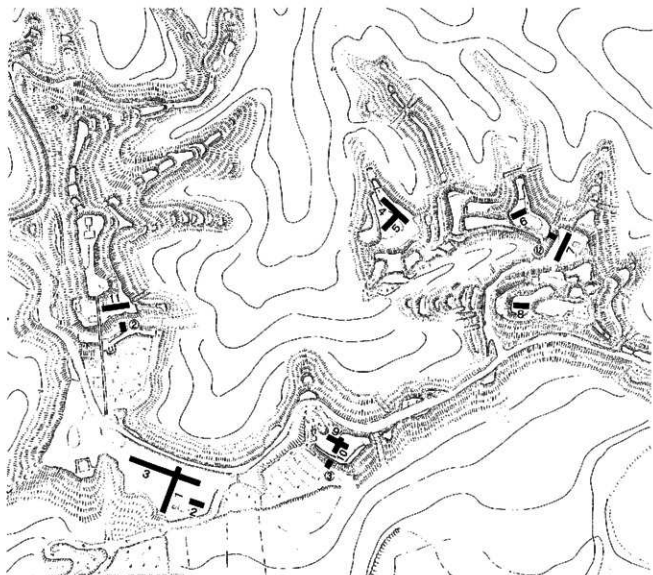
調査期間 平成9年11月7日～12月11日

調査面積 70㎡

調査の目的 各平場における遺構・遺物の確認

調査の結果

横地城は、二つの核となる曲輪から構成されており、東から東の城、中の城、西の城と呼ばれている。各曲輪ごとの平場にトレンチを設定し調査を実施した。東の城では5箇所、第4トレンチから第8トレンチとし、中の城は2箇所、第9・10トレンチである。西の城はまとまった面積を有する平場が少なく、1箇所、第11トレンチとした。第4トレンチは、山頂部より北に派生する屋根の最西端側に築かれた平場56に設置した。平場56は、この周辺の尾根では低位となっているが、広い平坦面を有する。トレンチは、尾根に沿う形で南北に11mで、標高64m前後となっている。基盤層は、表土より10cm～20cmと浅く、中央が低く窪んだ地形となっている。覆土は黄褐色砂質土で植物腐食を含んでいるが、攪乱を受けた状態はみられない。遺物は、中央と北側の2ヶ所からまとめて上器、石器、金



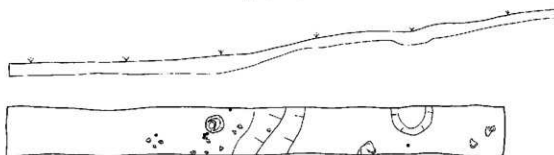
第16図 トレンチ配置図

属製品、炭化米が検出されている。土器は、古瀬戸緑釉平碗（18）・天日茶碗（13）、常滑産壺（24・25）、かわらけである。石器は砥石（33～35）3点で、金属製品として刀子（36）、鉄鏃（37・38）、釘（39）、スラグが出土している。炭化米は、土器などが出土した地点周辺より少量検出されている。遺構は、認められなかった。第5トレンチは、第4トレンチに直交し西側に延ばす形で設定した。地形的には、第4トレンチより西に傾斜する部分で低くなっている。第4トレンチの地点と西端基盤層では、比高差1.70mを測る。遺構は、斜面の中間で直径90cm程の円形の落ち込みと、西側の平坦地形に直径40cm程の不明穴が検出されている。不明穴が検出された基盤層は、表面では薄く赤色に焼けて炭化物が出土している。また、破碎した10cm以下の石に混ざって、摩滅した土師質土器2点が出上している。第6トレンチは、平場55の中央に位置する。平場55は、北と南の先端を堀切によって遮断され西に向かってY字状に平坦部が広がり、東縁辺部は上笠が築かれている。地形的には、東側が高く西に向かって傾斜する。トレンチの東側は基盤が岩盤となっており、その岩盤に柱穴が掘り込まれている。柱穴は2箇所検出され、大きさは直径20cm～25cmで、深さ5cmを測る。基盤層は赤く焼け、覆土には炭化米が多量に含んでいる。トレンチ中央から西側では、比較的扁平な配石を基盤層より5cm程浮いた状態で検出している。また、同位層より完形な古瀬戸緑釉小皿（171）と常滑産壺（29・30）が出土している。第7トレンチは、平場38地点の井戸遺構周辺に南北に10mの規模で設置した。東側は標高85.1mで西側端が84.3mと比高差80cmとなっている。調査区の西側上層部分では、後世の攪乱が認められたが、下層は安定した土層となっている。また、10cm～20cmの円礫が多数覆土より検出され、中には赤く火を受けて変色しているものもみられる。なお、土層は湿り気が多く暗灰色で、炭化物や炭化米を多く含んだ上層となっている。東側では、表土は5cm程と浅く、下層で硬く締った土が検出されている。この土は粘土を叩いて固めた痕跡がみられ、二次的な要因によって盛土された土層であろう。また、この上層の表面は赤く焼け、上層内には炭化米を密に含まれている。粘土を盛土した層が中央やや東で消滅し、その境付近で落ち込みとなっている。この落ち込み付近では、かわらけが集中して出上している。遺物には、舶載陶磁器、国内陶器、かわらけ、スラグ、炭化米がある。舶載陶磁器は、調査区東側にまとまっており、青磁蓮弁文碗（9）の1個体が細片となり散乱した状態で出土している。青磁では、蓮弁文碗（1～3）・畚文帯碗（5）・無文端反碗（6）、白磁では皿（11）がある。国内陶器としては、古瀬戸天日茶碗（14）と緑釉小皿（19）があり、かわらけはクロロ成形からなる。炭化米は、今回の調査区内の中で最も出土量が多い。第8トレンチは、東の城の中心的な平場1より西側に1段低く延びる平場2に位置する。平場2に平行する形で、東西方向に6m程の規模で設定した。地形的には、平坦で高低差は10cm程である。上層は1層で、東側が10cm、中央で20cm、西側が15cmを測る。基盤層は東側で岩盤となるが、中央より西側は黄褐色粘質土となっている。遺構は、検出されなかった。遺物は、覆土より青磁桜花皿（10）と炭化米が出土している。土器等は極端に少ないが、炭化米は東側の床面に多くみられた。第9トレンチは、中の城の中心的な平場1の虎口付近から、東の堀切に向かって長さ11mの規模で設置した。地形的には東側が高く、西に緩やかに傾斜し、中央付近で一端2m程平らとなるが、また、西では傾斜が強くなり虎口付近で擋鉢状になる。土層は、東側が表土より20cm下で岩盤が2m程の範囲で露頭し、それより西では黄褐色土の基盤層となる。堆積は、虎口付近に向かって厚くなり30cmを測る。虎口付近の床面付近では、炭化物が検出され薄く赤く焼けた痕跡が認められる。遺構は、調査区の東側の岩盤に柱穴を掘り込んでいる。柱穴は3箇所見られ、平面形が方形状となり、大きさは一辺30cm前後となっている。中央西側に不明穴が1箇所検出されたが、覆土は締りがなく、後世の掘削のものであろう。遺物は、覆土より山茶碗（12）破片と炭化米が出土している。炭化米は、虎口付近で少量出土している。土器では、特に遺構

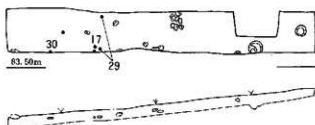
第4トレンチ



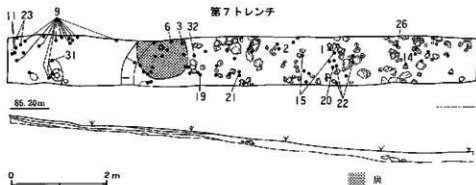
第5トレンチ



第6トレンチ



第7トレンチ



第17図 第4～第7トレンチ平面図・土層図



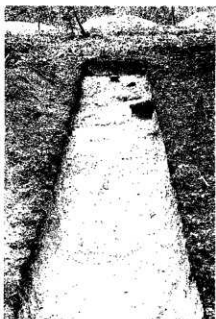
第4トレンチ



第5トレンチ



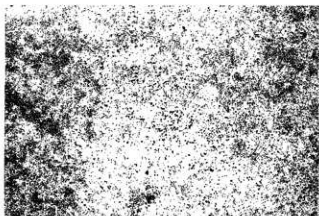
第6トレンチ



第7トレンチ



第6トレンチ土器出土状態



第7トレンチ出土炭化米

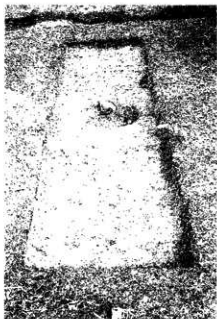
に伴うものは認められなかった。第10トレンチは、第9トレンチの東部分に直交する形で、南に5m程設置した。地形は、平らな部分で標高87.7mとなる。土層は1層で、厚さ15cm～20cmと安定した堆積となっている。北側端で下層より炭がまとまって出土しているものの、床面が焼けた痕跡はない。遺構は、中央付近に平面形が円形で、大きさは直径60cm、深さ20cmの柱穴が1箇所検出されている。遺物は、覆土より少量の炭化米が認められるが、東の城の出土状態とは明らかに違っている。土器等生活に直接関連するものはなかった。第11トレンチは西の城で唯一の調査区で、平場4に設置した。平場4は、西の城の中心となっている平場1・2地点と比高差4mと1段低い地点となり、丘陵の南面に平場を構える。そして、この城にとって重要な一端を担う場所ともなっている。調査区は、平場に平行する形で階段より東側に東西9mの長さの規模となっている。地形は、西側が高く東に向かっ



第8トレンチ



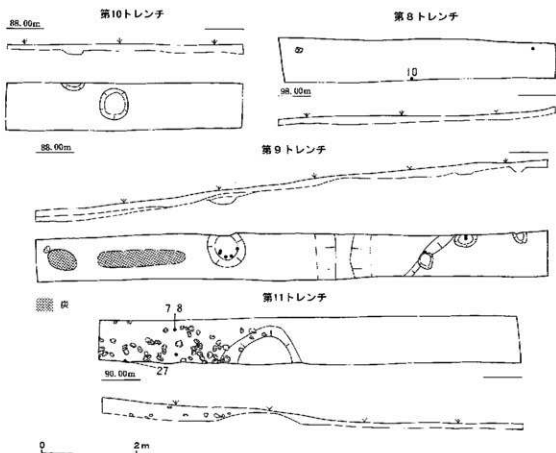
第9トレンチ



第10トレンチ



第11トレンチ



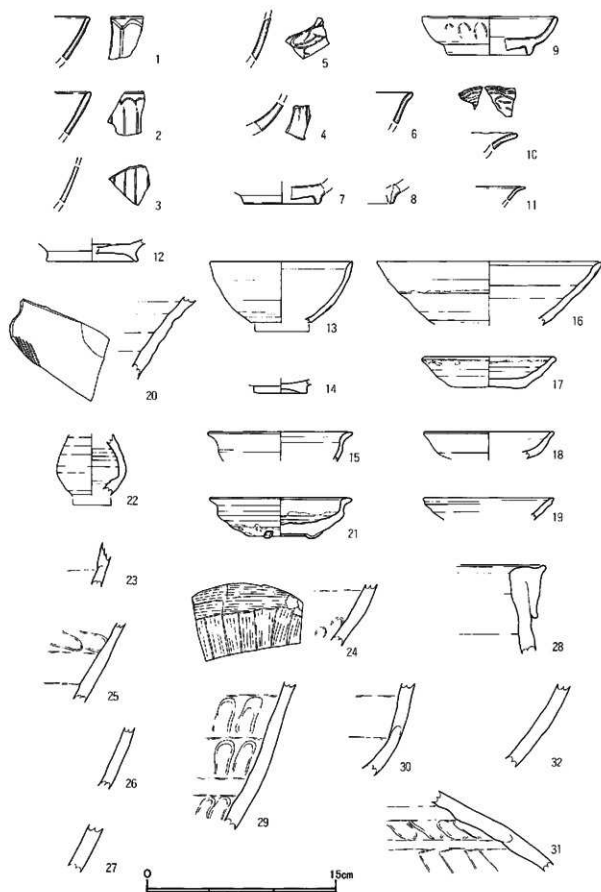
第18図 第8～第11トレンチ平面図・土層図

て緩やかに傾斜するが、平坦となっている。基盤は、西側では緩やかに傾斜し、3 m程東の地点で一段高く土塁状となり、さらに東では平らとなる。土塁状の高まりは、東側の平坦な地点との比高差30 cmを測る。覆土では、土塁状の高まりの付近から西では、直径10cm程の円礫が下層から基盤にかけて検出されているが、東側ではほとんど円礫を確認することはできない。そして、円礫に混じって土器片や炭化米が出土している。遺構としては、柱穴、溝といった施設関連のものはみられないが、中央の土塁状の高まりが、平場4の縁辺部に沿うように城内に登る道として施設された道遺構に関連するものであろう。遺物は、青磁碗（7・8）と常滑産泰（27）の土器と炭化米が出土している。炭化米は、西側でも西に集中しており、土層堆積状態や平場1・2地点で多くの炭化米が出土していることを考慮して考えると、流出による二次的なものである可能性が高い。

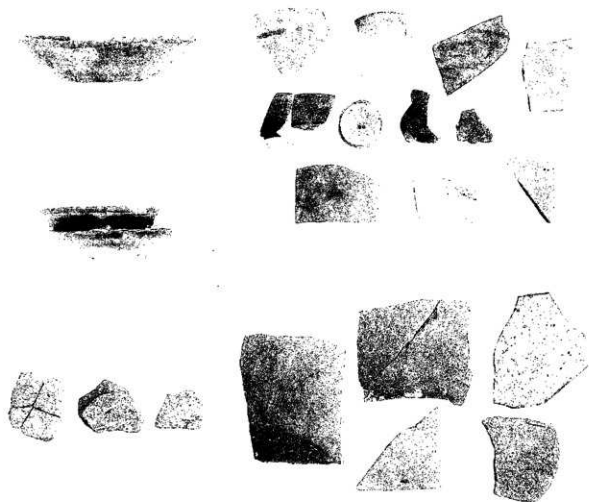
出土遺物（第19・20図）

今回の調査では、ポリコンテナ1箱分が出土しており、その主たる遺物は土器で、他に石製品、金属製品などもみられる。土器は、舶載陶磁器（1～11）、山茶碗（12）、施釉陶器（13～22）、陶器（23～31）などからなる。舶載陶磁器には、青磁と白磁が認められる。青磁は破片数で22点、その内碗類が8点、皿類が14点となっている。碗は、龍泉窯系の製品で1～4は外面に縦描蓮弁文を施している。1は幅が広目の剣先形縁描蓮弁文で他に比べ古い様相となっている。素地は淡灰色で、釉薬は淡灰緑色透明で質人が多い。2は幅の狭い剣先形蓮弁文で直線的な口縁である。胎土は粗く淡黄灰色をなす。3は体部破片で、幅の狭い蓮弁文となるが施文は不鮮明となっている。釉薬は灰緑色不透明で白濁気味である。4は体部下半部の破片で、施文は3と同様な特徴となっている。5は雷文帯碗で

ある。施文は、外面に片切彫の刻花文を描き、釉薬は淡灰緑色半透明で小気泡がみられるが、貫入はない。6は無文の端反碗の口縁部である。口縁直下に一条凸線が認められ、厚目の施釉となっている。7・8は同一個体の碗の底部である。大きさは、底径5.8cm、高台高さ0.8cmで、高台内は露胎となっている。釉薬は、暗灰緑色不透明で貫入が多い。9・10は皿類である。9は今回の調査で唯一全形を知り得るものである。大きさは、口径12.6cm、器高6.3cm、器高3.0cm、高台高さ0.8cmを測る。器高に対し口径が広く扁平な皿で、口縁は直立気味となっている。文様は、外面に不鮮明ながら粗雑な片切彫蓮弁文が刻まれ、内底には印花文らしきものがあるが不明瞭である。釉薬は、暗灰緑色不透明で部分的に再火による白濁が認められる。また、高台内側に蛇口状の釉掻とりが施されている。10は稜花皿である。内面口縁沿いに3条の沈線文、体部内外面にヘラ彫り文が施されている。白磁は3点山土しているが同一個体の皿である。11は口縁部直下で強く外反させ、端部を尖らせている。口唇部は口元気味で薄い淡灰白色透明な施釉を施している。胎土は、古いものでは15世紀前半に位置付けられるが、15世紀中葉～後半が主体となっている。山茶碗は2点出土しているが、図示できたのは12の1点である。底部は径12.6cmで、低い三角形の高台を有するもので東遼系の製品である。時期は13世紀前半と一応考えられる。施釉陶器は瀬戸・美濃産と三ツ沢産が出土している。瀬戸・美濃産は碗・皿類が主体で、播鉢や仏具類の器種などもみられる。13・14は天目茶碗である。13は口径11.0cmと小型なもので薄手作りとなっている。口縁部は体部からまっすぐ立ち上がり端部を尖らせている。体部下半部まで鉄釉を施している。14は底径4.1cm、高台高さ0.6cm内反り高台で露胎となっている。内面には鉄釉が施されている。16は灰釉平碗である。口径17.4cmで体部から口縁にかけ、直線的に外傾しハの字状に開く。口縁部内面は強くナデ境が稜線を描く。釉薬は体部上半部から口縁部に認められる。17～19は皿類の主な器種である緑釉小皿である。17は完形なもので、口径10.0cm、器高2.5cm、底径5.6cmを測る。底部には糸切り痕と砂目が明瞭に残り粗い。口縁端部は端面を有し角張る。体部内面から見込部は丁寧なヨコナデ調整が施されている。18は口径10cmと17と法量は同じとなるが、口縁部直下を強くナデるものである。19は口縁外面に沈線を有するものである。20は播鉢の体部で卸目5本分が認められる。体部はノタ目が強いが胎土は緻密となっている。仏具類は香炉(21)と仏花瓶(22)がある。香炉は鉄釉が施された袴腰形の製品となっている。法量は口径16.2cm、器高3.2cm、底部10.0cmを測る。体部は扁平で、頸部はほぼ直立し口縁部は水平に外側へ張り出している。体部下端には三足が付けられ、底部は糸切り未調整となっている。22は仏花瓶の体部である。体部中央が最大幅となり5.4cmを測る。体部外面には、鉄釉掛けされている。三ツ沢産は端反碗(15)と播鉢が出土している。播鉢は摩滅して計測できなかった。15は口径10.3cmを測る碗である。口縁部直下で強く外反させ、肥厚する口縁を有している。釉薬は鉄釉である。施釉陶器の時期は、藤沢良祐氏の編年(1991)によると後期IV段階の資料となる。ただし、IV段階の中でも緑釉小皿17は古段階で、18・19、天目茶碗14平碗16、香炉21は新段階と対比される。実年代では、15世紀中葉～後半の範疇となる。陶器は、常滑産の壺と甕からなっている。壺は23～27の4点である。23は色調が、灰青色で胎土中に長石石英を含む。24は体部中央付近の破片で、外面に板状工具によるナデがタテとヨコ方向に認められる。25は赤茶褐色で外面にヘラナデ、内面に指ナデ調整が施されている。26はにがい褐色で胎土は緻密となっている。27は赤味が強く赤褐色となっている。甕は29～32で全て体部破片となっている。31以外は色調は赤茶褐色をなし、焼成は良好で胎土に小粒礫を含んでいる。外面にはヘラナデ調整され、29内面に指頭圧痕とヘラナデがみられる。31は頸部に近い破片で、外面に灰釉が認められる。内面には粘土帯が顕著に残り、その部分に指頭圧痕を加え全体に粗い作りとなっている。常滑産の製品は、時期ごとに口縁部に特徴が顕著にみられ、編年が確立されているものの、今回体部の破片で時期を決



第19図 出土遺物（土器 1～31）

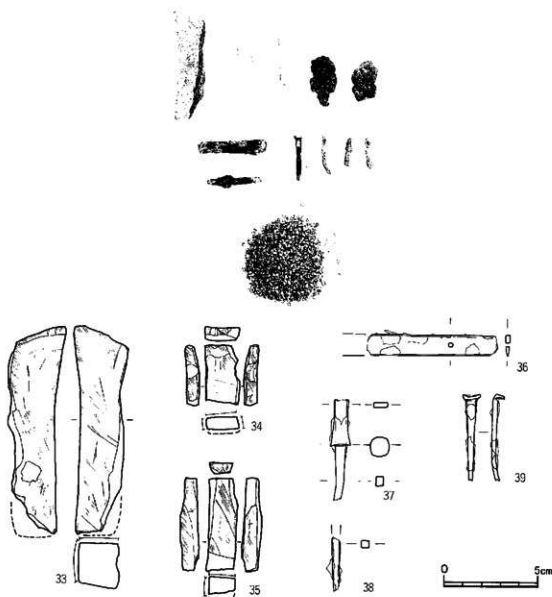


定できるものはないが、過去の表採資料の比較や他の遺物との共伴から考えて中野晴久氏編年（1994）の9～10型式の範疇と推定される。土師質土器は、かわらけが101点、個体では11となっているが計測できるものはない。断片的な資料から特徴をみると、全てロクロ成形で小型となっている。15世紀の良好なかわらけ資料として、勝間田城跡出土のものがあげられるが、大型のもので扁平で外側に開くタイプの碗状となるものはなく、口縁は短く直立気味となるものと緩やかに外反するものがみられる。全体に土器は、15世紀代に限定され、16世紀まで下るものはみられない。

石製品では、砥石が3点出土している。33は最も大型なもので全長11.0cm、幅2.5cm、厚さ2.3cm、重さ96gを測る。凝灰岩質で方柱状となり2面を使用している。表面は磨かれ中央が窪み弯曲する。34は欠損部分が多く大きさは残存するもので長さ3.0cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ5.8gとなっている。各面とも使用されている。35は長方形をなす凝灰岩である。大きさは、長さ5.0cm、幅1.4cm、厚さ1.0cm、重さ11gを測る。欠損した面以外は全て使用され、表面は磨かれている。各面には、細かな削痕が顕著に残る。各砥石の特徴より、33は中砥で34・35は上砥として使用されたと考えられる。

金属製品としては、刀子、鉄鏃、釘などがある。36は刀子で刃部が欠損している。茎部は幅1.1cmで、残存全長は6.9cmとなっている。37・38は鉄鏃の破片である。39は寸法が、全長4.5cm、幅4mm×3mm、笠9mmの1寸5分の楔形の釘である。断面は角形で切り頭を有するものである。全体に錆が進行している。

今回の出土遺物は、石製品と金属製品が第4トレンチからまとめて出土している。鉄製品の刃の研磨に砥石が当然必要となり、砥石と鉄製品が一括して出土していることは、利に叶っているといえる。さらにスラグなどの鍛冶に関連する遺物もみられ、第4トレンチのある平場9が、鍛冶工房跡の機能を有した空間である可能性が強いことを、出土遺物より読み取ることができる。また、土器では井戸周辺の平場4地点から貯蔵具の壺・甕、供膳具の碗・皿類、仏具類と生活用具が比較的まとまって出土しており、この地点を生活空間として捉えることが可能であることを今回の調査によって裏付けられた。また、遺物の時期から15世紀にまとまっており、横地城の年代に一定の方向性を見出すことができ、今回の調査目的を充分果たした調査であったと言える。



第20図 出土遺物（石器・金属製品）

＜第3次調査＞

調査期間 平成10年8月10日～12日・20日

調査面積 4㎡

調査の目的 堀切遺構の保存状態の把握

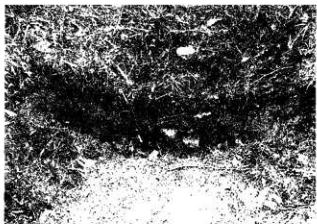
調査の成果

平成9年度の発掘調査の結果を踏まえた調査委員会での協議の中で、堀切遺構部分についての保存状態や構造といった部分について、少し明らかにできればという主旨のもとで、東の城堀切①、中の城堀切③、西の城堀切②の発掘調査を行った。合わせて、周辺の堀切の横断面の

測量を実施した。東の城堀切①は、平場4と平場6の間に設けられており、底面での標高は平場4側との比高差が3.6m、平場6側で2mとなっている。トレンチは長さ1.5mで、交差する形で設置した。土層は、表土と覆土の2層で表土は10cmの厚さとなっている。覆土は、小礫を含んでおり黒色土、暗灰色土、灰茶褐色土の層が識別できた。黒色土は、平場6の上面に黒色土が卓越しており流れ込みと考えられる。暗灰色土には、炭化物を含んでいる。灰茶褐色は、締りのない土となっており、平場4の斜面が崩落して堆積したものであろう。また、小礫は平場4のトレンチ調査でも検出されており、それらとの関連性強いと思われる。底面は岩盤に掘り込んで掘削されており、幅1.3mの規模を有し断面皿状を呈する。出土遺物は堀切の中央付近で暗灰色土より検出されている。土器は常滑産甕(28)の1点である。28は、口縁の緑帯部が垂下して頸部に接合している。緑帯端部丸く仕上げ口縁よりやや突出する形となり、緑帯は長さ3.7cmを測る。時期は9型式の範疇で15世紀前半と推測される。中の城堀切③は、平場1の西側に土塁と平行する形で北から南に設けられている。現況では、腐食土によって埋まり、わずかな窪みが確認できる状況となっている。トレンチは、長さ1.4mで設定した。土層は灰茶褐色土の1層で厚さ25cmを測る。基盤は黄褐色土で岩を含む層となっている。堀切の底の幅は、90cmで比較的に平らとなっている。堀切の中央の底の標高は、84.4mで平場1の土塁上で87.9mとなり、比高差3.5mとなっている。一方平場9側では0.5mとあまり落差は認められない。遺物は、出土していない。西の城堀切②は、最も大規模な堀切で底は広く平らとなっている。トレンチは、堀切の中央付近に南北3mの規模で設置した。土層は3層に分層できた。上面より表土、暗灰茶褐色、黄茶褐色となっている。表土は植物など腐食土となり10cmを測る。暗灰茶褐色土は、厚さ15cmで混じりのない土となっている。黄茶褐色は堀切の北側の壁面より流れ込んだ状態で検出され、粘土ブロックを含んでいる。基本的には、表土と暗灰茶褐色土の2層であろう。堀切の中央で厚さ25cmを測り、標高84.95mとなる。平場3との比高差は4.4mである。底面の幅は約3mで平坦な地形となっている。遺物は、出土していない。今回の調査の結果、堀切の堆積は薄く現況地形とあまり変化しないことが明らかとなった。

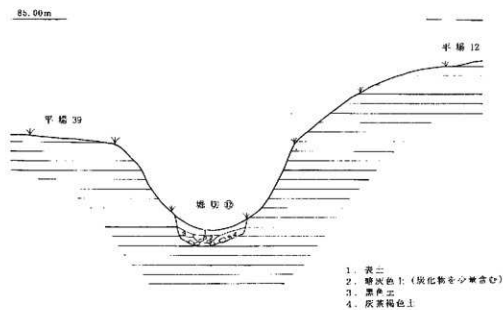


東の城堀切①土器出土状態

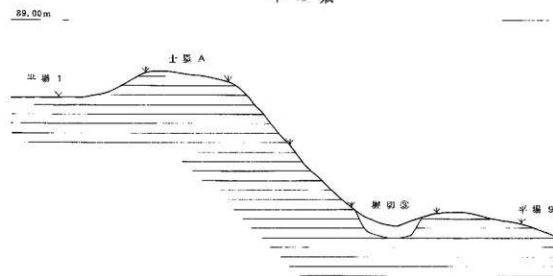


中の城堀切③完掘状態

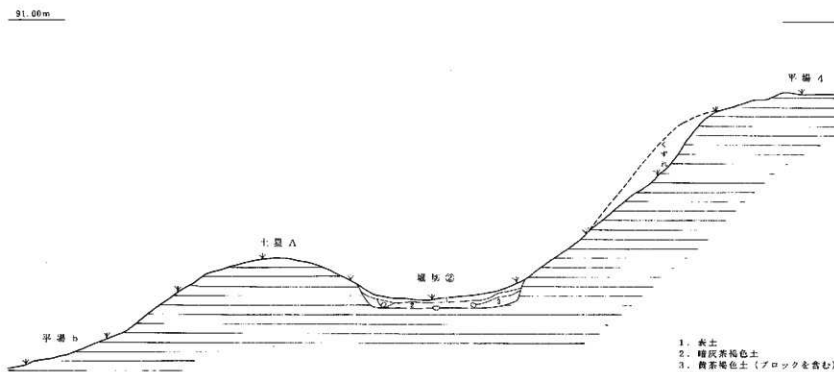
東の城



中の城



西の城



第21図 堀切断面図

周辺城郭との比較

菊川流域では、中世城郭の発掘調査は数少なく、横地氏のような領主クラスの城郭となると皆無といえる。しかし、周辺では勝間田氏の居城の横原町勝間田城跡や原氏の居城の掛川市殿谷城跡の調査例がある。勝間田城は横地城と同時に落成したとされる。城跡の調査では、建物跡や井戸等の遺構がみられ、遺物では中国製陶器をはじめ瀬戸産、金谷産の陶器やかわらけなど、日常生活を支える用具や茶器など嗜好品などが出土している。年代的には16世紀以降に下るものではなく、横地城跡出土遺物も断片的であるものの同じ特徴を示すもので、文明8年落成説を裏付けていると推測される。城の機能では、トレンチ調査によって東の城の平場において、日常生活を支える碗皿や調理用具が確認されたことで、この城の中が一定の日常空間の機能をもっていたことがわかる。これは以前に表面採集されていた、常滑焼大甕の機能（水甕）や井戸と伝承される遺構と合わせ、その関連性が裏付けられる。また、1点ではあるが、香炉が発見されており、美術陶器（高級品）を使用する空間もあったことが推測される。トレンチ4から出土したスラグは、この一段低い場所では鍛冶が行われたことを意味しており、城内に場所毎に分化した空間機能を確認できる。しかし、第1次調査で中の城平場2に、居住空間が認められなかったことで、勝間田城や殿谷城との城郭の構造に違いが認められる。勝間田城跡では建物跡をはじめ、かわらけの出土量が全体の76%を占めているほか、殿谷城も横地城よりやや時期は下るものの、出土遺物で信楽産の茶壺や志戸呂産の茶器、そしてかわらけが7%と生活機能を備えていたと考えられる。よって勝間田城や殿谷城が一般的な城郭の形態を取るものであり、同時期に存続した横地城が、例外的な城郭の構造を備えていたといわざるを得ない。

第7表 器種組織・個体分類表（第2次調査）

	山系陶類				土師質土器				煎飯陶磁器							
	土茶碗	鍋	皿	小計	かわらけ	その他	小計		青磁				白磁			
									碗	皿	その他	小計	碗	皿	その他	小計
破片数	2	—	—	2	101	3	104	8	14	—	22	—	3	—	—	3
個体数	2	—	—	2	11	2	13	7	2	—	9	—	1	—	—	1

	瀬戸・美濃産							常滑産			二ツ沢産			合計
	天目茶碗	平	鍋	鉢	小鉢	鉢	仏花瓶	香炉	小計	壺	小計	碗	鉢	小計
破片数	7	3	7	1	3	5	26	6	5	11	2	1	3	171
個体数	2	1	3	1	1	1	9	3	4	9	1	1	2	45

	山系陶類	土師質土器	煎飯陶磁器	瀬戸・美濃産	常滑産	二ツ沢産	合計
破片数	2 (1.2%)	104 (61%)	25 (15%)	26 (15%)	11 (6%)	3 (1.8%)	171 (100%)
個体数	2 (5%)	13 (28%)	10 (22%)	9 (20%)	9 (20%)	2 (5%)	45 (100%)

ここでは発掘調査の実施された埴地城や埴地氏関連遺跡の概要と特徴について触れ、さらに東遠江を中心として同時代の領主クラスの中世城館などの周辺遺跡についても概観してみたい。また各遺跡の輸入陶磁器を主体に観察し、その組成と出土量の分析を行って遺跡の主要な時期と存続期間についても考えてみたい。

1) 舶載陶磁器の分類について

遠江における主要遺跡から出土した舶載陶磁器の検討を行うまえに、時代区分のメルクマールとなる青磁や白磁の碗・皿を中心に型式分類の基準について、以下に述べることにする。舶載陶磁器の型式分類と年代観については、これまでの研究成果により横田賢次郎・森田勉氏（横田・森田 1978）、森田勉氏（森田 1982）、小野正敏氏（小野 1982・1985・1994）、横伸一郎（横 1995）などの分類・編年案が報告されている。

今回報告する中世期の舶載陶磁は、横田・森田両氏、小野氏の分類・編年案を基本的には継承しているが、当地方の出土資料の実情に合わせて変更したところもある。従って、以下の碗・皿の分類基準は今回の報告だけのものに考えておきたい。

1. 青 磁

青磁碗・皿類は横田・森田分類の同安窯系と龍泉窯系に大別して、文様や形態的な特徴により細分した。

◎同安窯系青磁

青磁碗

内面または内外面撫掻文を有するもの。

A類：太目の撫掻文—横田・森田分類碗Ⅰ・2類（12C後葉）。

B類：細目の撫掻文—横田・森田分類碗Ⅰ-1類（12C後葉）。

青磁皿

内底面に撫掻文を有したもので、横田・森田分類皿Ⅲ類（12C後葉）。

◎龍泉窯系青磁

青磁碗

文用や形態的な特徴によりA～E類に分類した。

A類：割花文碗を主体とした一群で、横田・森田分類碗Ⅰ-1～4・6類の細分に準じたもの（12C後葉～13C初頭）。

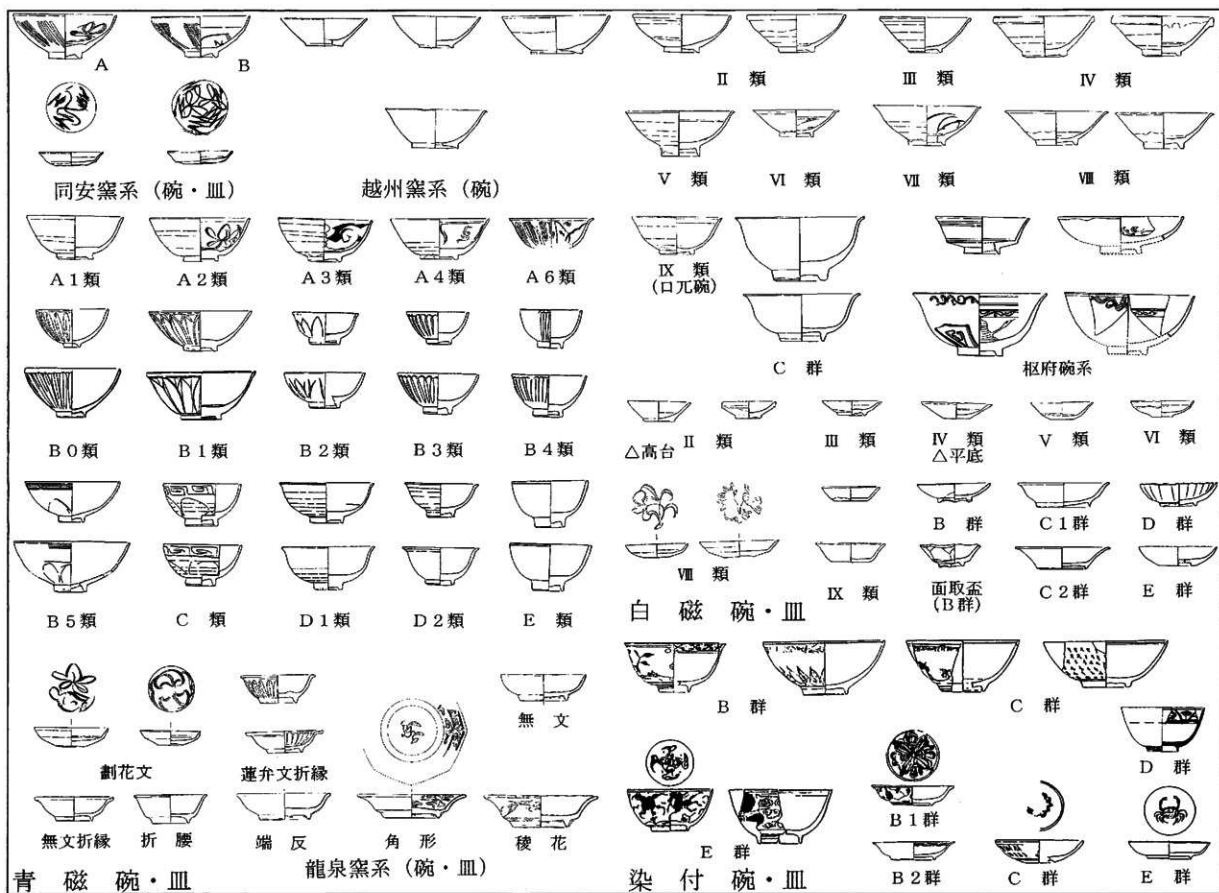
B類：蓮弁文碗の一群を一括したものである。

0：鴛蓮弁文—横田・森田分類碗Ⅲ類（13C末葉～14C前半）。

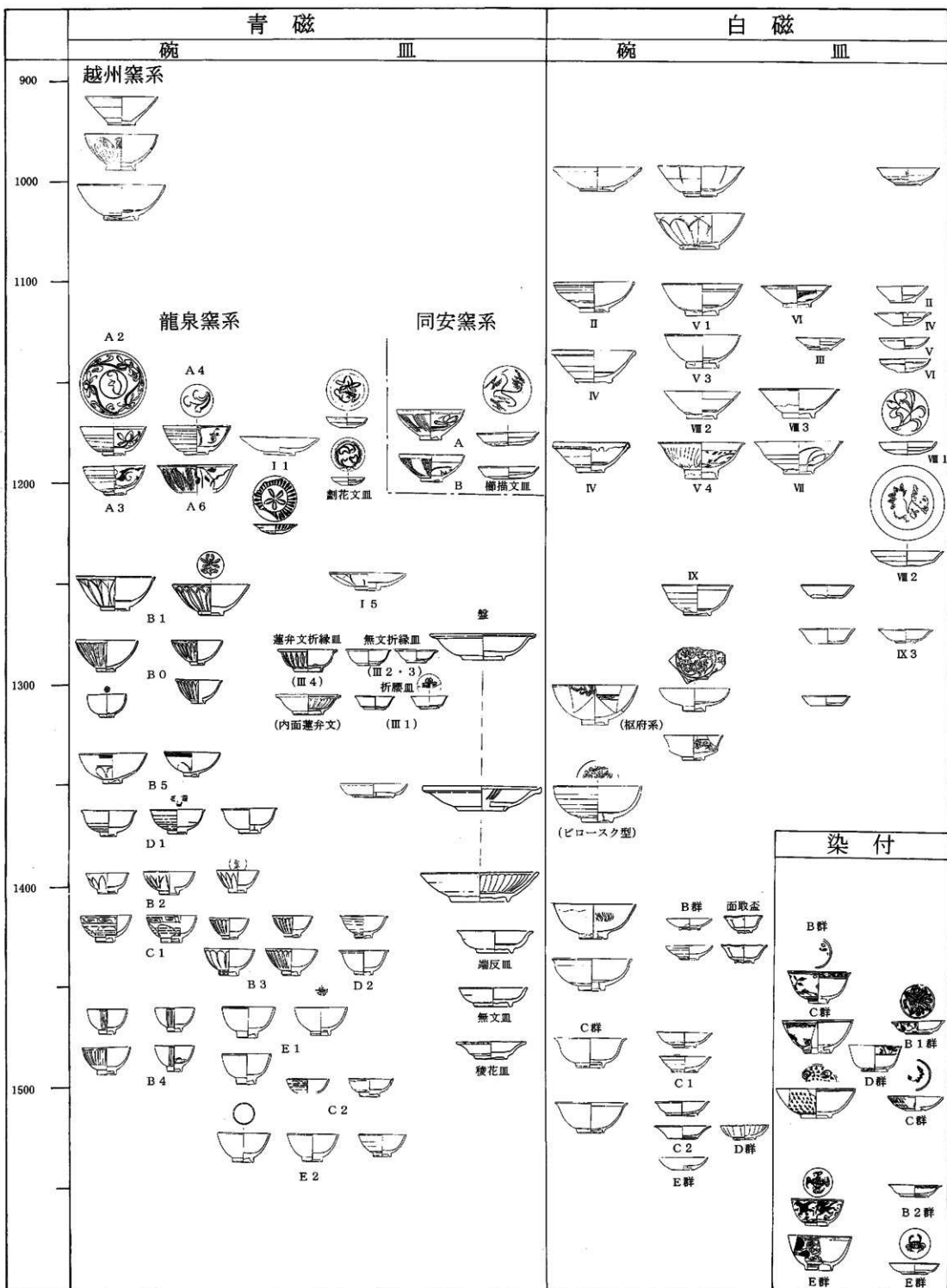
1：鴛蓮弁文—横田・森田分類碗Ⅰ-5類（13C中葉～14C前葉）。

2：へう彫で鴛を有しない蓮弁文もの（14C末葉～15C初頭）。

3：線描蓮弁文の古手のもの（15世紀中葉）。



第22圖 青磁・白磁・染付型式分類圖



4：線描連弁文の新手のもの（15世紀後半）。

C類

1：口縁部に条線文、いわゆる新安手と呼ばれるもの（14C前半）。今回出土例がない。

2：外面の口縁部に雷文帯、体部下半にうま式連弁文を有するもの（15C前半）。

3：口縁に退化した雷文帯を残す小形碗（16C前半）。

D類：無文の端反碗の一群で、新旧の二次期がある。

1：大型のもので高台と高台内に軸がかからないもの。口縁も比較的薄い（14C後半）。

2：小型のもので高台に軸がかかる。口縁は玉縁風に厚い（15C前半）。

E類：無文の直口型碗の一群である（15C後半～16C前半）。

青磁皿

劃花文皿：内底面に主に劃花文を有したもので、横田・森田分類皿Ⅰ類（12C後葉）。

蓮弁文折縁皿：内外面に蓮弁文、外面蓮弁文例に内底面双魚文をもつ例が多い。横田・森田分類環

Ⅲ-4類（13C後半～14C前半）。

無文折縁皿：折縁皿で無文のもの。横田・森田分類杯Ⅲ-2・3類（13C後半～14C前半）。

折縁皿：体部下位が屈曲するもので、横田・森田分類杯Ⅲ-1類（13C末葉～14C前半）。

無文皿：（15C中葉）。

角形皿：沖縄首里城出土資料にあるもの？

端反皿：無文（15C前半）。

稜花皿：口縁部稜花形の刻み、折腰で口縁部外反、内面櫛掻波状文（15C中葉～後半）。

菊皿：型押し菊花皿？（16C中葉）

2. 白磁

白磁の碗・皿類については、基本的に中世前期の資料を横田・森田分類の大別に従っており、中世後期の資料は小野分類と森田分類を採用しており、異なった表記で示しているのはそのためである。

白磁碗

Ⅱ～Ⅳ類：いわゆる玉縁碗の一群である（12C後葉）。Ⅱ類（12C前半～中葉）。

V～Ⅷ類：いわゆる端反碗の一群である（12C後葉）。

C群：端反碗。端反皿C群と同時期と思われるもの（15C後半～16C前半）。

その他、編年表には森田分類の桓府磁（B・B'群 14C中葉～後半）も参考資料として提示した。

白磁皿

Ⅲ類：高台を有するもの（12C後葉）。

Ⅳ～Ⅵ類：平底を呈するもの（12C後葉）。

Ⅶ類：平底を呈するもので、体部が屈曲し、内底面草花文（12C末葉）。

Ⅷ類：いわゆる口元皿の一群である（13C後半～14C前半）。

B群：挟り高台、内底面に溶着痕を残す。盃・面取盃と同時期（15C前半）。

C群：端反皿の一群である。一乗谷朝倉遺跡などで多数出土しており、新旧の二次期がある。

1：古手のもの（15C後半）。

2：新手のもの（16C前半）。

D群：型押し菊花皿である（16C中葉）。

E群：いわゆる萼筒底の一群で、体部が開いて内湾気味の口縁のもの（16C前半）。

3. 染付

染付の碗・皿の型式分類は、小野分類を採用した。

染付碗

B群：端反碗の一群である。高い高台内を施軸する。内底面に梅月・ねじ花・福字・寿字などの文様がある（15C中頃）。

C群：蓮子碗の一群である。高台内が凹形に窪み、開いた器形である。内底面に蓮花・法螺貝などの文様がある（15C後半～16C初頭）。

D群：直口型の一群で、内底面が平坦で広い（15C後半）。

E群：饅頭心型の一群で、内底面が盛り上がり、高台皿付に砂付着するものがある。高台内に大明年造・天下太平などの文字がある（16C中葉～16C後葉）。

F群：慶長頃で今回出土例ない（16C末～17C初頭）。志野等セット出土（大坂城例）。

染付皿

B群：端反皿の一群である。高台の器形や文様などで、新旧の二次期がある。

1：古手のものは、器壁がやや厚く、内底面に十字花文・玉取獅子文などの文様（15C後半）。

2：新手のものは、器壁が薄く、大明年造・天下太平などの文字がある（16C中葉）。

C群：碁笥底の一群で、体部が開いて内湾気味の口縁をもつ。内底面に花鳥・ねじ花・梵字などの文様がある（15C後半～16C前葉）。

E群：器高の低く、体部が内湾する。内底面に蟹・獅子・山水人物・文字などの文様がある（16C中葉～16C後葉）。

参考文献

- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4
- 森田 勉 1982 「14世紀から16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究第2号
- 小野正敏 1982 「15・16世紀の染付碗・皿の分類とその時代」貿易陶磁研究第2号
- ” 1985 「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」MUSEUM 11月号
東京国立博物館美術誌
- ” 1994 日本出土の貿易陶磁 国立歴史民俗博物館資料調査報告書5
- 續伸一郎 1995 『中世後期の貿易陶磁器』概説 中世の土器・陶磁器 中世土器研究会編
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」 ”

8 噸 載重 1 噸 載重

[illegible]

船載陶磁器 (青磁碗)

分類	年代	製作年代	伊	平	林瓦寺	上	瀬	瀬海寺	子	瀬	高松寺	瀬田城	瀬田城	瀬田城	大見寺	元	瀬田城	瀬田城	野
同安系																			
八類	12C後半～13C前半																		
B類 (森田 I-I)	12C後半～13C前半	1	9												6				4
瀬田系																			
A類	13C																		
I-1 (編文)																			
I-2	12C後半～13C前半	18															1		
I-3	12C後半～13C前半	5																	
I-4	12C後半～13C前半	5																	
I-2-4	12C後半～13C前半	2	6																3
I-6		1																	
新 安	14C前半																		
不 明																			
B類 (道升文様)																			
B-0 (甲)	14C前半	13	45																2
B-1 (11-5)	13C後半～14C前半	37	93												4				3
B-2 (乙)	14C後半～15C	3													32				16
B-3 (丙)	15C前半																		4
B-4 (丁)	15C後半	3	1																3
輪花文		2													2				1
不 明		2																	
C類 (道升文様)																			
C-1	14C前半																		
C-2 (B)	15C前半	2																	
C-3	15C後半～16C																		
不 明																			
D類 (道升文様)																			
D-1 (乙)	14C後半	1																	
D-2 (丙)	15C前半																		
D-3 (新々)	16C																		
E類 (道升文様)	15C後半～16C前半	4	4																1
新 安	16C前半	1																	
青磁碗不明		6	12																

船舶・航空・鉄道・道路・港湾・河川・その他

分	種	年	代	関ヶ谷	伊平	林光寺	土橋	瀬池寺	宇藤	香蓮寺	鳥取藩	静岡山園	阪本城	堀江城	見付山城	大尾寺元島	馬場山	田川城野原
◎血類																		
同安系																		
細情文(1巻)				1	9		1		1							2		2
御屏草紙																		
劇本文(1巻)				1														3
漢文学附録墨垣					3											1		
無文字所傳墨垣								2							2			
蜀文題					9			1										
所傳丸目				2								12						
角形題																1		
短以風																1		
緑花題				1	1							15			7	6	2	2
菊題								3										
蘭題				2														
不明										2							1人通	
◎穀類																		
粟類																		
占新				2			2	1					1			1		2
⑤受類																		
酒会窓																		
山口巻																		
小書				2														1
◎その他																		
花生																		
各戸									1									
彭象物																1		1
越州系																		
☆高麗系					1													
雪隠手引																		
合計										2					30	6		8

船載陶磁器 (白磁)

分類	年 代	總ヶ谷	伊 平	林光寺	上 橋	潮海寺	宇 田	寶福寺	高根城	藤岡村城	歌台城	備後城	信作城	人見寺	元 萬	莊岡城	御川城	野 原
⑤ 族 類																		
I 類 (玉縁)	12C												2	1				3
II 類 (玉縁)	12C	1			3								1	1			1	10
IV 類 (玉縁)	12C		4		3								9	1	1			10
V 類 (海皮)	12C		1			1							21	1	4			10
VI 類 (海皮)	12C												4					
12C~13C初頭																		
12C~13C初頭			2															
13C初~13C中葉					2													2
13C初~13C初頭			10	5														
V 類~VII 類																		
海皮 (新)																		
15C後半~16C前半		2	4		1	1	1	1		1					3		2	
不明																		
⑥ 血 類																		
III 類	12C																	
IV 類	12C		6	1									1				2	
V 類	12C		1														1	
VI 類	12C																	
IV 類~VI 類																		
V 類	12C中葉~後葉					1												
IX 類 (山元)	13C後半~14C前半	17	36		2					2				5	4		1	
印化 (聖神面)	13C	4	1	1	1													
A 群																		
B 群 (快高介)	15C前半		8							11	5		38		30	1	1	1
C 群 (海皮) C-1	15C後半~16C前半									3	46	3	2		5	1	35	
C-2	16C前半																	
D 群 (海皮)	16C										5					1		
E 群 (内焼)	16C					1					1							
大 皿	14C後半~15C初																	
不 明		3	8		1	2	1	2		1					3		1	
蓋	15C前半										3							
面取蓋 (日群)	15C前半					1				2								
四耳蓋 (湯か水注)		18	1		1													3
水 注			1															
白磁不明				1						26						1	1	1(器)

柏倉町誌 (黄白磁・その他)

分類	年代	観ヶ谷	伊平	林光寺	上郷	湖崎寺	宇井	高田寺	新田山	霞谷城	横地城	見付城	大見寺	元島	野間城	掛川城	野原
☆ 白磁																	
☆ 銅鏡			3														
③ 皿類														2			
印花 (青銅)		4	2				1										
皿																	
茶碗														1			
不明																	
③ 磁・その他																	
磁類		22															
香器		5	19														
水注		2												1			
鉢																	
水磨			1														
合子			3	1											2		
不明																	
合計		1															
☆ 銅鏡																	
人形茶碗		1	3									2	1	1			
茶入									8								
四耳器																	
他			2														
不明																	
合計																	
☆ 銅鏡		6															
☆ 銅鏡天目茶碗														6			

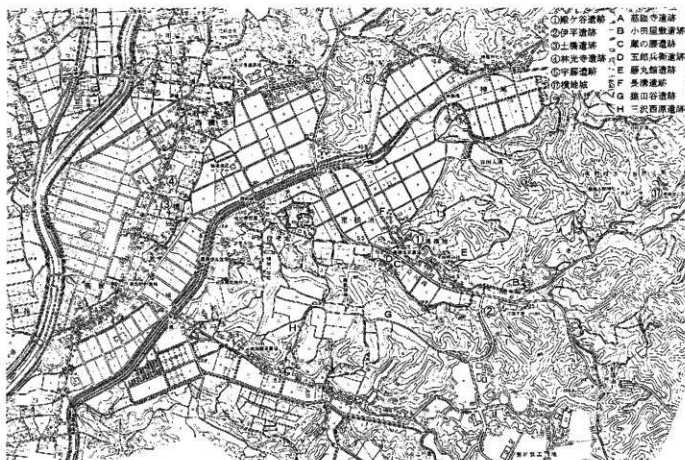
2) 横地の中世遺跡の様相

① 殿ヶ谷遺跡

菊川町東横地字殿ヶ谷に所在し、西に開口した谷戸に位置する。昭和62年の第1次調査から平成10年の第7次調査にかけて過去7回の発掘調査が実施され、中世前半期を中心とした横地氏の居館を思わせる遺構・遺物が発見されている。遺構は数時期の生活面（竪地層）に伴い礎石建物・掘立柱建物や多数の柱穴、土壇、溝、かわらけ溜りなどを検出した。それに伴って国産陶器・舶載陶磁器・木製品・石製品などとともに、在地系の多量のかわらけ（土師質土器）や白かわらけも出土しており、かわらけにはロクロ成形の底部が糸切り底のものと、京都系の技法を用いたといわれる手づくね成形のものが含まれていた。

当遺跡の舶載陶磁器は、鎌倉では市街地のどこでも出土する龍泉窯系青磁の蓮弁文碗・折縁皿や白磁口元皿の類が多いことが目につき13世紀中葉から14世紀前半にピークを想定することができる。しかし遺物の消長をみると、上限年代を示す資料としては同安窯系青磁の節掻文碗・皿と龍泉窯系青磁の割花文碗や、白磁の玉縁碗といった12世紀後葉～13世紀前半頃までの所産があり、横地城跡の調査でも出土している15世紀後半の青磁綾花皿・線描蓮弁文碗（B-4類）がこの遺跡の下限年代を示していると思われる。

出土遺物の中で注目されるのは、東国武十の中世居館跡では殆ど出土しない青磁酒会壺、泉州窯系の陶器盤、青白磁の梅瓶・小物類（合子・袋物・小皿類等）、黒漆地に朱漆で鶴丸を手描きした漆器



第24図 横地の中世遺跡位置図

皿、滑石製石鉢などが少量ながらみられた。また出土遺物の大半を占める多量のかわらけが出土したことも大きい案件であり、こうした出土現象は京都をはじめ鎌倉や平泉などの都市的な場で調度品的な良質の舶載陶磁器も含まれていることなど、これこそ殿ヶ谷遺跡の住人やこの場の使われかたの性格をよく表わしたものとえよう。

この遺跡は、12世紀終わり頃から形成されだした在地の領主層クラスの屋敷であり、この谷戸を殿ヶ谷と呼称することからみても横地氏の居館跡であったことは間違いないであろう。当地を本貫地として領主を中心に台地の山野や山裾、谷戸田などの開発に勤めて領地経営を行っていた地方武士の典型的な居館の姿であろう。このことを裏付けるように、後に触れる伊平遺跡や横地城跡など周辺の中世遺跡の消長と、横地氏一族の動向とが密接に関連しているのである。調査の結果では、良好な保存状態の遺構や遺物が多数発見されており、平安時代末期から室町時代かけての地方武士の谷戸型居館跡として重要な情報を提供してくれるはずである。現在、家並の下に埋もれているためかなりの困難が予想されるが、今後とも継続的な発掘調査が実施されることが望まれる。



殿ヶ谷遺跡、礎石建物跡

②伊平遺跡

菊川町東横地伊平に所在し、横地域西方の谷戸の入口部に位置する。平成3年から平成6年にかけて、約7,000㎡を対象に発掘調査が実施された。遺跡は鎌倉時代から室町時代かけて横地氏が活躍する時期に営まれた屋敷跡と推定される遺構・遺物が発見されている。

舶載陶磁器の示す時期は、12世紀後葉から15世紀後半にかけての資料が主体であるが、大きく分けて三時期が考えられる。

I期に相当する12世紀後葉から13世紀前葉頃までの資料としては、白磁玉縁碗・皿類や端反碗類、同安系青磁の櫛掻文碗・皿と龍泉系青磁の劃花文碗などを中心とした組み合わせをもち、ある一定量が出土している。

II期の13世紀中葉から14世紀前半頃までの資料としては、龍泉系青磁の蓮弁文碗（B-0・1類）

と白磁口元皿（Ⅸ類）を中心とした組み合わせのものが高い出土比率を示している。この他、青磁では折縁・折腰皿や無文碗、白磁では四耳壺・印花文皿、青白磁では梅瓶・合子・水注・小皿類などがみられ、褐釉小壺や高麗青磁も含まれていた。年代観や器種・出土量の豊富さからすれば細分したいところであるが、遺跡の層位や遺構のあり方はそれを許さない状況であった。

次のⅢ期は14世紀後半から15世紀後半までの資料であるが、若干量みられたに過ぎない。龍泉窯系の青磁には無文端反碗（D-1類）・ヘラ彫や線描の蓮弁文碗類（B-2・4）・稜花皿などがあり、白磁の扶高台小皿（B群）や染付の端反小皿（B1群）などがある。この他に混入品かとも思われるかなり時期の下った染付碗（E群）が1点だけ出土しており、その年代は16世紀中～後半頃に位置付けられる。

出土遺物の特徴としては、主に12世紀後半から15世紀代頃かけての舶載・国産品の陶磁器類がある程度まとまって出土しており、その中に瀬戸・美濃産を中心として少量の舶載品を含んだ天目茶碗が多量にみられたことである。当遺跡から検出した遺構群は、出土遺物などからみて中世成立期の12世紀後半頃から営まれはじめた武士の屋敷であったと考えて間違いないさそうである。しかも舶載陶磁器類をかなりの量入手していることや、喫茶の習慣を身につけていたなどを考え合わせると、在地の領主層に近い立場にあった武士階層の屋敷であったと推測することができる。

③土橋遺跡

菊川町土橋字西軒に所在し、この地域は横地地区の西の玄関にあたり、交通の要所で弥生時代から平安時代にかけての集落跡が確認されている。平成8年10月から平成9年5月にかけて約4,000㎡を対象に発掘調査を実施した。発掘調査では、後世の削平により建物などは確認できなかったが、外郭に濠を廻らした方形の区画内からは井戸跡・土壇跡などが発見された。これに伴って古代末期から中世初期を主体にした夥しい量の東遠系の山茶碗類や木製品に混じって、東海地方産（常滑産等）や中国から輸入した陶磁器類が少量ながらみられた。木製品には生活用具（曲物・箸・下駄等）の他、この時期には珍しい呪術資料の形代類・呪符、笹塔婆などのまじないや信仰に關係する遺物が濠跡から多数出土している。

遺物の出土傾向をみると、舶載陶磁器はあまり出土していないが、白磁の玉縁碗（Ⅳ類）・端反碗（Ⅴ類）、同安窯系青磁飾瑠文皿や龍泉窯系青磁の劃花文碗（A1-2～4類）などの12世紀後半から13世紀前半頃までのものが目につく。それに比べ、殿ヶ谷遺跡では主体を占めていた13世紀中葉以降の龍泉窯系青磁の蓮弁文碗（B-1類）や白磁口元皿（Ⅸ類）などの出土量が減少しており、青白磁や褐釉を含め14世紀以降の舶載陶磁器は出土しておらず、瀬戸・美濃産の製品（古瀬戸前期様式）も殆どみられない。さらに山茶碗類の出土量の多さと比較して、かわらけの占める割合が極端に少ない点もこの遺跡がもつ特徴としてあげられる。

この遺跡は、遅くとも平安時代後期には屋敷が営まれはじめたと考えることができ、出土遺物からみると鎌倉時代後期頃までには屋敷の機能が失われていたことが伺える。当地域が賀茂社領であったことや、屋敷の外郭を廻る濠跡から豊富な呪術資料が出土したことは、この屋敷の動向と消長を考えるうえで興味深い資料を提供している。

④林光寺遺跡

菊川町土橋字天白に所在する。遺跡は西横地から奈良野にかけて南北に広がる低地部にある微高地に立地する。平成6年10月から平成7年4月にかけて約3,400㎡を対象に発掘調査を実施した。遺跡

は調査の結果、古墳時代前期から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。中世期の遺構としては、掘立柱建物跡、溝跡などが検出されているが、遺構密度が低く小規模な掘立柱建物で集落の中心的な空間ではなかったと推測される。遺物は山茶碗類が多量に出土しており最も多く、次いでかわらけなどの土師質土器類で占められていたが、常滑産や瀬戸・美濃産、舶載品の陶磁器類は極めて少ないのが特徴である。その殆どは大溝跡から出土したものである。

舶載陶磁器の時期をみると、主体は白磁で12世紀後葉から13世紀前半葉の白磁端反碗（V類又はⅦ類）が最も多く、白磁皿Ⅲ類に近い形の小皿も1点みられた。その他、青白磁合子と青磁鎗蓮弁文碗（B-1類）が各1点出土しただけである。

⑤宇藤遺跡

菊川町神尾字大平に所在し、神尾地区の西に位置している。遺跡の立地する地点は、昔から菊川と牧之原、横地を結ぶ交通の要所となっている。平成9年7月から同年10月にかけて約2,000㎡を対象に発掘調査が実施されている。遺跡の時期は、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡であり、近世には寺院となっていたことが判明した。中世期には、掘立柱建物跡や柱穴群、井戸跡などの屋敷跡の一部と予想させる遺溝が検出されているが、調査区が屋敷地の東側の隅にあたり主体は西に広がっていると思われる。遺物は、柱穴や井戸跡などの遺溝に伴って出土しているが、大半は包含層となっている。舶載陶磁器の全体を通しての年代観は、12世紀後葉から16世紀前半頃までの資料で、その種類には青磁・白磁・青白磁・染付がみられたが、組成などの特徴から二次期に大別される。

I期は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗（B-1類）・無文碗、青白磁印花文皿などの資料が13世紀中葉から14世紀前半頃までの所産のものであろう。

II期は龍泉窯系青磁の端反碗（D-2類）・線描蓮弁文碗（B-4）・桜花皿、染付の碗（D群）・蓮子碗（C群）・直口型碗（R群）やゴケ底の染付皿（C群）などで、15世紀前半から16世紀前半にかけての資料である。

この他、出土量が少なく散って面期を想定しなかったが、当遺跡からも殿ヶ谷遺跡や伊平遺跡などで確認された、この地域の中世成立期の資料である白磁端反碗（V類）・白磁皿Ⅶ類（13C前半）、同安窯系青磁磁種文碗の12世紀後葉から13世紀前半頃までのI期より古手ものが各1点ずつであったが出土している。ところが、舶載陶磁器である一定量出土した殿ヶ谷遺跡や伊平遺跡からは、当遺跡で出土した青磁碗E群と染付皿C群が現在までのところ発見されておらず、これは何を意味するのだろうか。15世紀後半から16世紀前半頃までの資料と考えられ、横地氏の滅亡を前後する時期のもので今後の調査研究の成果を持って結論としたい。

⑥潮海寺門前町遺跡

菊川町潮海寺字下ノ段に所在し、真言宗潮海寺の南側の門前に位置している。潮海寺地区には、現在でも潮海寺に関連する地名や僧坊名が多く残されており、門前町として古代から中世にかけて栄えた。当遺跡も、その影響下で成立したと考えられる中世遺跡である。平成7年3月から同年5月にかけて702㎡を対象に発掘調査が実施された。調査では、掘立柱建物跡、土坑跡、濠跡、溝跡、井戸跡などが検出され、中世期の集落であることが明らかとなっている。遺物が示す年代は、12世紀末葉から17世紀初頭の時期がみられ、濠（SD-13）からは古瀬戸前期から大窯V期にかけての資料が多量に出土している。また調査地点は寺院址としての伝承を残しているが、調査の結果からはその痕跡を見出すことができない。

舶載陶磁器の全体の年代観は、12世紀後半から16世紀中葉頃までの資料で青磁・白磁類だけが出土した。この地域の中世成立期にあたる12世紀末葉から16世紀中葉頃までの資料である白磁端反碗（Ⅴ類）や龍泉窯系青磁の劃花文碗（A 1-2~4）ものが少量出土している。さらに出土量や組成から主体をなした時期が13世紀後半から14世紀前半と、14世紀末葉から15世紀代までの資料であり、新旧に別けることが可能である。古手ものは、龍泉窯系青磁の蓮弁文碗（B-0・1類）がみられ、新手ものには、龍泉窯系青磁のへう彫蓮弁文碗（B-2類）・線描蓮弁文碗（B-3・4類）、白磁小盃などが出土している。また15世紀後半から16世紀前半の所産と考えられる青磁直口型碗（E群）も4点みられた。

注目されるのは、少量ながら横地氏の滅亡以降の時期を示した16世紀段階の資料である青磁菊花碗や白磁の菊皿（D類）・内寄皿（E類）ものがみられた。現在までのところ伊平遺跡で1点出土した染付碗（E群）以外で、この時期の舶載陶磁器を出土しているのは当遺跡だけである。

⑦善福寺遺跡

菊川町富田字大門に所在する。遺跡は富田川が菊川と合流する上流部の大きく蛇行した西側低位の丘陵部に立地している。善福寺は同寺縁起によると、潮海寺末寺として創建されたと伝えられているが今は曹洞宗寺院となっている。善福寺の周辺には現在でも、東西100m、南北130mにも及ぶ大規模な範囲に土塁が残されており、西側の丘陵に立地する富田城跡や、殿前などの地名を残すことから中世居館の可能性が指摘されている。発掘調査は、平成5年7月から11月にかけて南側土塁の外側の約1,500㎡を対象に実施された。調査では、整然と配置された掘立建物や堀などの遺構が検出されている。出土遺物は全体に少ないが在地産の山茶碗類や土師質土器類とともに、東海地方産・舶載品の陶磁器が少量みられたに過ぎない。

舶載陶磁器としては、碗類を中心に青磁の占める割合が高く龍泉窯系青磁の蓮弁文碗（B-0・1類）・折縁皿（Ⅲ類）などがみられ、白磁は口元皿（Ⅸ類）と不明碗が出土している。これらは鎌倉で主体をなしていた時期の13世紀後半から14世紀前半の組成と共通したものである。

⑧横地城跡

菊川町東横地に所在する。遺跡は菊川町横地を本貫地として領地経営にあたり、鎌倉御家人としても活躍した横地氏によって、室町時代に築造された古い様相をもつ山城である。横地城は、応仁の乱後の文明8年（1476）今川氏の攻撃により落城し、横地氏もその時に城と共に没している。発掘調査は平成8年10月、同年11月、同10年8月の3回で、遺構の確認を目的にして合計130㎡の範囲を対象にトレンチ調査が実施された。遺構は平場や堀切・堅堀などの一部が確認され、それに伴って15世紀代に比定される土器類などの遺物を中心に少量出土している。

舶載陶磁器について観察すると、15世紀前半～後半までの資料で青磁・白磁類のみで構成されている。調査で出土した舶載陶磁器は24点みられたが、内訳は青磁の碗・皿類が21点であり、白磁は皿だけで3点が出土しており、碗類に比べて皿類の占める割合が極めて多いことがこの遺跡の特徴としてあげられる。次に年代観について触れると、15世紀前半の所産と思われる資料は、龍泉窯系青磁の線描蓮弁文碗（B-3類）・雷文帯碗（C-2類）などである。これよりも新しい時期の資料には、線描蓮弁文碗（B-4類）と青磁桜花皿・無文皿などの15世紀中葉～後期頃のもので、16世紀に下る舶載陶磁器は発見されていない。15世紀後半の青磁碗・皿がこの遺跡の下限年代を示しており、横地城が今川氏の攻撃により文明8年に落城した史実を裏付けるものであろう。

3) 東遠江周辺の中世遺跡の様相

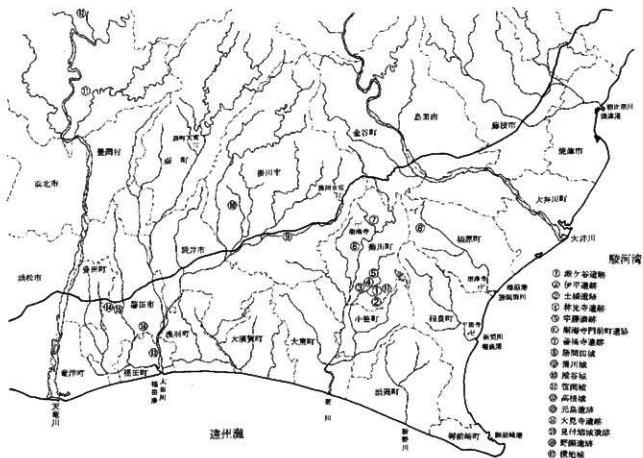
⑧勝間田城跡

榛原郡榛原町勝間田に、所在する山城である。国人領主勝間田氏によって築かれた山城で、文明8年(1476)今川氏との戦いに敗れ落城している。昭和58年2月に静岡県指定史跡となり、12,695㎡が公有地化され保存されている。昭和60年度より史跡整備に伴う発掘調査が開始され、平成5年度までに計7回の発掘調査が実施されている。調査の成果としては、堀立柱建物、井戸状遺構などの遺構群が検出され、出土遺物はかわらけ等の土師質土器類、瀬戸・美濃産や東遠江産(志戸呂・ミツ沢窯)、舶載品の陶磁器類などが各産地の製品が遺構に伴って良好な状態で出土している。室町時代に築城された山城の一端が明らかにされており、今川氏により横地城と同時期に落城したと伝えられ、勝間田・横地両氏の動向や関係を探る上で貴重な遺跡となっている。

舶載陶磁器を観察すると、主に13世紀後半から15世紀後半頃にかけての資料で青磁・白磁・染付・褐釉類などで構成されており、出土量や組成から二次期に大別される。

13世紀中葉から14世紀前半頃までの資料は、龍泉窯系青磁の蓮弁文碗(B-0・1類)・白磁口元皿(IX類)の組み合わせで少量ながら出土した。

次に15世紀前半～後半頃までの資料である。15世紀前半までは、龍泉窯系青磁雷文母碗(C類)と挟り高台白磁皿(B群)が高い出土比率を示し、白磁面取盃も少量みられた。15世紀中葉から後半の



第25図 東遠江周辺の中世遺跡位置図

ものは、龍泉窯系青磁の線描蓮弁文碗（B-4類）・稜花皿の量が目立ち、さらに染付は端反碗・皿（B・B1群）である。当地域では珍しい褐釉系天目茶碗が8点と、赤絵皿なども出土している。

以上のように舶載陶磁器では、1期のような鎌倉時代後期に遡るものや14世紀後半頃の端反碗（D1類）も少量みられるが、15世紀前半～後半にかけての出土量の多さや器種構成の豊富さからみて、その繁栄ぶりが想像される。16世紀に下る時期のものはほとんど認められず、文明8年落城ということに関連性をもっているに違いない。

⑨掛川城跡

掛川市掛川字元城中に所在する。掛川城は、標高55mの龍頭山を中心にその周辺の独立丘陵部におよんでいる。現在、復元されている掛川城は、天正18年（1590）豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻め滅ぼした直後、秀吉幕下の大名山内一豊によって築かれた近世掛川城を模したものである。それ以前、16世紀前半には今川氏の重臣である朝比奈氏によって軍事、交通の要所という重要性からこの地に山城が築かれている。発掘調査は、掛川城天守郭復元事業に伴って平成元年4月から5年11月の期間に実施され、朝比奈氏の時代に関連する三日月堀や露盤堀などの遺構が検出され、中世城郭の特徴を良く残している。また本丸御殿地区の下層からは、朝比奈氏の築城以前に遡る中世墳墓群や礎石建物跡などの遺構が発見されており、中世前半期におけるこの地の様子を知ることができる。

出土遺物に関しては、掛川市教育委員会のご好意により掛川城復元調査報告資料だけではなく、平成10年度までに実施された周辺丘陵部の発掘調査で出土した、未発表資料の舶載陶磁器も含めて調査を行っている。

舶載陶磁器の年代をみると、この遺跡の変遷を裏付けるように12世紀後葉から16世紀後葉の中世全般に継続する遺跡であったことを窺わせている。中世成立期には龍泉窯系青磁の劃花文碗や白磁の玉縁碗・平底皿（V類）、鎌倉後半期を示す青磁線蓮弁文碗や白磁口元皿などが少数であるものの認められた。白磁平底皿（VI類）は鎌倉では出土しておらず、12世紀前半から中葉頃までのものである。

15世紀代を中心とした時期の青磁・白磁・染付が占める割合は極めて高く、前半期では青磁端反碗（D類）、後半期には青磁線描蓮弁文碗（B-4類）、白磁端反皿（C類）、染付の蓮子碗（C群）や端反碗・皿（B・B1群）、茗荷底皿（C群）が共に目立った出土状況を示していた。この他、涼州窯系の黒釉碗も1点認められた。

16世紀中～後葉に位置付けられる染付碗・皿E群が認められたことは、この遺跡における中世期の終焉を物語りものである。

⑩殿谷城跡

掛川市本郷字中殿谷に所在する戦国期の山城である。原野谷川流域に国人領主として君臨した原氏の居城である。この城は文献から文明年間に築城され、明応3年（1494）に今川氏の攻撃を受けて落城するが、その後改築されて16世紀前半までは機能していたようである。発掘調査は昭和57年11月から翌年6月にかけて約4,000㎡を対象に実施され、その結果、城郭構造が明らかになっている。調査によって、曲輪から掘立柱建物、土堀、堀切などの遺構が検出されている。遺物を見ると、一の曲輪からは15世紀から16世紀前半の時期を示す良好な資料が多数出土している。この城は掛川周辺の中心的な要害地に築かれており、東海道を望む要所として陸路交通の文化の影響を強く残した遺跡であり、出土遺物の特徴がそれを物語っている。

舶載陶磁器を観察すると、白磁や染付類が多く彩り豊かであるのに対し、青磁の占める割合が極端

に低く敷点してなかったことが出土傾向にみるこの遺跡の特徴といえよう。さらに年代については、他の城郭で少量ながら出土する中世前半期の資料が1点も認められない。わずかに挟り高台の白磁皿や盃が15世紀前半と考えられるものであるが、白磁の端反皿・菊皿や染付の蓮子碗・端反皿・碁筭底皿といった一帯がこれらの主体をなしており、15世紀後半から16世紀前半にかけての年代観が与えられよう。

⑪笹岡城跡

天童市二俣町二俣に所在する。城については『遠江国風土記伝』の記載によると、「文亀年間、近江守昌長これを築くか、郷人は古城と謂うなり」とあり、16世紀頃の築城説が窺える。また伝承として、ある時期までは「侯城」と呼称されていたようである。昭和42年に新庁舎建設に伴う発掘調査が実施され、土塁や井戸などの遺構と共に、かわらけ、山茶碗、舶載陶磁器が出土し、この遺跡が中世後期の城館であったことを示す資料が提示されている。この城が立地する北遠地方は、中世後期には斯波氏と今川氏の抗争の中で犬野・奥山・松井の各氏などの國人領主がひしめく地域であり、笹岡城はその歴史的背景の中で成立したものと推測できよう。

舶載陶磁器は、青磁・白磁・青白磁・染付がわずかに出土している。時期をみると、中世前半期のものは認められず、最も古いのが15世紀後半頃にあたる挟り高台をもつ白磁皿B群である。青磁の線描蓮弁文碗・棧花皿や白磁端反皿は15世紀前半にかかわる頃のものと思われ、さらに青磁端反皿・菊皿と染付皿(B1・E群)は16世紀代の年代観が与えられよう。

⑫高根城跡

水窪町地頭字久頭郷の通称三角山に所在する。城は河内川と水窪川が自然の堀の役割を果たし、山は急傾斜の地形となり、天然の要害で囲まれている。また水窪地域は、古代から信州と遠江を結ぶ交通の要所となっている。奥山家文書「山緒書状」には、応永31年(1424)に高根城内に五輪塔を建立して、葬り祭ったという伝承がある。築城時期を示す資料は、文献上では永正10年(1513)名の山住神社の棟札に「当国地頭方村久頭郷城主 一中略一 奥山氏」とあり、奥山氏が築いた城とされる。奥山氏はこの地域の國人領主で、今川・武田・徳川氏の勢力争いの波に強く影響され、揺れ動く奥山氏の動向と城の変革は、この地域の戦国期の動向を窺いみることができる。発掘調査は、保存整備事業に伴い平成5年12月から開始され、平成10年までに土塁、二重堀切、本曲輪の虎口の遺構が発見され、武田氏によって改修されたことが裏付けられている。出土遺物は12世紀から19世紀にいたる土器類が主体をなしているが、平成10年度の本曲輪の調査では礎石建物跡に伴ってまとまった量の陶磁器類が出土している。

高根城跡からは舶載陶磁器が計27点出土している。内訳は染付端反皿(B群)の1点を除く残りのすべてが青磁であり、しかも大半が碗で占められており皿類は認められなかった。さらに注目されるのは、15世紀前半の端反皿や線描蓮弁文碗なども出土しているが、15世紀後半と思われる新しいタイプの線描蓮弁文碗の割合が極めて高いのが、この遺跡の特徴であろう。

⑬元島遺跡

磐田郡堀田町豊浜字一本松に所在し、遺跡は遠州灘の河口付近で太田川流域の海拔2m程の平野に立地している。太田川は、遺跡地の上流約1kmの地点で麻野谷川と、さらに下流1km程で古代に国府あった磐田見付を流れる今之浦川とも合流しながら遠州灘へとそそぎ込んでいる。河口周辺は古くか

ら知られた福田湊であり、近年まで船着場や河岸などが設けられ、物資を運ぶ船が往来していたようである。この地域が遅くとも中世前期には、港町として河川を利用した水運と、遠州沿岸の海上交通の拠点となった可能性が考えられる。元島の由来については、文献によると慶長9年(1604)の地震による大津波がこの周辺の集落を襲い壊滅的な被害を与えたという、その後行われた太田川の河道改修に伴い大島村と小島村を移転したことから、この地を元島と呼んでその名を残したという。

発掘調査は、平成6年7月から平成9年6月にかけて財団法人静岡県埋蔵文化財研究所によって調査が行われ、溝や濠で区画された中に獨立建物、井戸、土塙などの屋敷を想像させる遺構群が検出され、さらに屋敷の一部に付随して舟入り施設と思われる遺構も発見されている。それに伴って、おびただしい量のかわらけ・ナベなどの土師質土器類や瀬戸・美濃産の製品、常滑産、舶載品などの陶磁器類の良質なものが豊富にみられ、さらに舟の礎なども発見されている。このように遺跡は、溝や濠を運河のように巡らした町割に船着場をもつ屋敷や倉庫が点在するような、福田湊に関連した中世集落の一部ではなかったかと想像される。おそらく太田川やそれに合流する河川を利用した水運と沿岸の海上交通、さらに見付から東海道へと抜ける陸上交通の手段も含めて周辺地域への物資集散地として重要な役割を果たしていたことが推測されよう。これから述べる舶載陶磁器の動向もまさにその様子を物語っている。

舶載陶磁器に関しては、青磁の碗・皿・盤・形象物類、白磁の碗・皿・盃・四耳壺・小壺類、青白磁の皿・小壺類、染付の碗・皿類、天目茶碗などの質量ともにバラエティに富んだものが認められ、これらが示す年代は主に12世紀後半から15世紀代にかけての資料であった。

この遺跡の上限年代を示したものとしては、白磁の玉縁碗・端反碗(Ⅳ・Ⅴ類)や龍泉窯系青磁刻花文碗や同安窯系青磁描蓮文皿などといった12世紀後半から13世紀前半にかけての資料が少量ながら出土しており、さらに13世紀中葉から14世紀前半までの所産と思われる資料に龍泉窯系の線描蓮弁文碗や折縁・折腰皿・盤類や白磁口元皿などがある程度の量が認められた。その他、少量であるが同時代の青白磁の型作皿・水滴・壺などの良質な小物類、また14世紀後半にやや時代の下の白磁大皿や龍泉窯系青磁端反碗(D1類)などが認められた。

この遺跡で主体となる舶載陶磁器は、15世紀代を中心とした時期の一群である。15世紀前半までの資料は、龍泉窯系青磁の富文帯碗(C類)・端反碗(D-2類)と、白磁の面取盃と共に挟り高台皿(B群)がまとまった出土量を示していた。15世紀中葉～16世紀初頭の資料としては、龍泉窯系青磁の線描蓮弁文碗(B-4類)・直口型無文碗や稜花皿が一定量みられ、白磁には端反碗・端反皿(C群)、染付の蓮子碗(C群)や端反碗・皿(B・B1群)が認められた。

14 大見寺遺跡

磐田市見付に所在する口照山大見寺の境内遺跡のことである。昭和60年度に発掘調査を実施した見付端城遺跡第5次調査の地点にあたり、そこから出土した資料を一括してまとめたものである。

大見寺遺跡から出土した舶載陶磁器の特徴は、青磁類が全体の9割近くにおよび圧倒的に多い。白磁は玉縁・端反碗などの12世紀後半頃の古いものが数点しか出土しなかった。青磁は碗類を中心に皿や盤などが認められ、年代観から14世紀と15世紀の二次期に大別することができる。14世紀のものは韓国の新安沖合引揚品の中に多く認められた種類の青磁碗と近似した一群と、それと同年代と思われる14世紀頃の皿や盤であった。15世紀は、前半の線描く蓮弁文碗(B-3類)や中葉から後半の所産の線描蓮弁文碗・稜花皿である。

⑬見付端城遺跡

磐田市見付に所在し、旧東海道の宿場町である見付宿の中央部に位置する。見付地区には、遠江国分寺をはじめ古代から遠江の政治・文化の中心地であったことは確かで、時期は下がるが鎌倉時代に書かれた『東関紀行』には「見付の国府」との記事も見受けられる。見付端城は室町時代初期に築城されたという。文献上では天文6年(1537)の犬野文書が初見で、これによると見付端城は堀越氏と天野氏との戦いで落城したという。その後、城館として再興されているが、永禄12年(1569)徳川家康による城ヶ崎城(見付新城)への移転に伴って廃城したことが『三河記』に認められる。大見寺に伝えられた元禄11年(1698)の『大見寺絵図』から見付端城の様子を窺い知ることができる。発掘調査は、昭和56年1月より昭和60年7月までの期間に計6回の調査が実施され、15・16世紀代を主体とした遺構・遺物が発見されている。

鉋載陶磁器類には、青磁の碗・皿・盤・酒会壺・香炉・花生類と白磁の碗・皿・盃・四耳壺・水注類、染付の碗・皿や褐釉系陶磁器などが含まれており、中世全般に継続する遺跡であるために青磁が7割近くと圧倒的に多く器種構成も豊富であった。年代をみると、主に12世紀後半から15世紀代にかけての資料が中心となっている。

ところが青磁において注目すべき点は、これら以前に遡る平安時代前半期に中国から輸入された、大変珍しい越州窯系青磁が3点認められたことである。越州窯系青磁の出土事例は、福岡県の博多遺跡・太宰府跡と奈良・京都を中心とした都城遺跡から集中して出土している。しかし、東日本では宮城県多賀城跡からある程度まとまった出土例が報告されている以外、極めて少ない。関東地方における出土例をみると、国分寺との関連性を窺わせる武蔵国分寺遺跡や千葉県荒久遺跡からの資料、官衛との関連が指摘されている神奈川県中原上宿遺跡などのわずかな数遺跡に留っており、さらに刑窯や定窯の白磁の出土例を含めても、極めて限られた遺跡だけである。これら鉋載陶器の出土地は、官衛または国分寺といった中央との強い繋がりをもつ遺跡からの発見例が多く、その時期は共作遺物の年代からみて少なくとも9世紀後半から10世紀中葉頃にかけてのものと思われる。

この遺跡の周辺は、遠江国分寺や総社(淡海国玉神社)が置かれていた地域であり、遠江国府推定地として総社東方にあたる見付端城付近に比定されていることから考えてみて、この越州窯系青磁も国府との関連性を想定しておきたいところである。

まず、12世紀後半から13世紀前半にかけての時期のものには、白磁としては玉縁碗・端反碗(Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ類)、皿類(Ⅲ・Ⅵ～Ⅶ・Ⅷ類)などがすべて少数であるものの認められた。また白磁碗Ⅱ類・皿Ⅵ類は主体を12世紀前半におき後半まで若干残るものであり、この時期では白磁端反碗Ⅶ類の出土比率が高いのが目立っている。青磁では、龍泉窯系青磁の劃花文碗(Ⅱ・2類多し)が大半を占めており、同窯系青磁の櫛掻文碗も少量ながらみられたが、皿類は出土していない。

13世紀中葉から14世紀前半にかけての時期には、鎌倉では市街地のどこでも一般的に出土する時期のもので、龍泉窯系鍋蓮弁文碗(Ⅰ・5類主体)を中心にして、折縁皿・盤類や白磁口元皿(Ⅸ類)などの組み合わせである程度出土している。

鉋載陶磁器で最も多いのが見付端城にかかわる時期の資料である。14世紀後半から15世紀前半頃までの資料には、龍泉窯系青磁の無文端反碗(D 1類)・雷文帯碗(C類)・線描蓮弁文碗(B-3類)などがみられ、白磁は主に持ち高台皿(B群)であるが、面取盃も少量みられた。15世紀中葉から後半のものは、龍泉窯系青磁の線描蓮弁文碗(B-4類)・直口方無文碗や稜花皿・端反皿の量が目立ち、盤類も少量ながら認められた。染付は端反碗・皿(B・B 1群)の占める割合が高い。

以上のように鉋載陶磁器では、12世紀以前の遠江国府に関連した考えられる越州窯系青磁が認めら

れ、北条氏の係る伊豆斐山の円成寺遺跡の12世紀後半～14世紀前半の屋敷的時期と、近い年代の一群もある一定量が出土している。見付端城の築城遺構に14世紀後半から15世紀にかけての出土量の多さや器種構成の豊富さからみて、見付端城の繁栄ぶりが想像される。16世紀に下る時期のものはほとんど認められなかった。

⑩野際遺跡

磐田市東貝塚の南側の低地部にある微高地に所在し、位置は今之浦川を挟んで西に見付の丘陵、東がこの遺跡のある丘陵になっている。当地の東側には小字で鎌田という地名がみられ平安時代に成立した鎌田御厨の中心地であったと考えられ、その影響を受けて古代から中世にかけてこの地域が発展したと推測される。しかし武士の台頭する中で御厨は衰退して行き、室町時代後期には国人領主松井氏の一部所領へと変貌を遂げていくのである。遺跡は昭和56年9月に行われた試掘調査をはじめに昭和59年2月までに3回の発掘調査が実施されている。調査では、古い時期の遺構として奈良時代の掘立柱建物跡などがみられたが、中世期には井戸、土坑、柱穴などの遺構に伴って多数の遺物が出土しており、この地に中世集落が営まれていたことが確認されている。

舶載陶磁器の最も出土量の多いのは、白磁の玉縁碗や端反碗、同安窯系青磁模写文碗・皿や龍泉窯系劃花文皿などの12世紀後半～13世紀初頭頃までの時期で、白磁碗を中心に一定程度まで出土している。次に出土量が多く認められたのは、龍泉窯系鎗蓮弁文碗や同時期の無文碗を主体とした13世紀中葉から14世紀前半までのものであり、この時期以降は減少して15世紀の青磁線描蓮弁文碗（B-3・4）と挟り高台の白磁皿の資料が数点認められたに過ぎない。

参考文献

- | | | |
|------------------|-----------|---|
| 菊川町教育委員会 | 1988 | 殿ヶ谷遺跡 菊川町埋蔵文化財調査報告書第12集 |
| 〃 | 1995 | 横地城南遺跡群発掘調査報告書（伊平遺跡・小太郎館） 菊川町埋蔵文化財調査報告書第35集 |
| 〃 | 1995 | 潮海寺門前町遺跡 菊川町埋蔵文化財調査報告書第39集 |
| 〃 | 1996 | 殿ヶ谷遺跡第4次発掘調査 菊川町埋蔵文化財調査報告書第51集 |
| 〃 | 1997 | 菊川町文化財年報-第4号- |
| 〃 | 1998 | 菊川町文化財年報-第5号- |
| 〃 | 1999 | 林光寺遺跡 菊川町埋蔵文化財調査報告書第55集 |
| 静岡県 | 1990 | 資料編2 考古- |
| 静岡県教育委員会 | 1981 | 静岡県の中世城館跡 静岡県文化財調査報告書第23集 |
| (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1998 | 年報XIV（平成9年度事業概要） |
| 磐田市教育委員会 | 1984 | 野際遺跡Ⅱ・Ⅲ地点発掘調査概報 |
| 〃 | 1986 | 昭和60年度見付端城発掘調査概報 |
| 〃 | 1993 | 見付端城遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1994 | 野際遺跡発掘調査報告書 |
| 天竜市教育委員会 | 1972 | 遠州笹岡古城-昭和43年度発掘調査報告- |
| 水窪町教育委員会 | 1994～1998 | 高根城Ⅰ～Ⅴ 水窪町文化財調査報告書第1集～第5集 |
| 掛川市教育委員会 | 1985 | 殿ヶ谷城址他遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1996 | 掛川城のすべて |
| 〃 | 1998 | 掛川城復元調査報告書 |

第9表 各滑跡器種組成表

[illegible]

※合計()の通称は、一部の上欄の小計を省略する。

項 目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359	1360	1361	1362	1363	1364	1365	1366	1367	1368	1369	1370	1371	1372	1373	1374	1375	1376	1377	1378	1379	1380	1381	1382	1383	1384	1385	1386	1387	1388	1389	1390	1391	1392	1393	1394	1395	1396	1397	1398	1399	1400	1401	1402	1403	1404	1405	1406	1407	1408	1409	1410	1411	1412	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426	1427	1428	1429	1430	1431	1432	1433	1434	1435	1436	1437	1438	1439	1440	1441	1442	1443	1444	1445	1446	1447	1448	1449	1450	1451	1452	1453	1454	1455	1456	1457	1458	1459	1460	1461	1462	1463	1464	1465	1466	1467	1468	1469	1470	1471	1472	1473	1474	1475	1476	1477	1478	1479	1480	1481	1482	1483	1484	1485	1486	1487	1488	1489
-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

瓦からみた菊川町の中世

原 廣 志

1. はじめに

今日の日本中世史への関心の高まりは、中世遺跡の発掘調査などの中世考古学の成果に迫るところが大きい。考古学と文献史学の協力・交流とともに、さらに民俗学・地理学・建築学・自然科学等の学問分野の新たな視点からのアプローチにより、各々が対象にしている資料・史料が人間生活のそれぞれの側面を明らかにし、重要な手懸かりが提示されてきている。今回の報告も横地の中世史を総合的な視点からのアプローチにより解明をこころめたものである。遺跡の性格やその年代を決定する役割を果たしているのが遺跡から出土する多くの遺物であり、主に中国からの舶来品を含んだ陶磁器類、在地で生産された土器類は豊かな研究史をもっている。

ここで述べる瓦類の歴史については、古代から中世にかけて寺院を中心に宮都・地方官衙などの限られた建物に用いられていたもので、城郭に用いられるようになるのは安土桃山時代に入った時期からである。中世瓦についての考古学的研究につながる論文として、昭和53年の上原真人氏による『古代末期における瓦生産体制の変革』の研究は、古代末期の軒瓦の変遷、生産体制、需給関係などの解明による基礎的作業と、それに伴う瓦生産について古代末期の特質の分析を行った先駆的な報告として評価されるものである（上原 1977）。奈良では薬師寺の発掘調査から古代～中世にかけての瓦編年がまとめられ（奈良国立文化財研究所 1980）、特に大和を中心とした鎌倉・室町時代の巴文鏡瓦の年代確実な資料の集成を行っており、さらに元興寺極楽坊の中世・近世瓦について瓦当文様や製作技法の変遷が報告されている（藤沢 1982）。関東では新田氏の本拠地である群馬県世良田長楽寺の発掘調査で出土した中世瓦の報告した大江正行氏（大江 1978）や木津博明氏の土野岡における大和系瓦工人の影響を論じた研究成果がある（木津 1987）。また高井梯三郎氏により筑波山麓を中心に周辺地域の中世瓦の分布を追求した先駆的な論稿がまとめられている（高井 1979）。その後、小林康幸氏の関東地方全体を対象とした基礎的研究が報告された（小林 1989）。

このような研究成果を踏まえながら、近年各地で中世瓦における資料蓄積の進展がみられ、製作技法を含めてようやく研究が活発化しつつある。近畿地方では、佐川正敏氏により『法隆寺昭和資材帳』の作成に伴う瓦の総合的な研究成果（佐川 1992）と、その後の全国規模の追跡調査で東北地方から九州地方までの鎌倉時代瓦の製作技法・瓦当文様をもとに変遷をまとめている（佐川 1995）。また市本芳三氏により大阪府堺市日置荘遺跡の出土瓦をととして大阪府下の古代末～中世瓦を集成し、その様相が判明してきている（市本 1993）。一方東日本では、岩手県が平泉出土瓦をまとめた鎌田勉氏（鎌田 1994）、福島県が伊達氏菩提寺に伴う出土瓦の論考を行った山中雄志氏（山中 1991）、栃木県が足利市を中心にして足立佳代・斉藤和行氏（足立・斉藤 1993）、群馬県が綿貫鋭次郎氏の白石大御堂遺跡の調査に伴う報告（綿貫 1991）や時枝務・五十嵐信氏の論考（時枝・五十嵐 1996）、茨城県は山崎信二氏が三村山極楽寺出土瓦を考察し（山崎 1993）、また橋場君男・桃崎祐輔氏による常陸南部の中世瓦の分析・検討がまとめられ（橋場・桃崎 1995）、埼玉県が荒川正夫氏の早稲田大学本庄校地の発掘調査報告（荒川 1993）や石川安司氏の势力的な研究成果が発表されている（石川 1994・1995・1998）。東京都は清野利明氏による日野市京王百草園の発掘調査成果や梵鐘の文様との対比した研究があげられる（清野 1993・1996）。神奈川県は横須賀考古学会のまとめた『神奈川県の中世瓦集成図録』（赤星・竹澤 1990）や鎌倉の中世寺院に関係した調査報告や研究が発表され、関東地方を中心とした地域での報告・研究が蓄積され、中世瓦の様相が明らかになりつつある。

本稿では、現在まで具体的な状況があまり知られていない菊川町の古代末～鎌倉時代の瓦について考えてみたい。

2. 菊川町出土の中世瓦概要

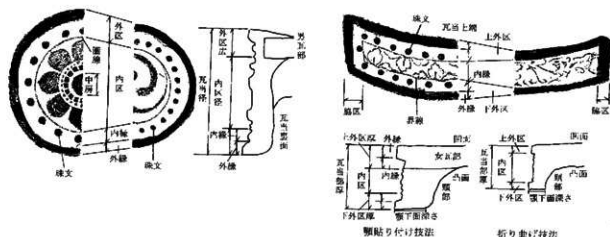
ここでは古代末～中世の瓦を出土する潮海寺と、そこに瓦を供給していたと推定される窯業遺跡である皿山古窯跡群採集瓦、さらに潮海寺と類似した資料が採集された慈眼寺の瓦類についても概要を少し述べておきたい。

a. 潮海寺出土瓦（第27・28図-1～9）

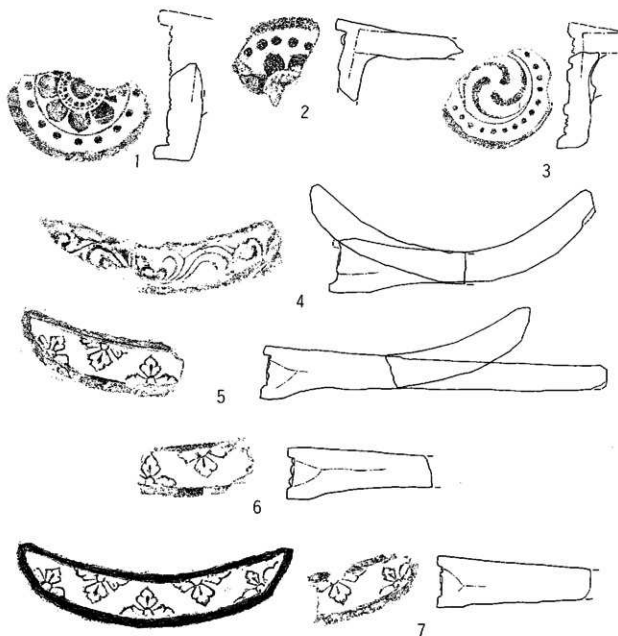
潮海寺から出土した軒先瓦のうち現在同寺に収蔵されているものと、菊川町教育委員会が所蔵している資料は釐瓦3点、宇瓦8点である。この他に女瓦には縄目叩き・斜格子目叩き・調整を施した叩き目の不明なものがあり、男瓦は行基式のものや玉縁式のものや潮海寺収蔵の資料にみられた。

釐瓦：1は八葉素弁蓮華文である。小径の中房に蓮子がなく、その外側に四角と円形を組み合わせた雄蕊を巡らし、弁区には弁端の尖った果実形の子葉を持たない素弁形式の蓮華文で内外区に分ける圏線に弁端が接する。外区外縁の大粒の珠文は弁端と弁間に対応した形で16個と推定される。胎土は灰白色で表面がくすぶ状に灰黒色になる。2も果実形の子葉を持たない素弁蓮華文と考えられるものである。弁区と珠文帯の間に圏線がなく、珠文は弁端と弁間に4個と密に配す。1・2の瓦当裏面は横位ナデで平坦に裏整する。3は内区に三巴文を配したものである。巴頭部は先端がやや角ばったもので、尾部は隣の巴と連結して圏線状を呈す。外区内縁に珠文を密に配す。瓦当裏面は横位ナデを施すが指頭痕が残る。

宇瓦：4は均整唐草文、5～7は同范の半截花文である。4は二重のハート形の中心飾を置き、分岐した枝葉をもつ唐草文を反転させている。半截花文字瓦は拓本で合成復元したように、中央と両端が上向きでその間に下向きの半截花文を配したものである。4～7の瓦当部は女瓦凸面の端部に向けて厚くなる様に粘土を貼り付けたもので曲線顎状を呈す。顎下面は横位の削りで成形し、顎部から女瓦部にかけては縦位のヘラ削り・ナデや指頭痕が認められる。8は中心部に宝相華文を置いた均整唐草文と考えられるもので、唐草文は主葉の先端や付け根から枝葉が多く派生する。瓦当部は折り曲げ技法と思われ、顎下面から顎部にかけて横位ナデで調整する。女瓦凸面は縄目叩を施し、凹面は布目痕があり、瓦当上端をヘラ削りで面取りする。9は半截花文である。内区に界線と接した半截花文を上下の向きで交互に配し、端の花文は上向きで3分の2程で脇区に取りつく。外区内縁には上



第26図 軒先瓦の各部名称・計測部分



合成復元図

第27図 軒先瓦(1) 1~7 潮海寺 S=1/4

面中央に小突起のある大粒の珠文を配す。瓦当部は顎貼り付け技法で、割口面の一部にへう刻みの痕跡が見られる。

b. 皿山古窯跡群出土瓦（第28図-10~12）

10~12は字瓦である。10は下半を欠失しているが、外区外縁の珠文は上面中央に小突起をもつ大粒の珠文がある。製作技法は女瓦端部に粘土を盛った顎貼り付け技法、接合部の女瓦凸面に×状のきざみを入れて接合を良くしている。潮海寺出土例9の半截花文字瓦とは製作技法を含め、胎土・焼成の酷似した同范瓦とみて間違いないさそうである。11は宝相華唐草文である。中心飾に花形を置き、唐草文は主莖の先端から枝葉が多く派生したものである。

瓦当部は折り曲げ技法、顎下面から顎部にかけて横位ナデで調整、女瓦部凸面は縄目叩きをわずかに残す。凹面は布目痕があり、瓦当上端と側縁をへう削りで面取りする。12は范ずれるが宝相華文と

考えられる。瓦当部は顎下面から頸部にかけて横位ナデで調整するが、女瓦部凸面の縄目叩きが頸部にまで及んでおり胎土の流れからみて、製作技法は折り曲げ作りであろう。

c. 慈眼寺

慈眼寺からは小片で表面が摩耗した女瓦6点、男瓦3点の合計9点の資料が採集されており、これらの瓦類は菊川町教育委員会が保管している。今回は紙面の都合上、これらの資料は掲載していないが、簡単に触れておくことにする。

女瓦は凹凸面共に摩耗が激しく成形・調整の痕跡が解りにくいが、離れ砂らしき粗いの付着が目立つ。その中で残りの良好な状況の資料を見ると、凹面には粗砂付着し布目痕は認められず、凸面には×状を縦に配したような斜格子叩き目の叩き痕跡が一部にみられた。側面は1回のへう削りで面取りし、凹面の側縁角をナデで丸味を持たせた調整を施している。厚さは2～2.4cm程である。胎土は比較的良好で灰白色を呈すが、表面灰黒色になる例もある。焼成は全体に付く粉質なものが多い。

男瓦は凹面に細かな布目痕と斜め方向の糸切痕があり、端縁・側縁をやや幅広にへう削りして面取りする。凸面は縄目叩き後、横方向を主体としたナデ調整で磨り消しており、叩き目が薄れている。胎土・焼成・色調は女瓦と類似したものである。

潮海寺出土の女瓦には凸面に縄目叩きを持つ例と、鎌倉中～後期と考えられる×状を縦に配した斜格子叩き目の資料がある。後者は慈眼寺出土例に近似した女瓦であり、両寺の考古学的な発掘調査が実施されればもっと明確な答がでるであろう。

3. 瓦の年代的な位置付け

a. 鎌倉出土の中世瓦について

鎌倉の中世瓦について概観すると、まず源頼朝の御願寺で奥州征伐の際、平泉で見聞した中尊寺二階大堂や毛越寺などの堂舎に感銘を受けことに由来し、怨霊鎮魂を目的に創建されたというエピソードをもつ永福寺がある。永福寺は『吾妻鏡』などの文献から創建・修理・再建の年代が比較的に明らかで、また一連の発掘調査によって出土した瓦類の実態が判明してきており、鎌倉時代の中世瓦の変遷を考える上で年代的な指標となっている。また発掘調査が実施された極楽寺をはじめ鶴岡八幡宮、覚園寺、武蔵称名寺などの調査成果と焼亡・再建の記事を考慮して、鎌倉時代の瓦類を3期に大別した(原 1997)が、以下に各期の瓦類の特徴を記す。

〈治承4年(1180)鶴岡八幡宮寺創建以降から寛元・宝治年間(1244～1248)の永福寺修理前〉

永福寺は文治5年(1189)年始、建久2年(1191)の鎌倉大火で幕府・鶴岡八幡宮が全焼しその修復の為に造営は遅れるが、建久5年(1194)までには二階堂・阿弥陀堂・薬師堂などの中心的な伽藍が完成する。創建期の主要軒先瓦は八葉復井蓮華文・巴文鏡瓦と均正唐草文瓦のセットでそれぞれ複数の範種があり、愛知県宇瓦の瓦当部の製作技法は基本的に顎貼付け式である。他に小型品のセットで巴文鏡瓦と宇瓦には瓦当部を折り曲げ技法で製作による陰刻下向き剣頭文や均正唐草文、また愛知県名古屋八事裏山窯跡の製品も少量みられる。女瓦凸面は主に縄目叩きを施し、細かな斜格子目叩き例もあるが、創建期には「×状」を縦位に連続した斜格子叩きは認められず、「文暦二年 永福寺」銘(嘉禄元年=1235年、寛喜3年焼失した惣門再建の年たる『吾妻鏡』の記年銘スタンプをもつ女瓦が初現である。

鶴岡八幡宮では中世最下層に伴ったI期の瓦類があり、建久2年の鎌倉大火で焼失した(再火に遭った資料が多い)一群と、焼失後の再建時の所用瓦に比定される資料が認められた。共に巴文鏡瓦が陰刻の下向き剣頭文と組合うものが主体的であるが、前者は大型型で鏡瓦が外縁に大粒珠文・太い圏縁

をもち、字瓦が顎貼付け式の製作技法、女瓦・男瓦の凸面に縄目・格子目叩きがあるのに対して、後者は小型岳のセットで字瓦が折り曲げ式の技法で瓦当部を製作、女瓦・男瓦は縄叩き目である（戸木他 1983・松尾他 1985）。他に永福寺や伊豆韭山願成就院跡と同范の折り曲げ式による均正唐草文字瓦、額下面の幅広い顎貼付け式による技法で瓦当部接合面に刻みを施した唐草文・半截花文字瓦（半截花文例は静岡県皿山古窯跡出土例と同范の可能性が高い）ものが若干みられる。これらは平安時代末期～鎌倉時代前期の南都や京都でみられる瓦当文様や製作技法の系譜を引く特徴を残している。

＜永福寺跡の寛元・宝治年間修理から弘安3年(1280)の鎌倉大火まで＞

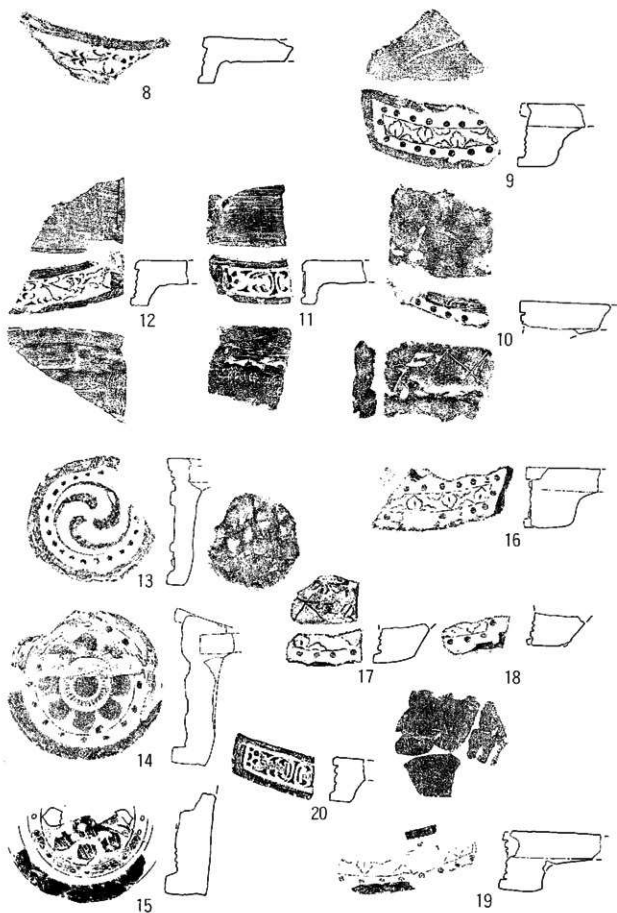
永福寺では、寛元2年(1244)から宝治2年(1248)にかけて二階堂と薬師堂、阿彌陀堂が修理されている。この時の修理に比定される主要瓦は、「永福寺」銘の文字文軒瓦と、埼玉県児玉郡美里町の水殿瓦窯跡で生産された陽刻の下向き剣頭文字瓦である。字瓦の瓦当部製作技法をみると、水殿瓦窯跡の剣頭文字瓦は顎貼り付け技法（接合面に刻みを施さない）によっており、寺銘文字瓦には顎貼り付け技法と新たに「瓦当貼り付け技法」の技法が認められた。この技法は、南都では1242～1261年の間に発生したと推定している（佐川 1995）。鎌倉においては寛元・宝治年間頃に瓦当部を瓦当貼り付け技法とした新たな製作技法が採用されたと考えられる。鎌倉ではⅡ期以降の14世紀まで一般的な製作技法となる点を考慮すると、この時期に鎌倉中世瓦の画期を想定することができる。さらに女瓦凸面には縄目叩きが消滅し、それに代わって「×」状を縦位に連続したような斜格子目を主体とした叩きが施されるようになる。

弘長2年(1262)鎌倉泉が谷の多宝寺に住持した忍性は、文永4年に極楽寺の伽藍完成を待って入寺している。多宝寺の創建期に比定される軒瓦は、瓦当中央に竹管文の刻印をもつ巴文鍍瓦で稻村ヶ崎小学校地点の主要瓦と同種の刻印をもち、同范・同文の関係にあることが確認され（木村 1980）、同一の特徴を有した瓦を両寺の創建時に供給していたと推定されており、この時期の極楽寺出土瓦には一次焼成を受けた資料が多く認められことから、建治元年(1275)大火で伽藍が焼失した一群のものと想定されている。この火災後に再建された所用瓦は、巴文鍍瓦と凸線上向きの剣頭文字瓦と考えられており、この瓦類と同范・同文例が弘安3年(1280)鎌倉大火で焼失後、忍性を別当に迎えて弘安10年(1287)に再建のなった永福寺をはじめ覚園寺・鶴岡八幡宮、さらに南都西大寺僧である叡尊に北条実時が帰依して文永4年(1267)に下野薬師寺僧の審海入寺により律院化した武蔵の称名寺や、金沢文庫遺跡などに認められる。当期以降の瓦を含めて14世紀前葉頃までの出土瓦は、共通性が極めて高く類似した文様意匠で、殆どどの字瓦は瓦当貼り付け技法に統一されているのである。

b. 出土瓦から見た横地の様相

潮海寺や皿山古窯跡の出土瓦である半截花文・宝相華文字瓦と、同文・同范の可能性のある資料が鎌倉の鶴岡八幡宮や千葉地遺跡から出土している（第28図-16～20）。

鎌倉出土の半截花文字瓦には、図示した鶴岡八幡宮出土の同范例（17・18 研修道場地点、19 鎌倉国宝館地点）と、16の千葉地遺跡出土の2種が現在までに確認されている。両者は胎土や製作技法が類似した製品で内区に界線と接した半截花文を上下交互に配し、両端に3分の2程の半截花文が見られるが、鶴岡八幡宮例は下向きであるのに対し千葉地遺跡例は上向きで終わっている。製作技法は顎貼り付けで、接合の際女瓦凸面にへうで×状の刻みを入れたものである（17の剥離面に転写）。9の潮海寺例と10の皿山古窯跡例は現物照合を行い同范であることが確認された。これと千葉地遺跡例は現物を実見した限り胎土・焼成や製作技法も同一で同范の可能性が高い。さらに鶴岡八幡宮出土例は菊川町では実発見であるが、胎土・焼成及び瓦当部の製作技法からみて、この種の一群も皿山古窯跡群を含めた東遠江系諸窯所産の可能性が想定される。また20の宝相華文字瓦は赤直直忠氏が鶴岡八幡



第28図 軒先瓦(2)

8・9 南海寺 10～12 圓山古窯

13～19 鎌倉 (15 入慈寺跡、16 千原地遺跡、その他鶴岡八幡宮)

宮の白旗社前で採集された資料で、現在横須賀考古学会が所蔵しており（赤星・竹澤 1990）、この資料を筆者は見ている。11の皿山古窯跡例は范ずれを起こしているが、須恵質に近い焼きを呈した小型品、瓦当部の製作技法は折り曲げ作りで両資料は酷似する製品である。

塚本・松井両氏は皿山古窯跡群の山茶碗類について、遅くとも12世紀前半に灰釉陶器から連続して生産され、13世紀前半頃まで継続して生産していたと考えている。皿山古窯跡群の山茶碗類の資料を3期に編年区分するとともに、遠江山茶碗編年のII期（12世紀後半～13世紀初頭）の段階で寺院に関係した瓦や仏具らしき器種の製品を焼成していることから、この段階で潮海寺などの宗教的な権力集団や、それに連なる在地領主であり鎌倉御家人の横地氏の関与があった点も否定し得ないとの論証がある（塚本 1993、松井1993）。潮海寺出土瓦の4～7の字瓦は瓦当文様や製作技法みて、鎌倉出土例より先攻する一群と推定され、尾張地方との関係も含めて今後検討する必要がある。

<参考・引用文献>

- 赤尾信弘・竹澤嘉範・足立佳代・斎藤和行・栗川正太・石川安司 1990『神奈川の中世瓦集成図録』『横須賀考古学会研究報告書5』横須賀考古学会
- 1993『足利における中世瓦の一樣相』『河津考古』第12号
- 1993『久保山II』早稲田大学本庄校地文化財整理室
- 1994『埼玉の中世瓦』『埼玉県北西部地域（川口市）考古資料集成』③古代・中世編
- 1995『比企地方の中世瓦1』『比企丘陵』創刊号
- 1998『東松山市西通造跡出の中世瓦 鎌倉永福寺1期同文瓦とその展開について』『比企丘陵』3・4号
- 1993『摂河原における古代末・中世瓦の様相』『研究紀要』Vol.1 舞大版文化財センター
- 1978『古代末期における瓦生産体制の変革』『古代学研究』第13・14号 元興寺文化財研究所
- 1978『長栄寺遺跡一世長田小学校改築工事に伴う発掘調査』尾島町教育委員会
- 1987『上野国府中砂見寺「応永17年」在銘瓦様相』『群馬文化』213号
- 1993『上野市白草園の発掘調査-幼の瓦様相をみる-』『上野市埋蔵文化財発掘調査報告14』
- 1996『梵鐘に刻まれた蓮華唐草文と瓦』『貝塚』51 物質文化研究会
- 1992『法隆寺の宝篋 瓦編 昭和資料15』法隆寺昭和資料編編集委員会
- 1995『鎌倉時代の軒平瓦の編年研究-よみがえる中世の瓦-』『文化財論叢 Ⅱ』奈良国立文化財研究所刊立40周年記念論文集 14朋希
- 小林康幸 1989『関東地方における中世瓦の一樣相 中世都市鎌倉と周辺地域における系譜性を中心として』『神奈川考古』第25号 神奈川考古同人会
- 高井徳三郎 1979『常陸・上野の中世瓦概見』『茨城県史研究』第43号 茨城県史編集委員会
- 塚本和弘 1993『皿山古窯跡群の成立と終末について』『向坂朝二遷葬記念論文集』
- 時枝務・五十嵐信 1996『北関東における中世瓦の一樣相（上）-東京国立博物館所蔵の茨城県茨城川子遺場出土瓦の紹介-』『高崎』市史研究 第6号
- 1987『東海寺発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所 1995『常陸南部における中世瓦の検討-新資料の紹介を中心に-』『茨城考古』第17号 茨城考古同人会
- 横崎祐規・横崎裕男 1997『図録 中世の霞ヶ浦と津奈-よみがえる仏教文化の聖地-』土浦市博物館
- 1998『茨城県内出土の中世瓦編年試案』『第5回 中世瓦研究会-茨城資料編-』
- 横崎典彦 1982『中・近世瓦の研究 元興寺編』元興寺文化財研究所
- 横崎祐規 1998『常陸の中世瓦をめぐる諸問題-その歴史的背景の検討-』『第5回 中世瓦研究会-茨城資料編-』
- 松井一明 1993『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学』第25号 静岡県考古学会
- 山崎信二 1993『第5章考察 三村山極楽寺出土の軒瓦の年代』『三村山極楽寺跡遺跡群 確認調査報告書』茨城県つくば市教育委員会
- 1997『中世の瓦葺瓦の調査』『奈良国立文化財研究所年報 1997-1』奈良国立文化財研究所
- 山中雅彦 1991『東北地方における中世鎌倉期瓦の一例』『東北史論』第6号
- 経費渡次郎 1991『白石大御堂遺跡-一池を伴う中世寺院址-』『群馬県埋蔵文化財調査事業団122集 群馬県教育委員会』
- 横崎 1997『東国出』の中世瓦 12世紀末～14世紀前半の中世瓦の一樣相』『浄土庭園と寺院記録集 永福寺創建800年シンポジウム』鎌倉市教育委員会

はじめに

横地城周辺には随所に中世の石造物がみられ、慈眼寺・三光寺・横地太郎塔周辺など幾つかの群をなしている。これらは横地氏ゆかりの人々によって造られたものと考えられ、またその石材は各地から搬入されたものであり、当時の人々の死生観や宗教観、流通などの実態を知る重要な手掛かりである。本調査では、菊川町内という限られた範囲であるが、石塔部材の悉皆調査を実施し、全点実測を行なっている。そこで本論では、調査成果の所見に基づき横地城周辺の石造物を概観したい。

①従来の研究法と問題点

遠江地域における中世石造物の本格的研究は1960年代に始まり、H野一郎氏は天竜川流域の石造物の分析の中で、磐田市鎌田兵衛五輪塔や掛川市本郷周辺の長福寺・照月寺や曾我十郎塔などを紹介した（H野1968）。川勝政太郎氏は、榛原町清浄寺裏山石塔群の所謂混合式塔・相良町平田寺の変形宝塔に注目し、遠江東部地域に展開した石造物の特異な地域性に着目し（川勝1970・1973）、特に「混合式」塔の概念をめぐっては、研究者間で活発な論争も行なわれた。

しかし従来の石造物研究ではセットが完全で大型、美術的完成度の高い遺品を主要な対象として、石工の系譜や建築学的な企画の検討がなされ、計測寸法を重視した建築学的な作図法による概念図や拓本・写真に頼る研究に拠っていた。このため同一精度・同一縮尺の実測図の比較検討による分類・編年という考古学の最も基本的な研究法は一般化せず、細工が複雑な反花座などの部位を除くと、中小の石塔、それも各部材が分離したものについてはほとんど分析の対象となしなかった。こうした状況に変化をもたらしたのは、尾形禮正氏による伊豆韭山町の石塔悉皆調査である。石塔群ごとに部材の全点計測を行ない、各部材の部位ごとの長幅比率の変化と紀年銘資料や出土層位、寺院沿革を対比して石塔の型式学的変遷を明らかにした（尾形1988）。これによって横地城周辺の石塔群のように造立当初の状況が失われた寄せ集めの石塔部材にも検討の可能性が開けてきた。一方1980年代以降は磐田市の大原墳墓群（磐田市教育委員会1984）・一ノ谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）などの調査で大量の石塔部材が出土し、考古学的な実測図を添えた報告がなされ、出土状態が示す部材の組み合わせや共存遺物が示す実年代を総合することで石塔部材の型式学的編年研究への端緒が開かれた。野澤則幸氏の「三光寺跡周辺の石塔の調査でも全点実測と分類、石材産地の推定が試みられた（野澤1995）。また『静岡県における中世墓』シンポジウムでは石造美術・考古遺物両研究の融合を模索する新たな研究の可能性が提示され（静岡県考古学会1997）、造塔階層や宗派の問題も取り上げられた。更に自治体史編纂事業に関連して各地の石材産地に関する研究も進展を見せている。

遠江地域は、鎌倉を中心とした東国の世界の西縁と京都を中心とした西日本の東縁の出会う場であり、東海窯業地帯の一端を担う地域でもある。石塔にもその位相が端的に現れており、横地氏の性格を考える上で、石塔の様式や石材の地域性の解明は重要な意味を持っている。

また石塔は中世仏教の産物であり、造塔は仏教諸宗派の思想や活動と不可分の関係にあるが、従来はこうした研究が不十分であった。遠江における仏教諸宗派の活動と石塔造営の相関も検討したい。

更に多数の石塔造営を支えたのは、単に仏教諸宗派の活動の成果にとどまらず、石塔造営を必要とした当時の社会状況が背景にある。石塔造営の象徴性の解明もまた求められる。

石塔はしばしば寺院址や居館に伴って見いだされるから、造立された地点の性格を解明することも、中世景観の復元の上で重要であり、特に居館との隣接関係が重視される。

(2)研究の方法

調査は以下のような手順で行ない、本論では現時点での成果の一部を示した。

- ①横地地区を中心に石塔の分布図を作成し、周辺の歴史的環境を調査する
- ②各石塔群ごとに部材を全点実測する
- ③石塔群を種別・部材ごとに分類して内訳を明らかにし、大きさ、石材、形態などの所見も含め型式学的操作で整理する
- ④石材産地の検討から製作地との流通範囲を明らかにする
- ⑤遠江を中心に銘文や共伴遺物・出土遺構より年代の判明する石塔と対比して年代決定を行ない、変遷をたどる
- ⑥各石塔群の形成・存続期間を推定する
- ⑦石塔群と寺院や宗派、居館址との関係を明らかにする。

I 石塔の種類

横地周辺には宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔などの中世石造物が見られ、これらが密集する幾つかの石塔群が形成されている。数量では宝篋印塔が最も多い。

(1)宝篋印塔（ほうきょういんとう）

宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼経納入した塔で、中国五代呉越の国王銭弘俶が発願して955年に日本を含む諸国に配布した八万四千塔（銅製で中に經典を納める）を原形とし、この形態が經典や舍利容器に採用され、更にその形態を石塔に写したもので、当初は經典を納めた記念碑であったが、次第に墓塔・供養塔に変化し、墓上に建てられるようになった。遠江地方の宝篋印塔は、古式で大型のものは相輪・笠・軸・基礎の4部材を基本に、台座を加え5部材よりなるものが一般的であり、更に基礎に二区の窓を設け、台座に反花座・框座を伴う所謂「関東形式」が主流であるが、小型で新式のものは、基礎に框座がなく台座を伴わない「関西形式」系統の退化型式のものが多い。

(2)五輪塔（ごりんとう）

五輪塔は地・水・火・風・空という世界を構成する五元素を四角・丸・三角・半球・宝珠という五つの形の組み合わせで表現したもので、この図形は12世紀に覚慶が著した『五輪九字明秘密記』の中で胎藏界大日如來の象徴（三昧耶）形であると説明されているように、本来真言密教の中で誕生したが、他宗派にも受容された。すなわち台座上の五輪塔は蓮華座の上に安置された仏像と同義である。

(3)一石五輪塔（いっせきごりんとう）

一石五輪塔は五輪塔の1種であるが、五輪塔が普通4つの石材を積み上げるのに対して、ひとつの石材（一石）を削り出して作っている。一石五輪塔は五輪塔本来の意味がうすれてきた頃、仙格の安い略式の小型石塔として現れ、横地城の落城以降、戦国時代～江戸時代にかけて多く造立された。

II 石塔群の分布と現況（地図参照）

(1)慈眼寺石塔群（奥横地通称人上（おおかみ））

現在真言宗で地元では眼病治癒の「お薬師様」として信仰されている。横地氏の祖、太郎家長の開基になり、家永出生ゆかりの鎮矢も納められていたと伝える。鎌倉時代に法然の弟子信寂房西運がこの地で死去したと伝え、当初は阿彌陀如來を本尊とする浄土宗系の寺院であったと考えられる。「横地金寿城合戦記」（金子正敏氏所蔵）によれば貞治二年（1363）に焼失したと伝えるが、平田寺文書の延文六年（1361）八月十六日沙弥成西寄進状には「横地往生院」の住持職を平田寺長老に寄進する記事があり、成西が横地一族の入道であるとするれば、「往生院」は慈眼寺の前身である可能性も残る。

中世石塔部材は14点。内訳は宝篋印塔部材4点（相輪1、笠3）、五輪塔部材9点（空風輪1、火輪3、水輪3、地輪2）、石塔礎盤1よりなる。

一具完存の緑色変岩五輪塔は各輪四面に薬研彫りで梵字が刻まれており、13世紀後半～14世紀初頭前後のものと考えられる。水輪のみが梵字をとりまき円形の輪郭を刻む月輪の表現を伴うものもある。塔周辺より12世紀末の瀝美、13世紀の常滑蔵骨器土土。他の宝篋印塔部材は16世紀代で砂岩製、

無縫塔類は近世のもので砂岩製（日坂石・天宮石？含む）と安山岩製よりなる。

なお慈眼寺参道より南の奥横地道久（ドウキウ）の江南工業敷地駐車場付近に一石五輪塔群があったというが、現在造成で埋没しており確認できない。

②横地延命段石塔群（奥横地延命段）

伊平遺跡より谷を隔てた南方、「延命寺」地籍の裏山にある茶畑の北へりに疎数基の上に宝篋印塔4基が並んでおり、昭和20年頃、朝鮮半島からの引揚者が入植して山林を開墾した際に掘り出し記ったと伝える。中世石塔部材は15点。内訳は宝篋印塔部材9点（相輪3、笠4、軸1、基礎1）、五輪塔部材3点（水輪2、地輪1）、石塔礎盤2、一石五輪塔1。宝篋印塔を主体とし五輪塔・一石五輪塔部材を交える。宝篋印塔相輪・笠はすべて退化が進んでおり16世紀前半～中葉の形成とみられる。

③横地太郎塔石塔群（奥横地中上）

奥横地川沖積地の北岸、中上（ちゅうかみ）の山腹に位置する。坂部義則氏の茶畑となっている斜面西側に椎の老樹があり、その根元に付近から出土した石塔部材が集められている。中央にある最大の「横地太郎塔」は大型宝篋印塔の相輪と笠で、14世紀中葉前後の造立と推定され、周周を中小の宝篋印塔や小型の五輪塔が取り巻いている。関東形式の二窓式基礎が1点しか見られず、また台座類も見られない点の特徴である。中世石塔部材は91点。内訳は宝篋印塔部材57点（相輪20、笠14、軸12、基礎11）、五輪塔部材29点（空風輪8、火輪9、水輪5、地輪7）、石塔礎盤5よりなり、一石五輪塔を含まないのが特徴だが、最も新しい宝篋印塔・五輪塔は16世紀まで下降すると考えられる。

④三光寺跡裏墓地石塔群（東横地殿ヶ谷）

奥横地川沖積地の北岸、殿ヶ谷後背の東横地の茶農協の北側（三光寺跡の裏）にあたり、現在、三光寺歴代住職の墓塔群（無縫塔）の脇に中世の石塔がまとめて安置されている。石塔は五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔からなる。曹洞宗で本尊は顔地蔵菩薩。興農寺三世華嚴得春和尚（位1501～1533）が天文四年（1535）五月五日に創建したと伝え、横地太郎開基と伝える延命寺、東泉寺、授福寺の三ヶ寺を合併したので三光寺を称したというが、曹洞宗となる以前は時宗末寺帳に記載のある時宗寺院であった。なお華嚴得春は天文二年（1533）に没したとされるので、事実上の開山は二世で、師の華嚴得春を開山とする礼をとったと考えられる。

三世路州和尚の代に徳川家康から朱印五石を賜ったが、明治七年、これを返納したという。昭和24年廃寺となり、更に昭和41年（1966）境内に東横地茶農業協同組合の建物で建築され、昔の木堂庫裡も解体撤去された。付近より散在した状態で出土した部材が寄せ集められて覆屋の内部に並べられている。横地城跡周辺に分布する石塔群の中では最も部材の個体数が多く、バラエティに富んでいる。大型宝篋印塔を中核に、中型宝篋印塔や小型の五輪塔・宝篋印塔部材を主体とし、古式の一石五輪塔も2点交える。宝篋印塔には関東形式の二窓式基礎を7基含み、確実な年号を持つ文和五年（1355）銘塔を前後的な時期のものと考えられる。主体時期は14世紀中葉～15世紀と見られるが、小型宝篋印塔には掛川市峯遺跡と同形のものを含み16世紀後半まで下降するものを含むと考えられる。

三光寺跡裏よりさらに100m程北側へ登った地点、奥横地の武衛原頂上へ登る途中の道端に別個に祀られているものも、部材の出土場所は同じで基本的に同じ群に由来している。

石塔部材は野澤氏の調査で124点が報告されており、宝篋印塔部材76点（相輪16、笠18、軸13、基礎29）、五輪塔部材47点（空風輪15、火輪13、水輪7、地輪12）、一石五輪塔1からなるが、その後の整備で新たに部材が出土しており、今後追加調査を実施し、上記の数値を訂正する予定である。

⑤東横地坪井政則氏宅宝篋印塔（東横地（通称温美谷）4019）

坪井政則氏宅敷地内裏手の生垣に接して屋敷神として中世石塔部材が祀られており、屋敷内の椎の

老木の根元より出土したと伝える。15世紀代の宝篋印塔等2点よりなる。

⑥長溝杉ノ谷遺跡福島唯雄氏宅石塔（東横地字長溝3899-2）

福島唯雄氏宅西側の椎の樹の下に16世紀頃の宝篋印塔笠1・五輪塔水輪1点が重ねられて屋敷神として祀られている。敷地内からは13～14世紀頃の常滑甃・青磁片が採集されている。

⑦神尾宝珠院石塔群（神尾）

共立菊川病院の所在する丘陵の東斜面に位置する寺院の境内墓地周辺に若干の石塔部材が見られ、宇藤遺跡の発掘でも石塔部材が出土している。中世石塔部材は6点。内訳は宝篋印塔部材4点（笠3・台座1）、五輪塔部材2点（火輪1・地輪1）よりなり、隣接する墓地に一石五輪塔1点がある。14世紀後半～15世紀の五輪塔（火輪）・宝篋印塔部材（笠・台座）がみられる。このうち宝篋印塔笠は褐色だが安山岩製の可能性がある。また五輪塔笠は淡緑色硬質で重く、緑色変岩の可能性がある。

⑧藤谷神社下二俣家墓地宝篋印塔（東横地藤谷）

藤谷神社南東裾の斜面の大口・毘沙門堂の脇に宝篋印塔基礎2点があり、いずれも砂岩製で14世紀末～15世紀前半の年代が推定される。ここより若干低い位置に二俣家墓地に一具完形の宝篋印塔があり、他に一石五輪塔の残欠、17世紀代の碑石墓などがある。宝篋印塔はもともと当地にあったようだが、他の墓碑や石塔部材は他所より移築したという。中世石塔部材は7点。内訳は宝篋印塔部材6点（相輪1・笠1・軸1・基礎3）、一石五輪塔1点よりなる。二俣家墓地の宝篋印塔は、相輪の断面が隅丸方形の角柱状で、頂部は一石五輪塔の構造と共通し、16世紀後半前後の年代が推定される。

二俣家は横地氏の有力家位の末裔で、横原町清浄寺の過去帳の冒頭部には、

「宣阿弥陀佛」卯 八月二十五日 ヨコヂ 二俣 〇〇〇 永禄十年（1567）」

「妙一房 〇西 六月十七日 同 内儀 天正元年（1573）」

とあり、このいずれかと宝篋印塔が対応する可能性がある。

⑨土橋坪井宅石塔（土橋。長藤旧在）

屋敷地の北西に中世石塔部材4点が祀られている。内訳は宝篋印塔部材2点（笠1・軸1）、五輪塔空風輪1・一石五輪塔残欠1よりなる。宝篋印塔は15世紀代に遡るもので三沢橋長藤付近の旧在。

⑩段横地公会堂石塔群（段横地）

現在段横地公会堂口敷地内の残丘上に中近世の石塔部材が並べられているが、もとは隣接する横山祐一氏宅に祀られていたという。中世石塔部材は10点で、内訳は宝篋印塔部材1点（基礎1）、五輪塔部材1点（空風輪1）よりなり、一石五輪塔8点（うち完形5点）。大型の安山岩製五輪塔空風輪を1点含み、これは14世紀まで遡ると見られるが、他の砂岩製一石五輪塔・宝篋印塔は16世紀末～17世紀か。一石五輪塔は小型で法量に斉一性が強く、やや緑がかった砂岩製である。

なお横山家には江戸時代の位牌が残る「久次庵主 横地久左衛門 寛文九年（1669）」の銘がある。また横山氏宅付近からは山茶碗や礎石が出土しており中世居館の存在が推定される。

⑪段横地天神森石塔群（段横地）

横地谷の西側出口、台地上辺縁部に大きな椎樹があり、その根元に櫛や石塔部材が塚状になっている。地表に中世石塔部材13点が散乱している。内訳は宝篋印塔部材9点（相輪4・笠2・軸2・台座1）、五輪塔部材4点（空風輪1・火輪1・水輪1・地輪1）よりなり、15世紀前後の中型宝篋印塔・五輪塔を主体とし、一石五輪塔を含まないのが特徴である。周辺には多数の石塔部材が埋没していると推定される。石塔群東方の畠地では常滑・瀬戸陶器の散布が見られる。当地には興嶽寺の前身となる真言寺院が存在した可能性がある。

⑫興嶽寺石塔群（東横地茶原）

大龍山興嶽寺は曹洞宗で相良町龍門山人興寺の四世大梁慶弘の弟子月山守満が文明七年（1475）に開基したと伝えるが、大東町今滝の真言宗今龍寺には当地にあった真言寺院の末寺であったとする記録があり、曹洞宗化する以前に前身となる真言寺院が存在した可能性が高い。江戸前期に至る世代は、

- 開祖 月山守満 延徳元年（1489）正月十五日寂
- 二世 雲巖叟石 文龜元年（1501）九月十一日寂
- 三世 華嶽得春 天文二年（1533）七月四日寂
- 四世 寛州玄泰 永禄十二年（1569）九月二十三日寂
- 五世 清岩泰純 慶長十五年（1610）五月二十三日寂
- 六世 玉山秀光 寛永九年（1632）九月二十九日寂
- 七世 九山梵昌 寛永十四年（1637）六月二日寂

宝暦三年（1753）の火災で焼失し古記録は失われているが、過去六ヶ寺の末寺があり、それらはいずれ興嶽寺世代によって開基されたり、禅寺として中興されたもので以下の通り（興嶽寺1980）。

- 美横地三光寺 三世 華嶽得春（位1501～1533）
- 三沢龍谷寺・段横地常泉寺 四世・寛州玄泰（位1533～1569）
- 笹間渡宝珠寺 六世 玉山秀光（位1610～1632）
- 神尾正光寺 九世 勝山全尊（位？～1667）
- 土橋林光寺 十六世 泰山耕道（位1788～1823）

現在中世石塔部材は歴代住職墓墓地や地藏堂周辺を中心に14点が確認されるが、かつて墓地内に散在していた多数の部材は現在埋め立てられており、本来の総数は不明である。内訳は宝篋印塔部材9点（相輪1、笠6、台座2）、五輪塔部材2点（空風輪1、火輪1）、一石五輪塔3点（完形1点）よりなる。15世紀の宝篋印塔台座2点は旧山門の礎石に使用され上面に方形のホゾ穴があげられている。このほか歴代住職墓所には15～16世紀代の五輪塔・宝篋印塔部材が散在する。四面に梵字を刻む大型一石五輪塔は全高約51cmを測り地輪の梵字左に「天□（文か正？）」銘があり、天文なら1532～1555年、天正なら1573～1592年の造立と考えられ、凝灰岩質の脆弱な石質は森町両宮の砂岩の特徴に似ている。前者であれば三世華嶽得春、後者であれば四世寛州玄泰の供養塔の可能性がある。

⑬段横地常泉寺（段横地常泉寺）

興嶽寺四世の寛州玄泰（位1533～1569）によって開基されたと伝える。墓地には宝篋印塔がある。

⑭三沢龍谷寺址石塔群（三沢寺ノ谷）

興嶽寺より南西の谷に位置する。曹洞宗で興嶽寺四世寛州玄泰和尚（位1533～1569）によって天文年間（1532～1555）に開基されたと伝えるが、明治14年廃仏毀釈のあおりで廃寺とされた。跡地は赤堀庄太郎氏宅の北東にあり、現在茶畑や山林となっている。右垣で区画された近世碑石墓群の一角に人型の一石五輪塔に伴う屋形形の覆屋2基があり、付近に宝篋印塔部材や一石五輪塔がみられる。中近世石塔部材は13点。内訳は宝篋印塔部材4点（相輪1、笠3）、五輪塔部材1点（空風輪1）よりなり、一石五輪塔は略完形7点。このうち中型の宝篋印塔残欠は礎石に転用されているが軒上4段で頂部に露盤の表現があり14世紀末～15世紀前半に遡る。一石五輪塔類は天保八年（1837）に四代目伊藤徳兵衛によって記された「本家過去覚」と対比が可能で大部分の被葬者ならびに没年が判明する。

- (1) 瑞相照珊大姉 宝永四（1707）丁亥歳九月七日
- (2)同貳番五リン石碑 華岩永春庵主 慶安五（1652）壬辰歳二月廿六日
俗名長太大事（谷ノ屋鋪先祖・相分）
- (3)同貳番五リン石碑 全室常安上座 元禄七（1694）甲戌歳六月十一日

俗名其エ門事 (助イエ門とも者之)

(4)同四番石カラウト石碑 源松宗本居士 寛文四(1664)甲辰歲四月十八日
是ヨリ本家先祖尊致所 中村市郎左エ門養父

(5)同 柏憲妙松人姉 犬和二(1682)壬戌歲二月廿六日
市郎左エ門養母

(6)同五番石カラウト碑 即巖宗心居士 貞享三(1686)丙寅歲二月十一日
俗名中村市良左エ門 代官ヲ以養子乗ル
是ヨリ二代中村之姓ヲ名ノル

(7)同 柏巖庭樹大姉 正徳元(1711)辛卯歲六月廿日
市郎左エ門妻 宗本之娘

以上より7基の一石五輪塔は、単立の(2)慶安五年(1652)、(3)元禄七年(1694、出ホソ有)、(1)宝永四年(1707)造立銘のものと、四番石龕(屋形形)に収められていた 寛文四年(1664)・(5)天和二年(1682)、五番石龕(宝珠屋根)に収められていた(6)貞享三年(1686)・(7)正徳元年(1711)の二組の夫婦の「石五輪塔からなっていたと考えられる。最大のものは石龕に納められた「空・風・火・水・地」を刻字する寛文四年(1664)造立のもので埋没部を含めた総高は80cm程と推定される。

⑬三沢宝篋印塔(三沢地内)

中近世石塔部材は6点。内訳は宝篋印塔部材6点(相輪2、笠2、基礎2)よりなる。三沢地区南方の丘陵山林(耳付谷)を茶畑に開墾した際に出土した小型の宝篋印塔2基が不完全ながら並ぶ。退化した型式で16世紀代のものと思われる。

⑭三沢大師堂宝篋印塔部材(三沢地内)

三沢地区の太子堂境内に宝篋印塔笠1点が持ち込まれているが、本来の所在地は不明。宝篋印塔笠は軒反りが顕著でやや人型であり15世紀のものと考えられる。

⑮三沢口殿ヶ谷坂道脇の石塔群(三沢地内)

興嶺寺原より三沢に下る道路の東脇の斜面下の残積み上に宝篋印塔相輪1・五輪塔火輪1・一石五輪塔1等が記られている。宝篋印塔相輪は15世紀に遡る。付近には多数の石塔が埋没しているという。

⑯小川端渋谷氏宅裏山石塔群(小川端)

菊川東岸、現在渋谷明穂氏宅の裏山、菊川を見下ろす崖縁に小規模な段切り平坦面があり、そこに近世墓碑がコの字形に配置され、周辺に中世石塔部材39点が散乱している。内訳は宝篋印塔部材9点(相輪4、笠1、軸1、基礎3)、五輪塔部材7点(空風輪2、火輪2、水輪2、地輪1)、一石五輪塔23点(うち完形16)よりなり、すべて砂岩製で、礫岩質、花崗岩質のものを含む。宝篋印塔は15～16世紀代。五輪塔部材にはホソ無し空風輪・出ホソ付空風輪、木ホソ火輪を含んでいる。大型古式の一石五輪塔が多いのが特徴で、最大のものは全高46cmを測る。石塔の大部分は15世紀後半以降のものと考えられ、横地落城から近世に移行する時期の石塔群として注目される。またここより北方の墓地にも中世石塔部材数点が見られ、安山岩製五輪塔の空風輪などを含んでいる。

⑰堀之内報恩寺石塔群(菊川町大字堀之内口の出町)

堀之内村堀之内、東海道線の線路北側(山本豆腐店付近)に旧在していた石塔群が鉄道敷設に際し横地駅前の報恩寺墓地内に集められたもので、現在は更に堀之内地区の新共同墓地に移築されている。比較的大型の宝篋印塔3基分程度の部材がみられ、反花座を伴うものがあるほか、小型五輪塔や古式の一石五輪塔も含まれている。なお当地は中世の河村莊堀之内で、永享十一年(1439)に小笠原正行が配され、のちにその子行重が堀之内城主となった。石塔群は堀之内城主ゆかりの遺品と考えられる。

Ⅲ 横地城跡周辺に分布する石塔の分類

横地城跡周辺の石塔群における部材数と内訳をふまえ、五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔の種別ごとに形態の比較による分類を行なった。野澤(1995)による三光寺石塔群の分類案を参考に新たに作成したが、暫定的なもので今後未知の型式が知見にのばれば、改めて分類を行なう必要があろう。

(1) 五輪塔

五輪塔は、宝珠・半球の結合した空風輪、笠形の火輪、球形の水輪、角形の地輪よりなる。

一般的に空・風輪が球形基調で丁寧な仕上げのものから円筒・円錐型基調の粗雑なものへ、火輪が高いものから低いものに、軒が厚く反るものから薄く反らないものへ、水輪が球状から扁平へ、地輪が低いものから高いものへと形態が変化する。石材は緑色変岩、安山岩、凝灰岩、砂岩である。

空・風輪

火輪と接する部分がホヅ付き(1類)、ホヅ穴(2類)、ホヅなし(3類)の3種類がある。

B類は空輪が宝珠形や球状をなし、くびれが顕著なもの。ホヅの付くB1類、ホヅ穴のあくB2類。

C類は空輪が円錐形でくびれが弱く仕上げも粗い。ホヅの付くC1類、ホヅ穴のあくC2類。

D類はホヅが付かず、ホヅ穴もあいていないもの。

火輪

ホヅ穴の径の大きいもの(1類)、小さいもの(2類)、無いもの(3類)の区別がある。空・風輪の1・2類、3類にそれぞれ対応するものである。

B類は軒下端部幅に比して高さの割合が大きいもの。ホヅ穴の径の大きいB1類、小さいB2類。

C類は軒下端部幅に比して高さの割合が少ないもの。B類にくらべ軒厚が薄く、軒反りもない。ホヅ穴の径の大きいC1類、小さいC2類。

D類は上端と下端の段形が一段となるもの。宝塔の笠には多いが、五輪塔では珍しい。

水輪

最大径と高さの割合から2分類できる。

B類は最大径に対して高さの割合が比較的大きいもの。古式大～中型のものが多く。

C類は径に対し高さが低く、扁平なもの。新式小型のものが多く。

地輪

幅と高さの割合から2分類できる。

B類は軒に対して高さの低い、扁平な感のするもの。

C類は幅に対し高さが高くなるもの。

(2) 宝篋印塔

宝篋印塔は、円柱形の相輪と、平面方形の笠・軸・基礎・台座よりなり、前者は方形柱状、後者は方形ブロック状の石材より削り出したもので、原材の石取り方法に相違がある。相輪は断面形、請花や九輪のメリハリや蓮弁の有無、笠は四隅に造り出した隅飾、軒上・軒下の屋根の段数の変異に基づく分類や細工の巧拙が年代決定の根拠となる。石材は砂岩、安山岩、花崗岩である。

相輪

相輪は宝珠、請花、九輪、請花、伏鉢の5つの部分から構成されている。

a 1類は低い玉蓋形の宝珠で半球形の上請花に間弁蓮弁を肉彫したもの。九輪タガ状で断面正円形。下請花に蓮華を肉彫し伏鉢半球形で低い。横地太郎塔を標識とし、三光寺にも破片が見られる。

a 2類は玉蓋形の宝珠に半球形の上請花につき単弁蓮弁を線刻したもの。九輪の彫りが弱く断面円形。下請花に蓮華を線刻し伏鉢台形で高い。小川端・横地太郎塔群例を標識とする。

b 1 類は球状の宝珠に上請花に蓮弁を線刻したもの。九輪塔ガ状で断面円形。下請花に蓮華を線刻する。今回は榛原町伏方中田家裏山例（安山岩）を挙げた。

b 2 類は球状の宝珠に半球形の上請花がつき蓮弁を線刻したもの。九輪塔ガ状で断面円形。下請花に蓮華を線刻し伏鉢台形。三光寺例（花崗岩質砂岩）のほか磐田市住占遺跡例を標識とする。

c 1 類は a 2 類に似るが上下請花とも素文。玉葱形の宝珠に半球形の上請花がつき九輪の彫りが弱く断面円形。伏鉢の形態はさまざま。三沢殿ヶ谷・横地太郎塔群例を標識とする。

c 2 類は桃形の宝珠に半球状の請花がつくもの。九輪の溝は浅く断面円形。伏鉢は台形で高い。全体的に非常に背が高い。横地太郎塔群例を標識とするが、三光寺の花崗岩製相輪が祖型か？

d 類は円錐形の宝珠に逆台形の上請花がつく。整形が雑で九輪と下請花の区別が不明瞭で伏鉢は円柱形臼状。断面は楕円形でやや扁平。延命段・横地太郎塔群例を標識とし掛川市峯遺跡にも破片がある。

e 類は全体的に方柱状の角張った形状で、宝珠と請花のくびれが弱く上下請花・九輪は退化鉢の退化し伏鉢が方形ブロック状で高い。二股家墓池・報恩寺・春野町豊岡下石切例を標識とする。

笠

軒上の段形は 3～6 段、軒下の段形は 0～2 段までバリエーションがある。

a 1 類は軒上が 4～6 段で、最上段に 2 窓の露盤の表現があるものを含む。軒と隅飾りの境界が明瞭で隅飾りは直立に近く輪郭は内括りで一段低くなる。

a 2 類は軒上が 3～4 段で、最上段は素文で軒と隅飾りの境界が不明瞭になり、隅飾りの斜辺が 2 弧をとどめる。隅飾りは直立に近く、輪郭は線刻で縦長である。

b 1 類は軒上が 4～6 段で、最上段に 2 窓の露盤の表現のあるものを含む。軒と隅飾りの境界が明瞭で隅飾りの斜辺は 2 弧で、内括りで横長の輪郭を設ける。三光寺・三沢太子堂・相良町笠名例。

b 2 類は軒上が 3～5 段で、軒と隅飾りの境界が不鮮明になり、外反気味の隅飾りの斜辺は 2 弧をとどめる。線刻で横長の輪郭を設ける。東横地坪井家・十橋・横地太郎塔群など。

c 1 類は素文直立気味の隅飾りの比率が大きく隅飾間が狭いのが特徴。横地太郎塔や龍谷寺が典型。

c 2 類は軒下の段がくずれて横帯状になったもの。三光寺や慈眼寺に例がある。

d 類は上下に極端に扁平なのが特徴で、軒上の段形が 2～3 段で、軒と隅飾りの境界が不鮮明になり、低く外反気味の隅飾りに横長の輪郭を設ける d 1 類と素文の d 2 類。延命段・浜松波例。

e 類は c 類に近いが丸い隅飾で比率が小さく間隔が大きい。軒上 2～4 段だが軒下が 1 段もしくは斜段で無段のものもある。隅飾には L 形の線刻を伴い掛川城本丸下層例がやや古く、春野町下石切塔例がやや新しい。更に素文となる。報恩寺の高い外反する隅飾で軒上 4 段になるものは延命段タイプや二俣家タイプの角柱状の相輪と組み合わせる。

塔身

a 類は側面の周囲に輪郭を設け、内側凹面に金剛界四仏の種子を刻む a 1 類と素文の a 2 類。

b 類は輪郭のないもので、ほぼ直方体を呈するもの。側面に金剛界四仏の種子を刻むものがある。

c 類は b 類にくらべ高さが低いもの。殆どが素文である。

d 類は成形後の彫刻が不十分でノミ痕を残す荒造りのままのもの。

基礎

a 1 類は各面 2 窓の凹面（稀に輪郭表現）表現が特徴。側面が高くなると同時に段形が低くなる。

a 2 類は各面 1 窓の凹面表現が特徴。側面が低く段形の立ち上がりが目立つ。

b 類は軸に対して高さの低いもの。段形の多くは 2 段であるが、稀に 1 段のものがある。

c 類は b 類にくらべ高さの高いもの。稀に底面に納入孔の設けられたものがある。

d類は段形が一段に省略されて角が丸みを帯びている。

反花座

a類は上端の反花が複弁で、側面は輪郭をもって凹面に2区に分けられている。

b類は上端の反花が単弁で、側面に輪郭がなく無地である。a類に比べて高さが低い。

(3) 一石五輪塔

角柱状の石材にくびれを削り出した各輪部の境を表現した五輪塔だが、空風輪の比率が通常の五輪塔に比べて大きいのに対し、火輪・水輪は偏平で比率が小さい。通常の五輪塔に近いメリハリのあるものから木製卒塔婆を石製にしたような棒状偏平なものまで様々である。古いものは単独で大型、ついで小型密集となり、近世に入ると紀年銘を刻むものが増大し、扇形状の石籠を伴うものは大廻廊の場合がしばしばある。石材は殆どが砂岩であるが、他地域には緑色変岩のものも稀に見られる。

A類は安置式で通常の積上五輪塔と同様なプロポーションのもので地輪を埋め込まない。

B類は埋込・立て掛け式で地輪部が長く埋め込む。そのまま立つものと自立できないものがある。

C類はホゾ穴式で台石に皿状のホゾ穴を施した上に出ホゾではめこむ形式のもの。

IV 石塔の変遷と編年

(1) 五輪塔

遠江地域の五輪塔は緑色変岩→伊豆安山岩→砂岩タイプへと変化し、異なる系譜の緑色変岩製（ホゾなし）と安山岩製（ホゾあり）の両要素が砂岩製五輪塔で合流し、その後はもっぱら安山岩製の影響下で砂岩製五輪塔の型式学的変遷がたどれる。空・風輪は13世紀末～14世紀初頭前後の慈眼寺五輪塔（緑色変岩、第31図-1～4）から14世紀末頃の榛原町伏方中田氏宅裏山五輪塔（砂岩、第31図-7・8）のようにホゾ無しの系統と、段横地公会堂や小川端北方墓地の14世紀中葉～後半の安山岩製空風輪のような出ホゾの系統が併存する。引佐町北岡古墓（引佐町1994）では出ホゾを伴う頂部の丸い空風輪の五輪塔が見られ、塔下から15世紀前半頃の常滑小壺を出土しており、前後する年代が推定される（砂岩、第31図-9）。掛川城跡本丸下層墳墓群では永正築城（1513前後）以前の層より空輪頂部が円錐形に退化した出ホゾの空風輪（H坂石）が出土しており15世紀後半～末前後の年代が考えられ（砂岩、第31図-6）潮海寺門前にも同形態の空風輪が見られる。16世紀に入る頃には空風輪・火輪とも小ホゾ穴を有するタイプが現れ、両者は小さい木製ホゾを介して連結されていたと推測される。当然木ホゾの腐朽とともに崩れてしまう永続性の低いものであったと考えられる。磐田市一の谷中世墳墓群の832号墓出土五輪塔（砂岩、第31図-9）では木ホゾ連結型の組み合わせが確認できる（加藤1993）。このタイプも古い段階では頂部がやや丸く、新しい段階では円錐形により近くなる。

(2) 宝篋印塔

宝篋印塔は伊勢湾以東では鎌倉のやぐら内より出土した寶治二年（1247）銘のものが最古とされていたが、近年の調査進展で、やぐらの出現年代との齟齬や類別が皆無であることから贋作であると見る見方もある。実際の初期の宝篋印塔には軟質石材を使用するものの存在が推定されているが、これらはほとんど風化崩壊して実態が不明である。現存資料では1260～70年代頃の造営と考えられる茨城県つくば市の宝篋山宝篋印塔（花崗岩）が関西形式の古い例だが孤立しており、所謂「関東型式」につながる宝篋印塔では神奈川県箱根町の永仁四年（1296）銘箱根山宝篋印塔が最も古く、13世紀末～14世紀初頭にかけて伊豆・駿河地域に定着し、遠江地域にも伝播すると考えられる。

宝篋印塔の年代は笠の露簾の有無、段形の段数、隅飾の形状や傾斜の度合い等を指標に新旧の日安が得られる。遠江の紀年銘石塔は大部分が安山岩製で、榛原町の中村家墓地の「観阿弥陀仏 正和元年（1312）壬子七月廿九日」銘安山岩製基礎は小型だが高い段と正方形に近い2窓の区画が特徴で、

これに組み合わせ等は軒上四段・軒下二段でやや上下に偏平、隅飾が直立し1弧であるなど古栴を示し、現在遠江地域で確認する最古の宝篋印塔である。静波鈎学院にも「也阿弥陀仏 元徳四年壬申(1332) 四月三日 奉建石塔□□□□四月□□ 銘基礎があり反花座を伴っている。

榛原町道場清浄寺妻山の「勝間田一族の墓」石塔群には伊豆安山岩製の宝篋印塔部材(「混合式塔」含む)が多数あり、基礎に「観応貳年(1351) 願主 智阿弥陀佛 四月四日||住一房 建武四年(1337) 正月八日 奉造塔 文和二年(1353) 四月八日」と刻むものがある。

菊川町三光寺跡裏の宝篋印塔群は、部材の大部分は掛川日坂産の硬質砂岩であるが、伊豆安山岩製の宝篋印塔の反花座・基礎・塔身・傘が含まれ塔身には梵字が彫られているが、相輪は失われている。基礎の窓部には、「見阿弥陀仏」「文和四年(1355) 卯月十日」と刻まれている。

三光寺には大型の砂岩製宝篋印塔部材も見られ、14世紀中葉～後半頃の年代が推定される。

横地太郎塔は人型の砂岩製の宝篋印塔で相輪と等が残り、14世紀中葉前後の年代が推定される。またその約2分の1の規格に相当する同型式の中型宝篋印塔が横地太郎塔群・神尾宝珠院にみられる。いずれも軒と隅飾に段差があり、隅飾内の装飾は縦長で内伏を残すという特徴があるが、横地太郎塔や三光寺大型塔が露盤の表現を伴うのに対し、横地太郎塔群・神尾宝珠院例には露盤の表現がない。

大井川対岸、駿河西部域の藤枝市鬼岩寺の矢部半人宝篋印塔は日坂石製と推定され「永徳元年(1381) 七月二十日」銘がある。相良町笠名の庵貸せ松旧在の砂岩製台座には「応永五年(1398) 三月二十日」銘があり、これと組み合わせ等は軒がやや外反し、頂部に露盤の表現をとどめる。これらは14世紀後葉に砂岩製の小型宝篋印塔が出現したことを示しているが、ともに台座が一窓となる関西形式の影響を示す。特に鬼岩寺には永徳元年銘塔も含め、関西形式で反花座表現のある一窓式基礎が多く見られ、三河地域の強い影響を窺わせ、これらが在来に関東形式の石塔に影響を与えたと考えられる。反花座・楕座を伴う台座は、関東形式に伴いこれの特徴付けるもので、花卉の彫りの深さや割り付けの変化から退化過程も跡づけられるが、関西形式系統のc類では反花座のみからなる偏平な礎板状の台座を伴うのが普通で、c類主体に転換していく15世紀以降、次第に減少していくと考えられる。基礎についても横幅が広く低いb類が台座を伴うのに対し、台座を伴わず縦長で底面に挟りのあるc類への変化もこれと対応していると考えられる。

15世紀前半と考えられる部材には、露盤の表現がなく、軒と隅飾突起との段差が焼失し、隅飾突起の装飾は縦長だが線刻となる奥根寺・天神森などの例がある。また井伊氏の領域である引佐町北岡中世墓では、15世紀前半の常滑壺を伴う墳墓付近より長大な宝篋印塔相輪が出土している。

三光寺跡裏では三河花崗岩製の宝篋印塔の部材一具が含まれ、15世紀中葉前後のものと考えられる。類似するものは愛知県・宮市法園寺中世墳墓5号集石墓にみられ、13世紀後半～15世紀末までの複数の蔵骨器とともに花崗岩製の宝篋印塔一具、一石五輪塔が出土している。これは遠江における関西系統の小型宝篋印塔や一石五輪塔の出現に三河以西の影響があることを暗示している。

15世紀中葉以降の宝篋印塔は中型・小型化のものが増大し2m級のものはほとんど見られなくなる。隅飾突起に線刻装飾を伴うものは横長からと状に退化していくのが特徴。掛川城跡本丸下層墳墓群は永正築城(1513前後)以前に当地に存在した中世寺院址(懸川山神宮寺か)に伴う石塔部材で、報告書には笠1点、相輪基部片1点が図示されており15世紀後葉～末頃の年代が考えられる。石材は非常に精良緻密な白色の砂岩から礫岩質の口坂砂岩まで様々である(掛川市教育委員会1998)。

掛川市寧遠跡では16世紀後半の陶器と宝篋印塔の笠・基礎が出土し、笠は軒下が斜段となり、台座も極端な縦長形で、段の退化も進んでいる(戸塚1995)。二俣家墓地宝篋印塔は、相輪は宝珠がつぶれ隅九角柱状をなし、16世紀後半頃の年代が推定される。なお榛原町清浄寺の過去帳には、永禄十年

(1567)、天正元年(1573)に二俣氏の夫婦が記載されており、これらの人物の墓塔の可能性も残る。浜松城東南石垣の裏込め中から出土した宝篋印塔笠は、徳川家康が関東に転封され秀吉配下の堀尾吉晴・忠氏らが石垣・瓦葺化を進行した天正十八年(1590)以前のもと考えられるが、直線状に外反した隅飾突起の粗い挟りが特徴で、中世末期の様相を示している(浜松市教育委員会1996)。こうした中世的な宝篋印塔は、大須賀町横要寺の天正十六年(1588)銘塔(大須賀町教育委員会1981)を嚆矢とする伊豆安山岩製の江戸時代様式宝篋印塔の出現以降、急速に姿を消していくと考えられる。

(3)一石五輪塔

大阪府貝塚市半田墓地の砂岩製永六年(1399)銘塔が在銘最古で、南河内では千早赤坂村森塚墓池にある砂岩製嘉吉二年(1442)銘塔が最も古く、14世紀末に大阪湾岸で出現し、15世紀に近畿地方にまづ拡がり、15世紀後半には伊勢湾岸に拡散し、遠江や北陸に達するのは15世紀末前後で16～17世紀にかけて多く造立されたと考えられる。現在までの報告例で最新の一石五輪塔は堺市経正寺の安政四年(1857)銘塔で、南河内の在銘最新は千早赤坂村小吹墓地にある砂岩製文政十一年(1828)銘塔であるという。木下浩良氏は、高野山の一石五輪塔を分析し、新旧の目安に石材の変化とともに「埋込式」→「ホソ穴式」→「安置式」という変遷を設定し、地面に突き立てたものから、地面の上に置くものへと変化していくこと、次第に全長が長くなっていくことを指摘している(木下1992)。

遠江地域の一石五輪塔は、木ホゾ連結式の五輪塔と形状・時期ともに対応関係があると考えられる。

当地で実年代の判明する最古の一石五輪塔は、掛川城跡本丸下層墳墓群の出土品で、厚く直線的な火輪と尖った空輪、さほど長くない安置式の地輪が特徴である。この墓地は朝比奈氏による永正年間(1513前後)の掛川城築城に先立つものと考えられ、石塔類に著しい擾乱が見られないことから、普請貞前の1500年代初めまでには一石五輪塔が出現していたとわかる。ただし出土した一石五輪塔はすべて白色の花崗岩質砂岩で、凝灰岩質砂岩の日板石製品は宝篋印塔・五輪塔部材のみで一石五輪塔を含まない。日板石の一石五輪塔出現は16世紀以降であることを示唆するものであろうか。小笠町正林寺には合石を伴う日板石製の大型一石五輪塔があり、本体49.7cmを計る。薄手で反りのある軒と長大化の途上にある地輪が特徴で、文明八年(1476)春に横地・勝間田氏との戦闘で傷付いた今川義忠墓塔と伝承し、正林寺が創建された永正十一年(1517)頃に造立されたと推定される。

以上をふまえて横地城周辺を見ると、三光寺跡裏に2点の古式一石五輪塔がみられるほか、小川端渋谷宅裏石塔群にはきわめてバリエーションに富む一石五輪塔がみられ、掛川城本丸下層や正林寺のものとはほぼ同法量・同形態・同石材のものを含んでおり、磐田市大原墳墓群やノ谷中世墳墓群に近い組成を示している。菊川町内でも15世紀末頃には花崗岩質砂岩の一石五輪塔が出現し16世紀初頭以降に凝灰岩質砂岩の一石五輪塔が展開すると考えられる。

興嶽寺歴代墓所に脆弱な凝灰岩質砂岩(大宮石?)製の大型一石五輪塔があり、四面に梵字を刻んでいる。地輪部に「天□」銘があり、天文(1532～1555)、天正(1573～1592)のいずれかと考えられる。この一石五輪塔は薄く反りのある軒と丸々と張った水輪部が特徴だが、水輪の最大径が火輪軒や地輪の幅より大きいものの方が石材からの加工工程が煩雑で、同じ幅のものは方柱状の石材にくびれを刻むだけでよいから、前者の方が古いタイプであると考えられる。

掛川城築城跡では16世紀後半の一石五輪塔片が出土している。全容が不明なのが惜しめるが、地輪部が極端に長い埋め込み式の可能性が高い。当初は自立可能な安置型に近いものだったが、次第に扁平で不安定なつくりとなり、自立不可能な完全な埋め込み式(または立て掛け式)になるようだ。

一方この時期には極端に地輪部が短く、横幅の広い安置式も見られる。

浜松城では1590年以降築造の南東石垣裏込より梵字を墨書した小型の規格品とみられる一石五輪塔

が出土しており、無文の小形一石五輪塔の多くは本来墨書を伴っていたと考えられる。16世紀後半～17世紀初めにかけて段楨地公会堂の一石五輪塔群のような小型の規格品が量産されるようである。

16世紀の一石五輪塔がやや偏平でハツリ痕やノミ条痕を残す粗い仕上げのものが多いのに対し、17世紀以降のものは彫整痕が丁寧に消され、のっぺりした角柱状の外観を呈する。袋井市春岡林光寺、市川家墓地の「寛永十^二（1635）季」銘塔は全高75cm程で、「キ・カ・ラ・バ・ア」の種子を刻んでいるが、全高97.2cmに達する静岡市小坂安養寺（曹洞宗）の「元和二」（1616）銘塔では既に刻字が梵字から漢字の「地・水・火・風・空」に変化している（河合1998）。三沢龍谷寺は刻銘や江戸期の寛書より石塔の被葬者と没年が判明する貴重な事例で、一石五輪塔は地輪部の長大化が著しく、埋め込み式やホヅ式、石竈内への立て掛け式ともいうべき形状を示している。また石竈を伴うものは、一対となる夫婦の一石五輪塔を安置していたことが記録から判明する。慶安五年（1652）銘のものは出ホヅをそなえ方形の台石上に建てられたもので、「地・水・火・風・空」の刻字がある。最大のは寛文四年（1664）の造立で「空・風・火・水・地」を刻字し、石竈内床石の方形孔に差し込まれた下部を含めた総高は80cmに達すると考えられる。占田町能満寺境内の「天和二年（1683）」銘塔では、空風輪は大きく膨らんで括れはきわめて弱く紡錘形に境の溝を影る程度となっているが、いまだ各輪の比率は均分である。ところが三沢龍谷寺の元禄七年（1694）造立塔・宝永四年（1707）銘塔のは空風輪がかなり小さくなり、細口瓶を思わせる急激なすばまりを示している。なお掛川市子嶺角皆英明氏宅墓地などには墨形形の石竈を伴い空風輪の頂部が丸く、各輪の影りが浅い退化の進んだ一石五輪塔が見られ、18世紀代のものを含むと考えられる。

以上、遠江地域での一石五輪塔は、出土遺跡の年代観や紀年銘資料からみて15世紀後葉以降に出現し、本格的な造立は16世紀前半～17世紀代と考えられ、関西地方での型式変化が進行した段階で受容されたようだ。当初は安置式で、次いで埋め込み式が現れ、江戸期に入ってホヅ式や石竈が現れるよう遠江地域とは様相が異なる。遠江内独自の編年と分類を進める必要がある。

V 石材について

(1) 石材産地と流通

横地崗辺の石塔石材は、砂岩が圧倒的多数を占め90%以上に達し、大部分は菊川町域に隣接する掛川市日坂産と推定される。また、少数ながらも遠隔地より搬入された石材が用いられており、安山岩、緑色片岩、花崗岩、凝灰岩などの存在が確かめられる。

静岡県下においては、伊豆半島の安山岩や森町の天宮石などの石材産地ならびに石工職人の存在形態や系譜、流通などについての幾つかの研究成果があるが、石塔石材との対比はいまだ途上である。

一谷中世墳墓群の報告書（伊藤1993）では、石塔材質主体をなす砂岩には花崗岩質砂岩と凝灰質砂岩の二種があるとしており、これらうち凝灰質砂岩は遠江国内の掛川市日坂や森町天宮などで産出したと推定されるが、伊豆地方でもこの種の石材を産出するようである。

白色緻密の花崗岩質砂岩は15世紀以降の宝篋印塔や一石五輪塔などやや遅れて出現し、菊川町周辺など遠江東縁には少なく、掛川市以西に多い印象を受けるので日坂よりも西方の地域に別な産地があるものと想像するが、森町の天宮石は泥岩もしくは凝灰岩質の脆弱な石材とされ硬質の花崗岩質砂岩とは特徴が異なるようである。憶測の域を出ないが、愛知県東部、奥三河の玖老瀬（くろせ）石、蒲川石、蛭井戸石などが花崗岩質砂岩の産地の候補となろう（野澤1995）。特に南設楽郡鳳来町の玖老瀬石は安定した良質の砂岩層が広く分布し、水陸交通の要衝に位置し搬出の便も良いことから広域な流通が推定されている。ただし現状では、原産地石材と製品の対比作業を殆ど行っていないので、石材産地の特定は今後の課題である。

日坂砂岩（掛川市日坂）

遠江東部から駿河西部の石塔材に多用された砂岩の大部分は、掛川市東部の日坂から菊川町北部の公文名にかけて産出する通称「日坂石」であると考えられる。日坂石は灰緑色の大小チャート礫を多く含む空隙の多い粗性の礫砂岩から、微砂主体のキメ細い凝灰岩質砂岩まで様々な変異があり、風化や経年変化で含有鉄分が褐色に変色することもあるが、本来は淡灰褐色を呈する石材と考えられる。

日坂で現在も石工業を営む「石由」（いしよし、屋号）は現当主内田雅巳氏が18代目を数える由緒ある家系で、遠江各地には「石工内田」と銘刻された近世石造物が残されているという。当家の内田美枝子氏によれば、昭和40年代頃までは街道脇に位置する石丁場で発破で切り崩した石材の中から芯の良質な部分を灯籠や石塔に、質の悪いものは間知石や砕石などの土木資材に用いていたという。「日坂石」は周智郡森町〜掛川市日坂にかけて分布している第三紀中新世の倉貞（くらみ）層群の天方（あまかた）砂岩層から産出している公算が高いという（野澤1998）。

なお現在の石丁場に近い日坂宮村耕地整理で高台より出土した宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔には、チャート礫を含む凝灰岩質砂岩、花崗岩質砂岩の両方が含まれており、やはり日坂に比較的近い掛川城本丸下層出土石塔にも白色できめの細かい花崗岩質砂岩が多く含まれている（戸塚和美氏に掛川市教委保管品についてご教示を得た）。日坂でも産出層位や地点によっては、花崗岩質砂岩のような石材も産出した可能性が残るが、花崗岩質と凝灰岩質の砂岩石塔は作風や製品、盛行時期や分布にも若干の相違が感じられるので、筆者は花崗岩質砂岩は三河産の可能性が高いと想像している。

天宮砂岩（森町大宮）

森町の天宮・橋・蓮華寺の八形山地区では、天宮石（あまみやいし）と呼ばれる、軟弱で泥岩もしくは凝灰岩質に近い砂岩が産出する。粒子が細かく軟質で、石塔などの加工が容易で、出来栄えも滑らかで美しい。その利用は古く森町飯田地区や園田地区の古墳石室材に始まり、石塔では近世の碑石墓や無縫塔などにしばしば用いられている。古老の伝承では、御影石のように水滴を吹き出す石を「生き石」、水分を石塔の表面に吹き出さない吸水性の高い石を「死に石」と呼び、太田川周辺では墓石には「死に石」を好んで用いたという。しかし吸水性が高く凍結作用による球状剝離で2〜300年を経過すると風化崩壊してしまう短所があり、中世前期までさかのぼる遺品は現存していないという。森町三倉田能蔵泉寺に戦国〜近世初期の一石五輪塔や寛文〜延宝期の船底型墓石が残存している。三ヶ日町摩河耶寺には元禄期の船底型光背の西国三十三観音像が見られる。

一宮別当蓮華寺は、浄土系の寺院だが、東国に多い法然系の念仏とは異系統で南都仏教の影響も窺える特異な存在である。市の立つ森山（三嶋大明神社山）南麓は太田川の河原で中世の津も隣接した。

蓮華寺は鋳物師・番匠・土師師・瓦師など、森の職人集団を支配していたことが文書類から窺え、中世以来石工業にも採石の権利を与えていたとみられる。寛永十七年（1640）の蓮華寺文書（『森町史』資料編五、蓮華寺関係資料151号）に、「八形山大ひらの尾崎にて、ふすま村の谷と申所に三郎左衛門（高木）石を切申候時、とかく申候は、寺一石役之分を何にても御用次第に仕るべしと申候間、ゆるし置候処其後石役不仕候間」とあり、蓮華寺に「石役」があって、一宮橋山の山役であった高木氏が蓮華寺山の石役も勤め、蓮華寺山石材の管理人として盗掘を取り締まっていた。また鋳物師が用いる鋳型の砂も付近から採取された。明治期まで石工であった天宮大上の竹島家の代々には「石峯道全上座・石心童子」などいかに石工らしい法名が知られている。竹島家では蓮華寺八形山の東に延びる尾根を「石山」と呼び、採石権を持っていた。天宮大上の「石山」の北の谷を「石取場」と呼び、比高差40mに及ぶ採石場をなし、切り出した石は背負い子で屋敷内の作業場に運んで加工したが、竹島家では墓石の竿部分のみを製作し、橋の森松家が台座部分を作ったと言う。天宮石は寺院や神社、

民家などの建造物の礎石・石段・石垣・石臼・庭石などにも利用された（『森町の棟札・金石文』）

緑色変岩（天竜川流域）

遠州地方では「青石」と通称される風化に強い硬質の石材で、碧玉質から緑色凝灰岩質まで若干の変異がある。中世前期の五輪塔では、奥精地慈眼寺に総高90cmを測る五輪塔一具を含む数個体分の部材が見られ、三光寺跡裏にも空風輪が見られるほか、神尾宝珠院の五輪塔火輪や小笠町小湊城五輪塔もこの石材の可能性がある。森町一宮片瀬薬師堂、同大久保共同墓地、円田大城戸、飯田崇信寺墓地（『森町の棟札・金石文』）、袋井市友永積雲院の伝源朝長五輪塔、宇刈春岡西楽寺五輪塔、春岡用福寺伝橘逸勢墓、磐田市鎌田兵衛墓石塔群（かつて五輪塔に永仁七年（1299）銘があったというが現在確認できない）など太田川流域に集中して遺品が見いだされ、榛原町中石塔群・勝田伏方石塔群、島田市医王寺墓地など大井川流域を東限とし、浜北町宮口大屋敷など天竜川流域まで広く分布しているらしい。宮口大屋敷の五輪塔は90cmを測り（久野1987）、慈眼寺例とほぼ同規模同形態で規格品が定量的に供給されていたようである。緑色変岩の最大の遺品は、相良町平田寺の延慶三年（1310）沙弥如蓮銘の異形宝塔であるが、相輪上部のみ砂岩製部材で補っており、遠隔地で製作され搬入されたと考えられる。よって緑色変岩は伊豆安山岩に先行して出現し、別個の技術系譜下で使用された石材と考えられる。塔下に13世紀前半生産の常滑の蔵骨器を伴う愛知県一宮市法園寺4号中世墓の五輪塔（第31図-5）はよく似た色調の緑色凝灰岩製で、緑色変岩の使用開始はこの石材を強く意識していたと考えられる。また緑色変岩五輪塔とほぼ同形同法量の砂岩製五輪塔が混在して見いだされる袋井市用福寺の「橘逸勢墓」五輪塔例から、その技術は初期の砂岩製五輪塔に継承されたと考えられる。

この種の鉱物は地質図によれば小規模局地的な露頭が点在する「緑色岩」に相当すると考えられ、広い分布を示す基盤層群や岩盤の狭間に局地的に存在し、なおかつそれらが点在しているため産地の特定は難しいが、石塔の分布からみて天竜川や太田川水系などの水蝕で形成された小露頭に由来すると考えられ、いまのところ天竜川上流の産出と推定されている（『森町の棟札・金石文』）。

なお緑色片岩五輪塔の所在地を結んでいくと、小笠町小湊城と平川、慈眼寺・三光寺跡裏と横地、本郷照片寺と和田岡、春岡西楽寺、上山梨用福寺と宇刈、友永積雲院、宮口大屋敷と二俣が比較的近く、すなわちその分布は、「塩の道」のルートと隣接関係を有している。小型の部材の一部は、天竜川上流から遠州への塩の埴り荷として陸路を搬送されてきた可能性が考えられる。

この石材は中世の五輪塔だけでなく、17世紀の一石五輪塔（金谷町利生寺裏墓地）・近世墓碑（河城）への使用が確認され、中世前期・近世の石丁場の存在が推定されるが、いまのところ宝篋印塔への使用例が知られておらず、中世後期にはあまり利用されなかったようだ。

輝石安山岩（伊豆半島周辺）

輝石安山岩は黒灰色～暗紫色硬質の石材で、石塔は13世紀末に箱根周辺で出現する。永仁四年（1296）の箱根山宝篋印塔、箱根町永仁三年（1295）銘五輪塔はその初期の遺例である。硬質石材加工技術の導入の背後には南部西大寺流の真言律僧、忍性の傘下にある大蔵派石工の関与が推定されている。

沼津市南方、内浦湾奥に位置する豆州郡沢郡重寺村の室伏家は中世以来の旧家で、慶長以降の文書多数が伝わり、100通にのぼる淡島・大洞の石切出しに関する記録が含まれている。淡島からは輝石安山岩（通称堅石）、凝灰岩（通称伊豆石）、玄武岩の柱状石（通称扇石）を産出し、現在も西海岸を中心に欠穴を残す石が散在している。文献による石切出しの初見は正保三年（1646）で、駿府城・久能山・江戸城・浅間神社などで地震・風水害による石垣の破損修理の用材を供給したことが記録にあるが、実際はそれ以前から採掘されていたと考えられる（高本1981）。当地をはじめ伊豆では輝石安山岩と凝灰岩が隣接した丁場から採掘され、硬質石材加工技術の軟質石材への転移が確かめられる。

淡島も含め江戸城関連の石垣石などを切り出した石丁場跡の分布状況より、近世以前からの丁場として①真鶴半島周辺、②伊豆半島東海岸沿い、③伊豆半島北西部の駿河湾沿い、などが挙げられる。

金子浩之氏等によれば、伊豆半島内での石材には大別して安山岩・玄武岩系の堅緻な石材と、砂岩系の軟質石材（通称「沢田石」）が代表的）の大別硬軟二種がある。『伊豆石』とした場合は砂岩系のもので、『伊豆青石』は安山岩系の石材を指すという（金子・岡田1994）。

河津町今井浜海岸は近世以降の石丁場の一例で、海岸の直径数mを越える安山岩塊に矢穴が観察され、岩塊を割り取って石材を生産したと考えられる。中近世の石丁場は、土中から掘り出す手間が不要で、なおかつ水運の便の良い海岸に立地することが一般的であったと考えられる（金子1995）。

安山岩製石塔は、菊川町内でも三光寺跡裏で宝篋印塔、段横地公会堂・小川端北方墓地などで五輪塔空風輪が確認されているが少ない。輝石安山岩製の石塔の分布は、国府のある磐田市見付周辺の一の谷中世墳墓群遺跡（加藤1993）出十例や西光寺宝塔、見生寺五輪塔のほかは、榛原町や相良町など沿岸部に偏って見いだされ、内陸部に入ると急激に減少する。遠江地域に供給された安山岩の産地は伊豆半島東海岸が候補と考えられ、製品搬入や石工の出稼ぎが考えられる。遠隔地石材の搬入は一見コスト面で不利に見えるが、福井県の若狭湾沿岸、高浜町の口引石（安山岩質凝灰岩）は、松浦党など前期倭寇の船の掃り荷のバラストとして長崎県五島列島・鹿児島県坊津までひろく搬入されたと推定されている（大石1997）。また中世には港湾使用料として堤防修築の用途に船のバラスト石を「置石」の名目で徴収する場合があった（網野1992）。バラスト材であれば、輸送コストは非常に低かったと考えられ、伊豆安山岩も船舶ルートの副次的な輸送物として持ち込まれた可能性がある。

凝灰岩（伊豆半島周辺ほか）

三光寺跡裏に凝灰岩製五輪塔地輪が1例のみ認められる。石質は空隙が多く白色を呈する。白色の凝灰岩は菊川流域の白岩石が横穴墓内の石棺に用いられている例があるが、脆弱で石塔部材の製作には耐えないという。また愛知県鳳来町門谷平沢家墓地の16世紀後半頃の石造宝塔は、奥三河産の凝灰岩製とみられるが石質は三光寺跡のものとは異なる（野沢1998）。一方伊豆半島周辺では安山岩と凝灰岩が一連の丁場から産出する。伊豆長岡町の大北横穴群では「若舎人」銘をはじめとする古代の火葬石櫃に白色凝灰岩が用いられている。なお近年の沼津市霊山寺の石塔調査によれば、若干の安山岩製空風輪を除くと嘉元二年（1304）・正和二年（1314）銘混合式塔、元享二年（1323）の成真五輪塔を含む大型石塔部材の大部分は凝灰岩（伊豆石）製であると報告されている（吉沢1998）。伊豆地方からの搬入石材は輝石安山岩ばかりが目につくが、現在石材産地を確定できない神尾宝珠院や興嶽寺の反花座付台座の石材は、伊豆凝灰岩の可能性も残されている。また遠江の砂岩製大型宝篋印塔の出現背景についても、伊豆安山岩だけでなく凝灰岩からの技術移転を想定しておく必要があろう。

花崗岩（愛知県岡崎市目産か）

掛川市長福寺境内には花崗岩製で梵字を刻んだ大型の五輪塔があり、かつて完形で長福寺裏山古墳の上に立っていたが、地すべりで崩落し空風輪・火輪を失い移築されている。掛川市本郷照月寺は原野谷川流域の原荘を所領とした地頭原氏の菩提所で、花崗岩製の大型五輪塔がある。これと同様な五輪塔は豊岡村永安寺にもある。三光寺跡裏墓地では、ほぼ1具に復元しうる花崗岩製宝篋印塔部材4点が含まれている。この宝篋印塔は軒が強く外反するなど尾張・三河地方の15世紀頃の遺品と酷似しており、「三河石」・「岡崎石」と呼ばれる岡崎・日付の花崗岩製品が搬入されたと考えられる（池上1966他）。なお愛知県瀬戸市の赤津長根窯では鎌倉後期の窯址に隣接して古い石切り場の跡がある。

VI 調査の問題点

(1)横地慈眼寺五輪塔の問題点—緑色変岩石塔と浄土宗と塩の道

菊川町内最古の石塔は、横地慈眼寺にある緑色変岩製五輪塔で、四面に薬彫彫りのしっかりした梵字を彫っている（第31図—1～4）。全高90.1cmを測り慈眼寺開基の信寂の墓と伝承する。法然が80歳で入寂した建暦二年（1212）、堀尾の高僧（明恵）は『推邪輪』、更に翌三年に『推邪輪莊嚴記』を撰して『選擇集』を批判した。これに対して信寂房は『慧命義』を著わして論駁した。信寂は寛元元年（1243）横地に下り、寛元二年（1244）三月二日当地で没したと伝える。

『法然上人行状記』によれば、法然は弟子の「眞觀房感西」と「西傳」ら二名を伴い浜岡町桜ヶ池を訪れ、大蛇となって棲息していた師の皇國阿闍梨を念仏で成仏させたと伝える。これはもとより史実とは考えられないが、眞觀房感西は内田應聲教院の開基で法然に先立ち正治二年（1200）閏二月六日に48歳で没したと伝える。西傳は浜西市西伝寺の開基で、法然の遺骨を持ち帰って境内に法然塚（五輪塔）を建てたと伝え、念仏教州道首（嘉祿の法難）の受難者の一人と目される。また『法然上人行状記』にみえる遠江出身の「西蓮」と「西傳」を同一人物とみる説もある（平1961）。なお『円通寺文書』「浄土惣系図」では「西蓮」と法然面授の弟子である播磨国朝山山信寂房を同一人物かとしている。おそらく西蓮は横地氏、感西は内田氏などの出身者で天台僧であったと想像される。なお『法然上人絵伝』巻四十五に、法然の弟子隆寛律師が見付に滞在した折には、近隣の地頭が結縁のため参集したといひ、浄土宗の勢力は遠江を広く覆っていたと考えられる。こうした法然門徒の開基を伝える寺院には緑色変岩の古式五輪塔がしばしば見られ、五輪塔と浄土宗布教の関係が推定されるが、大口如來の三昧耶形である五輪塔が真言密教の産物である点を重視すれば、浄土宗が中国の浄土教学や南都仏教・真言密教を摂取して変質し、専修念仏を放棄して兼学を強める1250年代以降に出現したと見るべきで、13世紀後半～末という塔の年代観もこれに矛盾しない。なお緑色片岩五輪塔の分布は「塩の道」のルートと重なる。天竜川上流の緑色片岩が、塩の運び荷として搬送された可能性がある。

(2)三光寺裏山宝篋印塔について—阿弥陀名号石塔と時宗の関係について

三光寺跡裏の伊豆安山岩製宝篋印塔は部材（笠・軸・基礎・台座）から合成復元したもので、基礎の窓部に「見阿弥陀仏」「文和四年（1355）卯月十日」と刻まれている。この宝篋印塔は、榛原町清浄寺裏山の勝間田氏一族の墓所とされる石塔群の中の観応二年（1351）銘混合式塔と笠・基礎・台座に極めて共通点が多い。榛原町道場清浄寺は現在浄土宗となっているが、寺号や地名が示すように、当初は時宗道場として弘安六年（1283）頃の開基を伝える。石塔群は中央部に比較的大きい混合式塔が8基立ち、周辺には小五輪塔が数多く見られ、いずれも伊豆安山岩製である。混合式塔に伴う台座は立ち上がりが急でやや退化した複弁反花座、格狭間表現のない椀座の様相などから、14世紀中葉～後半前後の製作にかかると考えられる。混合式塔2基の基礎に刻銘があり、うち総高1.12mのものに「観応貳年（1351）願主 智阿弥陀佛四月四日」の刻銘がある。総高1.15mのものに「住一房 建武四年（1337）正月八日 奉造塔 文和二年（1353）四月八日」とみえ、建武四年没の住一房の供養塔として16年後の文和二年四月八日に造立したものである。榛原町にはこの他にも中所在中村家墓地宝篋印塔台座に「観阿弥陀仏 正和元年（1312）壬子七月廿九日」、静波鈎学院所蔵の宝篋印塔台座・五輪塔の寄せ集め塔に「也阿弥陀仏 元徳四年壬申（1332）四月二日奉建石塔」四月〇〇とみえるが、三光寺宝篋印塔の「見阿弥陀仏」も含め、これらの石塔に見える「～阿弥陀仏」とは、時宗の信徒に授けられた阿弥陀名号であると考えられ、1310年代前後から阿弥陀名号を刻んだ時宗門徒の造塔が始まるようだ。石塔より後の時代であるが、横地三光寺も時宗本山である神奈川県藤沢市の清浄光寺の末寺であった。一連に始まる時宗は、宗祖を遊行上人というが、二代目の他阿真教の

『他阿上人和歌集』には「慈阿弥陀仏^{（阿彌陀佛）}」とあり、法語集『他阿上人法語』には勝間田氏の屋敷を訪れた記事があるほか、延慶三年（1310）九月頃、遠江鎌塚の宿で「横地九郎左衛門入道新西」と歌合をしたことが記録にあり、当時勝間田氏・横地氏は時宗に帰依していたとわかる。三光寺の「見阿弥陀仏」塔も、横地氏一族の中で時宗に帰依した人物の墓塔が供養塔と考えられる。神奈川原相模原市の当麻無量光寺には歴代の遊行上人の墓があり、いずれも関東形式の宝篋印塔で、南北朝～室町頃の様式を示している。よって時宗末寺では、宗祖をまねて墓に宝篋印塔を立てる風が行なわれたようである。なお三光寺跡裏には文和年塔に後続すると推定される大型砂岩製宝篋印塔があり、刻銘があるようだが摩滅不鮮明である。これにも阿弥陀名号が刻まれていた可能性がある。

伊豆安山岩製石塔の初期の遺品は忍性が関与した箱根周辺や、鎌倉極楽寺や金沢称名寺など律宗寺院に集中し、忍性同門で西大寺数尊高弟の宗賢房成貞の中興になる沼津雲山寺にも律系の凝灰岩製石造物が多数あり、遠江のものはそれらのうちの退化の進んだものと同形態である。また一遍入寂の地である兵庫泉真光寺には一遍の遺骨を納めた南北朝期の大型五輪塔がたっているが、その形態はまさしく西大寺様式である。西大寺流真言律宗では五輪塔造営と本山納骨・『光明真言結縁過去帳』の記載がセットで行なわれていたが、時宗でも阿弥陀名号宝篋印塔と本山納骨・『時衆過去帳』の記載がセットをなしていたと考えられ、これは律宗のシステムを換骨奪胎したものだと推定される。

すなわち遠江東部の時宗末寺の安山岩製石塔は、律宗傘下の大蔵派石工の製作になる律系石造物に起源をもち、時宗が教団組織を整備した遊行二世他阿真教の代にその技術や様式を受容して出現したと考えられる。なお他阿真教からの法語の宛先には、大仏宣時が登場するが、大仏氏は執権北条氏の一族で遠江国の守護を独占していた時宗の最大のパトロンであり（保立1988）、北条氏の公認のもとで、得宗政権と密接な関係を有した律宗の技術が、時宗にも移植されたことが想像される。

(3)横地太郎塔の問題点—砂岩製大型宝篋印塔の出現

菊川町内で最も大型の石塔は横地太郎宝篋印塔（砂岩）で、宝珠・半弁請花・九輪・錦蓮弁請花・伏鉢を完備した相輪、軒上4段・軒下2段の笠で最上段を各面二意の框座で露盤となし、垂直隅飾を伴う。相輪と笠の計は145cmに達し、失われた関東形式の軸・基礎・台座を補えば、総高220cm前後に達する遠江でも最大級の宝篋印塔であったと考えられる。つぶれた宝珠の相輪や軒上4段と露盤、軒下2段の笠の構成は下田市河内承福院の建武元年（1334）塔と共通する。他県の例だが、埼玉県深谷市小林家の観応二年（1351）宝篋印塔は相輪のタガ状九輪、内彫の請花が横地太郎塔に類似する（埼玉県教育委員会1998）。この塔は安山岩製で、伊豆半島周辺の製作とみられ、阿弥陀名号の人物が十数名も結縁した結束塔で時衆の関与が推定される。また駿河北西縁の小山町菅沼川連静寺の嘉慶二年（1388）銘塔はタガ状相輪を留めるが上請花の退化が進み横地太郎塔より新相を示す（石川1997）。よって横地太郎塔は、伊豆半島周辺で製作された14世紀中葉の安山岩製宝篋印塔の影響を顕著せ、これらが遠江産の砂岩に材質転換したものと考えられ、14世紀中葉～後半の比較的早い段階のものと考えられる。なお伊豆半島南部では、島田市高馬の通称「傾城塚」や土肥町八木沢の嘉慶三年（1389）銘塔など「伊豆式」と呼ばれる長人偏平な反花座の台座を伴い（尾形1988）、類似する台座は掛川市下本郷照月寺跡や曾我五郎・十郎塔（口野1968）、本川根町藤川の伝小長谷城主墓（向坂鋼二先生のご教示）などに見られる。これらは14世紀中葉～末に遠江東部を中心に展開した砂岩製の大型宝篋印塔が伊豆半島、中でも南部地域の地域色を強く受けて成立したことを示し、両地域間の交流、ひいては伊豆安山岩石工が来達して定着し、砂岩製石造物の製作に関与したことさえうかがわれる。

(4)宝篋印塔の小型化と三河の影響—関東形式への関西系形式の影響

三光寺跡裏では5点の花崗岩製宝篋印塔部材が確認され、うち相輪・笠・軸・基礎の4点は法量や

形態の相関から一具の可能性が高い(第36図 2)。これに近いものは愛知県・宮市の法園寺5号中世墓に例がある(第36図-3)。法園寺では関西様式の砂岩製宝篋印塔もみられるが、これに比較的近いものは、西駿河藤枝市の真言宗鬼岩寺にみられ、反華座を併い側面1窓の低い台座で「永徳元年(1381)」銘があり、14世紀末葉の関西様式の受容を端的に物語っている。鬼岩寺にはこの他にも古式の小型砂岩製宝篋印塔が多く、大部分は日板石製と考えられる。鬼岩寺は永仁年間(1293~1299)に鎌倉極楽寺の忍性の中興したと伝え、応安六年(1373)銘のある西大寺様式の大形納骨五輪塔も見られるため、律宗寺院であったと考えられる。律宗傘下の大蔵派をはじめとする石工集団は花崗岩や安山岩などの硬質石材石塔の出現に直接関与したことが知られるが、例えば千葉県銚子の銚子砂岩の石造物は、初期の遺品が大栗町大慈恩寺や多古町東禅寺など律宗系寺院に偏って見いだされ、律宗は砂岩製石塔の出現にも関与していた可能性が高い。

おそらく三河以西から関西様式の花崗岩や砂岩の石塔が持ち込まれ、やがて在地の口板石にその様式が持ち込まれたと考えられる。ただし先行して関東様式が定着していたため、関西様式の受容は部分的なものにとどまったと理解することができる。

(5)横地城落城以降の世界一曹洞禅の展開と一石五輪塔の出現

小川端浪谷家裏石塔群は一石五輪塔23点(うち完形16)よりなり、大型古式の一石五輪塔が多く、掛川城本丸下層墳墓(1513前後の築城以前)と同形態のものがみられ、完形で最大のものは全高46cmを測り、水輪部の径が人さき、屋根化された柱状石材の削り出し製品に先行するものと考えられる。また破片には更に大型のものがみられ、横地落城から近世に移行する15世紀末~16世紀を主体とする石塔群として注目される。小笠町正林寺の伝今川義忠墓塔(文明八年(1476)没)は正林寺の前身である昌桂寺が創建された永正十四年(1517)頃の造立が推定される(河合1998)。本体49.7cm、総高55cmを測る日板石製の大型品で細長い形状だが、小さい台石の上に立てられており安置式に分類される。これらも含め遠江地域での一石五輪塔のうち最も型式学的に遡り15世紀末~16世紀前半の造営と考えられるものを眺めると、ずんぐりして積上式五輪塔に匹敵する規模の安置式が目につく。

興嶽寺は曹洞宗で文明七年(1475)に開基したと伝える。四面に梵字を刻む大型一石五輪塔(第37図-13)は全高約51cmを測り地輪の梵字横に「天□」銘があり、天文(1532~1555)・天正(1573~1592)のいずれかと考えられる。もし前者であれば天文二年(1533)七月四日に没した三世華嶽得春の墓塔の可能性も考えられる。六ヶ寺の末寺のうち興嶽地三光寺が三世華嶽得春(位1501~1533)、三沢龍谷寺と段横地常泉寺が四世寛州玄泰(位1533~1569)、笹間波宝珠寺が六世玉山秀光(位1610~1632)、神尾正光寺が九世勝山全尊(位?~1667)の開基になるという。

三光寺は戦ヶ谷通跡と武術原藤丸館の中間にあり、興嶽寺三世華嶽得春が天文四年(1535)五月五日に創建したと伝えるが、華嶽得春は天文二年(1533)に没したとされるので、事実上の開山は二世であったと考えられる。古式の一石五輪塔を2点交え(第37図-8・12)、形態からみて三光寺が曹洞禅寺として復興した天文年間に近い時期が考えられ、藤丸館の存在とも関わっていると考えられる。

三沢龍谷寺址は興嶽寺四世寛州玄泰によって天文年間(1532~1555)に開基されたと伝える。大型の一石五輪塔に伴う屋根形の覆屋2基があり、付近に宝篋印塔や小型の一石五輪塔などがみられる。

以上、菊川町内の一石五輪塔は15世紀末頃に出現し、天文年間(1532~1555)以降に開基された寺院で主に造立されたと思われるが、特に初期の大型塔は当地域の曹洞宗の展開との関連が考えられる。

曹洞宗は15世紀以降、道元専修禅・出家主義的な傾向を改め、密教的要素を導入して祈禱や葬送に積極的に関与するようになる。横地氏をはじめとする国人領主層の滅亡後、当地の曹洞宗は今川氏に協力的な態度をとり、また戦乱で荒廃した天台・真言寺院を復興、禅寺として中興し急速に教線を

伸ばしている。こうして彼らは旧来の菩提所の経営を引き継ぎ、宝篋印塔や五輪塔にかわる新たな墓標石塔として一石五輪塔を採用したものと想像され、北陸地方の風習を導入した可能性も考えられる。なお河合修氏の検討によれば、西駿河地域での古式の一石五輪塔は今川氏有力被官の菩提所（曹洞宗を多く含む）に多く見られ、また石材からみて遠江の日坂石製品が搬入された可能性があるという（河合1998）。すると墳地落成後に当地に盛行する古式の一石五輪塔の担い手には、今川氏被官となった在地領主や新たに人植した領主・武士層を含むものと推定される。そして17世紀に入ると、石甕を伴う夫婦墓の形態をとるものがあり、名土層の墓塔を含むと推定される。

(6) 居館と石塔の関係―御堂と御館

遠江国府見付の磐田市一の谷中世墳墓群では、宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔の部材が合計207点出土しているが、古式的大型宝篋印塔・五輪塔はなく多様性に富んだ小型品が主流であり、紀年銘や阿弥陀名号を刻むものもない。横地・勝間田・井伊などの有力在庁官人層は、国府から離れた本貫地付近に大型石塔を造立したと考えられ、特に横地では中世居館と石塔群が隣接関係で捉えられる。

伊平遺跡の所在地に残る大上（おおかみ）の通称は当地の居館の遺称と考えられる。伊平遺跡では13世紀後半～15世紀、16世紀、17世紀の遺物群が出土しており、これは13世紀後半～14世紀の慈恵寺五輪塔群、16世紀の延命段宝篋印塔、16世紀末～17世紀の道久一石五輪塔群との対応が推定される。

横地太郎塔は14世紀中葉の大型宝篋印塔を中核に、14～15世紀代の石造物を主体とし、16世紀の石塔も交えるものの一石五輪塔は見られない。付近は川上（ちゅうかみ）の通称を残し、伊平遺跡付近の大上と対応し、中世居館の存在を暗示している。なお横地城周辺ではいまのところ14世紀中葉～後半に出土陶磁器の断絶層があるが、横地太郎塔付近にこの時期の居館址がみつかる可能性も残る。

殿ヶ谷遺跡（12～15世紀）と藤丸館（15世紀末～16世紀）は三光寺跡裏石塔群（14世紀前半～16世紀）と対応し、特に15世紀後半～16世紀の一石五輪塔や宝篋印塔は後者との関係が推定される。

宇藤遺跡は神尾宝珠院（14世紀の石塔含む）との関係が推定される。

段横地地区周辺では14～17世紀の石造物が見られ、天神森（真言宗の寺院址？）は15世紀、興蔵寺（曹洞宗）は15世紀後半以降、段横地公会堂では14世紀ならびに16～17世紀の石塔が見られる。段横地では過去に山茶碗や礎石が出土し居館の存在が推定され、興蔵寺も居館址であったとの説がある。

以上墳地谷周辺の石塔群は、それぞれ対応する居館址が考えられ御堂・御館のセット関係が推定されるが、現在横地太郎塔群ならびに段横地・天神森に対応する館址は未確認である。特に横地太郎塔は14世紀中葉の横地惣領家ゆかりのものと考えられる点から、未発見の該期居館の発見が期待される。

(7) 屋敷神としての石塔

横地から上橋にかけての民家は、敷地内の西隅や北西隅に「地の神」と称して中世の石塔が祀られていたことがしばしばある。東横地坪井政則氏宅には古式の宝篋印塔笠2点、東横地長溝杉ノ谷遺跡彌島唯雄氏宅石塔群は宝篋印塔笠1・五輪塔水輪1点、十機坪井家では宝篋印塔笠、五輪塔空風輪、一石五輪塔残欠が、いずれも屋敷内の西もしくは北西に屋敷神として祭られている。これらのうちには付近から掘り出されて祭られたものと、転居に際して持ち込まれたものと二通りがある。屋敷内に中世石塔を祀る景観は現在も広く東日本の旧家に見られるが、山梨県の富士山麓では勝間田姓を名乗る家系の屋敷も含め、15～16世紀の入植を伝える本家筋の屋敷内にはしばしば屋敷神とともに近世屋敷墓が祀られ、中世の宝篋印塔や五輪塔が並置されていることがある。石塔は家屋の移動に際しては残されることが多く、どちらかというと土地に属した属地的・地神的性格を示しているが、例外的に移住に際して五輪塔や宝篋印塔の部材を数キロメートルも運んでいる例もある（斎藤1998）。

屋敷墓は屋敷地を開発した家父長を埋葬し祖先祭祀を行なうことで、屋敷地の世襲的相続を保障、

もしくは正当化する象徴として発生・普及していったと考えられている(橋田1991)。具体的には屋敷地内・隣接地の墓の形をとり、また最初の当主の墓が氏神として祀られることがある。浜北市宮口大屋敷では、中世居館跡に隣接し集石を伴う鎌倉後期頃の緑色片岩五輪塔が今もたっており、福田町元島遺跡では溝で区画され船入を伴う屋敷地内から15～16世紀代の屋敷墓が検出されているという。

中世武士階級の「一所懸命」の象徴であった屋敷墓や造塔は、中世末～近世初頭の民衆の「イエ」の成立に伴い、有力な「百姓」層にも拡大していくが、その過程ではあらたに一石五輪塔や碑石墓を建てるのと並行して、既存の古い石塔を祀る行為もしばしば行なわれたようである。

Ⅶ 小結

①菊川町の中世石造物は、宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔の3種類よりなり、五輪塔(鎌倉後期)・宝篋印塔(南北朝～室町)・一石五輪塔(戦国～)の順で出現し、これらが混在して群を構成する。

②石材は緑色変岩→日坂凝灰岩質砂岩→伊豆輝石安山岩→三河花崗岩→花崗岩質砂岩の順に出現。石材の90%以上が日坂砂岩で、ついで花崗岩質砂岩、緑色変岩、安山岩、花崗岩と続く。

③最古の石塔は慈眼寺の緑色変岩製五輪塔で、同種の五輪塔は太田川流域に集中し、中世前期居館の隣接地や浄土宗系寺院に多い。延慶二年(1310)造立の相良町平田寺宝塔も緑色変岩製石塔の年代の一端を示す。緑色変岩は天竜川上流の産出と推定され、近世の一石五輪塔や墓碑にも使用された。

④凝灰岩質砂岩は掛川市日坂周辺の産出で含有チャート礫の粒径や色調に幅がある。菊川・大井川両方の流域に供給され、遠江東部～駿河西部の14～16世紀の石塔に多用された。

⑤伊豆半島産の輝石安山岩の石塔は遠江では磐田のほか榛原町清浄寺裏山など沿岸部に多く河川水系の内陸部では急激に減少する。三光寺跡裏の「見阿弥陀仏 文和四年(1355)」銘基礎が示すように14世紀前半～中葉の宝篋印塔に阿弥陀名号・年号を刻む例が多く時宗との関係が推定される。

⑥14世紀中葉～後半に横地太郎塔や三光寺跡石塔群など砂岩製大型宝篋印塔の造営が目立ち、伊豆安山岩製宝篋印塔の影響を強く示す。

⑦愛知県岡崎市中日産とみられる花崗岩の石塔は掛川市本郷長福寺・照月寺、豊岡村永安寺に14世紀の大型五輪塔、三光寺跡裏石塔群に15世紀代の宝篋印塔が見られる。

⑧15世紀後半～16世紀代前半には石塔が急激に小型化し数量増大し、更に小型宝篋印塔に木杵ソ使用の小型五輪塔主体を多く交えるようになり、大型の一石五輪塔もこれに加わるようになる。

⑨一石五輪塔に多い花崗岩質砂岩は愛知県鳳来町玖老瀬産の可能性もあるが未確認。

⑩掛川城跡本丸下層墳墓群(1513前後以前)や小笠町正林寺(1517創建)の伝今川義忠墓など1500年前後以降に一石五輪塔が出現。16世紀後半に小型品が増大し、17世紀以降は大型塔の刻字が梵字「キャ・カ・ラ・バ・ア」から漢字の「地・水・火・風・空」に変化するとともに石叢が出現する。

Ⅷ 結語

横地地域では平安末期の経塚や土橋遺跡出土品にみるような木製卒塔婆が仏教的な作善としてまず現れるが、石塔の造営は鎌倉後期以降に開始され、これは屋敷地に居館として整備され、イエが固定化され家督相続が確立した段階で、イエの祖をまつる一族紐帯のシンボルとして出現し、その様式や石材はその段階で横地氏やゆかりの人々が帰依していた仏教諸宗派の活動を密接に反映していると考えられる。鎌倉後期～南北朝にかけての石塔は大型で数が少なく、横地谷の中の慈眼寺・横地太郎塔石塔群・三光寺跡裏・神尾宝珠院など幾つかの石塔群に集中する傾向があり、複数の有力家系の併存と本拠の移動を暗示し、また遠隔地石材を若干含む三光寺と在地の砂岩のみからなる横地太郎塔群の差も注意されるが、15世紀以降には隔絶した巨大石塔がみられなくなり、小型化と数の増加で地点間の格差が解消して伯仲するようになり、16世紀に入ると幾つかの中世石塔群が停廃して横地谷の中心

性が次第に喪失し、周縁部の奥嶽寺や報恩寺に中型宝篋印塔群が現れ、小川端、ついで三沢龍谷寺に大型一石五輪塔を中核としたあらたな造塔景観が出現する。

横地氏は遠江の有力在庁官人層から鎌倉御家人となり、南北朝期には本拠で北朝側として戦うとともに、関西や九州での転戦を経て室町幕府の奉公衆とその性格を変化させ、室町期には本拠に戻るも滅亡以降は旧臣層や新たに入植した領主層が横地氏の旧蹟の周辺に分散しているようだが、それについて鎌倉時代の浄土宗、鎌倉末～南北朝期の時宗、戦国期の曹洞宗と当地の宗教環境も変化した、主体となる石塔も五輪塔→宝篋印塔→大型一石五輪塔と変化していくと考えられる。

鎌倉後期に緑色片岩の五輪塔を製作した石工の技術は遠江砂岩の石工集団に引き継がれ、南北朝期には伊豆方面の安山岩・凝灰岩の石工集団の一派がこれに合流し、関東形式系統の砂岩製宝篋印塔を製作したと推定される。14世紀後葉以降に現れ室町期に普及する小型の砂岩製宝篋印塔は三河の影響を窺わせ、少数の三河花崗岩製石塔の存在がそれを裏付けるが、三河式と細部まで同調した型式は西駿河藤枝市鬼岩寺など局地的にしか見られず、東遠江の遺品の大半はあくまでも部分的な影響を示すにとどまる。砂岩製石塔の小型化につれ受容層は徐々に拡大するが、横地城が落城して惣領家を含む国人領主層が解体した15世紀後葉以降も横地氏時代からの墓地に退化した宝篋印塔・五輪塔が依然として造立されており、滅亡を免れた旧臣層は横地氏を追慕しながら、かつてステイタスシンボルであった宝篋印塔をより広い階層で造立しつつあったと考えられる。しかし有力領主層なき石塔造立層の無秩序な拡大は、石塔の小型化と粗製濫造を加速させ、ますます石塔の存在意義を低下させていく。そうした中で関西から新たに伝わった一石五輪塔は曹洞宗に帰依した今川氏被官を中心に新興武士層の墓標に採用され小型品も普及するが、江戸期の社会再編で新たに名士層のイデオロギイが成立すると、夫婦の一石五輪塔を石龕に納めたものが現れる。しかもそこでは中世石塔の密教的な精神世界を具現した梵字にかわり、「地・水・火・風・空」の漢字が刻字されたことは、インドに由来する仏塔の本義さえも、列島の内的世界に消化されてしまったことを示している。精神の異質さえも翻訳してしまった江戸社会は、やがて磁器や銭の国産化をもちとげ、ついには鎖国体制を実現するのである。

おわりに

横地城周辺の石塔の分布・実測調査の成果をもとに編年・石材・石工の系譜等に関する予察を行なった。横地城周辺に多い砂岩製石造物は風化の進行が危惧されてきたが、横地城保存会を中心とした各位の善意と尽力で、着実な保護対策が徐々に成果をあげており、本調査も大きな恩恵を被っている。しかし散在している郷土の歴史的遺産を確実に保全していくには、景観保全を視野においた総合的な対策が求められる。具体的には散逸風化の防止のための継続的な分布調査を重ね個体登録を進めるのと並行して、横地城を取り巻く周辺史跡の体系的な整備保全を行なう必要がある。

また石塔は石材の流通や地域性と密接に関わっており、菊川町内の資料の位置付けにあっても、周辺地域の関連資料との比較検討が不可欠であり、今回も各市町村のご厚意で大きな成果を収めることができた。総合調査を通じて連携が生まれたことは、地域振興の上でも大きな財産となると考える。

最後に種々ご教示・ご指導を賜った諸先生がた、ご支援下さった諸氏に厚く御礼申し上げます。

引用参考文献・注釈

網野善彦 (1992) 「中世前期の交通」『日本交通史』pp80-101.

池上年 (1969) 『愛知県岡崎市周辺の歴史と石造文化財』岡崎石造美術研究所

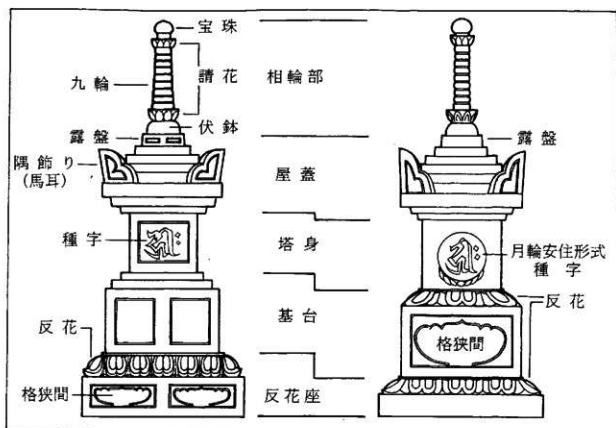
磐田市教育委員会 (1993) 『一の谷中世墳墓群遺跡』

大石一久 (1997) 「中世の海の道—中央形式塔のなぞ」(『長崎新聞』1996年11月の連載を再録)『ひびき』1号 日本石造物学会 pp.8-14.

- 大須賀町教育委員会(1981)『摘要寺墓塔群』
- 大橋俊雄校註『他阿上人法語』『他阿上人和歌集』『時衆過去帳』
- 大橋俊雄(1973)『時衆の成立と展開』吉川弘文館
- 尾形禮正(1988)『葦山町史』第4巻 葦山町役場
- 掛川市史編纂委員会(1997)『掛川市史』上巻
- 掛川市教育委員会(1998)『掛川城復元調査報告書』
- 加藤恵子(1993)「石塔」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市水堀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書本文編 磐田市教育委員会 pp.375-388.
- 金子浩之・岡田善十郎(1994)「伊豆石丁場遺跡調査の現状」『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会第7回大会発表要旨
- 金子浩之(1995)「生産遺跡 伊豆・石切場」『季刊考古学』第53号
- 河合修(1998)「供養塔の形態と変遷 特に西駿河の一石五輪塔について」『静岡県考古学研究』No.30 静岡県考古学会 pp.309-319.
- 川勝政太郎(1970)「駿河付近の五輪・宝篋印混合式塔について」『史跡と美術』402号
- 川勝政太郎(1973)「勝岡田氏の石塔群 静岡県榛原郡勝岡町道場」pp.211-213.『平田寺の変形宝塔』静岡県榛原郡相良町大江 pp.210-211.『石造美術の旅』朝日新聞社
- 橋口正徳(1991)「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 久野正博(1987)「浜北市北野丘陵地域における中世墳墓の諸相」『静岡県考古学研究』22
- 斎藤泰三(1998)「地神への「埋納」日印としての本家屋敷神」『甲斐路』90号 pp.26-34.
- 斎藤彦司(1987.6)「駿州霊山寺と石造遺品」『三浦古文化』第41号 pp.59-72.
- 平祐史(1961)「遠州櫻ヶ池譚私攷」『法然上人傳の成立史的研究三』臨川書店 pp.169-181.
- 大龍山興嚴寺(1980)『ふり向けば五百年』
- 高本浅雄(1981)「重寺村の石切文書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』5 pp.1-30.
- 土隆一(1993)「第3章3 掛川地域」『中部地方』共立出版
- 戸塚和美(1995)「遠江における中世墓の諸相—峯遺跡の墳墓宮について」『静岡県考古学研究』No.27 静岡県考古学会 pp.
- 賢恵子(1997)「石塔の変遷」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 春野町史編さん委員会(1994)「下石切の宝篋印塔」『春野町史 資料編一 原始・古代・中世』
- 日野一郎(1968)「北信濃及び天竜流域における宝篋印塔形式」『日本歴史考古学論叢』雄山閣福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所(1975)『一乗谷石造物調査報告書』
- 保立道久(1988)「町場の墓所の宗教と文化—和歌・時衆・謡曲・祭り」網野善彦・石井進編『中世の都市と墳墓—一の谷遺跡をめぐって』日本エディタースクール出版部 pp.149-174.
- 野澤則幸(1995)「付載5 横地城跡(三光寺跡周辺)出土の石塔について」『横地城南遺跡群発掘調査報告書 伊平遺跡 小太郎墓』菊川町教育委員会 pp.271-286.
- 水上一久(1969)「阿弥陀仏号についての一考察」『中世の荘園と社会』吉川弘文館 pp.383-384.
- 松本芳徳(1989)『史実横地一族』横地城保存会 pp64-65.
- 横田明・西山昌孝・小林義孝(1996)「一石五輪塔は何を語るのか」(上)(下)『歴史民俗学』第六号pp.139-171. 第七号pp.350-385.
- 占沢悟(1998)「沼津霊山寺の中世石塔群の調査」『沼津市史研究』第7号 pp.97-30.
- 引佐町教育委員会(1994)『引佐町遺跡VI』



第29図 石塔分布図



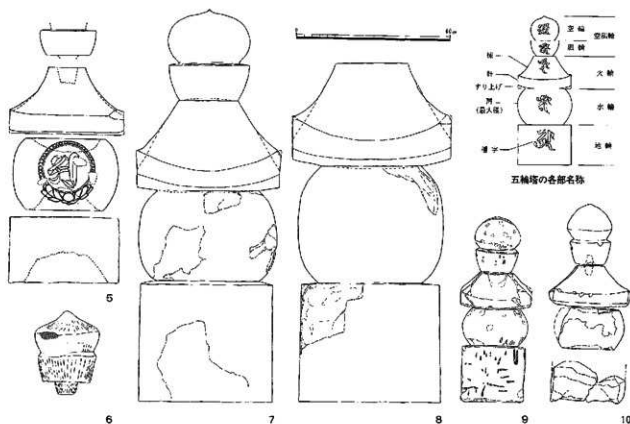
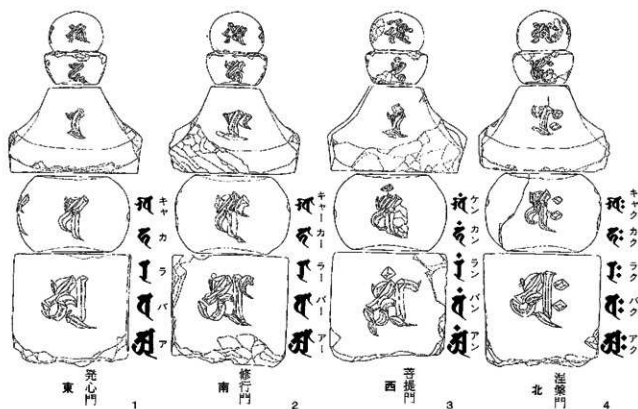
関東形式

関西形式

第30図 宝篋印塔と各部名称(尾形禮正1988より転載)

番号	所在地	宝篋印塔						五輪塔						石五輪塔			備 考 他	計
		相輪	蓋	輪	基座	台座	計	空輪	火輪	水輪	地輪	計	大	中	小	計		
1	邸町寺	1	3				4	1	3	3	2	9				1	1	15
2	延命院	3	4	1	1		9			2	1	3		1		1	2	15
3	伝播神太郎塔	20	14	12	11		57	8	9	5	7	29				5		91
4	三光寺跡裏	16	18	13+	29	3+	79+	15+	13+	7+	12+	47+		1-		1+	○	124+
5	東横地井政則宅	2					2											2
6	長瀬福島神社						1			1		1						2
7	神尾立御院		3			1	4		1		1	2						6
8	鎌谷神林下二供家墓	1	1	1	3		6								1	1		7
9	上郷坪中宅		1				1	1				1				1		3
10	段橋地公堂				1		1	1				1			8	8		10
11	天神森	4	2	2		1	9	1	1	1	1	4						13
12	岡崎寺	1	6			2	9	1	1			2	2			3		14
13	段橋地常泉寺						○											
14	二沢集谷寺	1	3				4	1					1	2	3	2	7	12
15	三沢宝篋印塔	2	2		2		6											6
16	二沢太子堂	1					1											1
17	三沢口殿ヶ谷	1					1		1						1	1	2	5
18	小川端洗谷七郎	4	1	1		3	9	2	2	2	1	7	3	18	2	23		39
19	堀之内権照寺	3	4	○	6-	1+		○	○	○	○			○	○		○	

第11表 横地 周辺の石塔群と部材の内訳

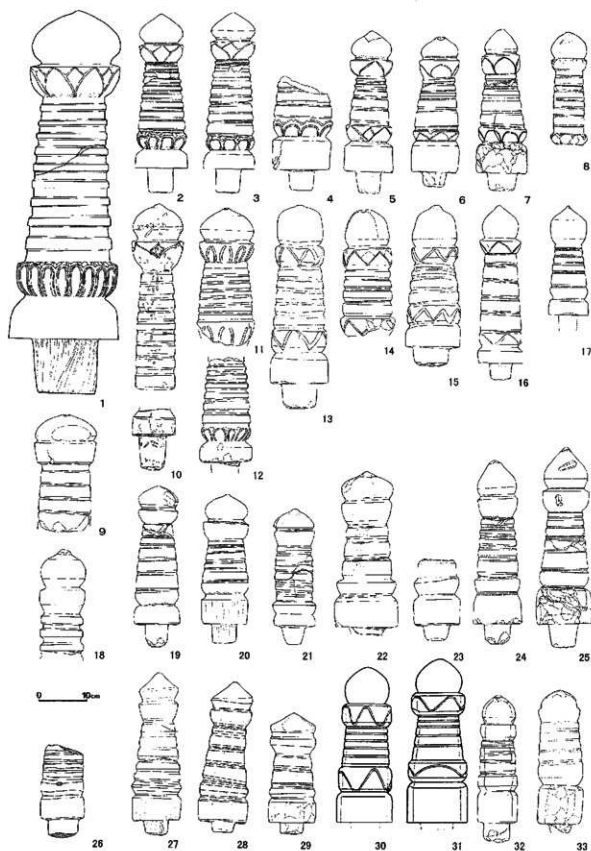


第31図 13～16世紀の五輪塔の変遷 (1～4 緑色変岩、5 緑色凝灰岩、6～10 砂岩)

1～4 慈願寺伝西遷 (1244没) 塔と各層の梵字 5 愛知東一宮市法園寺4号中世墓 (塔下より13世紀前半の常滑焼。一宮市教育委員会1995)

6 掛川城本丸下層横廊 (永正築城 (1513前後) 以前) 7・8 横原町勝田伏方中田宅裏山 (古川久雄氏原図)

9 引佐町北岡古阜 (塔下より15世紀前半の常滑焼。引佐町教育委員会1994) 10 豊田市一の谷中世墓群832号墓 (豊田市教育委員会1993)



第32図 宝篋印塔相輪の変遷 (8 安山岩 18 花崗岩 他は砂岩)

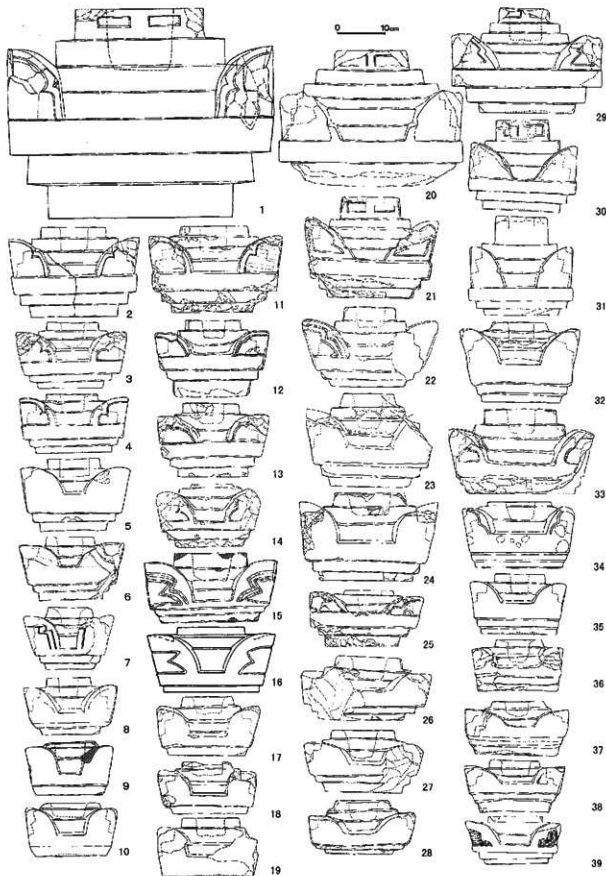
1・2・3・5・7・16・17・20・24・25・27 佐賀県太宰府石塔群 4・9・11・12・14・18・32 三光寺跡裏 (野澤剛幸1995を補訂)

5・21 小川端沢谷宅裏 8 藤原町藤田伏为中田宅裏山 10 引佐町北岡古草 (引佐町教育委員会1994)

13・15 藤田町住吉遺跡 (藤田町教育委員会1993) 19 三乳殿ヶ谷 22・28・29 臨命殿

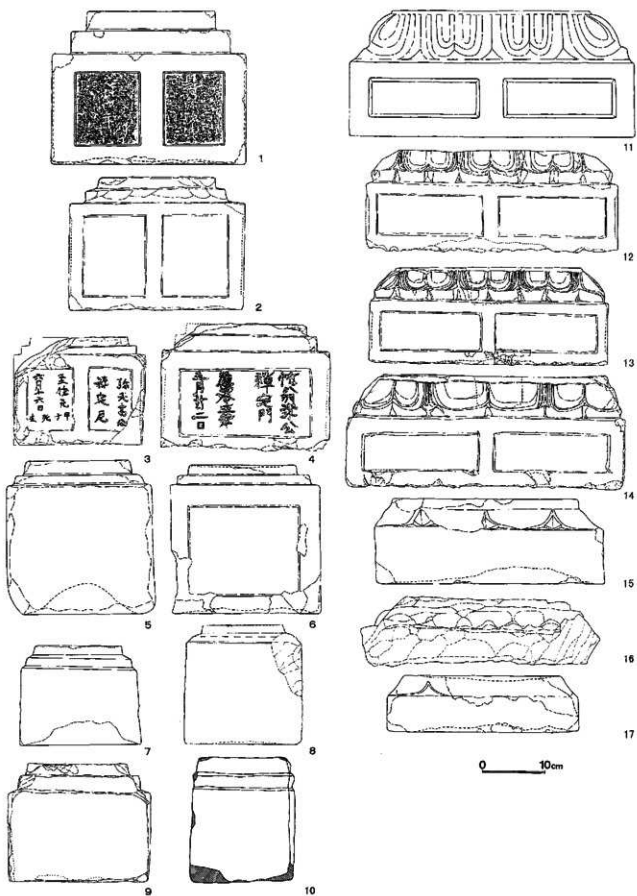
23 坂川城本丸下層墳墓群 (永正築城 (1513前後) 以前, 坂川市教育委員会1995) 26 坂川市幸道跡 (16世紀後半, 戸塚和典1995)

30・31 春日町豊岡下石切 (春日町史蹟さん委員会1994) 33 藤谷神社下二俣家墓地 (1567・1573の遺立?)

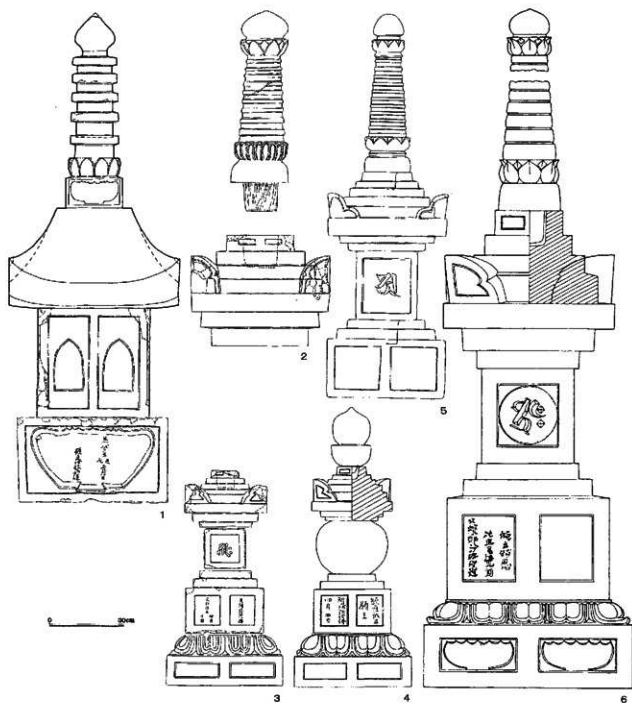


第33図 宝篋印塔笠の変遷 (22花崗岩 29・30安山岩 他は砂岩)

1・2・5・9・13・27・38佐賀地太郎塔石塔群 3・18・24・32興隆寺 4・23天神森 6・28延命院 7三沢藍谷寺
 9掛川市半道跡 (18世紀後半, 戸塚和典1995) 10・19・20・22・29・30・31・34・35三光寺跡 (野澤剛幸1995) 11・25神皇宝珠院 (宇佐美達郎)
 12東嶺地坪井宅 14土橋山崎宅 (三沢穂田在) 15掛川城本丸下層墳墓群 (永正廣城 (1513) 以降, 掛川市教育委員会1998)
 16森野町堂四下石切 (森野町史編さん委員会1994) 17原谷神社下二保家墓池 (1567・1573の遺立?)
 21横良町立名恵永五年 (1398) 銘塔 26・36慈眼寺 29三光寺跡裏文和四年 (1356) 銘塔 (野澤剛幸1995)
 30藤原町勝田伏方中田宅山 33三沢太子堂 37長清保島寺 39浜松城南東石塔裏込 (1590年代築城以前, 浜松市教育委員会1996)

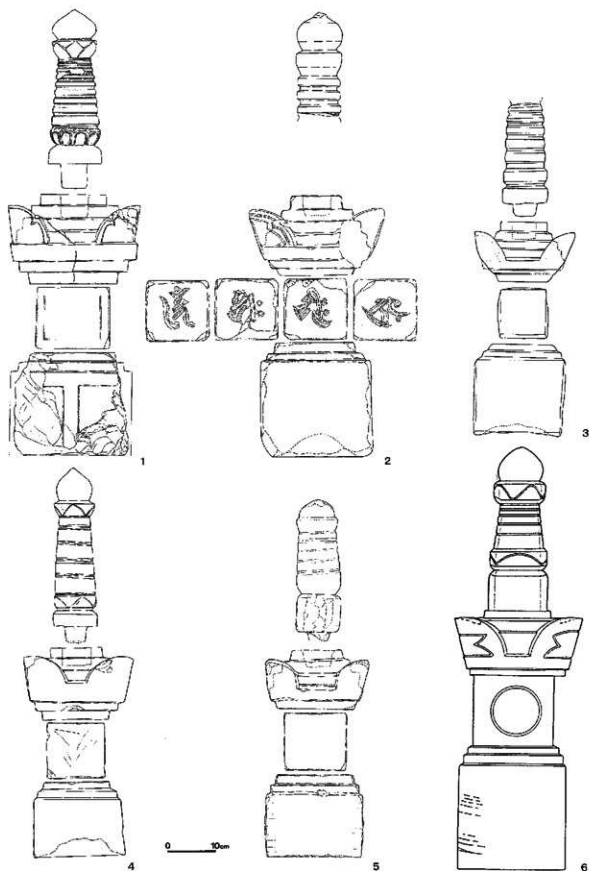


第34図 宝篋印塔基礎・台座の変遷 (1・3・11安山岩 5花崗岩 他は砂岩)



第36図 14世紀の大型宝塔・宝篋印塔（1 緑色変岩 2 砂岩 3～6 安山岩）

- 1 相模町平田寺縁座三年（1310）銘宛形宝塔（193cm，精輪のみ砂岩，古川久雄氏蔵）
- 2 伝横地太郎塔宝篋印塔（14世紀中葉，残高145cm）
- 3 三光寺文和四年（1355）銘宝篋印塔（残高85cm，野澤剛幸1995より構成）
- 4 徳原町藤岡田氏墓所観応二年（1351）銘混合式塔（111.8cm，尾形雄正1988）
- 5 埼玉県深谷市小林家観応二年（1351）銘宝篋印塔（150cm，埼玉県教育委員会1998）
- 6 下田市建武四年（1334）銘宝篋印塔（271cm，尾形雄正1988）

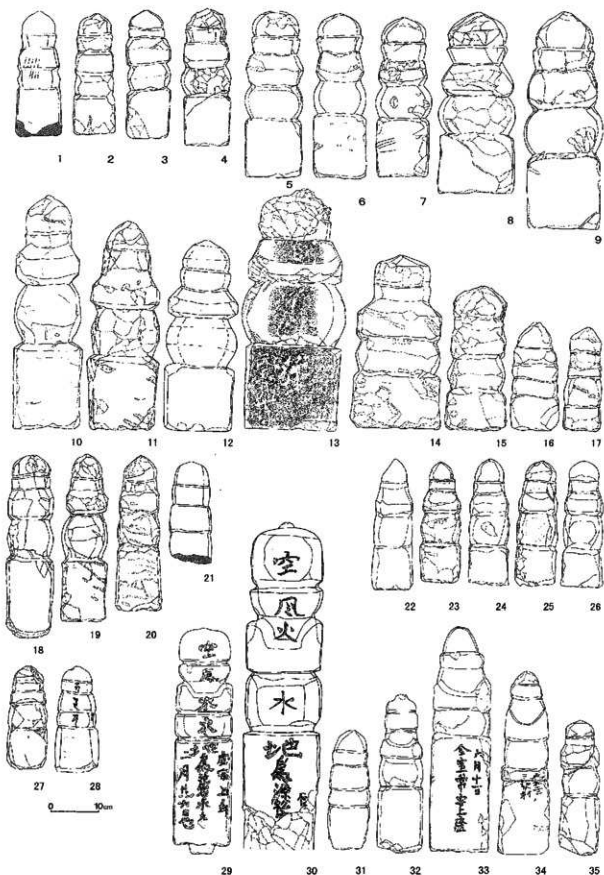


第36図 14～16世紀の宝篋印塔の変遷（1・4・5・6 砂岩 2・3 花崗岩）

1 伝横地太郎塔碑（合成。基礎は別體体の可能性がある） 2 三光寺跡裏（野澤剛幸1995を補訂）

3 愛知県一宮市法園寺5号中世墓（付近より13～15世紀後半の散骨壺。一宮市教育委員会1995） 4 伝横地太郎塔石塔群

5 藤谷神社下二俣家墓地（1567・1573の通立？） 6 春日野町豊岡下石切（春日町史編さん委員会1994）



第37図 菊川町周辺の石五輪塔の変遷 (すべて砂岩)

- 1 樹川城本丸下層 (永正築城 (1513前後) 以前) 2~7、9・11・14・15・17・18・19・20・27 小川崎洗谷宅変
 10 小笠町正林寺依今川嘉忠塔 (1476没, 1517昌隆寺創建) 8・12 三光寺跡裏 (野添則幸1995を補訂)
 13 興四寺聖代住職墓塔 (「天口」銘) 21 掛川市孝道跡 (16世紀後半, 戸塚和美1995) 22~26 政模地公家堂 (横山宅旧在)
 28 浜松城南東石垣裏込 (1590築城以前, 浜松市教育委員会1996)
 29~35 三沢龜谷寺 (29 慶安五年 (1652), 30 寛文四 (1664), 31 天和二 (1682), 32 貞享三 (1686), 33 元禄七 (1694), 34 「宝永四」 (1707), 35 正徳元 (1711) か)

第IV章 横地氏とその本拠の構造

小野 正 敏

横地氏は、遠江を代表する中世武士の一族であり、平安時代末から、戦国時代はじめ文明8年（1476）に滅ぶまで、この名乗りの地に本拠を構え、中世前期は、鎌倉御家人として、後期は室町幕府奉公衆として、時の政權と深い関係をもってきた。この間、横地氏は本拠をこの横地の地から移動することがなかったため、横地周辺の遺跡群には中世武士の本拠の展開がそのまま残されており、時代とともに、その空間構造全体の変化を追うことができる。そうした視点で、横地氏関連の遺跡群を概観してみよう。

1 横地遺跡群の空間構造と変遷

奥横地の遺跡群の時代的な変遷に関して、次のように概略がまとめられる。遺跡群は第38図に示すように大きくAからEの5地区に分けられる。また、時代的には出土した陶磁器の型式による時代的な組成から、5時期にまとめられ、各地区の出土状況をみると次のような変遷が考えられる。

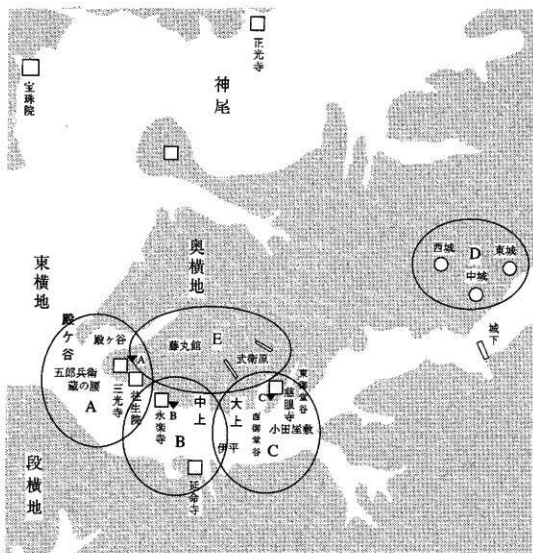
PreI期は、12世紀後半から13世紀前半の陶磁器を出土する遺跡群で、殿ヶ谷、伊平、慈眼寺などで、いずれも後の時代に比べると陶磁器の構成比は小さいが、各地区の核になる遺跡が、既にこのころから始まることを示しており、初期から横地地域に広く、多極的な在り方であったことがわかる点で重要である。

1期は、13世紀後半から14世紀中頃までの遺跡群で、各地点における遺物の量も増加し、遺跡群もまとめられ、横地氏の本拠としての景観が確立、発展した時期といえる。

A地区は、南の谷の入り口にある小さい支谷「殿ヶ谷」を核として、周辺に分布する三光寺や往生院などの寺院と三光寺跡裏に存在する多数の石塔をもつ墓地、さらに丘陵の裾や谷の中の「五郎兵衛」「蔵ノ腰」に発掘された屋敷群（？）とから構成される。C地区は、南谷中程の慈眼寺とその墓地、小田屋敷、対岸の伊平周辺である。これらの各地区は、館・屋敷・寺院・墓地のセットから構成される空間単位が明瞭である。B地区は、発掘調査がなく具体像は不明ながら、永楽寺と伝横地太郎墓の存在から、AとCの間の地区を仮定した。

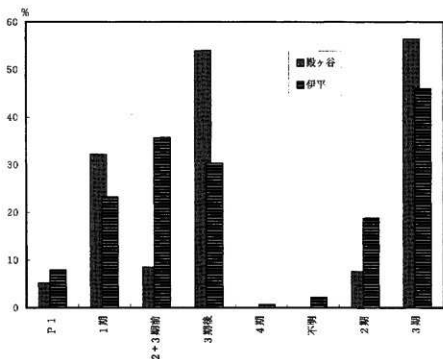
この時期には、各地区が並立しているが、中心は、殿ヶ谷と考えられる。殿ヶ谷からは、白磁四耳壺や青白磁梅瓶、緑釉洗などの出土があり、鎌倉の状況にも比べ得る中国産陶磁器の量と質をもち、また威信財としてハレの場で使われるかわらけが鎌倉と類似し、その構成比も98%という高比率であることなどから、社会的な地位の高さや鎌倉との関係の深さをよく示している。さらにこの時期には地方において例の少ない礎石建物が発掘されていることなどである。それに対して、伊平の陶磁器組成は、かわらけよりも地元産の山茶碗の比率が高く、両者の比較では内容的に殿ヶ谷の優位は明らかである。なによりも「殿ヶ谷」地名などを考えると、ここに横地氏惣領の谷戸型居館の存在を推定することは妥当であろう。

また、この時期の空間構成で注目されるのは館と寺院のセット関係である。特に慈眼寺の東西の小さな谷には、「東御堂谷」「西御堂谷」の字名が残され、慈眼寺が「御堂」と呼ばれたことを暗示している。周知のように古代末から中世への転換する院政期にその拠点として鳥羽や白河などの新たな都市が旧都の外にできる。その核は、白河南殿と蓮華蔵院、北殿と宝荘蔵院というように、院の御所と御堂のセットであった。同じ頃、それをモデルとした権力拠点が各地に作られ、「御館」・「御堂」のセットがコピーされた。たとえば、1285年に源頼朝に滅ぼされた奥州平泉の発掘の成



第38図 奥横地の遺跡群の空間構造と変遷

16世紀	15世紀	14世紀	13世紀	12世紀
文明元年 明応二年		文宣二年 和暦元年 和暦二年 和暦三年	宝徳元年 宝徳二年 宝徳三年 宝徳四年	
4期	3期	2期	1期	Pre 1
武衛原	殿ヶ谷 伊平	横地城	恵眼寺	宇麻 十橋
	勝間口城 殿谷城			



第12表 殿ヶ谷・伊平遺跡出土陶磁器組成比率表

果では、平泉全域に統一された都市計画があるのではなく、3代にわたる各惣領の館と寺院がセットになって地点を変えながら展開した結果が平泉の遺構群であると理解される。大きくは、初代清衡の中尊寺と化立遺跡、2代基衡の毛越寺と観自在王院の前身の館、3代秀衡の無量光院と加藤御所の各々のセットごとに全く異なる方位をもって造営されていたことが発掘されている。(本沢信輔1993など)。横地遺跡群の場合、谷全体の中で先の殿ヶ谷の館と慈眼寺をセットとする考えかたと、伊平の館と慈眼寺のセットとする考え方ができよう。

後者にも可能性がある理由としては、次の2期、14世紀後半には「殿ヶ谷」の陶磁が少なく、一方の「伊平」では多くなることから、中心がA地区からC地区に動いたことが推定される。第12表は、殿ヶ谷と伊平の出土陶磁器について、各々の地点での組成比の変化を比較したものである。殿ヶ谷、伊平の変化が全体に同じ傾向を見せる中で、2期あるいは2+3期前半にみる伊平での増加が特徴的である。このことからC地区の核である慈眼寺に残る「御堂」はこの時の御館と御堂のセットの構成の名残と考えることも可能なのである。「伊平」の遺構からは横地氏惣領の館の位置付けを与えるには貧弱な印象はする。しかし、遺物からはこの時期の天目茶碗がまとまって出土するなど、これまでの発掘の中では資料的には最も多いことは指摘できる。したがって、横地氏の中の有力な庶流の屋敷などを推定できよう。

殿ヶ谷が優位な1期は、横地氏が鎌倉幕府で活躍した時代であり、遺跡の内容も鎌倉との深い関係が指摘できる。それに対し伊平が優位となる2期は、京都時代とでもいうべき、横地氏が室町幕府奉公衆として京都で活躍した時代であり、たとえば、齋藤氏が指摘するように、横地氏の中での惣領と庶流の関係の変化などがこの両者のあり方に反映されている可能性もある(第IV章第2節)。

さらに、この各地区の関係を考えると、御堂問題と共に重要なのが石塔であり、特に伊豆石の大型宝篋印塔の分布では、もっとも人型で型的にも古式な横地惣領の墓塔と推定される伝横地太郎墓

(B)がB地区に、A地区の「光寺跡裏」には文和四年(1355)銘(A)をはじめとする石塔群がある。また、C地区の慈恩寺墓地には1243年に横地に下り、1244年に没した慈恩寺開基信寂の墓と伝えられるこの地区最古の緑色凝灰岩の五輪塔が存在するなど、各地区に各々の核として重要な石塔が分布することが指摘できる。したがって、これらの3地区は横地一族の一揆的な結合としての単位とみることができ、その並立が推定されるものである。

この地区の空間を大きく区分していた概念とも推定できる地名が残る。それが「大上」(おおかみ)と「中上」(ちゅうかみ)である。この境界は西御堂谷であるといわれる。これを積極的に理解すれば、先の各地区の区分に対する当時からの空間概念が呼び名として残存した可能性をもち、興味深い。

以上の1, 2期がいわば「館の時代」である。次の3期は「城の時代」といえる。

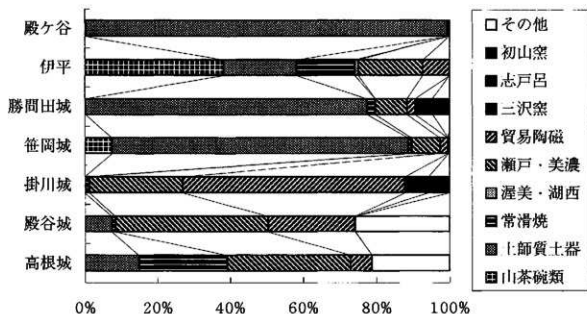
3期は、15世紀代の遺跡群で、15世紀前半に台地の上の城郭が作られる。D地区の城とA、B、C地区の谷内の城下集落がセットとなる空間構成が成立したと考えられる。城の虎口は字「城下」にあり、ここにみられる南の谷を閉鎖する土塁状の地形はこの谷の奥を画する施設と考えられる。城郭の構造は、第三章第3節に触れられたように、地形の影響からか、通称「東の城」、「中の城」、「西の城」と呼ばれる3つに分かれており、その各々が個別に空間構成をもち、全体としての求心性がないのが特徴である。こうした点から、「館の時代」にみた谷の中に広がるA、B、Cの3地区に反映された一族の「揆結合」を、この3つに分かれた城郭構造の各々に比定することが可能である。

東の城の発掘では、平場4からは中国製の青磁碗、皿、染付碗、瀬戸窯の天日茶碗、灰釉皿、平碗、緑釉皿、香炉、志戸呂窯磁鉢などが出土した。時期的には、中国陶磁が15世紀第2四半期から第3四半期にかけてのもの、瀬戸窯がいずれも後4期に相当する15世紀中葉のもの、志戸呂窯は15世紀後半のものと考えられる。したがって横地城は、15世紀前半に築城され、文明8年(1476)に落城したという年代観が確認された。また、15世紀前半の築城の確認は、齋藤慎一氏が指摘した館から城へ、一般的な城郭への常住化が15世紀中葉であるという見解とも大筋で合致するものである(齋藤1991)。

また、空間機能的には、城内から生活を支える日常の飲食具である碗皿や調理具の磁鉢が確認されたことで、この城の中に一定の日常生活空間があったことがわかる。ここからは焼き米も確認されており、以前に採集されていた常滑焼大甕の機能とともに、井戸をもつこの場所の意味を推測させる。また、1点ではあるが香炉が採集されており、美術陶磁を必要とする空間が城の上にも確認できたことは重要である。なお、平場9からは、スラグが出土し、この一段低い場所では鍛冶が推定され、城内に場所ごとに分化した空間機能を予測できよう。

一方、D地区で最も広い平坦地である中の城と西の城の間の「千畳敷」にトレンチをいれた結果では、顕著な遺構や遺物の発見はなかった。東の城にしてもその空間は非常に狭く限定されており、原則的には、城は生活の中心ではなく、台地の下にその空間が求められる。つまり台地の上の城とその裾や谷内の平地に展開する館、寺、屋敷群のセットで、相互補完された全体空間を考えるのが妥当であろう。この段階で、南の谷にどの程度の屋敷群があったのかなど、その景観の解明は今後の調査によらなければならない。

4期は、15世紀末から16世紀の遺跡群で、この時期の陶磁器は各地区からわずかに採集される程度になり、まさに文明8年(1476)の落城以後の状況を示している。台地上のE地区の「藤丸館」からも16世紀後半の中国製の染付皿が採集されている。この地点には、庭園の存在が伝えられるが、発掘の結果では遺構の保存が悪く明瞭な遺構は確認されなかった。「武術原」に残る土塁と堀もこの時期かと推定されるが、確証はない。A地区の「殺ヶ谷」に大窯2期の陶磁器があることや、



第13表 産地別陶磁器組成比率表

「光寺跡裏に小型の石塔が多いことなど、全体的にはA、E地区にシフトしている感触を受けるが、今後の調査が必要である。さらに段横地の興隆寺から天神森・元公民館周辺にも多くの小型石塔が確認され、周辺地域への拡散など、それまでの空間的な枠組みとは違う構造が予測される。

2 勝間田城との陶磁器の比較

横地氏関係の遺跡を理解するため、周辺の関連中世遺跡の陶磁器を調査した。ここでは遠江において横地氏と同族ともいわれ、ともに鎌倉・室町將軍に仕え、横地氏とよく似た消長をたどった勝間田氏の勝間田城を上に、原氏の殿谷城、笹岡城、高根城などの陶磁器と比較を概観する。

勝間田城については、発掘された遺構や遺物の豊富な出土状況から見て山上の城に生活空間や建物など丁房があることが明らかになっている。発掘された陶磁器は、時期的にみると12世紀～14世紀中葉までの第1グループと、15世紀前半～後半の第2グループがある。ただし、前者は非常に少なく、現状でみる城の遺構の下層として独立した遺構があるのかどうか不明であるが、勝間田氏の場合もおそらくは横地氏と同様に別地点に14世紀までの館があった可能性が高いと考える。そして、遠江に緊張が高まる15世紀前半にどこからかこの城に移ってきたため、生活機能を含めた全機能を山の上に新たに作ったのであろうと考えられる。この点が本拠の移動をしなかった横地氏との大きな違いになっていると思われる。

第2グループの中では、15世紀初めの遺物も比較的少なく、多いのは15世紀第2、3四半期の資料である。基本的に文明8年(1476)の落城以後の陶磁器は含まれず、時期的なまとまりのよい遺物群である。したがって落城のちは生活遺物を残すような形でこの城が使用されたことはないであろうと推定される。

陶磁器の内容では、中国製天日茶碗を5点をもち、さらに丹波焼茶碗をもつなど、それなりの威信財としてのステータスシンボリックな陶磁器をもち、かわらけの構成比も8割近くを占めている。また、若干の時期的な違いはあるものの、第13表のように全体の陶磁器組成を比較してみると、勝間田城と笹岡城はかわらけの比率の高さで類似しており、掛川城、殿谷城、高根城などのかわらけの比率の低

いグループとの顕著な差が認められる。この陶磁器の様相は、横地氏とならぶ勝間田氏の立場を象徴しているといえよう。横地城は、トレンチ調査のみであり、先述のように遺構も遺物も詳細が不明のままだが、原則的には勝間田城にみるこうした晴れの場合威信財としての陶磁器は、横地氏においては館にその機能があったと推定してよいであろう。

発掘報告によれば、全面が調査された二の曲輪では二枚の遺構面があるが、その下層の陶磁器は2グループの前半、後半ともに混在しており、この下層面に関しては15世紀の半ばに造成されていると推定される。報告書で指摘されたように、大堀切を境とする北半と南半との空間構成の大きな違いに関して、改造などの時期差をどのようにみるか、今後の大きな検討課題である。

また、さらに大きな問題は、勝間田氏の館の調査である。勝間田城以前の館の所在はまだ不明である。城から発掘された第1のグループの陶磁器の性格付けも、発掘が進んでいない、改造される前の状況をとどめると推定される大堀切りの南側の空間を、いつの時期に位置づけ、どのような空間機能を考えるかという課題を残している。

3 残された問題

横地氏の小宇宙を考える時、今後に向けての課題は多いが、特にこの遺跡群の空間構造に関連したことから指摘する。

1) 横地氏遺跡群の核である殿ヶ谷の内容が不明である。まさに肝心の館に関しての具体像を確認し、保存をはかる必要があろう。2) 台地裾の現屋敷にみられる地形的な区画が中世の遺構なのかどうか、時代的にどこまでさかのぼるのか。3) 五郎兵衛、蔵ノ腰に見られたような南の谷の水田下にどの程度屋敷群が展開するのか、それによってこの谷の歴史的景観が大きく変わるのと同時に、鎌倉期の館をめぐる空間に主従する屋敷の在り方にも新たな問題を投げかけることになる。4) そのような全体の空間構成の変遷を検討するとき、発掘調査以外の情報では、奥横地と周辺に残された多くの石塔についての时期的な分布の変遷がそのひとつの鍵になると考えられる。特に、鎌倉後期とされた伊豆石製の大型の一群と新期の日坂石製の小型の一群の分布のあり方は、空間構造の枠組みの大きな変化を反映していることが予測される。5) 文献史料からの横地氏の動向をまとめた齋藤年表との比較では、Pro1期をふくめ、横地氏の大きな動向と5時期の概要が連動しそうである。特に13世紀後半から14世紀と15世紀前から中華の動向は、幕府との関係など、遠州における本遺跡の陶磁器が卓越することの裏付けになる。一方で、14世紀後半の陶磁器の少なさに関しては、積極的な理解と消極的な理解の二つの理解があり、今後の検討が必要になるう。

引用参考文献

- 本沢慎輔1993「12世紀平泉の都市景観の復元」古代文化第45巻9号
齋藤慎一1991「本拠の展開——四・一五世紀の居館と城郭・要害」中世の城と考古学
足立順司1987「遠州笹岡城跡の再検討」森町考古19
菊川町教育委員会1988「殿ヶ谷遺跡発掘調査報告書」
1989「藤丸館遺跡」
1995「潮海寺門前町遺跡」
1995「横地城南遺跡群発掘調査報告書」
榛原町教育委員会1986～94「勝間田城跡Ⅰ～Ⅵ」
掛川市教育委員会1985「殿ヶ谷城址他遺跡発掘調査報告書」
1995「掛川城大手門—掛川城大手門番所復元整備報告書」

第V章 保存整備に向けて

向坂 鋼二

第1節 横地城跡調査の意義

横地城跡は、比較的新しく昭和46年(1971)3月に静岡県指定史跡となった城跡である。その城跡は、奥横地東方の山中にあり、標高80~90mの瘦せ尾根を巧みに利用して築かれている。

横地城のような山城の伝統的な調査法は、徹底した現地踏査によって、人為的な平場・土塁・堀・城道などを確認し、その結果を縄張図と呼ぶ独特な図化方法によって客観化させるものであった。我々も、そうした伝統的な現地調査を実施し、第7図に示すような縄張図を作成した。この縄張図によって横地城は、東西二つの山頂に、それぞれ独立的に営まれた「東の城」と「西の城」が、両者の中央に位置する尾根の高まりを利用した「中の城」を介して、有機的に結ばれている状況が良く分る。また、各支尾根には、何段もの削平が施され、核心部に近づくれば、堀や土塁で守られている様が、手にとるように示されている。この城への入口については、従来不明とされていたが、今回の調査によって、西の城の南側のさらに一段下が大手曲輪と確認され、そこから南西に下る細尾根が入口(虎口)であったことが明らかになった。縄張図には、その点も明示されている。

縄張図は、このように城跡遺構の構造や配置状況、ひいては縄張の特徴を把握するには極めて便利であるが、各部分の詳細な構造や実長、正確な高低差や海拔高度等を知るには不向きであり、今後城跡の整備を進めるための実測図面とはなり得ない。そこで、我々は、縄張図とは別に踏査に基づく遺構の位置を入れた、正確な地形図を作ることにした。別途袋入りの図面がそれである。この図面を作るための地形測量は専門業者に委託したが、人為的な削平地、平場、堀、土塁といった遺構については、測量点をどこにとるかが重要なので、担当委員と事務局の調査員が現地で立合った。この様な図面は、一般には馴染みがないかも知れないが、整備工事等の設計図を画く時には欠かせない。

以上のような現地調査や作図作業を通じて横地城の縄張は、次のような特徴をもっていることが明らかになった。第Ⅲ章第3節に述べられた諸点をさらにまとめてみよう。

- ①西の城・中の城・大手曲輪・東の城というように、大きく四つの遺構群から構成され、それぞれ独立性を持たせている。
- ②各遺構群(曲輪)は、瘦せ尾根を巧く利用して配置されているので、全体として不整形で、ひとつ一つの削平地や平場が狭く、しかも段差が大きい。
- ③北側の支尾根に段状の削平地や堅堀、堀切などが目立ち、支尾根の先端部まで削平地を施して防御を固めている。
- ④土塁は、東の城では東もしくは北、中の城では南、西の城では西もしくは南というように、一方向にしか築かれていない。
- ⑤南側は、東西方向の崖状の地形を巧みに活かして、集落から城へのルートとしている。

こうした特徴をもつ横地城跡の年代については、横地氏の興亡も念頭に置いて、漠然と室町時代の完成度の高い大規模な山城とされてきたのである。

そこで、横地城跡の築城年代と使用年代を確定することが、我々の最大課題となった。この課題を解決するには、考古学的手法が有効である。しかし、これにはやっかいな問題があった。それは、城の築かれている丘陵が、浸食の進んだ砂礫層でできており、すでに崖崩れや地滑りを起こしている所

があること、斜面が急なため、一度地肌を出すと植生の復元が困難であること、遺構・遺物の発見が予想される場所が少ないこと等であった。そこで、発掘可能な地点を充分下調べした上で、千疊敷と呼ばれている西の城の南側広場を中心に、各地点で計7ヶ所、小規模なトレンチ調査を実施した。その結果、千疊敷では城関連の出土品が皆無に近かったが、東の城と西の城、特に東の城では、15世紀の陶磁片を含む遺物群がややまとまって出土した。その詳しい内容については、第Ⅲ章第4節に述べられている通りである。注目すべき点は、出土遺物の中に15世紀後半を降るものがなく、炭化米が見つかったことから火災のあったことも分った。これは、横地氏が今川義忠に攻められ、横地城が落城したとされる文明8年(1476)前後の動向を、考古学的に裏付けた形である。一方、陶磁片の中には15世紀前葉のものも見られない。そこで横地城は、15世紀中頃に築かれ、文明8年に落城した後は城として使われず、当時の姿をそのまま今日に伝える、極めて貴重な城跡であることを、改めて証明することができたのである。このことの意義は実に大きい。

城跡自体の調査としては、これで完了したことになるのであるが、横地城を築いた横地氏はどこに住んでいたのだろうか。また、横地氏はどんな武士団だったのであろうか。こうした点が明らかにしないと、横地城の理解は不十分である。横地氏と常に行動を共にしていたとみられる勝間出氏は、ある時期勝間田城に住んでいたらしく、城跡の発掘調査によって、日常生活に使われた陶磁類が、たくさん出土しているのに、横地城跡の調査では、城内に住んだ形跡はない。横地城跡から西に開く谷の出入口一帯は、奥横地といって古くから横地氏の本拠地とされてきた。横地太郎の墓と伝える宝篋印塔や横地氏一族の墓といわれる石塔群も遺存する。奥横地の西には段横地があり、牛瀬川を介してその西側には西横地が広がる。奥横地には殿ヶ谷という小字もある。また、横地氏がどんな武士団だったかという点については、文献的な探究が必要である。

こうして、我々は横地城跡解明のため、城跡のみに止まらず広い視野で、横地地区の総合調査を実施することになった。視点は、城郭をはじめとして地名、文献、考古学的遺跡それに石造物とした。



第2節 横地氏及びその関連遺跡調査の意義

文献に現れる横地氏の調査結果は、第三章第2節に述べられている。要約すると、横地氏は従米源姓とされてきたが、東海地方の多くの領主と同様藤原南家の系譜を引く藤原姓の一族だったらしく、「長」を通字とし、勝間田氏と同族であったと考えられる。横地氏の所領は、名字の地であった奥横地と段横地を含む東横地から西横地にかけての地域を中心に、遠江国内に散在していたらしい。そして、横地氏は鎌倉時代には幕府の御家人として、鎌倉などを中心に活躍し、室町時代には京都を中心に、將軍の近くに仕える奉公衆として活動していたが、その性格は將軍直属の武力装置つまり親衛隊であった。その武芸をもって將軍の近くに奉公する武士であった横地氏が、15世紀中頃から在地で行動するようになった。活動拠点を京都という都市から横地へ移したらしいというのである。こうした地域に即した調査成果の意義は、たいへん重要である。

考古学的調査の成果はどうであろうか。中世横地氏が住んだ場所は、今日宅地やその近くの畑の下に埋まっていると推定される。そこで、横地地区で行われる家や店舗の増改築とか新築、あるいは道路工事等に合わせて発掘調査を実施した。発掘調査は10ヶ所に及び、その詳細は第三章第4節に記述されている。

西横地では、林光寺遺跡で11世紀から14世紀にかけての集落跡が、土壌遺跡で同時期の屋敷跡とさまざまな祭祀資料がみつかった。盛期は共に12世紀を中心とするものであった。

奥横地では、殿ヶ谷・伊平・小田屋敷・蔵ノ腰の各地点において、それぞれ屋敷跡が発見された。中でも殿ヶ谷遺跡で、緑石で囲う雨落溝を巡らした礎石建物の跡が見つかったことは、特筆に値する。地名が示す通り、この建物は横地氏の居館だった可能性が高い。出土した陶磁器の中には、高価な中国製の陶磁器がたくさん入っていて、そのことを裏付けている。また、伊平遺跡では、溝で囲まれた屋敷跡が検出されていて、生活用具がたくさん出土した。横地氏の家臣団の屋敷が展開していたのかも知れない。小田屋敷遺跡では井戸跡が見つかった。殿ヶ谷遺跡には、13世紀から14世紀前半にかけての時期と15世紀後半の遺物が多い。伊平遺跡もほぼ同時期とみられるが、15世紀前半に盛期を置く点が注目される。蔵ノ腰遺跡では13～15世紀の土器が出土した。これらの他、五郎兵衛遺跡では13～15世紀の遺物を出す区画溝（道路跡か）が発掘され、藤丸館遺跡では、16世紀とみられる陶磁器片等が出土した。なお、横地地区から少し北へ外れた神尾では、宇藤遺跡が発掘されている。15世紀から16世紀前半にかけて、屋敷が展開していたと推定される。

奥横地の慈眼寺境内には、13世紀と15世紀の石塔をはじめ中世墓地の存在が知られているが、この慈眼寺の東と西の小さな谷が「東御堂谷」「西御堂谷」と呼ばれることが分った。慈眼寺は御堂だったと思われる。御堂に対して領主の居館は御館と呼ばれる。横地氏居館とみられる殿ヶ谷遺跡を御館とした場合、御堂は、横地氏一族の墓と伝える石塔群近くに跡に残る二光寺と推定できよう。従って慈眼寺を御堂とする居館（御館）は、まだどこかに眠っているのであろう。こうして、奥横地には、御館と御堂のセットが、少なくとも二つあったこと、つまり二つの核があったことが分るのである。あるいは、伝横地太郎塔と永楽寺を含むもう一つの核があったかも知れない。そのことは、横地城の東の城と西の城にしてもう一つ中の城に対応するかのようである。そして、殿ヶ谷遺跡の建物跡が礎石をもち、出土陶磁器が他を圧倒して優れていることから、殿ヶ谷遺跡の方が、No.1であったといえる。以上の考古学的成果については、第四章に的確に述べられており、それを時間軸に沿って表示すると、別紙年表のように整理することができる。

中世の世界が形成され始める11世紀後半から12世紀にかけての時期、西横地の土橋・林光寺の両遺

跡は、すでに盛期を迎えていたが、奥横地での動向は顕著ではない。横地氏の居館跡とみられる殿ヶ谷遺跡と、もう一つの核を構成する伊平遺跡など、奥横地における動きは、13世紀から15世紀にかけて顕著となるが、殿ヶ谷遺跡では14世紀後半から15世紀前半、伊平遺跡では14世紀後半の時期の動向が欠落している点は、注目される。この空白時期は、横地氏の京都における活躍、それ以前は鎌倉における活躍時期に対応し、15世紀中頃から、横地氏が在地で行動するようになったとする文献上の推定が、殿ヶ谷遺跡の動向と横地城築造の推定年代に対応することが明らかになった。

発掘調査は、面積も狭く、調査地点を決めるにもさまざまな制約があって、隔靴搔痒の感が強いが、以上のような成果を挙げることができたのは、極めて効率的であり、意義深いものであったといえる。

さらに、もう一つ石塔の調査においても、大きな成果があった。中世石塔は奥横地を中心とする横地地区に多い。それらを、ひとつひとつ丹念に調べて実測する作業が行われた。ひとつの地区の石塔を徹底的に調べて実測するという事例は、従来みられなかったのではなからうか。石塔がもっとも注目されるのは、殿ヶ谷遺跡背後の三光寺跡、横地太郎墓と伝える大型宝篋印塔周辺、御堂の地名が残る慈眼寺の3ヶ所である。

石塔の種類は、一石五輪塔、五輪塔、宝篋印塔の3種から成り、年号が刻まれた最古の例は、三光寺跡に残る文和四年（1355）銘の安山岩製宝篋印塔基礎である。年号銘はないが、最も古い型式を示すのは、慈眼寺の緑色凝灰岩製五輪塔で、13世紀後半か13世紀末と推定できる。14世紀中葉から末にかけて大型の宝篋印塔が立つ。最大のものは、伝横地太郎塔で砂岩製の宝篋印塔である。1350年前後に作られたものと推定されている。三光寺跡には、14世紀前半と思われる砂岩製の大型大型宝篋印塔もある。15世紀後半から16世紀前半にかけて、石塔は急激に小型化して数が増え、宝篋印塔から五輪塔へ、さらに一石五輪塔に移行する。16世紀には中小型の一石五輪塔が各地に普及する。こうして横地地区の石塔は、五輪塔（鎌倉時代後期）→宝篋印塔（南北朝～室町時代）→一石五輪塔（戦国時代以降）といった順で出現したことが分った。また、使用された石材は、13世紀には緑色凝灰岩だったが、14世紀以降砂岩や安山岩に移行し、一石五輪塔には花崗岩質のものが使われた。砂岩の9割以上は、日板石とも呼ばれる硬質砂岩であった。石塔の変遷は、おおむね全国的傾向を踏むものであったが、地元産の日板石を使う点など、この地域独自の特徴が明らかになった意義は大きい。

三光寺の宝篋印塔基礎には、文和四年の紀年銘と並んで「見阿弥陀佛」と刻まれている。石塔の阿陀陀名号を刻んだ例は、藤原町清淨寺裏山に残る勝間田氏石塔群の中にもみられ、時宗門徒の造塔であることを示している。また、菊川町内最古の慈眼寺五輪塔は、当寺開基の信寂墓と伝承されている。信寂は、法然の弟子で、寛元元年（1243）に横地に入り、翌年当地で没したといわれる。当地での造塔は、まず13世紀後半浄土宗の布教と関わり、五輪塔が造られ、14世紀中頃から時宗の教線拡大に伴い宝篋印塔が造られるようになったようである。文明8年（1476）横地城落城後、横地地区の考古資料は、現在の所見つつかっていない。にも拘らず、この頃から一石五輪塔の造立が始まり、かなりの数が遺存する。石塔の調査は、横地城落城後の横地地区の動向にも目をつける結果となった。

なお地名については第三章第1節に述べられているが、注目すべき成果は随所に引用されている。

以上、平成7年9月発足以来3年半にわたる、当委員会の調査成果とその意義について簡単にまとめた。これを一口で言えば、奥横地を中心とする横地氏の本拠地について、城跡だけでなくとどまらず、居館（御館）・寺院（御堂）・墓（子孫繁栄を見守る祖先達）を含めた、有機的な集落構造とその変遷過程を明らかにすることができた。今日各地で城跡や集落跡の調査が行われているが、こうした重要な成果を挙げた調査は、全国的にもほとんど例がない。

第3節 保存整備及び活用における課題

横地城跡及び横地氏関連遺跡の調査は、すでに述べた通り武芸をもって將軍の近くに奉仕する家柄の武士であった横地氏が、発生から滅亡まで本拠地としていた、奥横地を中心とする地域の状況を構造的に明らかにした。それは、横地氏の文献的調査・横地地区の地下に眠る遺構遺物の考古学的調査・現地に残る地名と石塔の調査、それに横地城の城郭としての調査と考古学的調査といった、さまざまな角度からの総合調査の成果であった。こうした総合調査の視点は、今後展開されるであろう保存整備とその活用においても、充分活かされなければならない。横地城跡の整備活用だけでは、他の城郭整備と同じものになって、横地地区の特色が失われてしまうからである。

横地城跡と横地氏関連遺跡の保存・整備・活用を図るに当たり、その基本的な考え方をまずしっかり捉えておこう。

それは、第1に地域の歴史を明らかにし、後世に伝えることである。この地域は、当面は横地地区ということになるが、関連性に従って菊川町全域に及ぶであろうし、さらに拡大するかも知れない。そして後世に伝えるためには、現状を出来る限り保存していくことが必要である。

第2は、歴史と文化の息づく町、菊川を情報発信する場とすることである。歴史と文化が息づくことによって、そこから関連する情報が発信される。横地地区がその核となるに違いない。

第3に、自然と触れ合い、町民の憩と交流の場とすることである。横地城跡は人の手が加わっていない、自然豊かな環境にあり、訪れる人々に安らぎを与え、自然に交流の輪が広がるだろう。

そのための具体策として、まず、現地の保存対策が講じられなければならない。かといって、そこには現実に人々が暮らしており、生活の糧を得るために、さまざまな生産活動が行われている。そうした住民の利害関係を充分に考慮することが、当然の前提である。そこで、遺跡全体を次のように三つのブロックに分けておくことが必要であろう。

A) 積極的保存地域

総合調査等によって判明した、拠点となるべき最も重要なブロックで、場合によっては、公有地化も必要となるであろう。その候補地としては、横地城跡は当然のことながら、横地氏の居館跡（御館）と目される殿ヶ谷遺跡、横地落城後の拠点と推定される武術原、14世紀中葉の横地惣領家の墓等と推定され、奥横地のシンボルともいえるべき伝横地太郎塔周辺、御堂の地名伝承をもち、伝開基信寂墓とされる町内最古の五輪塔がある慈恩寺、町内最古の紀年銘と阿弥陀名号を刻む宝篋印塔を含む、伝横地一族の石塔群が残る三光寺跡などを挙げることができる。

B) 重点的調査の必要地域

今回の調査は、大きな成果を挙げたが、あくまで局地的で、面積や調査地点の選択には制限があった。現状でさえ、殿ヶ谷遺跡の全体像は不明だし、横地氏がここに住みついた当時の村落構造はわかっていない。また、横地落城後も一石五輪塔はたくさん残っているが、16世紀以降の集落景観や横地氏の動向については分っていない。そこで、調査対象から離れた奥横地の台地上や台地裾一帯については、これからは重点的に計画的な発掘調査を継続する必要がある。

C) 関連する埋蔵文化財包蔵地

A・Bブロックの外側、奥横地の隣接地と高田大屋敷遺跡周辺など、関連する遺跡についても、常

に注目して、機会を捉えて適切な調査を行う必要がある。

以上の内、横地城跡については、すでにほぼ公有化されているので、現状保存を第一に考えるべきである。

今後、これらを活用に向けて整備して行くためには、総合調査の成果に基づいて、早急に整備委員会を設置し、専門家の意見を取り入れて、事業を進めることが何よりも重要である。その際留意すべき点は、特に横地城跡の地形・地質・植物・動物等、自然環境の正確な調査が欠かせないことである。以下整備のあり方について提言する。

①横地城跡は、史跡を活かし、歴史に彩られた自然公園として整備する。そのため、道路や畑作用切土など後世の工作物は除去し、旧景観に復元するように努める。また、平場・堀・土塁・削平地などの遺構については、解説板を設置する。

②殿ヶ谷遺跡や中世墳墓群については、将来的に遺構の状況がよく分るような展示施設を整備工夫する。

③慈眼寺・三光寺跡、伝横地太郎塔周辺をはじめ、各地に散在する石塔については、風化や散逸を防ぐよう適切な保存措置を施し、案内板を立てたり、所在分布図を作ったりして、見学の便を図る。

④史跡の整備は、一旦でき上がると、その後の補修や保全が疎かになりがちである。そこで、見回り、草刈り、補修等のメンテナンスに努めなければならない。そのため管理機能を担う組織を設置する。

⑤総合調査を通じて、横地城跡の史跡としての評価は高まり、また横地氏関連遺跡の存在がクローズアップされ、その保存状況が極めて良好であることが、新たに確認された。これらを一体的に取り上げることによって、県指定区域を拡大し、将来国の史跡に昇格させることが望ましい。その場合、高田大屋敷も関連遺跡に含めたら良いと考える。

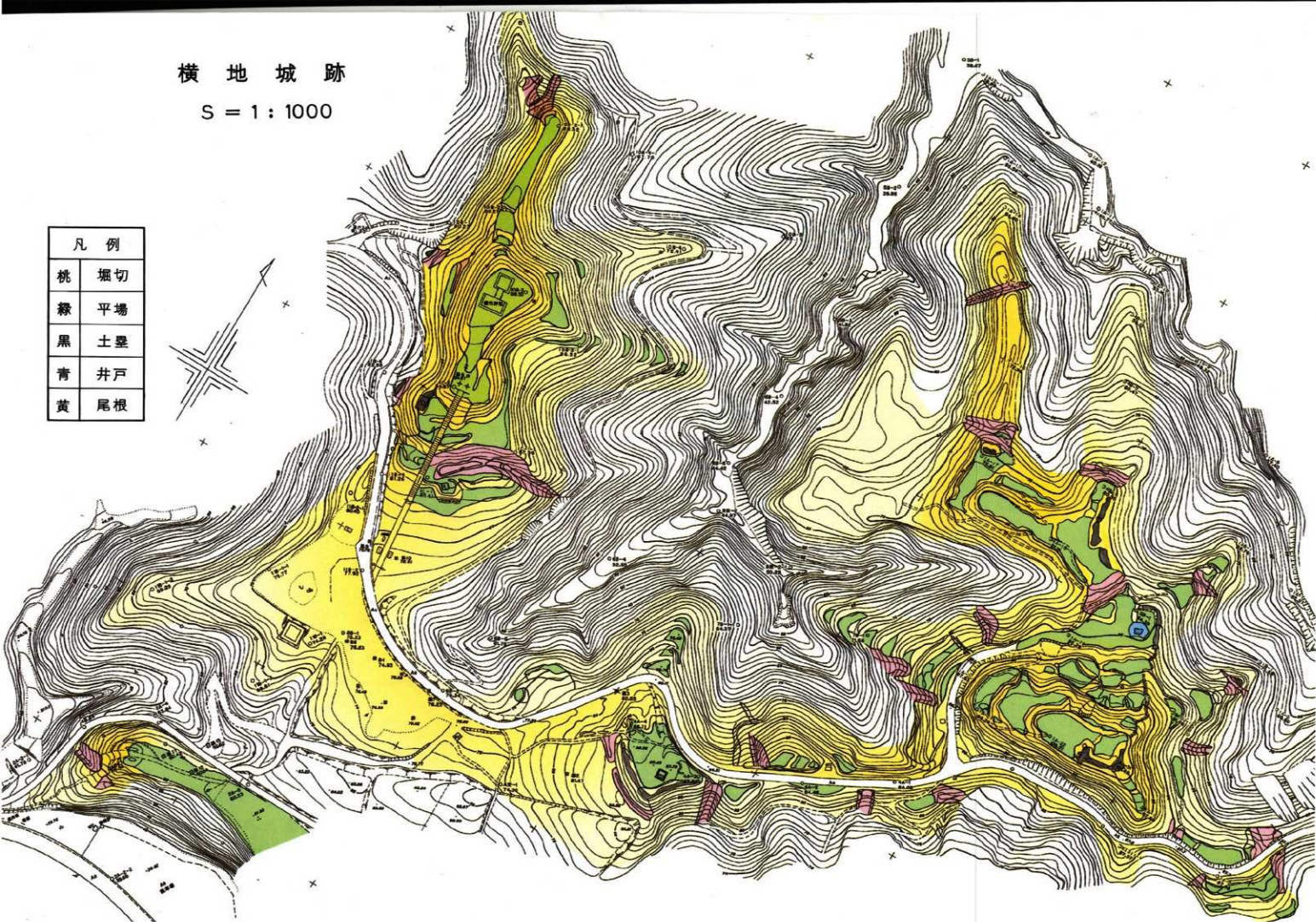
以上のような整備と併行して、その活用を図ることが肝心である。活用の具体策としては、まず関連遺跡をまわるハイキングコースを設けて、定期的にコースを散策しながら学習したり、花見・句会・写真会などのイベントを催すことによって、町民に親しまれるものにすることが大切である。また、文化財愛護デーなど年間決まった日に、何等かの催しを開き、文化財に接する場を提供することも必要である。さらに、そうした活用の拠点として、適当な場所に博物館を設置し、見学や学習の便に供すると共に、調査成果の公開、出土品の展示收藏、菊川町を中心とする東遠江の中世遺跡の調査研究機能を持たせて、この地域のアイデンティティー（住民意識の結集）の場とする。博物館は当然、基本的考え方の第2に謳った、菊川町の歴史と文化に関する情報発信の基地となる。静岡県内広しといえども、以上のような具体策が可能な所は、他にはない。ぜひ、その実現に向けて、関係機関と関係各位の御尽力を切望する次第である。

以上、横地城跡及び横地氏関連遺跡の保存・整備・活用について提言する。

横地城跡

S = 1 : 1000

凡 例	
桃	堀切
緑	平場
黒	土壁
青	井戸
黄	尾根



横 地 城 跡

総 合 調 査 報 告 書

平成11年3月30日 発行

発行・編集 菊川町教育委員会生涯学習課

〒439-8650 静岡県小笠郡菊川町堀之内61

Tel 0537-35-0925・2111

印 刷 株 式 会 社 開 明 堂

横地城跡平面図

S = 1 : 500

全体面積 6ha
作成年月 1999年2月
作製者 不二総合コンサルタント株式会社





別圖1 地名地図